

---

# スーパーロボット大戦OG

謎人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スーパーロボット大戦OG

### 【Nコード】

N6527F

### 【作者名】

謎人

### 【あらすじ】

オペレーション・オーバーゲートより数ヶ月後、世界は異星人の脅威に怯えながらも一先ずの平和に甘んじていた。だが一方で、地球連邦大統領グライエン・グラスマンは対異星人兵器の開発と大統領直属部隊の育成を進めていた。その頃、異世界『エンドレス・フロンティア』では長距離移動用の新型ゲートの完成セレモニーを間近に控えていた・・・OG外伝の個人的な続編です。OG未参戦のスパロボや関連作品をプレイ済みで事を前提とした所謂ネタバレ展開もございますので、苦手な方や未プレイの方にはあまりオススメ

出来ませんのでご了承ください( ^ ^ ; )

## 第1話 招かれた異邦人

極めて、遠く・・・

『この世界』はいくつもの世界が交じり合って誕生した。

機械科学が発達した世界もあれば、魔法科学が発達した世界もある。ここに住んでいるのは人間だけではなく、獣人や魔物、鬼とも呼ばれる種族も混在している。

遙か昔から、各世界はクロスゲートと呼ばれる、世界と世界を繋ぐ門で繋がっていた。

しかしごく最近、その門が消滅してしまった。

そして世界すべては混ざり合った。

ここは未知なる無限の開拓地。

『エンドレス・フロンティア』

<エンドレスフロンティア・ツアイトクロコデイル移動中>

リー「艦長。そろそろ目的地ですよ、起きてください。」

アシェン「艦長、目的地までもうすぐでございますので、とっとと起きやがりますせ。」

アシェンはブリッジで爆睡しているハーケンをたたき起こした。

ハーケン「OK、アシェン。・・・最悪の目覚ましどうも。」

・・・って、まだ目的地すらみえてないじゃないか。」

アシェン「航行速度から計算してあと30分といったところです。」

相手が相手ですから

よだれの跡付けたマヌケ面のままだとヤバイので早いとこ身支度しやがりませ。」

ハーケン「そいつはどうも・・・」

ハーケン「・・・ところで姫さん方の様子は？」

リー「ああ、それなら・・・」

神夜「はい、こちらにおります」

錫華「ほっほっほ」

ハーケン「・・・いつからここに？」

錫華「ふむ、そちがあわれもない姿で大奮をかいておったところからかう？」

神夜「ハーケンさんの寝顔、ちょっと可愛かったですよ」

ハーケン「おい、アシエン・・・」

アシエン「・・・せいぜい寝てる時もカッコ付けるよう努力しやがりませ。」

ハーケン「・・・ちょっと顔洗ってくる。ブリッジは任せるぞ。」

神夜「どうやら言われた通りに身支度はするみたいですね。」

錫華「わらわ的には寝てる間に額に肉とでも書いておきたかったのう。」

アシエン「今回は笑を取るような席ではないのでやった場合全力で対処するぞナマコ姫。」

リー「姫さんといえどどういったところは弁えて欲しいものですな。」

錫華「・・・無論、冗談であるぞ。」

アインストの親玉、ヴァールシャインとの戦いから数ヶ月がたとうとしていた。

クロスゲートを造ったアインストを打ち倒したことで世界すべては混ざり合い

一つの新たな世界が誕生した。

新しい世界は広大で、今までのような交通手段では間に合わないことが多々あった。

そこでフォルミッドヘイムの指導者、エイゼル・グラナータは新たな交通機関として

クロスゲートを作ることにした。

無論、ゲートにエネルギーを送っていたアインストが消滅し、またクロスゲートそのものも

消滅してしまったので開発は困難を極めた。

クロスゲートを独自に研究し軍用化までに発展したフォルミッドヘイムにとっても

大元のクロスゲートが無ければゲートを起動させることすらできなかったからだ。

そこで各国の協力を煽り、新型ゲートの共同開発を行った。

ロストエレンシアからはシュラーフェンセレストとマイティエーラのデータ、

神楽天原からは物質召還技術等々、

各国の科学・技術・魔術総がかりの一代プロジェクトであった。

そして、何ヶ月にも渡る苦難の末、今晚、新型ゲートの初起動が行われるのだ。

その立会人として、各国の要人たちが招待された。

今回のハーケンの仕事は神楽天原と式鬼一族の要人の護送。

そして新型ゲートの第一転送者としてゲートをツアイトごと潜ることであった。

ハーケン「……まったく、たまったもんじゃないぜ。」

ハーケンは顔を洗いながら呟いた。

今回の仕事はさほど難しいものではない。

だが危険がまったく無いとはいえない。

もしゲートに万が一の事があればどのような事態になるかは想像で

きる。

だが彼がこの仕事を引き受けたのは高い報酬のためではない。彼自身、新しい世界を造った引き金を文字道理引いてしまったという責任を

少なからず感じていたからだろう。

実際、世界がこうなつて争いが起こらなかったといえは嘘になる。数多くの小規模の戦争もあった。

肉親と離れ離れになった人達にも出会った。

誰もがこの新しい世界を受け入れられるとは限らないとハーケンはこの数ヶ月で思い知った。

普段はニヒルを気取っているように見える彼も、自分がした罪の重さを痛感したのだ。

だが自分が全ての人を救えるとはハーケンは思つてはいない。

だから彼は彼なりに出来る事をする事が自分の罪滅ぼしになると考えたのだ。

今回の仕事もその一つなのだ。

アシエン「……長、艦長。」

ハーケン「……」

アシエン（DTD）「いゝカゲンにしないとボコっちゃうよ？ はーきゅん！」

ハーケン「おつとすまない、アシエン。だが多少無神経だな。

男がナーバスなときは放っておくもんだぜ。」

アシエン（DTD）「だゝってボク神経ないもゝん。アンドロイドだもゝん。」

ハーケン「（言うだけ無駄だったか……）」

だがこういうとき、彼女の無神経さがかえつて良い場合もある。下手に氣遣つてくれるよりは案外いいかもしれないからだ。

アシエン「ところで艦長、宜しいのですか？お二人に最後のお別れの話をしなくて。」

ハーケン「なんで失敗すること前提で話すんだお前はあ？」

アシエン「宜しければ遺言を録音しちゃいましょうか？」

私が多少のアレンジを加えてドラマティック且つエキセントリックにいたしますが。」

ハーケン「話を失敗すること前提で進めるな。」

アシエン「・・・」

アシエン「正直、新型ゲートは未知数です。あらゆる結果を想定して行動すべきです。」

ハーケン「確か向こうの話じゃ試作で何度も暴走しかけたそうだな。」

アシエン「はい。ですが苦難の末に実験に成功。その後の幾度のテストで安全性を高め

今に至っちゃうそうです。」

ハーケン「俺が最後のモルモットになる。それだけの話さ。」

アシエン「・・・」

ハーケン「本当はこの計画、最初から携わりたかったんだが

あのスカルボスが中々許してくれなくてな、回ってきたら一番最後だった

ってわけだ、これがな。」

アシエン「艦長が責任を感じることはありません。エイゼル・グラナータも

それを察していたでしょう。」

ハーケン「・・・ま。いまさら駄々をこねても仕方ない。できる仕事をするだけさ。」

アシエン「では艦長、ブリッジへ。お二人がお待ちしておりやがります。」

ハーケン「オーケイ。では旅路を祝して乾杯でもしようかね。」

アシエン「未成年に酒飲ます気ですか？このエロ銀髪」



ハーケン「そういう空気じゃないだろ。」

<フォルミッドヘイム・バレリアネア塔前>

エイゼル「ようこそフォルミッドヘイムへ。この度は遠いところをお越しいただき感謝する。」

神夜「い、いえいえ。こここちらこそお久しぶりでございますです。」

錫華「どこぞのオンボロのように呂律が回らなくなっておるぞ、神夜。」

アシェン「それ、誰かの嫌がらせですか？胸板姫。」

ハーケン「こんなところでドンパチは勘弁してくれよ。」

それにしても王直々に御歓迎の挨拶とは恐縮いたします。

「

フォルミッドヘイムに到着した一行は、新型ゲート前でオルケストルアーミーのメンバーと落ち合う予定だった。

ハーケンはキュオンかヘンネあたりだろうと思っていたがそこにいたのは

現フォルミッドヘイム指導者、エイゼル・グラナータであった。

エイゼル「王というのはよしてもらいたい。私はただの一指導者に過ぎん。」

はよい。」

???「相変わらずよねえ、エイゼル。」

エイゼルの後ろから音も無く忍び寄ったのはデューネポリス代表のカッツェだ。

ハーケン「おや、キャットガイ。お早いお着きで。」

錫華「ぬぬ……。わらわ顔負けの見事な月面歩法ぞな。」

カッツェ「女の子に褒められても嬉しくなくてよ。」

エイゼル「カッツェか、久方ぶりだな。」

カッツェ「半年振りかしら？あなたに会えなくてアタシ、寂しかったわぁん。」

アシエン「気色悪い声を出さないで下さい。カマ猫野郎。」

ハーケン「お前はもう口を出すな。毒舌ロボ。」

アシエン「その言葉を聞くとあのドチビ洗濯板娘を思い出してムカッ腹が立ちやがるので

やめてくださりませ。」

ハーケン「・・・！」

ハーケン「で、そのリトルデーモンがお前の後ろにいるわけだが・

・

アシエン「！？」

アシエンが振り向いた先には戦術砲機を構えていたキュオンがいた。止めようとするヘンネを無視して発射体制万全である。

何故か半泣きしているがそこに触れるのはよしておこう。

キュオン「誰がドチビ洗濯板だ！この毒舌マグロ！！！」

アシエン「相変わらずのチビっぷりですね。まるで成長しておりませんね。」

キュオン「せ、成長してるもん！毎日牛乳飲んでるもん！！」

アシエン「半年前のデータと比較しても身長、胸囲ほぼ100パーセント一致。

努力の無駄遣いです。牛乳に謝りやがりませ。」

キュオン「うう・・・。」

ヘンネ「ハイハイ、そこまでだよあんた達。キュオンも泣くんじやないよ。」

神夜「キュオンちゃん泣かないでね。そうそう！お豆いっぱい食べると良いみたいですよ。」

キュオン「キュオン信じないもん。もう悪乳の言うことなんか信じないもん。」

神夜「あ、あくにゆう・・・？」

カツツエ「女の子達は大分盛り上がっているみたいねえ」

ハーケン「ならこっちもそろそろ盛り上がってもいいころじゃないか？

だろ？」

エイゼル「そうだな、本題に入るべきだな。」

ハーケン「言われた通りにお姫さん方はお送りしたぜ。」

次は俺の番だぜスカルボス。」

エイゼル「うむ。そちらの手配はすでに出来ている。」

後は予定通りツアイトをゲート前方に移動させておけば

よい」

ハーケン「オーケイ。リー、そう言うことだよろしくたのむぜ。」

リー「アイアイサー。ところで艦長はこれからどちらへ？」

ハーケン「ここには何度も来たが上っ面だけで中身のほうはまるで見ちゃいない。」

発進までゲートの事を色々聞いておくことにするさ」

リー「じゃあ、しっかり勉強なさってください。」

こっちは先に行って待っておきますんで。」

そう言うとリーはツアイトに乗り込みゲートがある方向に向けて移動を始めた。

ハーケン「というわけだ。スカルキング、解説を頼むぜ。」

エイゼル「うむ。初めてここに来た者もいる。改めて説明するとしよう。」

カツツエ「はい、よい子の皆、そういうことだから。痴話喧嘩はそこまで。」

今からエイゼル先生と愉快的仲間たちからの小難しい説明がはじまるわよん。

解らない事があつたら恥ずかしがらずに手を挙げてね

「

神夜「はい！」

錫華「おー！」

アシエン（DTD）「バッチコイ！」

エイゼル「うむ。まずは新型クロスゲートシステム

『ヒュアキンティオス』から説明せねばならぬな。」

神夜「ひゅ、秘遊亜金帝雄？」

錫華「言いくいこと甚だしいぞな。」

エイゼル「簡単に言えば、バレリアネア塔のゲート干渉機能を基盤とし、

シユラーフェンセレストのデータをもとに造ったジェネレーターからの

エネルギーを經由させてゲートにエネルギーを送ると同時に

転移座標の安定性を保つシステムだ。」

神夜「ぜ、全然簡単じゃ有りません。」

錫華「アシエンよ。今の説明聞いておったか？」

アシエン（DTD）「うん。ボクわかんない。」

ハーケン「このぐらいいは理解してくれよアシエン。」

鞠音「でもそれだけでは説明不足ですわ。」

神夜「わっ！鞠音博士！」

錫華「ツァイトで見かけぬと思ったたらフォルミッドヘイムにおったのか？」

ハーケン「ドクターは一応このプロジェクトチームの第一人者だぜ。旅の途中にいわなかったか？」

アシェン「艦長は全く持つてお話しておりませんでございました。」

鞠音「大変失礼ですよ、艦長。」

でも今回はゲート開発の件もありますので良しとしましょう。

「  
ハーケン「ドクターの寛大さに感謝するよ……」

神夜「じゃ、じゃあ鞠音博士、続きをお願いします。」

錫華「先程の説明でなにか欠けておるところがあるとそちは申しておったが……」

鞠音「まず転移座標の安定はバレリアネア塔だけでなく

マイティエーラからサルベージしたデータを元に補助システムを使用しています。」

これには神楽天原の転移技術も使われております。

それにゲートそのものはフォルミットヘイムが十年戦争に使用した

軍用ゲートを原型とし、この世界のあらゆる技術で大型化させたものです。」

ヘンネ「……。」

「ゲート新造にはフォルミットヘイムだけでは出来なかった。」

そう言いたいんだろ。」

鞠音「はつきり言えばそうです。」

キュオン「でもフォルミットヘイムだって凄いだよ！

システムの大元のプランとか、軍事ゲートの発掘とか、  
エイゼル「キュオン、もう良い。ヘンネの言う通りだ。」

キュオン「……！」

エイゼル「澄井鞠音博士。」

今回のプロジェクト、我らだけでは決して成し得なかった。

そのことには幾ら感謝を述べても足りぬ。」

鞠音「私は新型ゲートの開発を自分の手でしたかっただけですわ。」

アシェン「つまり、」

アシェン（DTD）「べ、別にあなたのためじゃないんだからね！」

アシェン「という事ですわね。」

鞠音「ちよつと後でラボに來なさい。」

ネジ「一つ残さず分解してあげますわ。」

ハーケン「後にしてくれ、時間の無駄だ。」

・・・

それにしてもよくまあ半年足らずでゲートを実用化できたもんだな。」

エイゼル「この世界の技術力がそれほどまでだったという事だ。」

ハーケン・ブラウニング。」

ハーケン「・・・」

エイゼル「今思えば、24年前、マイティエーラが落下したときにこうすれば

我らも戦うこともなく、王も死なずに住んだのかもしれない。

ぬ。」

ハーケン「・・・それは、『今思えば』だろ。」

エイゼル「む・・・」

ハーケン「今やることは過去を悔いる事じゃなく、前に進む事だろ？それに過去の過ちが必ずしも悪いことばかりじゃないさ、

これがな。」

エイゼル「だからこそこうして互いに協力関係を結べるように

なったのかもしれない。」

ハーケン「言い方は悪いが結果オーライってヤツさ。」

アシェン「そうです。私はいつもそのやり方ですべて通っていますでございます。」

錫華「ぬしの場合、話しが大きく違う気がするがのう。」

ヘンネ「ん？・・・どうやら時間のようだ。」

エイゼル「そうか、では頼む。」

ヘンネ「じゃあ、エイゼル。」

私とキュオンは管制室に行ってジェネレーターに火を入れて来るからな。

あとのことは任せるよ。」

そういうとヘンネとキュオンは一足先にゲートへ向かった。

ハーケン「おや？まだ出発までにはだいぶ時間があるんじゃないのか？」

エイゼル「このゲートの幾つかの欠点としてエネルギーチャージの長さがある。」

通常空間転移は次元転移より遥かにエネルギーが少ないがそれでもかなりの量になる。

そして以前ならばエネルギーは無尽蔵であったが今はそうではない。」

ハーケン「成る程、節約ってわけか。」

で、そのチャージってのはどのくらいかかる？」

エイゼル「一度の転移につき、約一時間が必要とする。」

カツツエ「とんだ鈍行ダイヤねえ。」

神夜「でも町から町まで一気に行けるのはいいですね。」

アシエン「場合によっては普通に行った方が早い場合もありやがりますね。」

カツツエ「でも長すぎるっていう程でも無いのよねえ。」

エイゼル「故に、今のところゲートの設置は主要都市のみとするつもりだ。」

鞠音「ですが、ジェネレーターの改良を重ねれば

いずれチャージの問題も解決されるでしょう。」

錫華「今、幾つかと申したな？まだ他に問題があるのかえ？」

エイゼル「もう一つの欠点は他の世界を繋ぐ力までは備わっていない

いという事だが。

こちらは改善するつもりはない。」

鞠音「それに、他の世界からもこのゲートを介して進入することは出来ません。」

ハーケン「出ることも入ることも出来ない。行けるのはこの世界のみ……」

前のクロスゲートなら欠陥品だが、今はそれで十分。

それにアインストの事を考えるとそうも言っていられないな。」

エイゼル「そもそもこのゲートは交通機関用だ。」

それ以上の機能は持たせぬべきと判断したのだ。」

ハーケン「賢明だな。」

アシエン「……艦長、言い忘れましたがここからゲートまで歩いて20分ぐらいかかります。」

早いとこ適当に繰り上げてツアイトに行っちゃった方が宜しいかと。」

ハーケン「そういう事はまず始めに言え。」

ハーケンたちは一度話を切り上げ、ツアイトに向かうことにした。だが、ハーケンたちが付く直前に、それは起こった。

エイゼル「……！これは！」

神夜「わぁ！これが新しい交鬼門ですか！

揺ら揺らとした輝きが綺麗極まりないですね！」

錫華「阿呆！まだ交鬼門は起動しておらぬはずだよ！」

アシエン「でも完全に電源がオンになっていやがりますね。」

ハーケン「まだエネルギーはチャージ中のハズじゃないのか？」

ヘンネ「その通りさね！」

管制室からヘンネとキュオンが駆けつけてきた。



エイゼル「ヘンネ！状況を説明せよ！」

ヘンネ「見たまんまだよ。」

キユオン「ま、まだエネルギーはチャージ中だし。

それにゲートにはまだエネルギーは送っていないんだよ！」

ハーケン「じゃあ何か！？」

ゲートがエネルギー無しで動き始めたって事か！？」

神夜「そ、それってとても危ないことなんじゃ」

アシエン「ぶっちゃけ、とてつもなくヤバイです。」

錫姫「ぶっちゃけずとも解るわ！」

こうして話している間にもゲートはその光を増していた。それはゲート起動のカウントダウンに他ならなかった。

鞠音「！？

ゲートが起動を始めましたわ！？」

ハーケン「どうなるんだ！？」

鞠音「予測不可能ですわ。この辺り一帯丸ごと吹っ飛んでしまうかも。」

錫華「さりと恐ろしいこと言うな！！」

カツツエ「そいつはマズイ！エイゼル！すぐに全員の避難を！」

ヘンネ「ここに来る前に研究者から兵士までにすでに避難命令を出しておいた！

あとは私たちだけだ！」

ハーケン「だったら全員ツアイトに乗り込め！

全速力でここから避難だ！」

ハーケンたちは急いでツアイトに乗り込み、ブリッジに駆け上がった。

リー「艦長！どういう事です！？

まだ出発までは時間がありますが、  
ゲートが開こうとしています！？」

ハーケン「原因不明の暴走だ！

全速力で後退だ！

急げ！時間が無い！！」

リー「了解しました艦長！

ツアイトクロコデイル、フルドライブ！！  
皆さんしっかりつかまってください！！」

だが、ツアイトが後退した次の瞬間、ゲートは光に包まれた。  
その光はクロスゲートの転移の時と全く同じものだった。

ハーケン「ぬぁあつ！！間に合わ・・・！！」

神夜「きゃあつ！！」

錫華「むうっ！こ、この感覚は交鬼門を潜るときの・・・！！」  
エイゼル「・・・世界を・・・超えるのか！？」

第1話 完

## 第1話 招かれた異邦人（後書き）

ご意見、ご感想は大歓迎です。

戦闘以外の通常の会話・雑談等は表情や行動といった部分の説明をあえて少なめにしてスパロボの会話パートの雰囲気再現を試みております。

「こうしたらより判り易い」

「この方法では判り難い」

といった意見は随時募集しておりますのでよろしく願います。

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その1

<プリモルスキー トーチカ5 ???>

ミタール「・・・君のレポートは読ませてもらったよ。

AI1プロジェクト、予定通りに進んでいるようだな。」

エルデ「ええ、AI0から得た良いデータもありましたし・・・」

ミタール「メデイウスの発進準備は既に完了済みだ。

パイロットの方はどうだ？」

エルデ「既に合流ポイントで待機中です。

そこまでの移動ぐらいでしたらAI1と私の制御だけで十分ですわ。」

ミタール「うむ、だがあの男は私とこのプロジェクトに

豪く恨みを持っておつてな。

・・・なんなら、無人機を幾つか持っていてても構わんぞ？」

エルデ「それでしたらご心配なく。既に手は打っておりますので。」

ミタール「ふふ・・・。やはり君は抜け目がないな。

ミツテ博士。」

エルデ「・・・それで、ザパト博士。やはり、サーベラスとガルムレイドの

搭乗者は・・・」

ミタール「ヒューゴ・メディオとアクア・ケントルムで決まりだ。」

エルデ「ですが・・・」

ミタール「確かにシミュレーションの結果は芳しくない。

だがそれはTEエンジンの出力不足によるものだ。

彼らの能力はむしろそれを補っている程なのだよ。」

エルデ「・・・」

ミタール「ん？まさか後ろめたさがあるとしても言つのかね？

確かアクアは君の・・・」

エルデ「そんなセンチな感情は持ち合わせてはおりません。

ただあの二人があの子の相手として相応しくないと

思っているだけです。」

ミタール「『あの子』、か。確かに君のあれに対する接し方は、

まるで親子のようなものだったな。」

エルデ「・・・何故、TEエンジンをメデイウスではなく

あちらの機体に回したのです？

あれの制御をA I 1に任せれば、より良い結果を出せると  
思うのですか？」

ミタール「ハンデだよ。」

今のままでは釣り合いが悪いからな。

それに、いくらA I 1が優秀だからといっても

D F Cシステムを理解することなど

現状では不可能だろう？」

エルデ「感覚制御など・・・非効率且つ非常識ですわ。」

ミタール「だが、アクアのデータは

A I 1にとっても貴重な物となる。

君は不服かもしれんがこれが現実だ。」

エルデ「・・・いえ。」

私のA I 1と博士の開発したラズナニウム。

この組み合わせが真価を発揮するには

完全なTEエンジンが必要不可欠です。

これに関しては、彼らと博士にお任せするしか  
ありません。」

ミタール「うむ。任せてもらおう。」

エルデ「最後に・・・メインターゲットは

例の三隻の戦艦でよろしいのですね？」

ミタール「そうだ、ハガネとヒリユウ改、そしてクロガネだ。

機が

これらの艦にはEOTを採用した機体や様々な試作実験  
集まっている。

それに何かしらの勢力との対立にはこれらの艦が主力と  
して扱われた事例が多い。

マークすれば、様々なデータ取得対象に出会えるだろう。

「エルデ」わかりました。

まずは近い場所から接触してみます。  
「では、博士……」

ミタール「ああ、良い結果が出ることを……  
いや、それは構わん。

ただ私の理論が正しかったことを証明してくれば良い。  
私は最後まで付き合って身を滅ぼす程馬鹿ではないから

な。」

エルデ「……」

<プリモルスキー トーチカ5 食堂>

アクア「……ちょっといいかしら？ヒューゴ。」

ヒューゴ「何の用だ？」

アクア「しらばっくれないでよ！

さっきのシミュレーションの事よ。

どうして私の指示に従わなかったの？

模擬敵の予測反撃パターン出したのに！」

ヒューゴ「全機撃墜、しかもタイムは8秒縮まった。

それに文句があるのか？」

アクア「そうじゃないわ！

そうして勝手に動いたのか、  
その理由を聞かせて！」

ヒューゴ「結果は出した。

それ以上に説明する必要も意味も無いだろ？」

アクア「あるわよ！」

索敵と分析は私の担当なの！

それを無視するなんて。

これからそんな調子でもらうては

たまないわ！

私達が出すべき結果は、

ザパト博士達が望む結果なの。

いくらスコアが良かったってそれじゃ意味が無いの！」

ヒューゴ「（あの男の望む結果か・・・）」

アクア「とにかく、私の指示を無視するのはやめてよね」

ヒューゴ「参考にはしている。」

アクア「ああ、そう。参考程度なんだ。

元特務部隊のパイロットさんにとっては

私の意見は参考程度にしかあてにしないのね。」

ヒューゴ「そういうつもりじゃない。ただ・・・」

アクア「ただ・・・何なのよ？」

ヒューゴ「あれが実戦なら、こちらが落とされていた。」

アクア「・・・！」

ヒューゴ「お前はＴＥエンジンの出力調整に専念してくれればいい。

試作機の戦闘と操縦は俺に任せろ。」

アクア「・・・ああ、わかったわよ。

どうせ私は実戦経験なんて無いわよ。

でもね、いつかは私だっていつかは

試作機のパイロットに・・・！」

ヒューゴ「（口だけなら何とでも・・・）」

うつ・・・！」

アカア「ん？どうかしたの？」

ヒューゴ「な・・・何でもない。

悪いが、水を取ってきてくれないか？」

アカア「はあ？あ、あのねえ！

何で私がそんな事しなきゃならないの？」

ヒューゴ「・・・頼む。」

アカア「・・・わ、わかったわよ。

お水でいいのね、お水で？」

ヒューゴ「ああ・・・。」

アカアが水を取りに行っている間も

ヒューゴの苦悶の表情は消えなかった。

ヒューゴ「くっ・・・！

ここしばらくは大丈夫だと思っていたが・・・

ミタールの野郎・・・」

アカア「はい、お水。」

ヒューゴ「すまないな・・・」

そういうとヒューゴはポケットから薬を取り出した。

アカア「ねえ、前から時々飲んでいるみたいけど、

それ、何の薬なの？」

ヒューゴ「・・・ただの風邪薬だ。」

アカア「ふっん、風邪ねえ。

凄腕のパイロットさんも

意外とデリケートなところがあるんだ。」

ヒューゴ「悪いか？」

アカア「別に。」



薬を飲んで暫くするとヒューゴから  
苦悶の表情が消えていった。

ヒューゴ「・・・何とか。

・・・落ち着いてきたか。」

アクア「早いトコ治しなさいよ？」

こっちにうつされたら、たまないわ。」

ヒューゴ「大体、お前こそ風邪はひかないのか？」

DFCスーツだったか？」

そんな水着みたいな格好で。」

アクア「もう！

私だって、好き好んでこんな格好している  
わけじゃないんだから。

大体、あんただって穴だらけの服着ているじゃない。」

ヒューゴ「だが、割と気に入っているんだろ？」

アクア「そうそう、

このままお風呂に入れるし・・・  
って違うわよ！

（私だって、仕事じゃなきゃこんな恥ずかしい服  
着られないわよ。

まあ、慣れてきたけど・・・。）

実はヒューゴとアクアの衝突はこれが初めてではない。

彼らには衝突や小競り合いが日常と化していた。

お互いが仕事上の関係以外のプライベートな事を

知らなかったせいでもあるし、

実戦で場数を踏んできたヒューゴと

優秀とはいえ実戦経験のないアクアとでは

意見が合わないのは当然だといえる。

だが彼らとて子供のようにいつまでも言い争っているのは

馬鹿げている事だと理解している。

いつものように、互いのどちらかが話を切り上げて終わる。  
それでいつもは済ませていた。

だが今日はそうはいかなかった。

ヒューゴ&アクア「!？」

突然基地が揺れ、爆音が響いた。

それも外からではない、内側からだ。

ヒューゴ「何だ！？爆発だぞ！」

アクア「格納庫の方からよ！」

ヒューゴ「まさか、サーベラスかガルムレイドが!？」

アクア「何言ってるの、私達が乗っていないのよ！」

ヒューゴ「じゃあ、メデイウス・ロクスか・・・？」

アクア「それこそあり得ないわ！」

まだパイロットも決まっていけないのに！」

ヒューゴ「とにかく博士の所に行くぞ！」

ヒューゴとアクアは急いでザパト博士の部屋に向かった。

ミタール「うぬ・・・、

格納庫のハッチが破壊されたか！」

アクア「博士！何が起きたんです!？」

ミタール「五号機が・・・、

メデイウス・ロクスが

何者かに奪われたようなのだ。」

ヒューゴ「!」

アクア「そ、そんな・・・！」

「いったい、誰が!？」

ミタール「すまんが、君達は

すぐにメデイウスを追ってくれ

あれがノイエDC残党にでも渡ったら

大変なことになる。」

アクア「そ、そうだわ！

ラズナニウムが悪用されたら、

アースクレイドルの事例と

同じようなことが起きるかも……！」

ヒューゴ「（アースクレイドル……か……）」

アクア「わかりました、博士！

メデイウスは必ず私達の手で取り戻します！」

ミタール「うむ。

追うならガラムレイドよりもサーベラスのほうが

速い。すぐに発進準備をさせる。

……場合によっては機密のためだ。

メデイウスを破壊しても構わん。」

アクア「は……はい！」

ヒューゴ「（手塩にかけた機体にも躊躇しない……

こいつらしいやり方だな。）」

ミタール「二人とも、くれぐれも頼むぞ。

（そう、くれぐれもな……フッフ）」

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その2

<地球連邦軍 極東支部伊豆基地 管制塔>

オペレーター「レイディバード、着陸完了しました。

続いて、機体と物資の搬出作業を開始します。」

ケネス「パイロットの方は？」

オペレーター「只今、到着手続きをしていると思われますが・・・」

ケネス「終わり次第、すぐに私のところへ通せ。」

オペレーター「了解しました。」

ケネス「（・・・フン。あいつ等め、ようやく来たか。）」

<地球連邦軍 極東支部伊豆基地 司令室>

キョウスケ「ATXチーム、キョウスケ・ナンブ以下4名、到着いたしました。」

ケネス「ふむ。カムチャツキー基地からご苦労。

まあ向こうではどうせ暇を持て余していたのだろう？

だがここではそうはいかないからな。」

キョウスケ「心得ております。」

ブリット「（偉そうな態度は相変わらずか・・・！）」

エクセレン「（ブリット君！いつかみたく逆切れはナッスイングだからね。）」

ケネス「では早速だが、合同演習の準備にとりかかってもらおうか？

ここは向こうとは違って大変忙しいのな。」

エクセルン「（うわっ・・・！ここまであからさまだと返ってムカ

ツク！」

クスハ「（エクセレン少尉、落ち着いて落ち着いて。）」  
キョウスケ「・・・では失礼します。」

キョウスケたちは部屋を後にして格納庫の方へ向かった。

ケネス「・・・フン。相変わらずだな。

だがせいぜい、がんばってもらわないとな。」

<地球連邦軍 極東支部伊豆基地 格納庫>

アヤ「キョウスケ中尉、お久しぶりですね。」

キョウスケ「お久しぶりです、アヤ大尉。

お変わり無さそうで何よりです。」

リュウセイ「そちらこそ、カムチャツカからの長旅、

お疲れさます！」

ライ「リュウセイ・・・。

『親しき仲にも礼儀あり』という言葉を知らんのか？」

ブリット「あれ？『行儀あり』じゃなかったですか？」

エクセレン「んふふ」二人とも違うわよ。

正解は『妙技あり』よん」

クスハ「そ、そうでしたっけ？」

キョウスケ「間違ったことを教えるな。

『礼儀あり』であっている。」

リュウセイ「でも俺、そういう堅っ苦しいのはどうも苦手で・・・。」

キョウスケ「俺は別にそれでかまわんが。」

エクセレン「そそ。もっとフランクな感じでいきましょ。」

クスハ「ところで、マイさんとヴィレッタ大尉はどちらに？」

リュウセイ「ああ、隊長とマイならART-1の調整に立ち会っているところだ」

アヤ「『後は私たちが済ませておくから』って、みんなを迎えに来たの。」

エクセレン「結構きがきくのよね、ヴィレッタ大尉。」

リュウセイ「これでもう少しトレーニングが楽だったら・・・」

ヴィレッタ「楽だったら？」

リュウセイ「う、うわっ！隊長、いつからそこに！？」

ヴィレッタ「・・・リュウセイ、訓練が終わったら、

トレーニング10セットするように。」

リュウセイ「（まる聞こえだったか・・・）」

マイ「ヤブヘビだったな、リュウ。」

エクセレン「あらら。」

ヴィレッタ大尉、お久しぶり。

マイちゃんも元気だったかしら。」

マイ「エクセレン少尉もお元気そうで。」

アヤ「・・・隊長たちが、こちらにいるということは」

ヴィレッタ「ええ、準備は整ったわ。」

ATXチームが遙々伊豆基地までやってきたのは、

SRXチームとの合同訓練をやるためだ。

レイオスプランが始まったばかりとはいえ、

現在の成果はART-1のみである。

だがART-1はあくまでもテストタイプに過ぎない。

本懐である『アルタード』が完成するのにはまだまだ時間がかかる。

そして開発を進めていくうちに、現在のデータだけでは

不足しているということが判明した。

そこでオオミヤ博士は以前RシリーズをATXチームと戦わせて得たデータが、

後にRシリーズのプラスパーツ考案の際に役に立ったことを思い出

し、

再びATXチームとの合同訓練を申請したのだ。

戦時中のデータを利用よりも実際に戦わせた方がよりよいデータを  
得られるとの

ハミル博士の意見もあつたからだ。

始めは無理かもしれないと思つていたが、

意外にも早々に上層部から許可が下りたため（ケネス指令は快く思  
つていなかったそうだが）

このたび合同訓練を行うことになった。

ブリット「ATXチームとSRXチームの合同訓練か・・・」

リュウセイ「あん時はアルトに装甲殆どもってかれたんだよなあ・・・」

キョウスケ「それを言うならこっちはR-1に左腕を丸ごと、だ。」

エクセレン「そうそう！

あの時ブリット君が駄々こねちゃって大変だったのよ  
ね。」

ブリット「別に駄々こねた訳じゃ・・・」

クスハ「でもあの時ブリット君がやめてくれなかったら・・・」

エクセレン「二人は結ばれる事は無かった・・・

つて言いたいんでしょ」

クスハ「！」

ブリット「ななな、何言ってるんですか少尉！」

エクセレン「あらあら。

ブリット君、照れない照れない」

マイ「・・・それ、本当なのか？」

エクセレン「そうなのよ」。

あの時、クスハちゃんがが式式に乗つてて、  
んで、ブリットがヒュツケMK-IIで戦ったんだけ

ど、

何しろクスハちゃん、初めてだったから上手く操縦できなかったのよ。

んでもって、ブリット君がそれに気がついたけど、それでも続行指示がでたもんだから頭にきちゃって戦うのやめちゃったってわけ。

そして二人は戦いが終わった後、ともに

大人の階段をかけあがっちゃのでありました メデタ

シメデタシ

マイ「そ、そうなのか。」

キョウスケ「真に受けるな。あと妙な終わり方を付け足すな。」

エクセレン「そうかしら？あながち間違っでは無いんじゃない？」

ヴィレッタ「フフ……。でも今回はあの時とは大分違うわ。」

リュウセイ「クスハはATXチーム側だし、お互いに共に戦った間柄だしな。」

エクセレン「戦場のラブロマンスは起きないってことね。」

アヤ「……じゃあ皆、そろそろ時間よ。」

キョウスケ「最初はアルトとART-1だったな？」

リュウセイ「へへっ、今度はあん時みたいには行きませんか？」

キョウスケ「それはこちらもだ。二の轍は踏むつもりはないからな。」

」

かくして、SRXチームとATXチームとの合同訓練が始まった。

だがこれが何者かによる意図的なものであることには

誰一人として気づいていなかった。



## 第2話 仕組まれた追跡劇 その3

キョウスケ「TCOS起動、ウェポンセレクトインファイト、ジェネレーター出力安定、

コンディションオールグリーン、アルトアイゼン・リ―ゼ起動！」

リュウセイ「TCOSよし、武装は近接格闘モードに固定、ジェネレーターもよし、

T-LINKシステムコネクト、ART-1発進！」

駆動音とともにアルトとART-1が起動した。

マリオン「キョウスケ中尉、兵装は全て模擬弾ですが、受ける衝撃は実弾のそれと同じですので注意してください。」

ロバート「リュウセイちゃんと聞いたか？

油断して気絶したなんて洒落にならないからな。」

リュウセイ「了解！」

キョウスケ「了解した。」

ヴィレッタ「では、状況開始！」

「先手は貰うぜ！ランダムシューツ！」

先手を出したのはリュウセイだった。

中距離からのHG・リボルヴァーの弾雨、キョウスケはこの手に少々驚いた。

「ほう？前のリュウセイなら無闇に突っ込んできたが、少しは学習したようだな。

・・・だがこの程度！」

弾雨はアルトには当たらなかった。  
いや、アルトが全てかわしたのだ。

ただのPTやAMならば当たっていただろう、  
だがアルトはただのPTではない。

アルトの背部ユニットは端的に表せばスラスターの塊である。  
さらに姿勢制御にテストドライブも使用している。

この距離なら避ける事はキョウスケにとっては造作もない。

キョウスケ「・・・この間合い、もらった！」

リュウセイ「！」

弾雨をかわしたアルトは一気に間合いを詰めて

ART-1の背後にまわった。

理論上は可能ではある。

だが普通のパイロットならその際の強烈なGに耐えられないだろう。  
だがキョウスケは並大抵のパイロットではない。

キョウスケ「一気にカタをつけさせてもらおう！」

アルトの右腕がキョウスケの右腕に呼応して

ART-1を突き上げた。

それと同時にキョウスケはアルトの切り札、

リボルビング・バンカーの引き金を引いた。

凄まじい轟音と衝撃が辺りに響き、粉塵が立ち込める。

早くも勝負が決まったと周りには思い始めた、だが。

キョウスケ「（何だ？この感じは？）」

キョウスケには妙な違和感があった。

何故ならバンカーが完全に極まった時とは全く違う感触だったからだ。

リュウセイ「・・・へへッ。捕まえましたよ、キョウスケ中尉。」

キョウスケ「！！」

ART-1は殆ど無傷だった。

キョウスケが突き上げたのはART-1が持っていたシールドだった。

リュウセイは激突の際に念動フィールドでバンカーの当たる方向を変え、

シールドに当てさせたうえでわざと突き上げられたのだ。

そうする事でアルトのセンサーを誤魔化したのだ。

さらにバンカーを突き上げたアルトは当然ながら隙が生じる。

その隙をリュウセイが見逃すはずはなかった。

いや、最初から狙っていたと言っべきだろう。

アルトが突き上げた衝撃でシールドから手を離し、

姿勢を低くして攻撃態勢を整えたART-1がそこにいるのだから。

リュウセイ「一撃粉碎！はああああ！！」

一瞬の虚を突き、T-LINKブレードナックルがチェンソー特有の金切り声をあげ

アルトの右腕を切り裂いた。

キョウスケ「！？

右腕マニピレーター大破だと！？」

リュウセイ「よっしゃあ！もう一撃！！」

キョウスケ「言ったはずだ、二の轍は踏まん！」

二度目の攻撃は当たらなかった。

アルトがギリギリでかわしたのだ。

だが状況はキョウスケにとって明らかに不利であることは変わらない。

バンカーが使えなくなったうえにさっきの攻撃で一部のセンサーも使用不能となっていた。

だがリュウセイとて馬鹿ではない、今近づけばアルトの両肩のクレイモアを使われる。

こちらとてただでは済まない事ぐらいは理解していた。

アルトが後退している今が勝機。

念動フィールドを収束させ、必殺のクラッシュソードを極めればリュウセイの勝ちだ。

後退している相手にとって、この追い討ちは止めとなるだろう。

普通ならば全力で後退するだろう。

だがキョウスケは逆に全力で前進して来た。

アルトの頭部のプラズマヒートホーンに電流が走る。

リュウセイは急いで手持ちのゴールドメタルブレードを使おうとするが

一足遅かった。

念動フィールドを突き破り、アルトのヒートホーンがART-1に突き刺さった。

キョウスケ「両腕部に集中して薄くなった念動フィールドなら

ヒートホーンでも貫ける、それに。」

リュウセイ「!？」

キョウスケ「本当の切り札は最後まで取っておくものだ。」

アルトの本当の切り札、アヴァランチ・クレイモアがその名の如く雪崩の様にART-1に降り注がれた。

<地球連邦軍 極東支部伊豆基地 格納庫>

ロバート「で、両機ともこのザマってわけか。

ま、確かに油断するなどは言っただけだなあ……。」

大破したアルトとART-1を見ながら、オオミヤ博士は愚痴をもらした。

まあ、オオミヤ博士が愚痴をこぼすのも無理は無い。

模擬弾を使い、訓練モードとはいえ、開始数分で2機とも大破すれば、

誰だって愚痴をこぼしたくなるだろう。

・・・約1名を除いて。

マリオン「素晴らしいですわ。キョウスケ中尉。

弱いとはいえ、ヒートホーンで念動フィールドを突き破

るなんて。」

キョウスケ「いえ、アルトの推進力のおかげですよ。

それに実戦だったらおれのほうがやられていたでしょう。」

エクセレン「イイイイイヤ。

っていうかフツーあそこまでのGに耐えられないですよ?」

ブリット「うぷっ・・・

数値みているだけで吐きそうです・・・。」

エクセレン「うゝん・・・

例えるなら、腰にロケットエンジン付けてローラースケートで走っている最中に

目の前からミサイルが飛んできて正面衝突したってト

コかしら?」

クスハ「そ、それってペシヤンコじゃないですか?」

ライ「というか即死だな。」

マイ「そんなのに耐えられるキョウスケ中尉って・・・」

キョウスケ「人を人外みたいに言うな。

それをいうならリュウセイだって相当なものだぞ。」

ヴィレッタ「念動フィールドの局部的な操作による攻撃誘導、ね。

確かに目を見張るものがあるわ。」

アヤ「T・LINK係数が余程高くないと出来ない事ですね。」

ライ「それに相手をひきつけてからのカウンターも悪くは無い。」

マイ「リュウも成長しているって事だな。」

リュウセイ「いやゝ。素直に褒められるとなんか照れるな。」

ヴィレッタ「でもその後念動フィールドを攻撃に回した事が仇になったわね。」

ライ「浮かれて止めを刺そうとするからだ。」

マイ「リュウもまだまだ進歩が足りないと言う事だな。」

リュウセイ「褒められた後のダメだしは勘弁してくれよ・・・。」

ロバート「だが貴重なデータがとれた。そのことにおいては感謝するよ。」

マリオン「具体的には？」

ロバート「うーん。やっぱり単機の装甲をより強化しないといけない。」

『アルタード』でも役に立つだろうし。」

ブリット「アルタードって確かSRXの後続機の名前ですよね？」  
リュウセイ「うーん。厳密に言うとなんか違うな。」

SRXはその名の通り『TYPE-X』、試作機なんだ。」

ライ「そしてSRXで得た実戦データを元に開発するのが

アルタードというわけだ。」

クスハ「じゃあ、アルタードが完成したらRシリーズの機体はどうなるんですか？」

ブリット「やっぱり実験用に回されるとか解体されるんじゃないのか？」

ロバート「いや、SRXとアルタードとの決定的な違いはその運用方法にあるんだ。」

SRXは通常PT形態で戦闘を行い緊急時に合体するのに対し、

アルタードは合体形態で通常運用するんだ。」

マリオン「つまりアルタードは合体したPTというよりもPTに分離変形する特機と

解釈すればよろしいので？」

ロバート「その通りです。だけど現状のSRXでも判る様に合体するのはまだ容易ですが、

戦闘中の高速分離となると中々難しくて・・・」

カーク「それに分離形態のアルタードはRシリーズを参考にしているとはいえ

今のままではRシリーズをチューンしたほうがまだ効率が

良い。」

キョウスケ「だからPT単機での戦いで有利なアルトをぶつけたと言っ訳か。」

カーク「そう言う事だ。」

ATX計画のアルト以外には出来ない仕事だった。」

マリオン「それ、褒め言葉と受け取ってもよろしいので？」

エクセレン「んじゃ、次は私のヴァイスちゃんとパスワードなR-3ちゃんです」

ブリット「その次が参式とR-2パスワードでしたね。」

ロバート「早速、と言いたところだけど・・・」

さっきの戦闘でケネス指令にこっ酷く注意されてな、

『訓練の続きは見送れ』だとき。」

キョウスケ「大方さっきの戦闘を見て下手に暴れられると

経歴や評価に傷が付くとも思っただろう。」

エクセレン「あのタコ親父、ああ見えて肝っ玉が小さいんだから困るわよね。」

リュウセイ「大体、ART-1とアルトをぶつけたらどうなるか

想像が付きそうなもんなんだがな。」

アヤ「でも、これで合同訓練はとりあえず終わりって事かしら？」

エクセレン「んじゃ！気晴らしにシヨッピングにでも行きましょか！」

ヴィレッタ「残念だけど、シヨッピングは無理みたいね。」

ATXチームは滞在中、哨戒任務に当てるつもりらしいわ。」

キョウスケ「いいように使ってくれるな、まったく。」

キョウスケが愚痴をこぼしたとき、基地内にアナウンスが流れた。

アナウンス「キョウスケ・ナンブ中尉、ヴィレッタ・バディム大尉、ケネスギャレット指令が呼びです。」

至急、司令室までお越しください。」

エクセレン「・・・どうやら、早速こき使われるみたいね。」  
リュウセイ「勘弁してほしいぜ・・・」

<地球連邦軍 極東支部伊豆基地 司令室>

キョウスケ「・・・追跡任務、ですか？」

ケネス「そうだ、先程プリモルスキー基地から連絡があつてな、

そこで開発中の機体が一機強奪されたそうなのだ。」

キョウスケ「お言葉ですが、向こうの基地からも追跡部隊が出ているのでは？」

ケネス「だがな、強奪機と言つのが何でも次期主力機の試作機という話だな。」

上層部からも追跡命令が出ている。」

ヴィレッタ「それで強奪機が伊豆基地の警戒区域内に入ってくるのを見計らつて

取り押さえると言つ事ですか。」

ケネス「まあ、そう言う事だ。」

すぐに出撃準備を急がせる。」

ヴィレッタ「ですが、先程の模擬戦でアルトアイゼン・リーゼとART-1は出撃不能ですが。」

ケネス「・・・基地にある量産型ヒュッケバインで事が足りるだろうが。」

キョウスケ「了解しました。では出撃準備に参りますので失礼します。」

キョウスケ達は司令室を後にした。



ケネス「（フン。あの反抗的な態度、やはり気に食わん。

だがここで強奪機を取り押さえればワシの評価も上がる。  
連中には頑張って貰わないとな。」

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その3（後書き）

戦闘パートは会話パートとは少々書き方が違うので中々難しかったです。

戦闘パートは今後ともこのようなスタイルで行きますが、御意見・御指摘等ございましたら遠慮なくおっしゃってくださいますようお願い申し上げます。

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その4

<日本海 上空 ハガネ>

エイタ「プリモルスキー基地から送ってきた情報だと、もうすぐこのあたりで接触します。」

テツヤ「PT部隊は？」

エイタ「全機体第一種戦闘配置完了、いつでも出撃できます。」

テツヤ「よし。各員現状を維持せよ。」

エイタ「・・・それにしてもいくら次期主力機の試作機だからって、ここまでする必要あるんですかね？

いくらバルトール事件があったからって

ここまでは多少オーバーじゃないんですか？」

テツヤ「それだけじゃない。

過去に奪われた量産型ヒュッケバイン Mk-IIは  
敵に量産された拳銃、マシンセルによって変貌して  
驚異的なまでの戦闘能力を発揮した事例がある。

今回の任務、上層部がようやく重要性に理解してくれたって事だろう。」

エイタ「！！」

リーダーに感あり！」

テツヤ「強奪機か！？」

エイタ「い、いえ！数は一個中隊です！」

テツヤ「プリモルスキーからの追撃部隊か！？」

エイタ「ち、違います。これは！？」

リーダーに映った影とその反応の正体はすぐに目視で確認された。  
リオンとバレリオンで構成されたノイエDC部隊だった。

NDC兵「例の情報によれば、このあたりだな。」

NDC兵「ちよつとまで！なんでよりによってハガネが出ているんだよ！」

NDC兵「ここは伊豆基地の警戒区域だ、覚悟はしてはいたが・・・」

NDC兵「だが試作機を奪えばこちらのもの！」

さらにハガネを落としたとなれば俺たちの株も上がるってモンだ！」

エイタ「どうやら、例の強奪機の援護部隊のようですね。」

テツヤ「ああ。PT部隊を出撃させる！本艦も迎撃準備に移せ！」

エイタ「了解。PT部隊は直ちに出击してください。」

<ハガネ 格納庫>

エクセレン「ちよつとキョウスケ、ホントにヒュッケちゃんて出るつもりなの？」

キョウスケ「確かにアルトとはまるで違うがクセのない汎用機体だ。悪くはないさ。」

ブリット「それに武装には近接系のがありますし、アルトと似た戦い方も出来くはないですよ。」

エクセルン「でもアルトちゃんとヒュッケちゃんだと月とスッポンぐらいの違いはあるでしょうが」

クスハ「（この場合、どっちがスッポンなんだろう？）」

キョウスケ「・・・四の五の言っていられん。アサルト1、出る！」

<日本海>

キョウスケ「アサルト1、及びARTXチーム出撃しました。」  
ヴィレッタ「SRXチームも出撃完了しました。」

リュウセイ、R-1の調子は？」

リュウセイ「全くもって問題ナシっす。」

ART-1もいいけどやっぱR-1もいいなあ。」

ライ「感傷に浸っている場合じゃないろうが。」

ヴィレッタ「でもART-1が大破したのはあなたの責任よ。」

後でトレーニング5セット追加。」

リュウセイ「とほほ・・・。」

アヤ「マイ、そっちこそヒュッケバインで大丈夫なの？」

アヤ「R-GUNやART-1がなかったときはこちらの機体で戦っていたこともあるからな。」

心配しなくても大丈夫だ。アヤ。」

エイタ「全機、出撃完了しました。」

テツヤ「よし、戦闘開始！」

敵戦力は指揮官と思われるガーリオン3機、ヘビーバレリオン3機、  
バレリオン3機、そしてリオンが24機。合計戦力33機。

対してこちらにはPTが9機、特機が1機、戦艦1隻。合計戦力1  
1機。

どう考えてもこちらが不利なのは子どもでも判る。

だが敵はその戦力差はないものと考えている。

NDC指揮官「いいか！」

あいつらは曲がりなりにも過去の大戦の前線部隊共だ！

1対1では絶対に勝てん。コンビネーションで落とせ！」

そう、彼らとて馬鹿ではない。

1対1で戦えば例えガーリオンでも数刻と保たないだろう。

故に、フォーメーションで敵機を攪乱し、コンビネーションで確実に仕留める。

この指揮官の考え方は概ね正しい。

NDC兵「了解！各機散開！その後、コンビネーションで仕掛け・・・！！」

だが彼らが唯一、そして重大なミスを犯していたとするならばそれはNDC兵「何だ！？」

・・・熱源反応が増大！？

10・・・20・・・40・・・ま、まだ増える！？」

彼がその真実を目にしたときには、撃墜される寸前であった。

エクセレン「ハウリングランチャーEモード！

ヴァイスちゃん超・分・身」

増える熱源反応、その正体は

ラインヴァイスリッターの高機動によるセンサーの誤認。

そしてヴァイスがその高機動を使用する際にハウリングランチャーから放たれる

エネルギー弾の弾雨である。

ライ「続けていきます！

ハイゾルランチャー・バースト、シューツ！！」

さらにダメ押しにR-2パワードのハイゾルランチャー。

それも収束モードではなく散弾モードである。

ハウリングランチャー程の範囲や精密さは無いが、追い討ちには最適である。

NDC兵「い、今の攻撃でリオンの半数が・・・！！？」

敵指揮官の唯一のミス。

それは、彼らがこういった状況においてのスペシャリストであるということだ。

NDC兵「隊長！バレリオンはまだいけます！距離をとって遠方から射撃すれば・・・！！？」

だが彼の判断は少々遅かった。

参式のドリルブーストナックルが彼の目の前に迫っていたからだ。  
ブリッド「よし、これで・・・！！」

アヤ「まだよ！」

念動集中・・・ストライクシールド、射出ッ！」  
マイ「アヤ、援護に入る！」

レクタングル・ランチャー、シュートッ！」  
リュウセイ「俺も行くぞ！」

ブーステッド・ライホウ！」

続いては念動制御のストライクシールドと遠距離支援砲撃。

狙った敵は逃がさないストライクシールドは戦意を失い始めた敵を容赦なく追い詰める。

運よく撃墜を免れた機体も砲撃の餌食となっていた。

テツヤ「こちらもいくぞ！」

対空機関砲、砲撃開始！続いて衝撃砲、1地番から4番、  
てーっ！」

ヴィレッタ「艦の援護に入る！」

ハイツインランチャー、デッドエンドシュート！」  
エクセレン「今日はアルトちゃんがない分ヴァイスちゃん張り切  
っちゃうから」

Bモードも持っていてね」

トドメはハガネの連装衝撃砲、R・GUNパワードのハイツインラ  
ンチャー、

ヴァイスのハウリングランチャー・Bモード。

もはや決定打というよりもオーバーキルに近いものがある。

キョウスケ「・・・残るは、ガーリオン3機か。」

エクセレン「多分指揮官機ね。」

ま、早いところ済ませちゃいましょうか」

NDC兵「た、たった数分で、30機のリオンとバレリオンが・・・」

NDC兵「た、隊長、これ以上は・・・」

NDC指揮官「お、落ち着け！」

俺達の任務は試作機強奪の時間稼ぎ、あくまでオトリだ。  
こうやっている間にも試作機はもう・・・」

エイタ「！！」

3時方向から新たな敵影です！」

テツヤ「敵の増援か！数は！？」

エイタ「い、1機です。識別信号は不明、

例の強奪機と思われます！」

戦闘空域に現れたそれは周囲の空気を一変させた。

禍々しい黒い機体『メデイウス・ロクス』は、明らかに異様な雰囲気  
気を漂わせていた。

キョウスケ「アレが強奪機か・・・」

エクセレン「うん・・・」

キミ、残念だけど私の好みじゃないわねえ。」

リュウセイ「結構カッコイイんだけど、悪役系のデザインだな、  
アレ・・・」

ライ「デザインは関係ないだろ、デザインは。

・・・それよりも、ヤツの出現が予想していた時刻よりも早  
い。」

キョウスケ「どのみち取り押さえるんだ。

早いに越したことはない。」

NDC兵「どういうことだ！？」

試作機は指定の場所で落ち合うはずだろう？」

NDC指揮官「おい！貴様！！いったいどういふ・・・！？」

指揮官が質問をしている間に、



メデイウスは彼のコックピットごと躊躇なく切り裂いた。

NDC兵「た、隊ちょ・・・!?!」

そして、彼の部下達もまた、同じ運命をたどった。

断末魔よりも速く、メデイウスはデイベイデッド・ライフルで打ち貫いた。

その挙動には微塵の情けも感じられなかった。

ブリット「!?!」

クスハ「み、味方を??」

???「フン。やはりガリオン程度では話にならんか。」

???「当然です。あの程度に手間をかけては次期主力機とはいえませんわ。」

???「ところで、このメデイウスの贄にする予定の連中は奴等が先に蹴散らしてしまったようだな。」

???「SRXチーム、ATXチーム、それにハガネ・・・  
いかがいたしますか？」

???「まずは、このメデイウスとAIIに実戦の恐ろしさを教えてやらねばならん。」

さっきの戦いではまるで意味がない。」

???「恐ろしさ・・・ですか？」

???「そういうものなのだろう? AIIは」

???「この子に感情など必要ありませんわ。」

???「フン・・・まあいい。」

それより、やつらは追って来ているか？」

???「ええ、間もなくここへ現れます。」

???「ならば、これでお前達の『辻褄合わせ』が上手くいくわけだな。」

「???? 計画と言ってください。」

リュウセイ「な、何だあいつ? 乗っているのはノイエDCの連中じゃないのか?」

キョウスケ「ならなおさらこちらに来る意味がない。」

避ける気があるならコースなんていくらでも修正できるだろう。」

エクセレン「ま、それは本人に直接聞いた方がいいんじゃない?

・・・とりあえずBモード、いただいちゃって」

放たれたハウリングランチャーの弾丸は、

不意に、だが正確に、そして静かに撃たれた。

緊張感と緊張感の間を突く攻撃を避けられる者はそうはいない、だが。

「????」・・・フム、悪い手ではないがな。」

メデイウスは避けた。

その動作にはあわてた様子は全く見られない。

「????」今度はこちらの番だ。

ディバイデッド・ライフル、ロングレンジモード。」

避けるとは同時にメデイウスは反撃を行った。

その動きに、エクセレンはついてこれなかった。

これらの一挙一動、全てには新兵や野党には見られない熟練した腕が垣間見えた。

エクセレン「うわっ!?

ちよつと油断したかしら? でも・・・。」

エクセレンは普段の言動で誤解されがちだが、

その本質には冷静で知的なものがある。

そんな彼女が油断するような理由は一つしかない。

キョウスケ「避けるとは意外だったな。」

だがこの間合い・・・!」

下方向からのキョウスケの接近にメデイウスは気がつかなかった。いくら機体のセンサーが反応するとはいえ、いかなるパイロットであれ、

意識が一方に向かっているときには数瞬だが反応が鈍る。

故に複数機による連携は単機よりも勝るものはあるが、互いの呼吸が合わなければ成立しないものである。

しかし、キョウスケとエクセレン。

このコンビにおいて、それはとうの昔に解決している問題である。

キョウスケ「G・インパクトステーキ、避けられると思うなよ！」

???「ぬう!!!」

少々奴等を甘く見たか？」

量産型ヒュッケバインMk-IIIの携行武装は

キョウスケ用に近距離使用のものに選択されている。

その中でも最も威力の高い武装がこのG・インパクトステーキである。

アルト程の威力は無くとも、彼にとっては最も扱いに長けた武装といえるだろう。

キョウスケの呼吸に合わせて、ステーキと装甲の間に火花が散った。

???「左腕部装甲中破、機能には問題ありません。」

・・・しかしこの連携、プログラム無しでここまで出来るというの？」

???「あいつらの連携は本来、アルトアイゼンとヴァイスリッターのだが」

ほとんどのモーションをマニュアルで行っているらしいという話は聞いたが、

どうやら本当だったようだな。」

ステーキはメデイウスの装甲を深々と傷付け、内部のフレームをむき出しにさせた。

キョウスケ「この手ごたえ・・・やはりアルトのようにはいかんか。」

エクセレン「でもまあ、上出来じゃない？」

これで機体バランスとれないでしょ。

黒トゲちゃん、そろそろおロープ頂戴いたしてもらいましょうか？」

エイタ「！？

強奪機と同方向から再び反応あり！

連邦の識別信号を受信しました！」

テツヤ「プリモルスキーの追跡部隊か？」

ようやくおでしたな。」

エイタ「で、でも識別信号は1つしか確認できません！」

テツヤ「何っ！？」

???「来たか・・・」

青と白の鋭角的な印象を持つツェントル・プトジェクトの産み出した番犬

メデイウスを追ってきた『サーベラス』がようやく姿を現した。

ヒューゴ「追いついたぞ、メデイウス・ロクス！」

アクア「さあ、その機体を返して頂戴！」

???「・・・」

ヒューゴ「こちらには撃墜命令も出ている。

機体を盾にするような真似をしても無駄だぞ！」

???「（フフフ・・・。それが今のお前か、ヒューゴ。）」

アクア「応答なしね。

どうする、ヒューゴ？」

ヒューゴ「武装のセイフティを解除しろ、全部だ。

それとハガネに至急連絡を入れろ。」

アクア「わかったわ。」

リュウセイ「あれ？まさか追撃部隊ってあの1機だけか？」  
ヴィレッタ「見たところ知らない機体だけど強奪機に似通った雰囲気があるわ。」

あの強奪機と同時期に開発された試作機といったところかしら？」

エクセレン「でもたった1機だけって・・・」

キョウスケ「余程の自信があるのか、単に動ける機体がアレだけだったかの」

どちらかだろう。」

ユン「形式不明機より、通信です。」

テツヤ「回線を開け。」

アクア「こちらはプリモルスキー基地所属、

アクア・ケントルム少尉とヒューゴ・メデイオ少尉です。

現在、我々は奪取された試作機『メデイウス・ロクス』の追跡中です。

申し訳ありませんが、こちらの援護をお願いします。」

ライ「メデイウス・ロクス・・・それがあの強奪機の名称か。」

リュウセイ「援護つつても、こっちはそっちの部隊と

挟み撃ちするつもりだったんだけどなあ・・・」

ヴィレッタ「元より今回の任務、あっちが当事者なわけだし、向こうの援護をするっていうのがセオリーよ。」

ライ「つまり、四の五の言うなどの事だ。」

リュウセイ「へい、へい・・・」

テツヤ「・・・エイタ、照会はすませたか？」

エイタ「は、はい。」

二人ともプリモルスキー基地のテストパイロットだそうです。」

テツヤ「こちらは伊豆基地所属テツヤ・オノデラ少佐だ。

了承した。そちらを援護する。」

キョウスケ「元からそういう任務だ。」

エクセレン「んじゃ、仕切り直してわけね。」

???「・・・仕掛けてくるそうだな。」

???「データ収集は続けておりますので引き続きお願いします、少佐。」

???「俺はもう軍人ではない、少佐はやめてもらおう。」

???「わかりました。」

アクア「TEエンジン出力調整・・・！」

くっ・・・駄目だわ！

イエローゾーンから出られない。

それに、メディウスの行動パターンも予測しないと・・・

！

ヒューゴ「落ち着けアクア。」

索敵も俺に任せろ。

お前はエンジンの出力調整だけをやっていればいい。」

アクア「冗談じゃないわ！

私だってテストパイロットなのよ！

ちゃんと役割を果たしてみせる！」

ヒューゴ「（初めての实战だから・・・

緊張するのも無理はないが・・・）」

リュウセイ「お、おい・・・

大丈夫なのかよ、あいつら？」

エクセレン「んふふ」

こういうのも若さってヤツじゃない？」

???「どうやら、TEエンジンの出力調整が上手くいっていないようですね。」

???「聞いていた以上のじゃじゃ馬らしいな、TEエンジンとい

「うヤツは。」

「????」(アクア・ケントルム。

やはり、あなたはその程度なのかしら?)」

アクア「もう!どうしてこうなの!?

シミュレーションでは上手くやれてたのに!」

ヒューゴ「イエローゾーンで構わん!

行くぞ、アクア。」

アクア「え、ちょ、ちよつとまってよ!」

ヒューゴはアクアの静止も聞かずにメディウスに向かって突っ込んだ。

「????」さあ来い。

そしてこのメディウスの贅となれ。」

ヒューゴ「ターゲット・ロック、ポッド展開!

ヤツを追い詰める!」

サーベラスの背部に設置してある有線式オールレンジ攻撃用兵器『

マシンガン・ポッド』が

メディウスを取り囲んでいく。

ヒューゴ「まだだ!ラディカル・レールガン、セット!

撃ちまくる!」

マシンガン・ポッドはその特性から自動運用可能だが、

それ故にAI制御特有の『穴』が生じる。

ヒューゴはそれを携行武器の『ラディカル・レールガン』で補った。

「????」ほう?中々いい手だな。

だがこの程度でメディウスを止められると思うな!」

メディウスはこの猛攻の中、尻下がるどころか迎え撃ってきた。

実弾とエネルギー弾の雨の中をかわしながら

「????」サーベラスの力、お前の力、みせてもらっ!」

アクア「き、来た!

はや、早く行動予測パターンを!」

ヒューゴ「しゃべるなアクア！

舌を噛むぞ！」

メディウスはディバイデッド・ライフルで弾幕を打ち落としながら急接近してきた。

そして一気にサーベラスの懷に飛び込むと同時にコーティング・ソードで切り裂いてきた。

サーベラスとメディウスの間に火花が飛び散った。

???「・・・ほう、中々の反応だな。」

サーベラスは無傷だった。

ヒューゴもメディウスと同様に、既にコーティング・ソードを持っていたおかげで

攻撃を切り払うことが出来たのだ。

ヒューゴの今回の戦法は弾幕の中、一気に懷に飛び込みコーティング・ソードで

切り裂くというものであった。

だが、メディウスもそれと同系統の戦法で対応してきたのだ。

ヒューゴ「・・・!？」

この動き、この戦い方

・・・まさか!？」

???「・・・フン。奴め、中々どうして悪くないな。」

???「とりあえずは、メディウスと戦える力は持っているようですね。」

???「ああ、そうでなければ意味が無い。」

アクア「!？」

どうしたの、ヒューゴ!？」

ヒューゴ「・・・いや、なんでもない。」

???「!!!？」

AI1に拒絶反応？

いったいどうしたの、AI1!」

???「ふっ・・・ふははは!」



「???「何がおかしいのです!」

「???「奴は感じたのだろ。初めての实战の恐怖を・・・!」

「???「この子に感情などありません。

ましてや恐怖を感じるなど・・・」

「???「まあいいだろう。とりあえずの任務は完了した。

後退する、と言いたところだがこの損傷では少々難しいか。」

「???「このぐらいなら問題ありません。

・・・ラズナニウム、自己修復機能作動。」

メデイウスの装甲がラズナニウムによって修復されていく。

その様子は生物のようでもあり、この異様な光景に周囲の雰囲気が変わった。

キョウスケ「!!

自己修復機能だと!?

エクセレン「うわ・・・

みるみる治っていくわ・・・」

ヴィレッタ「この修復力・・・

まさかマシンセル!?

「???「フフ・・・

さすがの奴らもおののいているな。」

「???「今のうちに後退を。」

「???「わかつておる。」

一同が驚いている隙に、修復を完了したメデイウスはその場から全速力で離脱した。

ヒューゴ「くつ、メデイウスめ。

なんてスピードなんだ。

アクア、こちらも追っぞ!」

アクア「・・・もう無理よ。」

ヒューゴ「何っ!?

アクア「駆動系と推進系のバッテリーももう空っぽなの!

メデイウスと違って、TEエンジンだけじゃ追いつけるま  
での出力が足りないの！」  
ヒューゴ「……」

エイタ「艦長、メデイウスの反応。

……ロストしました。」

テツヤ「周囲に敵影は？」

エイタ「あ、ありません。」

テツヤ「よし、本艦は引き続きメデイウスの追跡を……」

エイタ「ま、待ってください！」

伊豆基地から連絡です。」

テツヤ「大方、ケネス指令の愚痴だろう。」

回線をまわせ、私が聞く。」

エイタ「いえ、違います。」

ハガネは至急伊豆基地に戻り、補給と整備が完了次第、  
プリモルスキー基地と合同でメデイウスの討伐任務に向か  
えとの事です。」

テツヤ「何だと!？」

エイタ「艦長、どうなされますか？」

テツヤ「……PT部隊を収容させる。サーベラスもだ。

パイロット達から詳しい事情を聴きたい。」

エイタ「了解です。」

テツヤ「(このタイミングでこの指示、いったい上層部は何を考え  
ている?)」

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その4（後書き）

長い、とにかく長い！

しかも話しの密度は薄目という結果に・・・

途中で区切りを切ろうか切るまいか悩んだ挙句

切らずにそのままやっていたら今までで一番長くなりましたorz  
スパロボで言えば

戦闘 敵増援 味方増援 敵撤退 戦闘終了

という一般的な流れなのに今までで一番難産でしたorz

「読みにくい！解り難い！だからこうするべきだ」という感想は大  
歓迎ですのでどうかよろしく願いますm（＿）m

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その5

<ハガネ ブリッジ>

アクア「アクア・ケントルム少尉、ならびにヒューゴ・メディオ少尉。

ただいま参りました。」

ヒューゴ「先程の戦闘、ご協力いただき誠に感謝しております。」

テツヤ「それはこちらの科白でもある。二人には感謝するよ。」

アクア「い、いえ！滅相もございません！

それに結局はメディウスを取り逃してしまったわけですし。

・・・あ！その、すいません！

付け決して少佐殿を批判したわけではなく、その・・・」

ヒューゴ「責任は我々にあります。

基地の近くでメディウスを捕らえる事が出来ていれば、

少佐達にご迷惑をおかけすることもございました。

（それとアクア、お前は少し黙ったほうがいい。

少しは落ち着け。

呂律が回らなくなってきたぞ。」

アクア「（お、落ち着けるわけ無いじゃない！

前大戦の英雄の艦長が目の前にいらっしやるのよ！

大体落ち着いていられるあんたのほうがどうかしてるじ

ゃない！）」

テツヤ「・・・まあ、責任の所在の話はともかく、

君達から機体の事について詳しく聞きたいのだが・・・」

アクア「は、はい。

まず、私達が乗ってきたサーベラスは動力源として  
ターミナス・エナジーを利用しております。

私達『ツェントル・プロジェクト』ではTEを動力として  
いる

機動兵器を通称TEアブソーバーと呼称しております。」

ヒューゴ「サーベラスはPT型TEアブソーバーとして設計されま  
したが、

もう一機、特機型として開発された試作機『ガルムレイ  
ド』が存在します。」

テツヤ「ターミナス・エナジー・・・」

聞き慣れないエネルギーだがどういったものだ？」

アクア「はい。」

ミタール・ザパト博士が新しく発見したエネルギーで、  
重力・電磁力・強い相互作用・弱い相互作用といった4つ  
の力の他に、

その存在が予言されていたものです。」

テツヤ「新エネルギーという事が・・・」

具体的にはどのようなものだね？」

アクア「ターミナス・エナジーは理論上どこにでも存在している物  
ですが、

その収集と動力変換、出力調整が非常に困難なものなので  
す。

それで、現状では駆動系や推進系にはバッテリーで補って  
いるのが現状です。」

テツヤ「つまり、エネルギーには困らないが、コントロールが困難  
な代物というわけか。」

（まるでエクサランスの時流エンジンだな・・・）」

アクア「はい、ですがTEエンジンが完全なものとなれば、TEア  
ブソーバーは

理論上、無限に活動することが可能です。」

テツヤ「夢のような話だな。」

ヒューゴ「だがそう上手くいかないのが現実です。」

現状では問題点が数多く完成するにはあと数年かかる  
とも言われております。」

テツヤ「・・・ところでアクア少尉、その格好も数多くの問題点の  
1つなのかね？」

まるで、その、なんと言うか、水着のようで少々目のやり  
場に困るのだが・・・」

アクア「し、失礼しました！」

これはTEアブソーバーのコンピュータ制御やTEエンジ  
ンの出力制御に

ダイレクト・フィードバック・コントロール・システムを  
採用しているため、

は、肌を少々露出させるように設計された特別なスーツで  
して・・・」

テツヤ「あ、ああ解った。」

では、強奪機のメデイウス・ロクスとは？

あれもTEアブソーバーという奴なのか？」

アクア「いえ、メデイウス・ロクスは動力こそ

通常の核融合ジェネレーターを使用しておりますが、  
その代わりにフレームと装甲には『ラズナニウム』という  
自立性金属細胞が使用されています。」

テツヤ「(さっきの機体の自己修復はそのせいか・・・)

・・・無尽蔵のエネルギーと自己修復機能か。

到達点はメンテナンスフリーの機動兵器の開発といったと  
ころか。」

アクア「はい。」

ですが現状ではそこまでには至ってはおりません。」

テツヤ「ところでラズナニウムと言ったな、

あれと同じような物を我々はアースクレイドルで目撃して  
いるのだが。

・・・まさかラズナニウムはマシンセルを改良したものな

のか？」

ヒューゴ「・・・いえ、イーグレット博士が開発したマシンセルも博士自身も

もうこの世には存在しません。

ラズナニウムはザパト博士が以前から研究していたもので、

マシンセルとの共通点がいくつかはありますが全くの別物です。

（何よりそれは俺が身を持って知っているからな・・・）

「

アクア「でも現状ではマシンセル程の力はございませんが、

その分、マシンセルより扱いやすいはず・・・

それにもし強化されでもしたら・・・」

テツヤ「アースクレイドルの時のような事が起こりうる、と言う事か。

・・・どうあれ、楽観視は出来ないわけだな。」

アクア「はい、ですから一刻も早くメデイウスを・・・」

テツヤ「その事なんだが、先程伊豆基地から連絡があつてな、ハガネは伊豆基地に帰還し、補給搬入を終えた後にメデイウスを追跡せよとの事だ。

無論、君達も同行するようにとの事だ。

後で正式な転属辞令が来るとは思うが・・・」

ヒューゴ「（この艦に乗れだと・・・？

今回の任務、俺達だけ向かわせたのは

事を大事にさせないためと思っていたが・・・）」

テツヤ「ヒューゴ少尉、どうかしたのか？」

ヒューゴ「・・・いえ、なんでもありませんよ。」

アクア「て、転属の件、了解いたしました。

え、栄光のハガネに同行できるとは、

感激極まりなく思っております。」

ヒューゴ「・・・では、以後よろしくお願いします。」

テツヤ「うむ。まあ、そう硬くならずに、よろしく頼むよ。」

ヒューゴたちは緊張しつつブリッジを後にした。

エイタ「・・・どう思います、艦長？」

テツヤ「まあ、悪い人間じゃなさそうだ。」

アクア少尉は少々硬くなっていたがな。」

エイタ「緊張しっぱなしでしたしね、彼女。」

テツヤ「だが、彼らのバックが気になるな・・・」

エイタ「このプリモルスキーって基地、そんなに大したところじゃないですが・・・」

このプロジェクト名は気になりますね。」

テツヤ「・・・『ツェントル・プロジェクト』」

あのイエツツトを産み出した連中か・・・」

イエツツト、それは人によって歪められたアインストの成れの果てだが最後には制御できずに暴走し、

ツェントル・プロジェクトの施設『トーチカ1』を破壊、

あげくの果てに妖機人なる異形を呼び寄せた。

だがそれらはアクセルの意思の力によりアインストでなくなったアルフィミイと

彼女によって蘇ったアクセル、そしてハガネとクロガネの仲間達の手によって滅び去った。

エイタ「まさか、艦長。」

メデイウスがイエツツトみたいになると考えているのですか？」

テツヤ「さあな。」

だがまた一騒動起こるのは間違いないだろう。



まあ、考えたところでメデイウスが捕まってくれるわけでもないがな。」

エイタ「そうですよね……。」

テツヤ「……これより、艦は伊豆基地へ帰還する。」

全艦、伊豆基地へ向かつて微速前進！」

エイタ「了解！微速前進！」

テツヤ「（ヒューゴ・メデイオ中尉……」

あの表情から見て今回の転属の件に違和感を抱いているようだが、

まあ、当然だろうな……）」

テツヤは嫌な予感を抱きながら伊豆基地へ帰還するのであった。  
嫌な予感と言うものはよく的中するが、  
それがド真ん中であることを思い知るのはまだ先の話である……

<伊豆基地 格納庫>

ヒューゴ「……妙だとは思わないか？」

何故俺達がハガネに乗る必要がある？」

アクア「そう？」

私は別になんとも思わないけど？」

ヒューゴ「……追跡を出すなら、

隠密系の部隊やゲリラ戦に特化した部隊を差し向けなければ  
いいだけの話だ。

何故わざわざ見つかりやすいスペースノア級を向かわせる必要がある？」

アクア「それだけこの任務の重要性が高いつてことじゃないの？」

ヒューゴ「それに、この根回しの良さも気になる。」

まるで上層部は初めからこうなるとわかっていたようにしか思えんほどにだ。」

アクア「うゝん・・・」

そう言われれば、ね。

確かに今回の事件、引つかかる所もあるわね。

簡単にメデイウスが盗まれた事とか・・・」

ヒューゴ「プロジェクト内で手引きした奴がいると見て考えるべきだな。」

アクア「もしかして、ザパト博士が？」

ヒューゴ「それならメデイウスだけ盗まれた理由がわからん。

他の勢力に売るつもりならＴＥアブソーバーももって行かせる筈だ。

（あの男なら間違いなくどうしているはずだが・・・）」

アクア「そうよね。」

プロジェクトの成果を売るんだったら、

ラスナニウムとＴＥエンジンをセットにしないと・・・

（それともメデイウスには私達の知らない機能があるんで

もいっうの？）」

ヒューゴ「・・・俺にはあのメデイウスの、

いやメデイウスに乗っていた奴のクセには見覚えがある。

だが有り得ない・・・あの人が・・・戻ってきたなど・

・・・」

エクセレン「あゝもう！

全く！若い二人が何うつむいてんだか！

先生もう我慢できません！」

ヒューゴ「は？」

アクア「な、なにこの人？」

エクセレン「いゝい？」

立ちはだかる困難や向かい風もあるでしょう。

でもそういう時こそ挫けちゃダメよ。

こういうときは女は男を頼り、

男は女と愛を誓い、そして二人はいざ行かん、さらなる荒波の中へ」

キョウスケ「適当な事をぬかすな。

それに色々と端折りながら進めていないか？」

ブリット「それに今の話、最終的にバッドエンドみたいなんですけど・・・」

エクセレン「ままま。

細かいところは気にしないの」

アカア「・・・え、え」と。

あ、あなた方はもしかして・・・」

キョウスケ「ATXチーム、キョウスケ・ナンブ中尉だ。」

エクセレン「おなじくエクセレン・ブラウニング少尉よ。

ンフ、エクセ姉さまってよんでも構わないわよん」

アカア「ア、アカア・ケントルム少尉です！

さ、先程はあっけに取られててすいませんでした！

キョウスケ中尉、エクセレン少尉・・・じゃ無かった！

エ、エクセお姉さま？」

キョウスケ「別に気にしていない。

あとこいつの話は話半分で聞いておいていい。」

アカア「は、はあ・・・」

ブリット「オレはブルックリン・ラックフィールド少尉。

ブリットで結構です。」

クスハ「わたしはクスハ・ミズハ少尉。

わたしもクスハで結構です。」

アカア「ふ、二人とも随分と若いんじゃない？」

ブリット「え？19かそこらですが別に珍しくは無いんじゃないですか？」

エクセレン「そうそう、それを言ったら教導隊のラトちゃんだって

まだ15もいつていないんだから。

若さつていゝわよね。」

アクア「(ま、負けた・・・歴戦の勇士つて聞いていたから、みんなカイ少佐ぐらいの年齢かと思っていたのに・・・)」

「  
ヒューゴ「なに悲壮感出してんだ、お前は？」

キョウスケ「ところで、サーベラスの操縦をしていたのはお前のほうか？」

ヒューゴ「申し送れました。ヒューゴ・メディオ少尉です。

先程の戦闘はどうもありがとうございました。」

エクセレン「ムムツ！」

キョウスケ張りのムツリとブリット君張りのマジメ

君と見たわ。」

ヒューゴ「む、むつつり？」

キョウスケ「茶化すのも大概にしろ。」

エクセレン「あゝん。

キョウスケのいけずう。」

ヒューゴ「どうも調子が狂うな・・・」

(あのイエツトを最終的に倒したのはこいつらだと聞  
いていたが・・・

もしこいつらがもつと早く駆けつけていれば・・・

いや、彼らを恨むのは筋違いか・・・)」

キョウスケ「ん？」

俺の顔に何か付いているか？」

エクセレン「わお！」

もしかしてもしかするとキミ、コッチのシユミ？」

ヒューゴ「いえ・・・」

ただあのアルトアイゼン・リーゼに乗っている男と言っ  
のが

一体どんなヤツかと思っていたもので・・・」

アカア「そういえば、さっきの戦闘ではアルトアイゼン・リーゼは  
出撃していませんでしたが・・・？」

エクセレン「ああ、それだったら、

あの子も呼んだほうがいいんじゃない？」

アカア「あの子？」

エクセレンは格納庫を走り回っているリュウセイを指差した。

リュウセイ「ぜえ・・・ぜえ・・・腕立て伏せ100回、

腹筋100回、格納庫20周、終わり・・・まひた・・・

・

ヴィレッタ「まだ後、スクワットが残っているわ。

そしてそれが終わってようやく5セット目終了。

あとまだ10セットあるわよ？」

リュウセイ「す、少ひ、休まふえて、くらはい・・・」

ヴィレッタ「・・・まあ、搬入作業もあるし、ひとまずは良しとするわ。

そのかわり定時になったら再開すること。

1分遅れることに1セット増やすから、そのつもりで。

・

リュウセイ「（お、鬼・・・）」

エクセレン「あらら・・・

コツテリとシゴかれてるわね。」

アカア「あの？彼は・・・？」

エクセレン「えっとね。

あそこでバテて死にかけてるのがSRXチームのリュ

ウセイ君で、

階級は私と同じ少尉。

その隣のイカしたお姉さんが隊長のヴィレッタ大尉よ

ん。」

アクア「・・・彼、随分と厳しい訓練を受けているようですが、

一体何があつたのでしょうか？」

エクセレン「あゝ・・・

それをひつくるめてリュウセイ君に話して貰いたかつたんだけど、

あれじゃ無理つばいわねえ・・・」

半ば屍と化している倒れたリュウセイを眺めながら、エクセレンはつぶやいた。

ライ「・・・なんなら俺達でよければ話しますが？」

アヤ「ええ。」

リュウの分の説明ぐらいは出来ますし」

マイ「それに後でリュウにも説明しておかないといけないしな。」

アクア「え・・・もしかして・・・」

ライ「紹介が遅れました。」

S R Xチームのライディース・F・ブランシュタイン少尉だ。

」

アヤ「同じくS R Xチームのアヤ・コバヤシ大尉よ。」

よろしくね、アクア少尉。」

マイ「アヤの妹のマイ・コバヤシ曹長だ。」

アクア「(ブ、ブランシュタインっていったら名門中の名門じゃない・・・！

それに、マイ曹長ってまだほんの子どもじゃない・・・！

あまけにそろいもそろってみんな若いし・・・)」

クスハ「・・・なんだか面食らっているみたいですね。」

エクセレン「まあ、ほら、アレよ。」

私達結構個性豊かだし。」

ブリッド「それを言ったら

彼女のパイロットスーツも個性的ですよ。

いくらシステムの制御に必要とはいえ・・・」

アヤ「まあ、私も人の事は言えないんだけどね・・・」

エクセレン「ねねね。キョウスケ、こうなったら私も・・・！」

キョウスケ「変に張り合うな。」

大体、パイロットスーツというものは

その目的や用途に応じて設計されているものだ。

お前の気分1つでコロコロかわるもんじゃないだろう

に。」

エクセレン「もう、夢が無いわねえ・・・」

んじゃ氣イ取り直して説明の続きと・・・」

エクセレンがアルトの説明を始めようとしたそのとき、  
間の悪い事に整備員が駆けつけてきた。

整備員「あのー。すいません。」

プリモルスキー基地からののですが・・・」

ヒューゴ「ああ。お疲れ様です。」

整備員「はい。」

それで、ガラムレイドとその他の積荷が到着しましたので、  
ご確認のサインをお願いいたします。」

アクア「解りました。」

ブリット「ガラムレイドって、確かグルンガストと同じ特機タイプ  
でしたよね。」

宜しければ、モーションデータとか見せてもらえませんかね？」

ヒューゴ「ああ、それだったら良いが、こちらも参式のデータを見せて欲しい。」

ガラムレイドの武装の一部は、グルンガストを参考にした  
ものもあるが、

何分特機のデータは貴重だからな、色々と参考にしたいんだが……。」

ブリット「ええ。それでしたら喜んで。」

エクセレン「そんじゃま、その新顔ちゃんをみんなで見に行きましょか！」

リュウセイ「よっしゃあ！みんな行くぞ！」

マイ「リュウ、体はもう大丈夫なのか？」

リュウセイ「おう！」

新しいスーパーロボットが来るって聞いて

おちおち寝てもいられないだろ！？」

ライ「相変わらずだな……」

ヴィレッタ「その元気をもう少し別のことに使えないのかしら？」

少々あきれながらも皆はガルムレイドを見に行くことにした。

整備員「あ、それからヒューゴ・メディオ少尉。

ミタール・ザパト博士から少尉宛に医薬品が届いておりますが……」

ヒューゴ「ああ、それはそこに置いといくれ。

あとで俺が持つていくから。」

整備員「はあ……。ではこちらに置いておきますのでよろしくお願いします。」

ヒューゴ「（ミタールめ、俺をここに縛り付けておくつもりか？

だが薬が大量にあるのはありがたい。

……このところ効きが悪くなっているからな）」

アクア「ヒューゴ！何やってんの！」

おいていくわよ！」

ヒューゴ「……ああ、わかってる。今行く。」

リュウセイ「おおっ！



こいつがガルムレイドか！」

ブリット「大きさはグルンガストとほぼ同じですね。」

リュウセイ「くうっ！」

真っ紅なボディに加えて両肩には牙、たまんねえぜ！」

マイ「うん。私はバーンブレイドのほうが好きだな。」

リュウセイ「だけどこの配色！この牙！そしてこの顔！

いや、設計者はいいセンスしてるぜ！」

アクア「あの・・・バーンブレイドってなんですか？」

アヤ「ああ・・・アニメよアニメ。」

リュウは根っからのロボオタクで、ああいう機体を見ると

熱が入っちゃってああなっちゃうの・・・」

アクア「ア、アニメですか？」

アヤ「おまけにマイも感化されちゃって

今ではすっかり・・・

ああ・・・あの子の将来が心配だわ、ホント。」

アクア「（私、ひよつとして聞いちゃいけないこと言っちゃったのかしら・・・）」

ブリット「成る程・・・。

この『ブラッティ・レイ』と『ファング・ナックル』は  
グルンガスト系統のもですね。」

ヒューゴ「思うんだが、何で特機ってヤツは腕をバコバコ飛ばすんだ？

戻ってこなかったら文字道理お手上げ状態だろうが・・・

まあ、実際乗っている俺が言えた義理じゃないか。」

キョウスケ「特機は元々、PTでは対処できない大型の敵を想定して造られたものだが、

その意匠や武器には敵に対する威圧も兼ねてあるからだと聞いたことがある。」

エクセレン「ようするにデカくて目立ってインパクトを利かせた武器で

相手をビビらせるってこと？」

ブリット「となると、腕を飛ばすっていうのは相手に相当なインパクトを与えますね。」

リュウセイ「それになんと言っても、ロケットパンチはスーパーロボットの代名詞だからな。

あ、そうだ！こんどロボに頼んでアルタードにも付けてもらおうか！」

ライ「・・・ただでさえ間接が弱いアルタードの強度をこれ以上下げてどうする？

それに腕を飛ばす機能を付けると設計を1からやり直さなくてはいけないし、

そうなると念動フィールドの出力制御や火器管制のシステムが大幅に増える

ことになるが、それをお前が全部やるとでも？」

リュウセイ「・・・スイマセン、許してください。」

キョウスケ「他の武装は、膝のチェンソーによる『サンダー・スピーンエッジ』と

エネルギーを開放・収束させて突撃する『バーニング・ブレイカー』か。」

エクセレン「ART-1ちゃんのブレードナックルといい、流行ってんのかしら、チェンソー？」

クスハ「さ、さあ・・・？」

ブリット「ところで、このTEアブソーバーって1人じゃ操縦できないんですよ？」

となると、1機余る事になりますが・・・？」

ヒューゴ「操縦の方はまだなんとかなるが、TEエンジンの出力調整となると

アクアが欠かせないからな、どうしてもそうなってしまうな。」

アクア「（へえ）。ヒューゴの奴、なんだかんだで私を認めらてる

のね。」

ヒューゴ「だが、先程の戦闘で結構無茶をしたからな、

サーベラスは当分控えるべきだろう。」

キョウスケ「ん？特に異常な点は見られなかったが？」

ヒューゴ「サーベラスは本来、アルトアイゼン・リーゼと同じく陸戦機なんです。」

エクセレン「え、でも思いっきり飛んで登場してきたじゃない？」

ヒューゴ「……空中戦使用のデータ採りをやるつもりだったんですよ。」

まあ何とか戦えましたし、試作スラスタも戦闘終了までは

問題なかったんですけど、

かなり負荷がかかってしまってもう使えないんです。」

クスハ「でも、換装式のテストドライブあるじゃないですか？」

アクア「残念だけどサーベラスもまだ試作段階でね、

まだ一般規格に合せる様にはなっていないの。」

ヒューゴ「それに、ガルムレイドならメデイウスと同じく単独飛行が可能です。」

無理に陸戦機のサーベラスで戦う必要は無いかと。」

リュウセイ「うん。残念だなあ。」

サーベラスのこの『ターミナス・キャノン』っての  
1度見たかったんだけどなあ。」

キョウスケ「だが時と場合によっては、

サーベラスを使わざるを得ない状況にもなると思うが

？」

ヒューゴ「多少の無茶は承知の上です。」

キョウスケ「フ……。いい心がけだな。」

エクセレン「あ！

そういえばブリット君にクスハちゃん、

あなた達、テスラ研に出張予定入っていたけど、

今回のことで、どうなっちゃうの？キャンセル？」

クスハ「それでしたら、さっきケネス指令から連絡がありましたよ。」

ブリット「要約すると、『さっさと済ませて帰って来い』だそうです。」

リュウセイ「何だ？」

もしかして、また龍虎王が目覚めたのか？」

クスハ「・・・それも、前よりもはっきりと。」

ブリット「ゲージを突き破らんばかりの勢いだったそうです。」

今は、おとなしくしているようですが・・・」

ヴィレッタ「まさか、また妖機人が！？」

クスハ「それは解りませんが、最近、妙な胸騒ぎがするんです。」  
ブリット「俺もクスハと同じです。」

・・・リュウセイ達は？」

リュウセイ「・・・いや、実を言うと俺達もなんだ。」

アヤ「この妙な感じ、何だと思う・・・？」

マイ「僅かに、だがどうしてもぬぐいきれないこの感じ・・・」

アクア「なんだか話が見えてこないんだけど・・・」

ヒューゴ「彼らはT・LINK適合者、俗に言う念動力者だ。」

アクア「確かT・LINKシステムが使える人達のことよね？」

それが何か関係があるの？」

ヒューゴ「俺が聞いた話だと、なんでも念動力者の嫌な予感つてのは妙に当たるんだそうだ。」

リュウセイ「なんか・・・エライ言われようだな俺達・・・」

ヒューゴ「で、龍虎王っていうのは」

アクア「テスラ・ライヒ研究所で保管・管理されている

超機人っていうカテゴリーの特機でしょ？」

ヒューゴ「なんだ。知っていたのか。」

アクア「けど、いくらなんでも遺跡から発掘されたって言うのは・・・」

ブリット「俺達だって、実際にこの目で見るまでは信じられなかったんですから」

無理は無いですよ。」

アクア「（ホ、ホントだったんだ。）」

ヒューゴ「それで、龍虎王が目覚めたというのとその胸騒ぎの関係は？」

クスハ「龍虎王は遥か古に造られた超機人の生き残り、

その使命は人界の救済、つまり人を守る事なんです。」

アクア「人を守る巨人・・・」

まるでどこかの神話ね。」

ブリット「以前もアインストの襲撃の際に龍虎王は俺達に力を貸してくれました。」

そして、龍虎王は再び眠りについたんです。

ですがその龍虎王がまた目覚めたと言っことは・・・」

ヒューゴ「・・・アインスト、いやそれ以上のものが現れると？」

クスハ「そこまでは詳しくは解りません。しかし、

アインスト殲滅後にもう一度目覚めたケースがあるんです。」

「

ヒューゴ「何・・・!？」

ヴィレッタ「妖機人、簡単に言えば悪の超機人が襲撃したときに龍虎王が覚醒したのよ。」

キョウスケ「だがその妖機人を追い回しているときに、とんでもないものに出くわした。」

ヒューゴ「『イエツツ』・・・ですね。」

ライ「お前達が知っているというのは、当然と言えば当然か。」

エクセレン「私達、さっき軽くこのプロジェクトについてレクチャー受けたんだけど、

『ツェントル・プロジェクト』って名前を聞いたときはさすがの私もびっくりしちゃったわ。」

アクア「・・・イエツツに関しては、もはや弁明の処置もありま

せん。

私達だって、最近このプロジェクトに入って知ったばかりなのですが、

まさかあんな物を造っていたなんて・・・」

リュウセイ「・・・まあ、イエッツトも殲滅したし、

あんた達は当事者じゃないわけだし、

別に気に負う必要はないとおもうよ。」

アクア「え・・・！？」

エクセレン「ウチの部隊、イロイロとワケありの子が多いから、

もうお腹いっぱいっていうか、ごちそうさまっていうか。

ま、一々気にしていたら体に良くないってことよん。」

アクア「それって、ポジティブなんだかネガティブなんだか・・・」

キョウスケ「色々気にしないのもどうかと思うが。」

リュウセイ「要するに、これから共に戦うんだからヨロシクって事だ。」

アクア「は、はい！

こちらこそよろしくお願いします！」

ヒューゴ「（共に戦う、か。

フォリア・・・

クライウルズもこんな感じだったっけな・・・

不思議だな、たった数ヶ月なのに、随分と昔のことのように思えるよ・・・）」

## 第二話 完

## 第2話 仕組まれた追跡劇 その5（後書き）

ようやく第二話が終わりました。

説明口調が多い会話ばかりで申し訳ありません。

ガラムレイドの扱い悪っ！

仮にも主人公機なのに

もう1つの主人公機、

サーベラスも出しゃばり過ぎたためクギを刺されてしまいましたね。  
まあ、主人公機の扱いが酷いのはスパロボの宿命みたいなモンです

（苦笑）

クスハとブリットはいきなり左遷もとい分岐です。

文句がある人は龍虎王に言うてください（苦笑）

文章を上手く纏められる本家スパロボ脚本家はホントに凄いですよ  
この内容だったら実際にプレイするとして30分とかかりませんね  
orz

それなのに二週間以上かかる自分が悲しいです（T-T）

### 第3話 過去との再会 その1

<地球連邦軍 北米支部ラングレー基地 教導隊事務室>

ラトウーニ「失礼します。少佐、この間の事件の報告書、全員分終わりました。」

カイ「うむ。わざわざすまないな。そこに置いといてくれ。」

ラトウーニ「あと、これローランド少佐から・・・」

カイ「娘さんの焼いたクッキーだろ？」

アラドから話は聞いている。

中々のものだそうじゃないか。」

ラトウーニ「はい。とつても。」

カイ「・・・それよりも、この間の任務、

お前達には辛い思いをさせてしまったな。

本来なら、無関係の者を向かわせるべきだったかもしれん。」

ラトウーニ「いえ。私達以上の適任者はいなかったと思います。

オウカ姉様を利用していると知ったら、なおの事です。

」

ここ最近、北米付近で改造PTを使用したテログループの攻撃が相次いで起こっていた。

軍人、民間人合せて死亡者156人、そのうちの76人はまだ幼い子どもだったという

見境の無い卑劣なものだった。

ラトウーニ達の任務はローランド少佐率いるテロ対策隊との合同による鎮圧であった。

特殊戦技教導隊の目的はPTの戦技研究とその構築ではあるが、秀でたパイロットがそう多くない今の連邦ではこのような任務を任



されるは珍しくも無い。

だがラトウー二達が任された理由はもう一つあった。

このテロに使用されている改造PTに

スクール出身者、オウカ・ナギサのモーションパターンが

使用されていることが判明したからだ。

オウカ・ナギサはラトウー二達がいたスクールの出身者であり、

彼女達に慕われていた大切な姉でもあった。

前大戦中には幾度と無く記憶を書き換えられ、

最後には人格を消去されて彼女達の前に立ちはだかつてきた。

だがラトウー二達の必死の説得と

スクールの研究者クエルボ・セロによってその人格と記憶を取り戻した。

そして彼女はア・スクレイドルでラトウーニやアラドそしてゼオラや他の仲間を守るために

共に戦い、その命を投げ出して皆を救ってくれた。

そんな彼女を利用している奴等をラトウー二達が許すはずも無かった。

何日もの張り込みの末、遂にテログループの鎮圧に成功したかに思えたが、

彼らの1人が捕まる間に改造PTの自律モードを起動させてしまった。

その自律AIにはオウカ本人のモーションパターンが組み込まれていたのだ。

AIとはいえ、オウカの実力は並大抵のものではない。

何よりも、それをラトウー二達は一番良く理解していた。

それでも彼女達は1歩も引かなかった。

任務だからではない、これ以上戦わせられている姉を見ていられなかったからだ。

決意の元、彼女達は連携を駆使して姉の鎖を断ち切ることに成功した。

だがそれは彼女達に再び敬愛する姉に別れを告がせる事を意味していた。

実はカイにも似たような経験がある。

ホワイトスター攻略戦、失踪していたと思われていたかつての教導隊隊長、

カーウアイ・ラウ大佐が変わり果てた姿で自分達の前に立ちはだかつてきたのだ。

彼にはラトウーニ達よりも長く生きている分多くの経験がある。

辛いことや悲しいことも含めてだ。

だがそれでも、自分のかつての隊長をこの手で葬ったときの感触は決して忘れられない。

そのことを思うと、今回の任務でラトウーニ達に

また心に背負い込んでしまうのではと懸念していたが、

彼女達は彼が思っているよりもずっと強く成長していた。

カイ「（強くなったな、ラトウーニ。）」

ラトウーニ「・・・じゃあ、報告書とクッキー、ここに置いておきますね。」

カイ「ああ、ありがたくいただくとするよ。」

ラトウーニ「ところで、少佐。」

随分と溜まっているようですね、書類。」

カイ「ほとんどが、あちこちの基地からの訓練要請関係の物だ。」

・・・が？こいつは違うな？」

カイ少佐は書類の山の中から、1束の書類を抜き出した。

ラトウーニ「なんなんですか？」

カイ「・・・ふう。」

こりゃ、上からの教導隊への引き抜きリストだな。」

ラトウーニ「？」

移動願いではなくて？」

カイ「インスペクター事件以前は、新教導隊は俺とお前、あとライディース少尉だけだったからな。

人手は多いほうがいいと思い、上に申請していた事があってな。

それが今になってようやく来たって事だ。」

ラトウーニ「ですが、今でも人手不足には変わりないでしょう？

別に今のままで良いと言う訳ではありませんし。」

カイ「まあ、そりゃそうだがな・・・

今さつと目を通して見たんだが、

このリスト、この間のゴタゴタのせいかな、かなり古いんだ。」

ラトウーニ「古い？」

カイ「・・・俺が知っているだけでも、死亡したもののまでいるんだ。

後で、情報部が人事部に問い合わせないとな。」

ラトウーニ「また仕事が増えちゃいましたね。」

カイ「もう慣れたさ。

それよりも、この中から選抜するのが一苦労だよ。

どいつもこいつも一癖も二癖もありそんな連中ばかりだ。」

ラトウーニ「フフ・・・。

それ、今に始まったことじゃないでしょ？」

カイ「身も蓋も無いな。」

ラトウーニ「それでは下からせてもらいますね。

これ以上、長居すると仕事の邪魔になってしまいます

から。

カイ「ああ、もうすぐ昼飯だからばちばち仕事を切り上げるように伝えておけ、

特にアラドにはな。」

ラトウーニ「はい。」

あ、少佐。

私、選抜の件、今から楽しみにしていますから。」

ラトゥーニはそう言う部屋を後にした。

カイ「フフ・・・」

まるで転人生を待っている学生のような。

・・・本当なら、そのぐらいの年頃だから仕方はないがな。」

カイ少佐はまだ30代半ばだが、16歳になる娘がいる。

ラトゥーニやアラド、それにゼオラとはちょうど同世代だ。

そのせいか彼女達に対しては父親のような接し方をしがちである。彼女達の境遇のせいか、あるいは遠くにいる娘に重ねているのか、おそらく両者だと思われる。

カイ「どれどれ・・・」

ふむ、結構旨いな。だが少々俺には甘すぎるかな。

娘、か・・・

・・・日本に帰るのはこれを片付けた後かな・・・」

山積みの書類を前に、カイは少し虚しい様な悲しい様な気分になった。

クッキーが少ししょっぱい味がしたのは気のせいだと自分に言い聞かせた。

ラミア「佐・・・カイ少佐。」

カイ「おおっ!？」

ラ、ラミアか？

・・・脅かすな、いつからそこに？」

ラミア「さっきラトゥーニと入れ違いで入ってきちゃりましたが？」

一応、声をおかけしちゃいましたが、

反応が無かったものでございますでしたので。」

カイ「ああ、そりゃ悪かった・・・

で、なにか用事か？」

ラミア「基地周辺の巡回任務、完了しちゃいましたのでその報告であります。」

・・・あと、先程から少佐ちゃんのモニターに

通信が入っちゃっているようなので、一声かけた次第でござりまする。」

カイ「わざわざすまんな。

通信？

・・・こりゃ情報部からか？」

カイ少佐はモニターの通信を開いた。  
モニターに映ったのはよく知っている男だ。

ギリアム「こちらは情報部のギリアム・イエーガーです。」

カイ「ギリアムか、随分と久しぶりだな。」

ギリアム「何分、良い様に使われている身ですので。」

カイ「それはお互い様だろう。」

ラミア「・・・それで、

別に世間話をしにわざわざ通信をしてきたわけでは

無いのではありませんでしょう？」

ギリアム「ラミアか、こりゃまた手厳しいな。」

カイ「それで、何か用か？」

ギリアム「以前、そちらに頼んでおいた件ですが、

何か進展はありましたか？」

カイ「・・・いや、先日もテログループを鎮圧したが、  
奴等が絡んでいたと言う証拠は見られなかった。」

ギリアム「・・・そうですか。」

ラミア「少佐、いったいどういった依頼だったのでございますのでしょうか？」

ギリアム「・・・そうだな、君も俺と同じで無関係とは言えないかな。

話した方が良いのかもしれない。」

ラミア「少佐と私・・・

もしや、シャドウミラー!?」

カイ「その通りだ。」

ギリアム「ここ最近、微弱ではあるが地球圏のあちらこちらで重力異常が確認されている。

それも、1度や2度ではない。」

ラミア「・・・シャドウミラーは首謀者のヴィンデル・マウザーを含め、

幹部を多く失い、残存勢力もホワイトスターと共に消え去りました。

私やアクセル隊長以外は・・・」

ギリアム「・・・だがそれは『こちら側』に辿り着けた連中の話だ。」

ラミア「・・・話が見えてきました。

少佐がおっしゃりたいのは、所在不明になった残りの半数の内の幾つかが、

こちらにやって来ちゃいましたかもしれないということでございますですね?」

ギリアム「そうだ。

リユケイオスは俺と言うコア無しで次元転移を行った。

それ故にリユケイオスの制御システムには大幅なブレが生じたはずだ。」

ラミア「その通りでございます。

順番で言えば、殿を務めたアクセル隊長が真っ先に

『こちら側』に転移して来ちゃいましたぐらいですから。」

ギリアム「そして、連中の真の恐ろしさは任務のためならどんな状況下であっても遂行しようとする妄信じみた執

念だ。」

カイ「つまり、例えリーダーを失ったと知っても連中がやることは変わらないと言うことか。」

ラミア「それで、カイ少佐に重力異常が起きた地点の調査や

テログループに連中の痕跡が無いに依頼したということで  
ごきますね。」

ギリアム「今のところは俺の取り越し苦労で終わってはいるがな。」

カイ「それで終わってくれば良いが、だからと言って連中を軽視するわけにもいかん。

引き続き調査は続ける。

連中では無いかもしれないが、何かの前触れとも十分に捉えられるからな。」

ギリアム「すいません。」

カイ「気にするな。」

いまさら仕事の1つや2つ増えたところで大して変わらん。」

ギリアム「でも正直なところ猫の手も借りたいと言ったところでし  
ようか？」

カイ「上もそれを見かねてか、さっき教導隊への引き抜きリストみ  
たいなモンを

よこして来たんだが、いかんせん情報が古くてな。」

ギリアム「引き抜きか・・・

そちらがよろしければ手を貸しましょうか？

1人心当たりがいるのですが。」

カイ「ほう？

少し聞かせてくれないか。」

ギリアム「俺が今調査している事件の関係者なのですが、

元軍人でその後は民間で契約社員ではあるが

テストパイロットから教導官役までこなしていたそうです。  
す。

・・・まだそいつにはそういった話はしてはいないし、

OKするかどうかは解りませんが、

話をしておくだけでも価値はあると思うのですが。」

ラミア「こなしていた？」

つまり今はフリーと言う事でございますのね？」

ギリアム「まあそんな所だ。」

カイ「テストパイロットだけならともかく教導官もこなすとなると並大抵の腕では勤まらん。」

ギリアム「だが今は療養中で、

パイロットとして働くならリハビリが必要との事だそうです。」

カイ「それでもOS構築や教導官役なら十分に腕を発揮できる。

もしそいつがそういった役職でよければ俺は考えておくよ。」  
ギリアム「わかりました。

それでは、調査の件よろしく頼みます。」

ギリアムはそう言う通信を切った。

ラミア「・・・少佐、今の話本当に受けるつもりでっしゃるのか？」

カイ「人手不足なのは事実だし、上からもそういう命令が来ている。

それにギリアムの好意を無下にはできんしな。」

ラミア「色んなモンに挟まれていらっしゃるんですね。」

カイ「中管理職っていうのはそういうもんだ。」

ラミア「ところで、重力異常の調査。

何も怪しいところは見つからなかったのでありんすか？」

カイ「逆に何も無いのが不気味でならん。

解ったことと言えば、この北米付近での重力異常の回数が比較的多かったと

言うことぐらいだ。」

ラミア「なるほど、それでこの辺りで調査を行っていたという事でございますね。」



カイ「結果はまだ何とも言えんが・・・」

だがそのときである。

アナウンス「特殊戦技教導隊所属カイ・キタムラ少佐、

至急、管制室までお越しく下さい。

繰り返します、カイ・キタムラ少佐、

至急、管制室までお越しく下さい。」

ラミア「噂をすれば何とやらというやつでっしょうか。」

カイ「ふう・・・。」

そういうことらしい。」

<ラングレー基地 管制室>

カイ「・・・重力余震？」

一般兵「はい、それもこのパターンは転移が行われる直前のものと推測されます。」

カイ「（ギリアムの嫌な予感的中したか・・・？）  
了解した。」

至急、予測転移座標を割り出してくれ。

解り次第、すぐに現場に急行する。」

一般兵「了解しました。」

カイ「（さて、鬼が出るか蛇がでるか・・・）」

### 第3話 過去との再会 その1（後書き）

カイ少佐大好きです（爆）

あの渋さとダンディは反則ですよw

個人的に結構書きやすいキャラです。

反対にラミアの崩壊言語は書いてるとゲシュタルト崩壊起こしそうですw

冒頭の話はOGクロニクルVOL.2収録の

栗橋伸祐先生作「護るべきもの、乗り越えるべきもの」です。

一応あらましを書きましたが、漫画を読んだほうが手っ取り早いです（笑）

ギリアムが紹介した人物、知っている人は直ぐに分かるでしょうが登場するのはもう少し先の予定なので気長にお待ちください。

### 第3話 過去との再会 その2

<北米 荒野地帯 ラングレー基地より50km地点>

ラトウーニ「予測した座標だとこの辺りです。」

カイ「うむ。全機そのまま警戒体制をとれ。」

アラド「・・・了解っス。」

カイ「おいアラド。」

しっかりせんか、いつもの元気はどうした？」

ゼオラ「あの・・・」

昼御飯の途中だったから・・・」

カイ「ああ、そういうことか。」

アラド「・・・グス。」

だってまだ3杯しかお替りしてないんすよ。

それにまだオカズ残ってたし・・・」

カイ「食欲旺盛なのは大いに結構だが、もう少しは限度ってものを考える。」

昔から腹八分と言うだろうが。」

ラミア「それに過度の栄養摂取は身体機能不全を起こさせると聞く。今後のためにも控えた方が身のためだ。」

アラド「カイ少佐もラミア少尉も冷たいっス・・・」

ゼオラ「あんたの体のためを思っただけでいるんだから、そんなこと言わないの。」

アラド「わ、わかってるよ。」

カイ「・・・それにしてもまだ何も見当たらんない」

ラトウーニ「このまま何も無ければいいのですが。」

ラミア「それに万が一、転移してきたとしてもここは無人口地区だ。

人的被害は最小限で済む。」

アラド「思う存分、暴れられるって事っスね。」

ゼオラ「もし市街地だったら大変な事になりましたね。」

カイ「だがここはあくまでも予測地点の1つだ。」

実際にどこに出るかは分からん。

俺達と同じように他の予測地点にも部隊が出てはいるが

だからと言って気を緩めるなよ。」

アラド「りよ、了解っス！」

ラトウーニ「・・・！」

どうやら、その心配は無用のようです。」

カイ「何っ!？」

ラトウーニ「・・・来ます！」

ラトウーニのビルドラプターはラングレー基地のセンサーと同調している。

そのセンサーがこの区域に重力余震の警戒を示したのだ。

カイ「総員、迎撃準備！」

カイの指令の直後、空が太陽よりも眩しい閃光に包まれ周囲に轟音が鳴り響いた。

そしてその光の中から何かが落ちてきた。

カイ「・・・全員、大丈夫か？」

ラトウーニ「・・・対閃光防御、なんとか間に合いました。」

ラミア「機体も大丈夫です。」

アラド「俺も何とか大丈夫っす。」

ゼオラ「私も・・・。」

それよりも、敵は!？」

全員が迎撃体勢をとった。

もし転移してきたのがシャドウミラーだったら、生半可な対応では済まないからだ。

だが周囲にはゲシュペンストはおるか、ソルプレッサやフルギアも見当たらなかった。

そこにいたのは一隻の地上戦艦と思しきものだった。

アラド「な、なんスカあれ？」

ゼオラ「地上戦艦・・・？」

ラトウーニ「でも・・・ライノセラス級とはまるで違う。」

カイ「『向こう側』の戦艦か？」

ラミア「いえ、私も知りません。

初めて見るタイプです。」

ハーケン「うつ・・・

皆、大丈夫か？」

神夜「こ、こっちは何とか無事です。」

アシェン「問題はナッシングなり。」

錫華「こ、腰を痛めてしもうたかのう・・・？」

キュオン「え〜ん。

キュオン転んだよ。」

カツツエ「んもう、皆だらしないわねえ。

少しはアタシを見習ってクルクルシュピンと着地できないのかしら。」

ヘンネ「あたしや猫じゃないんだ、んなこと出来るか！」

エイゼル「そう気を立てるなヘンネ。

皆が無事だっただけでも良しとしよう。」

リー「むう・・・

少々、クラクラしますな。」

鞠音「私も無事ですがツアイトが心配です。

まあ、今の衝撃で壊れるようなタマではありませんが。」

ハーケン「……ツアイトもそうだが、まず状況を確認する方が先だ。」

アシエン「艦長、どうやらエライ事になっているようでやがります。上空に未確認物体が4つと地上に1つ、おまけにどいつもこいつも目測で20mぐらいありそうなデカブツです。」

あの羽の生えたヤツは40mあります。」

神夜「うわぁ……。」

綺麗な観音様ですね。」

カツエ「いやいや、天使様でしょ？」

錫華「うむ。」

ならここは少なくとも地獄ではないな。

わらわ的には天国も地獄も御免こうむるがのう。」

ヘンネ「あたしはなんだか気に入らないねえ……。」

ハーケン「あっちのビッグエンジェルはさておき、その隣に居るやつは

ゲシュペンストじゃないのか!？」

アシエン「マイティエーラから得たデータと比較しましたが、合致率は60パーセント以下です。」

パチモンかバツタモンの類かと思われます。」

鞠音「私はあのゲシュペンストですが、周りの機体も気になりますわ。」

キュオン「うん。」

キュオンあんなの見た事ないもん。」

エイゼル「……ここはもしか、

ハーケン、お前がいた世界なのか?」

リー「となると、私らは世界を超えてしまったのでしょうか?」

ハーケン「俺がいた世界かどうかはまだ分からんが、

まずは連中とコンタクトを取った方がいいだろう。

見たところ迎撃体制をとっているようだ。

話もしないでドンパチやられちゃ洒落にならん。」

アシェン「了解しました。」

色んな電波を飛ばしてみます。」

ハーケン「変なのは飛ばすなよ。」

カイ「・・・妙だな。」

攻撃のそぶりがまるで無い。」

ゼオラ「シャドウミラーや修羅なら迷わずこちらを攻撃してくるでしょうからね。」

アラド「ただ単に動けないだけじゃないんすか？」

ラトウーニ「それなら何かしらのコンタクトを取ってくるはず・・・」

ラミア「・・・む!？」

少佐、どうやら向こうからコンタクトが来たようです。

しかし、これは・・・。」

カイ「何か問題が？」

ラミア「複数の波長やコードで呼びかけているようなのですが、

その1つがシャドウミラーの秘匿コードのようでございます。」

アラド「じゃ、じゃあ、あの戦艦シャドウミラーなんすか!？」

カイ「まだ分かんが、その可能性は高いな。」

ラミア、回線をこちらに回せ、俺が話してみる。」

ラミア「了解しました。」

ラミアはカイに回線を繋げた。

アシェン「艦長、どうやら繋がったようです、通信モニターに回します。」

カイ「こちらは地球連邦軍特殊戦技教導隊所属、カイ・キタムラ少佐だ。」

貴艦の所属と目的を明らかにせよ。」

錫華「腹の立つ髭親父が何やら長ったらしい文句をほざいておるな。」

アシエン「要するにお前は何モンだとほざいておりやがります。」

ハーケン「どうやら軍人らしい。」

お前らが出ると話がこじれそうだ。俺が出る。」

神夜「頑張ってください、ハーケンさん」

ハーケン「・・・通信が遅れてすまない。」

こちらは地上戦艦ツアイト・クロコデイル艦長、

ハーケン・ブラウニングだ。

現在、新型クロスゲートの暴走から要人を守るため乗船させている。

こちらに攻撃の意思はない。

至急、救援を要請する。」

ラミア「(ブラウニング・・・だと!?)」

カイ「おいラミア、まさか・・・」

ラミア「・・・いえ、シャドウミラーにブラウニング姓は1人だけです。」

アラド「じゃあ、一体何なんスかね?」

カイ「・・・では率直に聞こう、お前達はシャドウミラーか?」

神夜「し、書道木乃伊?」

アシエン「シャドウミラーです。」

検索したところ、

我々が元いた世界に存在した特別任務実行部隊の名前で  
す。

Wシリーズはその部隊が開発したものです。」

ハーケン「だがこの雰囲気。」

俺がはいそうですと言ったらドカンとやられそんな感じ  
だな。

さて、どうしたものか・・・」



カイ「もしこちらの質問に答られない場合は手荒なマネをすることになるが・・・」

ハーケン「オーケイ、そうカリカリするなよマスタツシユダンディ。」

カイ「マ、マスタツシユ!？」

ゼオラ「何だか随分と軽いノリね。」

アラド「・・・何か、悪いやつじゃ無いっばいっスね。」

ハーケン「（とりあえず、ここは正直に答えた方が身のためだな。）

あんた達とそのシャドウミラーってのに何があったかは知らないが、

その口振りからするとお友達ってわけじゃなさそうだ。

確かに、ここにいるアシェンとこの俺はそうだが、他の連中は無関係だ。

俺とアシェンはともかく、他のやつらに手荒なマネはよしてくれ。」

ラミア「・・・アシェン!？」

ま、まさか、アシェン・ブレイデルか!？」

ラトウーニ「ラミア少尉!？」

カイ「どうしたラミア?

そのあわてようは!？」

ラミア「・・・少佐、回線をこちらに繋げて下さい。

お願いします。」

カイ「・・・解った。」

カイはラミアに回線を繋げた。

ハーケン「!？」

おいおい髭ダンディが消えたと思ったら

こいつは一体・・・!？」

神夜「ア、アシェンさんのそっくりさん!？」

錫華「古来よりクリソツな人間は世界に3人は居るそうだと聞くがの・・・」

ラミア「・・・アシエン・ブレイデルに変わってくれないか？」

ハーケン「・・・あ、ああ。」

ハーケンはアシエンに通信を変わった。

カイ「・・・こいつは!？」

ゼオラ「ラ、ラミア少尉!？」

ゼオラ「で、でもえらくメカっぽいつスよ!？」

ラミア「・・・W07、アシエン・ブレイデルで間違いないな。」

アシエン「何故私のナンバーを知っている？」

・・・お前は何者だ？何故私の顔をしている？」

ラミア「それは、私のこの顔はお前を元に作られたからだ。」

私の名はラミア・ラプレス。

開発ナンバーはW17。」

アシエン「!?!？」

神夜「って事はアシエンさんの妹さん!？」

錫姫「ということはこ奴、からくりなのか？」

カツツエ「でもアシエンちゃんより随分と生っぽいわねえ。」

ハーケン「こいつは驚きだな。」

だがこれでほぼ確定したな。」

アシエン「やはりこの世界、我々が本来いた世界だったようだな。」

ラミア「・・・いや、ここは我々がいた世界より極めて近く限りな

く遠い世界だ。」

鞠音「つまりここは艦長達が元いた世界に極めて近い世界と言うことですね。」

キュオン「でもどのくらい近いのかな？」

カツツエ「まあ、カレーライスとライスカレーぐらいの差じゃない?」

ヘンネ「それ、全然例えになってないよ。」

ハーケン「一体何の因果か知らないが、こりやまた随分とややこしい事になってるな。」

アシエン、とりあえず身の安全は保障するように向こうに言ってくれないか？」

アシエン「W17、いやラミア・ラプレスと言ったな。」

我々の目的は先程艦長が言った通りだ。

そちらに危害を加えるつもりは無い。

至急、救援を要請する。」

アラド「どうします、少佐？」

彼ら、見たところ悪い人じゃ無さそうですし

助けても良いんじゃないんすか？」

ラトウーニ「でも、こちらを油断させるための演技かも。」

カイ「・・・解った。」

至急基地に連絡する。

応援が来るまで待っていてくれないか？」

アシエン「了解した。」

ゼオラ「少佐！？」

ラトウーニ「彼らが敵でない保障は無いのですよ？」

カイ「それは承知の上だ。」

だがまだ何とも言えん。

単なる遭難者ならここで手を打たなければ向こうさんに悪いだろ。

それに敵であるならここで相手の手に乗るのも1つの手だし、応援は呼んだ方がいい。

どちらにせよ俺たちのやることは変わらんとする事だ。」

ラトウーニ「・・・それもそうですね。」

アラド「それにしてもあのアシエンって人がWシリーズって事はわかったんすけど、

あのハーケンって奴は何者なんすか？」

ラミア「・・・私にも解らない。」

ラトゥーニ「さっき、ブラウニング姓は1人だけっておっしゃっていましたが」

ラミア「そうだ。」

Wシリーズ開発者レモン・ブラウニングただ1人だ。」

ゼオラ「だとしたらあの男は一体・・・？」

カイ「とりあえず応援が来るのを待て。」

連中と話をするのはそれからだ。

（それにしても連中のあの落ち着き様、

まるでこういった状況に慣れているようだが・・・）

アシェン「艦長、適当にしゃべくついたら向こうさん

あつさりとOKでしたが、どうしやかりますか？」

ハーケン「とりあえずあちらさんの出方を待つとするさ。」

どうせこっちは何も出来んしな。」

エイゼル「それに情報が少なすぎる。」

ここがどういった世界なのか今の会話では不十分だ。」

ヘンネ「解ったことはここがエンドレス・フロンティアじゃないってことさ。」

キュオン「キュオン達、無事に帰れるかなあ・・・」

鞠音「向こうの反応を見る限り、こちらにゲートが存在していない可能性は高いですね。」

カツツエ「それにあの態度・・・」

どうもこの世界に前に来た異邦人は

みんな悪い子ちゃんばかりみたいだな感じだわねえ。」

神夜「それって迷惑極まりないです！」

リ「全く、礼儀を知らん連中がいると困りますな。」

錫姫「それ、そちが言えた事かいの？」

ハーケン「・・・アシェン、お前はと思う？」

アシェン（DTD）「そう言うハーキゅんはどうなの？」

ハーケン「……ま、俺はいつもの調子でやるだけさ、これがな。」

### 第3話 過去との再会 その2（後書き）

第1話からやっとかさ転移してきました。

最初にエクセレン達と会わせる案もあったのですが、

説明するのに都合がいいのでシャドウミラーをよく知っているラム  
アと先に会わせる事にしました。

ムゲフロの連中とOGの連中って微妙にノリが違うので書くのがや  
やこしいです（TOT）

### 第3話 過去との再会 その3

暫らくするとラングレー基地から応援がやって来た。

護衛用の量産型ヒュッケバインMk-2が3機、護送用のレイディバードが2隻だ。

レイディバードには救護チームと医療チーム、それに武装した部隊が乗っていた。

またレイディバードならば50m級のツアイトを運ぶことも可能である。

エイゼル「どうやら救援が来たようだな。」

ハーケン「こりやまた随分とドデカイ連中だな。」

あのマツシブな飛行機は100メートルは超えてるぞ？」

錫華「あれで基地まで運ぶつもりかのう？」

神夜「私、あんなおつきな船に乗るの初めてです」

ヘンネ「あたしゃ自前があるから別にいいけど、

今回は甘えさせてもらおうじゃないの。」

キュオン「キュオンも賛成ー」

鞠音「・・・艦長、まさかあんなのにこのツアイトを乗せる気ですか？

ハーケン「そう氣を立てるなよ・・・

あの衝撃だ。

どうせツアイトは今動けないんだろ？」

鞠音「恥ずかしながら、今は動かすだけで精一杯と言ったところですわ。

ちゃんと修理すれば、連中なんか振り切ってやりますよ。」

ハーケン「そいつはベターとは言えないな。

下手したら俺達、この世界でお尋ね者になるぞ。」

リー「はつきり言って賞金稼ぎがフダツキとなっては身も蓋もあり

ませんからな。」

鞠音「・・・わかっていますわ。」

レイディバードが着陸すると同時に、武装した部隊がツアイトを取り囲んで行った。

その雰囲気はただ事では無いことをハーケン達は悟った。

神夜「な、なんだか厳つい人たちがたくさん出てきましたけど・・・」

錫華「詫び寂びの無い連中よな。」

アシエン「艦長、このメンツならフルボッコにする事も造作もありませんが。」

ハーケン「そいつは勘弁してくれ。」

さっきの俺の話を聞いていなかったのか？

アシエン「きれいさっぱり聞いておりませんでした。」

ハーケン「とにかく抵抗はするな。」

ここで連中の信用を作っておきたいしな。」

カツエ「それにここで暴れたら、せつかくの玉のお肌も傷だらけよん？」

神夜「そ、それは困ります・・・」

錫華「それ以前に死んでしまうぞな。」

ハーケン「・・・一応、さっきのダンディに話しておくか。」

アシエン、さっきの回線を繋げ。」

アシエン「それぐらいでめえでやりやがりませ。」

ハーケン「艦長を働かせるなよ。」

ハーケンは渋々と回線を繋げた。

ハーケン「えーっと、カイ少佐と言ったな？

こちらに危害を加えるつもりはないと言ったが？」



カイ「悪いが、よその世界からの来訪者とのコンタクトは  
今まで最悪なケースばかりだったからな。

気を悪くするのも無理は無いが、

本来ならこれの倍投入しても足りないぐらいだ。

医療チームも待機している。

早急に下船してもらおうか。」

ハーケン「全員大した傷じゃない。

今からそちらに全員で投降する。

・・・手厚い歓迎に感謝するよ。」

カイ「すまないな。」

アシエン「それでは皆様、唯今からこのオンボロ船から

あの下種な野郎共の飛行機にお乗換えです、

お忘れ物の無いようにお願いいたします。」

神夜「ハロー」

錫華「オー」

ハーケン「さあ、盛り上がって来た所で新世界の大地に下りてみる  
とするか。」

ハーケン達はツアイトクロコデイルを下船した。

ヘンネ「こりやまた随分と物々しいね。」

キュオン「やっぱり近くで見るとデツカイね。」

エイゼル「ふむ。

周りにいる兵士たちの武装、銃か何かか？

見たことが無いタイプだな、服装も初めて見る。」

カツツエ「これだけのもの造るのに一体いくらかかるのかしら？」

鞠音「・・・艦長、後であのロボット分解したいのですが構いませんかね？」

錫華「バラした後は邪鬼銃王に組み込んでみても面白いかもしれぬ。

「神夜「じよ、冗談に聞こえませんよ・・・」

ハーケン「マッドぶりも程々にしてくれよ。」

ドクターもへそプリンセスも」

リー「そうですよ。」

弁償するとなるといくらかかるのか想像もしたくありません。

「

ハーケン達は物珍しそうに兵士たちやPTを見た。

だが彼ら以上にカイ達の方が驚いていた。

ゼオラ「な、何なのあの連中？」

アラド「ガイコツ男に猫人間！？」

ラトウーニ「あの女性の背中の羽と女の子の尻尾、アクセサリーで  
しょうか？」

ゼオラ「よく見るとあの小さい女の子、頭に角生えてるじゃない？」

カイ「・・・それにも驚いたが、

連中の服装、妙だと思わんか？」

アラド「ええ、あのボンキュッボン、たまんないっスねえ。」

ゼオラ「そういうことじゃないでしょ！」

ラミア「あまりにも統一性が見られない、

ということまでございましょう？」

カイ「ああ、同じ世界からやって来たにしてはあまりにも纏まりが  
無さ過ぎる。」

ゼオラ「ただ単に別々の国の出身とも考えられますが？」

ラトウーニ「そうだとしても違いが大きすぎる。」

単なる文化の差とは言い難いもの。」

アラド「あいつら、一体どんな世界からやってきたんスかね？」

カイ「・・・話を聞いて解ると良いのだが。」

カイは外部スピーカーのスイッチを入れて、ハーケン達に指示を出した。

カイ「すまないが、武装を解除してからこちらに来てくれないか？  
失礼は重々承知のつもりだ。」

アシエン「丸腰で来いと言う事か。」

ハーケン「・・・ま、当然といえば当然だな。」

錫華「わらわの邪鬼銃王、このようなところで置いては行けぬ。」

キュオン「キュオンもいやー！」

神夜「キュオンちゃんも錫華ちゃんも我慢しましょう。」

きつと後で返してくれますよ。」

錫華「そうだといいのだがのう・・・。」

錫華や神夜、それにオルケストルアーミーの面々はそれぞれの武器を『召喚』した。

それは彼らにとっては日常茶飯事の事だが、周囲の兵士達は驚きを隠せなかった。

アラド「あ、あいつら何も無いところから武器出てきたっすよ！  
？」

ゼオラ「て、手品かしら？」

ラミア「あの斧と刀、身の丈ほどありますね。」

ラトウーニ「あの小型サイズのロボット、一体どこから・・・？」

カイ「ああいう連中は、どうも心臓に悪いな・・・。」

エイゼル「このリアクティブアーマーも脱いだほうがよいだろうか？」

ハーケン「それがOKならあんた持ってる斧だってOKだろうが・・・。」

神夜「でもそれ脱いじゃうと何か寂しいですね。」

エイゼル「問題ない。」

同様のデザインの非武装のものもここにある。」

ハーケン「（あ、あるのか？）」

ハーケン達は持っている武装を全て地面に置いて両手を挙げた。  
錫華は最後まで嫌がっていたが、渋々邪鬼銃王を地面に置いた。

カイ「これで、全部か？」

ハーケン「・・・ああ。」

あとツアイトの武器庫に幾つかあるが、手持ちの武器はこれで全部だ。

これ以上は逆さに振っても何も出ないぜ。」

カイ「念のため、簡単なボディチェックを済ませてから搭乗してもらおう。」

錫姫「む？」

まさかそちがわらわたちの体を触るのか？」

カイ「心配するな。」

お前さんがたは女性のスタッフが担当するから、問題ないだろう。」

カツツエ「あら？」

ならアタシはどうなるのかしら？」

ハーケン「バイセクシャルキャット、少しは黙っていてくれ、

あんたは男だろ？」

カツツエ「ムフフ。」

まあ、女の子に触られても嬉しくなくてよ？」

アラド「何か、いろんな意味で調子狂うつスね・・・」

ゼオラ「ま、まあ、世の中ああいう人はいるんだし。」

ラトウーニ「（人じゃなくて猫だと思っけど・・・）」

ハーケンたちはボディチェックを済ませた後、  
レイディバードに搭乗した。

当然、部屋の出入り口は武装兵で固められているが。

ハーケン「全く、用心深い事だな・・・」

錫華「わらわ的に乙女の周りをうるちよろされるのは勘弁して欲しいのう。」

アシエン「艦長、この後我々どうなると思っていやがりますか？」

ハーケン「十中八九、尋問だな。」

あとは連中の捕虜に対する礼儀によるな。」

エイゼル「下手をすれば拷問もありえるな。」

ハーケン「それよりも話すだけ話して後ろからズドン、

なんて事もある。」

神夜「そ、それって恐ろしいこと極まりないです・・・」

ハーケン「だがこの連中はその辺はしっかりしているらしい。」

錫華「その根拠は？」

ヘンネ「アタシらに対しての扱いを見れば大体わかる。

連中、こういった捕虜や護衛にそれなりの心構えがあるフ

シがある。」

エイゼル「だが、我々を見る目は少々奇異だな。」

カツツエ「熱視線は大歓迎だけど、こういった冷たいのはイヤねえ。」

ハーケン「多分連中にはあんたらが珍しいんだろ？」

兵士や医療チームを見たが、全員同じ種族のようだ。」

リー「となると、艦長のような連中と見た目が同じの人達はともかく、

私たちは大丈夫でしょうか？

ハッキリ言って私の毛皮は三流品ですが。」

カツツエ「アタシは剥製になっても綺麗でいられる自信あるわよ？」

ハーケン「早々に覚悟を決めるのはまだ早いだろ。」

アシエン「・・・エンジンの起動音を確認。

どうやら飛び立つみたいです。」

神夜「ち、ちよつと緊張しますね。」

錫華「シュラーフェン・セレストを登りきった時の事を思えばなんて事はないのう。」

かくして、異邦人達を乗せた飛行機はラングレー基地に向けて出発した。

アラド「俺達も帰還ですか？」

カイ「連中の尋問は第一接触者の俺達がするべきだろう。」

シャドウミラーの関係者かもしれんと思えばなおさらだ。」

ラトウーニ「了解しました。」

ラミア「・・・少佐。」

カイ「ん？」

ラミア「その・・・

ありがとうございます。」

カイ「・・・気にするな。」

敵を倒すだけが仕事では無いからな、俺もお前もな。」

ラミア「・・・！

はい。」

### 第3話 過去との再会 その3（後書き）

武器の召喚設定は斉藤和衛先生のムゲフロのコミカライズからです。神楽天原の面々はハッキリと召喚と言っていますが、オルケストルアーミーにはそういった発言はありません。キュオンしか登場していませんし。

しかし漫画のキュオンの登場シーンを見ると最初は武器を持っていないのに名乗りのシーンではしっかり持っているので召喚設定にしました。（単なる作画ミスという見方も・・・）

何よりエイゼルのマックス・アックスでかいですし、ゲーム中でも技術レベルは神楽天原と同等以上という発言もありますし、ワープで退場していますので十分に通る設定だと思います（  
^^;）

### 第3話 過去との再会 その4

<地球連邦軍 北米支部ラングレー基地 教導隊事務室>

カイ「・・・以上が、現時点での連中のデータだ。

ギリアム、どう思う？」

ギリアム「少なくとも『向こう側』の世界の住人でない事以外は俺にも解りません。

・・・すいません、力になれなくて。」

カイ「いや、俺も連中の事はまだ理解できなくてな。

これから、連中と話をするつもりだが・・・

お前もよければ参加して欲しい。」

ギリアム「・・・確かに今回の来訪者、

シャドウミラーの関係者を名乗る者がいるのでしたら、

俺はそれを無視する事は出来ません。」

カイ「すまん。

では、よろしく頼む。」

カイは通信機のスイッチを切った。

ラミア「それでは少佐、こちらはいつでも大丈夫でございます。

」

ラトウーニ「回収班からの報告では彼らの兵装には分析不能な点が多いそうです。」

ゼオラ「それにあの地上戦艦の事も

基地に運んで調べないと解らない事だらけみたいですよ。」

アラド「こういうのを謎が謎を呼ぶって言うんスカね？」

カイ「今回の会談で、その謎が少しは解ればいいのだが・・・。」



<北米支部ラングレー基地 会議室>

ハーケン「ふうゝ・・・」

結構疲れたな。」

アシエン「出力15%低下。」

艦長、おやつが食べたいです。」

神夜「あ！私も食べたいです。」

キュオン「キュオンはご飯の方がいいー！」

錫華「連中のあの視線、気疲れすることこの上ないぞな。」

ヘンネ「全くだよ。」

人をジロジロ見やがって・・・！」

カツツエ「気付いた？」

連中の目、アレはどう見ても恐怖が勝っていた感じだっ

たわよねえ。」

リー「ハッキリ言っただけにありませんな。」

エイゼル「心配無用、我はああいった視線には多少慣れている。」

ハーケン「（そりゃアンタはそうだろうさ・・・）」

鞠音「私を見たとき、何人かは別の意味で驚いていたようですが。」

アシエン「おそらく専門的なシユミの方々だったと推測されます。」

鞠音「・・・後でツアイトに戻ったら分解しますわよ？」

ハーケン「趣味はともかく何らかのエキスパートだったのは間違いないな。」

驚いていたのは白衣とか作業着を着てた連中だったしな。

」

エイゼル「それにしてもあの飛行機といいこの基地といい、何もかもが巨大だ。」

キュオン「ホントだね。」

この建物だけでもエスメラルダ城塞の数倍はあるよ。」

錫華「大昔に緑色の巨人族でもおったのかのう？」

ヘンネ「いや。この基地は建てられてからその年月は経っていない。

せいぜい2、30年が良いトコだろ。」

キュオン「い、いたらいたで困るけど・・・」

ハーケン「それよりも連中、中々来ないな。」

アシェン「・・・いえ、こちらに近付いて来る動体反応をキャッチしちゃいました。

やつとこさ来やがったようです。」

ハーケン「これでやつと話せるな・・・」

数回ノックした後、何人かが部屋に入ってきた。

第一発見者である教導隊の面々だ。

皆一様に緊張していたがそれはむしろ当然の反応といえるだろう。

カイ「改めて紹介する。地球連邦軍特殊戦技教導隊所属

カイ・キタムラ少佐だ。

先程の無礼は許していただきたい。

（こうやって直に見るとどうも緊張していかんな・・・

）

ハーケン「（さっきのミスターダンディか・・・）

当然の反応だとこちらは理解している。

こつちが突然現れたのだしな。」

ラトウニ「同じく教導隊所属、ラトウニ・スウボータ少尉です。

（彼らの格好・・・リュウセイが言ってたコスプレっ

てヤツかしら？）

ラミア「同じくラミア・ラブレス少尉だ。

（W07・・・最後に見た時は何も感じ無かったが・・・

何だ・・・この気持ちは・・・）」

神夜「わ」。

見れば見るほどアシェンさんにそっくりですね。」

錫華「見た目は気に入らんが、こ奴本当にからくりなのか？」

ネジ「1つ見当らんが……」

カツツエ「でもどう見ても人間よねえ。」

ハーケン「積もる話は後だ。」

そんな調子じゃ先に進めんだろ。」

ゼオラ「えっと……」

ゼオラ・シユバイツァー曹長です。

（あの子の頭、どう見ても角よね……）

羽とか、尻尾とか生えてる人もいるし……）」

アラド「右と同じでアラド・バランガ曹長っす。

（いや、それにしてもあの胸あの太もも、たまらんっす。

）」

カイ「……後、通信だがもう1人参加させてもらうが、よろしいか？」

エイゼル「我らの存在を他所に漏らしても良いのか？」

カイ「彼は信用できる人間だ。」

それにあながち無関係とは言えんな……」

アシェン「そちらが宜しければ問題はナッシングでございますです。」

」

ハーケン「それはオレの科白だろ、アシェン？」

ラトウーニは持っていたポータブル通信機を繋げた

ギリアム「……地球連邦軍情報部のギリアム・イエーガー少佐だ。

通信での参加の許可、感謝する。

（聞いてはいたが……彼らの構成、これは……）」

ハーケン「オーケイ、ミスターミステリアス。

俺たちは全然構わないぜ。」

アシェン「宜しくちゃんです。」

ハーケン「それにしても、ダンディ少佐やミステリック少佐、それに生アシエンを除けば、

若い連中ばかりだな？」

アシエン「少なく見積もっても、およそ13から17歳といったところでございます。

あの私の妹設定の付いたヤツは不明ですが、  
負ける気は毛頭ナッシングでやんす。」

ラミア「妹設定？」

アラド「何か、ラミア少尉そっくりっすけど、

口が悪いというか、ケンカ腰というか・・・」

ハーケン「気を悪くしたのなら謝る。

こいつはいつもこんな調子でな。」

アシエン「艦長、部下の不躰は上司の責任です。

キツチリ落とし前を付けやがりませ。」

ゼオラ「（お、おまけに図々しい・・・）」

ハーケン「とりあえずコントはこのぐらにして自己紹介といきま  
すか。」

カツエ「話の尺というのもあるしねえ。」

ラミア「（尺・・・？）」

ハーケン「俺はロストエレンシア出身のハーケン・ブラウニングだ。

人呼んでさすらいの賞金稼ぎさ。」

カイ「（ブラウニング・・・

やはりシャドウミラーの・・・？）」

アシエン「同じくその無能な艦長の下でこき使われてるしがないア  
ンドロイドの

アシエン・ブレイデルと申しちゃったりいたします。」

ゼオラ「（ハーケンって人、苦労してそう・・・）」

ラトウーニ「（あの手足・・・

見たところ何かしらの兵装のようだけど・・・）」  
リー「私はエルフェティル出身でツァイトの副長で操舵手も担当し

ております

リー・リーです。

御覧の通り虎の獣人ですので、中の人を期待していた人はあしからず。」

ラミア「中の人？」

ギリアム「（獣人まで存在する世界・・・普通ではありえないはず・・・）」

ラトウニ「（獣人・・・伝説や神話に登場する亜人類種。

総じて知能は低いとされているけど・・・）」

アラド「お、俺は食っても旨くないっスよ！

いや、マジで！」

リー「ご心配なく、筋っばい男の肉なんかこっちから願ひ下げです。それよりもこちらの方がハッキリ言って旨そうですな。」

ゼオラ「え、ちよつと!？」

鞠音「いたいけな子どもを怖がらせてどうするんですの、リー副長？」

リー「勿論冗談ですよ、ドクター。」

最近生きた肉はご無沙汰なモンでつい。」

アラド「（や、やっぱり食うんスカ!？）」

鞠音「私は澄井鞠音<sup>すみい まりおん</sup>。神楽天原<sup>かぐらあまはら</sup>の出身で

ツアイトのメンテナンスやその他のメカニックを担当しております。

正確には副長と同じエルフェ<sup>エルフ</sup>テイルの妖精族と神楽天原の人間とのハーフですが。」

アシエン「そのため年齢不詳ですが、

性格の歪み具合からしてかなりの歳かと思われます。」

鞠音「・・・余計な補足をどうも、お礼に後で分解して差し上げますわよ?」

アラド「マ、マリオン博士そっくりっス!？」

鞠音「そういえば何人かここのスタッフが私をそう呼んで驚いてい

ましたが？」

カイ「・・・以前、ここの基地で進めていた強襲人型機動兵器計画というのがあってな。」

その研究主任の名前がマリオン・ラドム博士というのだ。」

鞠音「あの反応を見れば解りますわ、さぞ優秀な人物だったのでしょうね。」

でも、私だって負ける気はしませんわ。

ふふふ・・・」

アラド「（こっちの博士は別の意味でぶっ飛んでるっスね・・・）」  
ギリウム「（他の世界ではこういった事は珍しくは無いが・・・）」  
神夜「はい」

私は鞠音博士と同じく神楽天原出身の楠舞神夜なんぶ かぐやと申します  
一応、悪を断つ剣なんですが。」

アラド「いや、目のやりどころに困るっスね。」

眼福、眼福。」

ゼオラ「ちよつとアラド！」

人前でそんなこと言わないの！！」

ラミア「（ナンブという姓・・・それに悪を断つ剣・・・）」

ラトウーニ「（キョウスケ中尉とゼンガー少佐が混ざってる・・・）」

「  
錫華「わらわは錫華すずか、神楽天原の由緒正しき式鬼一族の姫である。」

アラド「お、お姫様なんスか？」

ゼオラ「その角・・・やつぱり本物なの？」

錫華「そち、無礼であるぞ？」

神夜「ほらほら、錫華ちゃん、そんなに怒っちゃダメですよ。」

錫華「おぬしはもう少し姫としての自覚をもて。」

仮にも皇族の姫であろうに・・・」

カイ「皇族？」

姫さんが姫さんのお目付けなのか？」

ハーケン「女の秘密を詮索するのは無粋ってモンだぜ？」

アシエン「過去に同じ事を聞いたキザ野郎が言っていると説得力が違いま  
すね。」

ハーケン「ダメだしは勘弁してくれよ・・・」

カツツエ「んじゃ、次はアタシね。」

アタシはカツツエ、カツツエ・コトルノスよん。

ツアイトのリー君と同じエルフェテイル出身で、

それでもエルフェテイル西部デューネポリスの砂漠都市  
マーカス・タウンの代表なの。」

アラド「オレ、獣人って言えば、もっところ猫耳とか尻尾付きとか  
思ってたんですが・・・」

ハーケン「いや、そういうやつもいるにはいるんだが・・・」

ラトウーニ「(い、いるの?)」

アシエン「とんだボツタクリの糞忌々しい腹黒猫なので、素人には  
オススメ出来ません。」

アラド「夢も希望もないっス・・・」

エイゼル「最後は我々だな。」

我はフォルミッド Heim 代表のエイゼル・グラナータだ。  
また特殊任務実行部隊オルケストルアーミーの隊長でも

ある。」

アラド「(近くで見るとすっげえ怖いっス・・・)」

ラトウーニ「我々・・・」

と言うと、後の二人も?」

キュオン「そうだよ

キュオンはキュオン・フリーオンって言うの。

ヨロシクね。」

ハーケン「見た目で判断するなよ、こう見えて相当の腕前だからな。  
」

キュオン「へへ、キモキザも少しはわかってきたんだね。」

アラド「見た目云々より、口が達者っスね・・・」

ヘンネ「アタシも同じくオルケストルアーミー所属の

ヘンネ・ヴァルキュリアさ。

・・・もしアタシらを剥製とかにしようって考えてんなら、  
こっちがその皮剥いでやるよ。」

アラド「(カ、カチーナ中尉より怖いっス・・・!)」

カイ「・・・それにしても多種多様だな。」

ラトウーニ「今の会話だけで、地名だけでも5種類。

人種も見た限りでは7種類以上です。」

アラド「時代はグローバルって言っスけど、ここまで極端になるもんスかね?」

ギリアム「通常ではありえない事だ・・・

これだけの種類の人類が同じ場所に共存する世界など・・・

」

エイゼル「確かにそれは困難であろう。

1つの世界しかないのであるならばな。」

カイ「何!？」

ギリアム「どういうことだ?」

ハーケン「口だけで説明するのも難しいだろう。

アシエン、モニターに繋いで映像記録を見せてやれ。」

アシエン「メンド臭いです。

自分で勝手にやりやがりませ。」

ハーケン「このメンバーじゃお前しか出来んだろうが。」

アシエンは文句を言いつつもモニターに映像を繋げた。

アシエン「どの辺から説明いたしちやいましょうか?」

ハーケン「そうだな、とりあえず1年ぐらい前の映像を出せ。

以前とは随分と変わったしな。」

エイゼル「説明するにしても、そのぐらいが丁度良いだろう。」

アシエン「解りました。

ではまずはロストエレンシアから」



アシエンは今から1年前のロストエレンシアを映した。

ハーケン「これがロストエレンシア、俺とアシエンの故郷だ。

科学の発達した世界で、住んでいるのは人間のほかに

アンドロイドやミュータント、それに他の世界からの出身者も多い。」

アラド「へー、でっかい都市っスね。」

ゼオラ「都市の周りは見渡す限りの荒野・・・

ということはデューネポリスの近くなのかしら？」

ハーケン「いや、ロストエレンシアには都市はここだけだ。」

ラトウーニ「・・・どうということ？」

カイ「では先程の地名は一体・・・？」

ギリアム「・・・まさか、先程の地名は国では無く

世界そのものの名前なのか！？」

ハーケン「ビンゴ！

正直、理解が早いと助かるぜ。」

カイ「つまりお前達は別々の世界の出身なのか？」

ギリアム「しかし一体どうやって・・・」

ハーケン「アシエン、見せてやれ。」

アシエン「ラジャーなのです。」

アシエンはまだ稼動していた頃のクロスゲートの映像を見せた。

ラトウーニ「これは・・・！？」

エイゼル「これが世界と世界を繋ぐ門、クロスゲートだ。」

神夜「神楽天原では交鬼門（こうきもん）って呼んでます。」

アラド「でっかい輪っかつスね・・・」

ゼオラ「これ、あなた達が造ったの！？」

ハーケン「いや、俺たちの世界じゃ大昔から存在しているものだ。

数千、数万年前ともいうやつもいれば、

始めから存在しているとも言う奴もいる。

・・・誰が造ったのか見当が付いたのは最近の話だが、

それは後で説明するよ。」

ギリアム「（異界への門・・・やはり実在していたか・・・）」

ラトウーニ「あなた達はこのゲートに対して何の疑問も抱かなかったの？」

錫華「太古から存在しておるものに何の疑問が湧くというのかのう？」

ハーケン「クロスゲート無くして俺たちの世界は語れないのさ、これがな。」

アシエン「では艦長、次いきます。」

神夜「アシエンさん、次は神楽天原をお願いします」

アシエン「了解しました、乳牛姫。」

画面は神楽天原に切り替わった。

当然一年前の姿である。

ゼオラ「これが神楽天原・・・」

カイ「あの奥のでかいのは桜の木か？」

神夜「はい。」

不死桜ふじくさくらと言います。

根元には都の武西城たけとりじょうがあります。」

アラド「桜と言えば花見、花見と言えばゴチゾウっスね。」

ラトウーニ「でも、シーズンによるんじゃない・・・」

ハーケン「こっちのチェリーブロッサムはどうか知らないが、

不死桜は一年中満開だ。」

カイ「なら一年中春なのか？」

アラド「オレはゴチゾウがあれば何だっていいっス！」

錫華「風情の無い輩ぞな。」

アシエンよ、わらわの城も見せてやれ。」  
アシエン「ラジャーです、ペタンコ姫。」

アシエンは映像をスキップさせた

カイ「今度は紅葉か」

ゼオラ「あれ？」

さつき桜は一年中つて。」

錫華「それは南半分の事ぞ。」

北半分は一年中紅葉ぞな。」

アラド「紅葉と言えば秋、秋と言えば秋刀魚、松茸、柿、梨、葡萄・  
・

それに紅葉狩り・・・

たまらないっス！」

ラトウーニ「アラド、紅葉は食べ物じゃない。

ハイキングよ。」

錫華「・・・こやつ、頭の中は食い物の事しか入っておらぬのか？」

ラミア「あの一際目立つ島は？」

錫華「アシエンの妹にしてはいい目をしておる。

あれこそがわらわ達式鬼一族の城、滅<sup>めぎじょう</sup>魏城である。」

アラド「まんま鬼ヶ島っスね・・・」

錫華「風情があると言わぬか。」

ハーケン「ちなみに俺達のロストエレンシアとは違い

神楽天原は魔法や呪術が発達した世界だ。

住んでいるのはそれを扱う人間や妖怪、

あとその錫華姫のような鬼だ。」

ギリアム「（魔法に呪術、それに妖怪・・・

まるで御伽噺だな。）」

カイ「成る程な。

先程、何も無いところから武器を出したのもその技術の一端

か。」

ラトウーニ「ではあの小型のロボットも？」

錫華「ロボットなど無粋なからくりと一緒にするでない！」

あれは邪鬼銃鬼ジャキガンオー、わらわが造った

由緒正しき伝統攻芸でんとうこうげい『戦術からくり』であるぞ。」

アラド「どうやって動いてるんスかあれ？」

ラトウーニ「回収班からの報告には電子頭脳はおるか、動力も無かったって言うけど・・・」

錫華「アレはこの扇子から出す妖気の糸で操っておるのでな、

そこいらの技術者風情に解るはずも無かるう。」

アラド「・・・何か、突拍子も無い言葉が出てきたっス。」

カイ「機械工学しかない俺たちにとっては、信じがたい話だが・・・

ハーケン「そうあんまり気にするなよ。」

そんなんじゃ白髪が生えてナイスミドルになっちまうぜ。

カイ「何を言うか。」

オレはこれでもまだ30代だ！」

錫華「ほう？」

人は見かけによらぬと言うのう。」

アシエン「2世紀以上生きている奴が言うと言得力が増しますね。」

錫華「・・・はよう、次にいかぬか！次！」

錫華が文句を言うそばで、アシエンはエルフェテイルを映した。

リー「ここが私ら獣人や妖精族のテリトリーの

エルフェテイルです。

森や滝や湖などの自然豊かな世界です。

技術的に言えば、魔法科学が発達しておりますな。」

錫華「神楽天原とは趣が大分違うがの。」

カツツエ「こう見ると、結構感慨深いわねえ。」  
ゼオラ「わ〜・・・」

映画で見る魔法の国みたいだわ。」

アラド「ゼオラってこういうの好きだっけ？」

ゼオラ「な、何よ。」

私だつて一応女の子なんだから別にいいじゃない。」

ハーケン「・・・残念だがファンタジーやメルヘンの世界もリアリティ満載だ。」

鞠音「エルフェティルは過去の大戦で壊滅的な打撃を受けました。

西部は大戦時に使用された魔法兵器の影響で完全に砂漠化していますわ。」

カイ「兵器による自然破壊・・・」

どこの世界でもそうだったところは変わらんか・・・」

リー「ハッキリ言つて悲しいですがコレが戦争なのです。」

カツツエ「その西部の事をデューネポリスって言っただけど、

今でも戦災難民が多いのよねえ。」

ゼオラ「シビアな話ですね・・・」

カツツエ「そこで活躍するのが移動要塞都市ジャイアントマーカス号ってわけ。」

画面が砂漠地帯に切り替わった。

アラド「デ、デッカイ猫型戦車!？」

ラトウーニ「・・・あれが丸ごと都市なの?」

カツツエ「正確にはジャイアント・マーカス号の上に

都市のマーカス・タウンが乗っかってるの。

砂漠を移動して難民を救済するのが目的よん。

ちなみにウチの名物は砂風呂とサウナ。

アタシが経営する取引所ナイスガイズもヨロシクねん」

ゼオラ「お世辞にもいい環境とは言えないけど、映っている人、

みんな活き活きしている。」

カイ「いい町なのだな。」

カツツエ「ムフフ・・・」

渋いオトコに褒められるのってやっぱりいいわねえ。」

錫華「こやつはいつもこんな調子ぞな・・・」

エイゼル「では、次は我らだな・・・」

映ったのはフォルミッドヘイム、今までとは全く雰囲気の違いだ。

アラド「お、おどろおどろしい事この上ないっス・・・」

エイゼル「これが我らの世界、フォルミッドヘイムだ。」

都市は黒い雷雲の上空に存在しており、

住んでいるものは他の世界からは悪魔や魔物と呼ばれて

いる

種族で構成されている。

技術的には高度に発達した機械工学と魔法科学が融合し

ている。」

ヘンネ「ちなみに軍事技術はどんな世界も凌いでいるさね。」

キュオン「召喚も転送もお手の物だよん」

鞠音「悔しいですが、事実ですわ。」

アラド「あんまり観光には向いてなさそうっスね・・・」

ゼオラ「えーと・・・」

これで世界の紹介は終わりなのかしら？」

ハーケン「いや、もう1つ残っている。」

アシエン、映してくれ。」

アシエン「艦長、そろそろ疲れました。

休んでもよろしいですか？」

ハーケン「もう少し張り切ってくれよ・・・」

アシエンが次に映したのは水の世界ヴァルナカナイだ。

ハーケン「この中に出身者はいないが、一応説明しておくか。

海の世界ヴァルナカナイ。

住んでいるのは人魚とか半魚人といった水棲種族が住んでいる。

連中は他の世界とは積極的に交わろうとしないため、俺達もこの世界についてはよく解っていない。」

アラド「人魚って、やっぱりボンキュツな感じっスか!？」

ハーケン「まあ、確かにグラマラスなマーメイドがいるにはいたが・  
・・」

アシエン「うちのケチな艦長は、口説こうとしたところ鱗が無いという理由で

無様にフられました。」

アラド「ロマンの欠片もないっス・・・」

ラトウーニ「単に種族の差と思うけど・・・」

ハーケン「以上が、俺達の世界の全様だ。」

カイ「ふう・・・

こりゃ何とも言いがたいな。」

アラド「そうっスね。」

なんかこう、現実離れしていると言うか・・・」

ゼオラ「そうね、私達からすればまるでおとぎの国だわ・・・」

錫華「わらわからすれば、おぬし達の世界も十分おとぎの国の住人だがのう。」

ハーケン「ちなみに

この幾つもの世界が重なり合った世界を

俺達はこう呼んでいる。

未知なる無限の開拓地、

『エンドレス・フロンティア』と。」

エイゼル「……だが今まで見せた映像は今から約1年前の、  
……かつての世界の映像に過ぎない。」

ギリアム「……何!？」

アシェン「……そしてコレが、現在のエンドレス・フロンティア  
の映像です。」

アシェンが最後に見せたのは混沌と化した大地の姿だった。  
その光景に誰もが驚きを隠せなかった。

カイ「……こいつは!？」

ラミア「今まで見た景色が全て混ざり合っている……!？」

ギリアム「(全てが混ざり合った混沌……」

彼らの世界はまるで……!)」

アラド「い、一体何が起きたんスか!？」

ハーケン「……全ては、この世界に一隻の巨大飛行戦艦が  
次元を超えて落下してきた事から始まる……」



### 第3話 過去との再会 その4（後書き）

今回は極めて薄く限りなく長い説明パートです（^^^;）

ムゲフロの世界観の説明を会話を交えて書こうとしたらあっという間に一万字を超えてしまいました（爆）

しかし分割してもまだ相当かかりそうです（泣）

01/05/09 17:00

科白の一部を修正。

### 第3話 過去との再会 その5

ゼオラ「飛行戦艦・・・？」

アシエン「名前はトライロバイト級万能戦闘母艦『ネバーランド』．．．」

ラミア「・・・！」

やはり・・・そうなのだな・・・」

カイ「知っているのか、ラミア！？」

ラミア「・・・はい。」

トライロバイト級はシャドウミラーが所有していた大型艦でございます。」

ラトウニ「シャドウミラーとの戦いの時に出ていた彼らの旗艦ね。」

ラミア「・・・そして、トライロバイト級のうちの一隻、『ネバーランド』は

『リユケイオス』で真っ先に跳ばされちゃったのこのことですのよ。」

錫華「何故それが、わらわ達の世界に来てしもつたのだ？」

ギリアム「転移装置『リユケイオス』による次元転移は不安定かつ不確定要素が多い。」

例えるなら、濁流の中で蜘蛛の糸を辿るようなもの・・・  
そのため、どのような事態が起きても不思議ではない。  
特に、俺というコア無しではな・・・」

ハーケン「何だと！？」

じゃあ、アンタも！？」

ギリアム「そうだ。」

俺もラミアと同じく『向こう側』から来た人間だ。

向こうではヘリオス・オリンパスと名乗っていた・・・」

エイゼル「その名は『ネバーランド』に記録してあった。」

『システムXN』の第一人者にして  
次元転移の第一被験者と・・・」

ハーケン「オーケイ、ミステリアスジャンパー。」

無関係じゃないってのはそういう意味か。

話の理解が早い理由も解ったよ。」

カツツエ「だけどその後は行方不明・・・」

アタシ達が知っているのはそこまでよ。」

ギリアム「・・・その後この世界に辿り着き、元の世界へ戻れなくなつた俺は

ギリアム・イエーガーと名乗りこの世界で生きる決意をした。

そして後続者が現れるのを待ち続けた。

システムXNのコアである俺を狙ってくる連中を・・・」

ハーケン「それが、シャドウミラーというわけか・・・」

神夜「でも、そこまでの危険を冒してまで世界を渡る理由がわかりません・・・」

錫華「観光ではない事は確かよな。」

ハーケン「連中の目的ってのはなんだ？」

ラミア「シャドウミラーの目的、それは彼らの理想の世界、

永遠に闘争が継続する世界の創造する事だ。」

ヘンネ「一体そのどこが理想の世界なのさね？」

リー「ハッキリ言つてサツパリ意味が解りませんな。」

ラミア「平和とは緩やかな腐敗でしかない、

だが闘争が日常である世界ならばそれは永遠に起こること  
はない。

これがシャドウミラーの持論だ。」

神夜「それって戦わない人にとって、はた迷惑極まりないです！」

錫華「というより、思いつき屁理屈よな。」

ハーケン「だが、それを他の世界でやる意味は無いはず・・・」

リー「ハッキリ言つて無責任ですが、そちらの世界で勝手にやれば

いいだけの話では？」

ラミア「彼らはその理想の元に連邦に対し反旗を翻した、だが・・・」

ハーケン「読めたぜ。」

結果ボロ負けしたもんだから、

他所の世界に逃げ込んで再起を計ろうとしたのか。」

エイゼル「その手段として使用されたのが『システムXN』と言うわけか。」

ラミア「その通りだ。」

エイゼル「・・・データを見る限りでは、大型で装置自体の転移は不可能だが

一度に大量に転移可能な『リユケイオス』で  
もう一つの小型だが装置ごと転移可能な『アギユイエウス』ごと部隊を転移させ、

その後追跡できぬよう、残った『リユケイオス』を自爆させたといった所か。」

ハーケン「よくそこまで頭が回るもんだぜ・・・」

ヘンネ「自分達を通った後に道を潰す・・・」

撤退戦のセオリーさね。」

ラミア「だが、ギリラム少佐抜きでの次元転移の成功率は低い。

そこで、少しでも成功率を上げるために『ネバーランド』

で試運転を行ったのだ。」

アシエン「私はさしずめモルモットと言うわけか。」

神夜「でも、なんでそんなひどい事を・・・」

ラミア「まず第一に『ネバーランド』に

搭載されていた戦力は凍結処分された初期生産型のWシリーズだけだったからだ。

例え消滅してもこちらの被害は少なくて済む。」

ラトウーニ「その、初期型って・・・」

アシエン「私の事でござりまするね。」

キユオン「でも、なんでそんな扱いを受けたのかな？」

鞠音「確かにアシエンはオツムはアレですが、戦力としてはそこそこですよ？」

アシエン「・・・後で蹴り倒すのことよ？」

ラミア「我々の戦争は機動兵器が主流だ。

故に機動兵器の操縦が困難な

白兵戦特化型の初期型のWシリーズは無用と判断されたのだ。

それに初期型の仕様では隠密活動にも不向きだ。」

アシエン「そしてお前の様な10番台以降はその点を考慮した

機動兵器の操縦と隠密に特化した仕様と言うわけか・・・

「  
カツツエ「あ、なる・・・

それだったらロボ分が無い理由もわかるわ。

人間じゃないってバレちゃったら元も子も無いし。」

ハーケン「おまけにそんな扱いじゃ、無事につけたとしてもマトモに使ってくれたかどうか

怪しいもんだぜ・・・」

ギリアム「そして辿り着けなかった場合は

最悪、次元の狭間に吞まれて消滅してしまったかもしれない・・・

ない・・・

エンドレス・フロンティアに辿り着けたのは不幸中の幸いだな。」

アシエン「・・・今、こうして生きているだけでも奇跡というわけか。」

ラミア「・・・もう1つ、『ネバーランド』が実験台に選ばれた理由があるのだが、

それ故にどうしても腑に落ちない点がある。」

カイ「どういうことだ？」

ラミア「それはハーケン・ブラウニング、お前と言う存在だ！」

ハーケン「何・・・!?」

アラド「どういう事っスか、ラミア少尉？」

ラミア「なぜなら『ネバーランド』には人間は1人も乗っていないかったからだ！」

ゼオラ「ええっ!？」

ラトウーニ「じゃあ、アシェンさんと同じ・・・？」

ラミア「・・・だがこの男には白兵戦用の兵装は見られない。

それにこの反応、間違いなく人間だ！」

アシェン「相当優秀なセンサーを積んでいやがりますのね。」

ハーケン「そりゃ、お前より後に作られたんだから当然だろうが。」

ラミア「答える！」

お前は何者だ!？

シャドウミラーを語るならまだしも・・・!」

ハーケン「開発者レモン・ブラウニングの名を語る輩は許せない、か？」

ラミア「貴様ツ・・・」

しらけるのもいい加減にツ・・・!!」

ラミアは怒りに任せての行動に出た。

それはラミアにとって初めての事であった。

ゼオラ「ラ、ラミア少尉!？」

アラド「ラミア少尉！」

落ち着いて!!落ち着いて下さいっス!!」

アラドの肉体は大人数人分のポテンシャルがある。

だが怒りに任せたラミアの力には程遠かった。

アラドはいとも簡単に振りほどかれた。

そして自製のきかなくなったラミアはハーケンの胸座をつかもうとした。

カイ「落ち着かんか！」

ラミア「ラブレス！！」

ラミア「！！？」

だが、カイの喝がそれを止めた。

ラミアは突然の事で、体が硬直していた。

カイ「・・・ラミア、こっちを向け。」

カイはラミアに思いきり平手打ちをした。

部屋中にその音が響き渡った。

ラミア「しょう・・・さ・・・？」

カイ「少しは目が覚めたか？」

ラミア「わ、私は・・・私は・・・」

カイ「・・・人間は時に理性より感情に身を任せて行動を取ってしまふ場合がある。」

産みの親を侮辱されたと思ったお前はそれが許せなかった。」

ラミア「・・・申し訳ありません・・・」

カイ「確かにお前がしようとしていた事は、重大な違反行為だ。」

・・・だがお前のその気持ちは決して間違いではない。」

ラミア「え・・・？」

カイ「そして怒った事に対して後悔する気持ちがあるならばそれでいい。」

・・・それが、人間というものだ。」

ラミア「・・・はい。」

ハーケン「オーケイ、アンガール。」

少しは、頭を冷やしたかな？」

錫華「このチャラ衛門めが！」

誰だつて産みの親を馬鹿にされたと思えば怒るに決まってお  
ろうが！」

ハーケン「俺は普通に話してただけなんだがな・・・」

アシエン「おそらく艦長のチャラっぷりが拍車をかけちまいがっ  
たようです。

素直に謝りやがりませ。」

神夜「そうですよ！ハーケンさん！」

ラミアさんに謝ってください！」

ハーケン「・・・すまなかつたな、ラミア・ラブレス。

怒らせるつもりは無かつたのだがな・・・」

ラミア「・・・いや、怒りに任せた私が悪かつた。

もう少しでお前を殴ってしまうところだった・・・」

アラド「あの・・・？」

ラミア少尉、

頬、痛く無いんスカ？」

ラトウニ「かなり大きな音がしましたけど・・・」

ラミア「問題無い。

Wシリーズの表皮はこの程度の衝撃では傷1つ付かない。

むしろ心配なのは少佐の方だが・・・」

カイ「・・・俺のことは気にするな、話を続ける。」

カイは直ぐに隠したがハーケンには見えていた。

カイの手のひらは真っ赤に腫れ上がっていた。

ハーケン「（男は辛いな、ミスター・・・）」

ラミア「では、話を続けてもらおうか。」

ハーケン「オーケイ・・・」

『ネバーランド』が落下してきた時からだったな。」

ラミア「そつだ。」



ハーケン「本来、この世界に転移するはずだった艦は  
エンドレス・フロンティアに辿り着いた。

だが、さらにに不測の事態が起こった。」

ラミア「何!？」

エイゼル「艦は転移する直前に空中分解を起こし、

前半分と後半分に分かれて方々に落下したのだ。」

アラド「マ、マジっスか!？」

ハーケン「このとき、前半分はエイゼル達のいるフォルミッドヘイ  
ムに、

後半分はロストエレンシアに落下したのさ。

今から24年も前の事だ・・・」

カイ「何だと!？」

ゼオラ「そんなに昔に!？」

ギリアム「(24年・・・それほどまでの誤差が出てしまったのか  
・・・)」

ラトウーニ「・・・でも、それならますます解らないわ。

あなたは どう見ても20代そこそこだもの・・・」

ラミア「ならお前は一体・・・?」

ハーケン「・・・たまたま落下に居合わせた、俺の育ての親、

賞金稼ぎのジョーン・モーゼスが

落下してきた艦の側にいた赤ん坊を抱いた一体のアンド

ロイドを拾ったのさ。」

アシエン「それが、私と艦長でござりまする。」

ラミア「ならお前は24年も稼動し続けている事になるのか!？」

ハーケン「お陰で相当人間臭くなっちゃったがな。」

ゼオラ「でも何で赤ちゃんなんか抱いていたのかしら?」

アラド「その辺から拾ってきたとか?」

ハーケン「残念だが、艦の周囲数十キロは見渡す限りの荒野、

人っ子一人住んでいないぜ。」

ラトウーニ「ならやはり『ネバーランド』から?」

ゼオラ「じゃあ密航者が乗っていたのかしら？

その子の両親とか・・・」

ハーケン「悪いがその後の調査で人間の遺体なんて見つからなかったのさ、これがな。」

カイ「だとしたら余計に腑に落ちんな、ワザワザ赤ん坊を乗せる意味など無いだろうに、

ましてやたった一人で・・・」

リー「あの時、私も生存者の確認のため、簡単な調査を行いました  
が、

人っ子一人見当たりませんでした。

おまけに艦はいつ倒壊するか分からなかったので、すぐにその場を立ち去りました。」

鞠音「私は改修したアシェンから、何かしらの情報を引き出そうと  
試みましたが、

当時のアシェンはボディは元より、電子頭脳、特に記憶回路に  
相当のダメージを負っていました。

自分の名前、製造番号、

それと赤ん坊の名前以外の全ての記憶を失っておりましたわ。

」

アシェン「その後遺症で未だに言語機能はぶっ壊れたままでござい  
ますです。」

ハーケン「そしてその赤ん坊はハーケン・ブロンニングと名付けら  
れ、

二人そろって親父たちのご厄介になったと言う訳さ。」

ラトウーニ「その後は？」

アシェン「その後私と艦長は先代と共に賞金稼ぎの一家の一員として  
世界の方々を回りました。

そして数年前、先代は今の艦長にツアイトを譲り引退し、  
政治家に転向してあつという間にロストエレンシアの代  
表になりやがりました。」

ハーケン「そしてようやく『ネバーランド』の探索許可が下りたのさ。」

落下して実に23年後の事だ・・・」

カイ「その間、誰も近づこうとはしなかったのか？」

アシエン「ぶっちゃけた話、『ネバーランド』と同じく異世界から落下してきたと思われる

超巨大戦艦があり、その全容は未だに知られておりやがりません。」

カイ「超巨大戦艦？」

ラトウーニ「先程の映像にうつすらと艦のような影が都市の向こう側に見えましたが、

あまりに巨大なため、見間違いかと思っていきましたが・・・」

アシエン「我々はその戦艦を『シユラーフェン・セレスト』と呼称しております。」

ハーケン「それに比べたら『ネバーランド』は

ちっぽけなものに過ぎないというわけさ。

それに、艦は嚴重にロックされていたし、

わざわざやってくる物好きもいないだろう？」

アラド「そういわれればそうっすね。」

ハーケン「その後、何度か中止したり妨害を受けたりもしたが、

俺達は調査を続けた。

そして・・・見つけちゃったのさ・・・」

ラミア「何をだ・・・？」

ハーケン「・・・アシエン、記録をみせてやれ・・・」

アシエン「・・・はい。」

アシエンは再びモニターに映像を繋げた。

ゼオラ「何かの研究室のようだけど・・・？」

アラド「かなりボロボロっスね。」

ラトウーニ「目の前にあるのは・・・」

壊れた調整槽のようだけど・・・？」

カイ「何か、プレートのようなものが見えるが・・・」

ハーケン「・・・拡大しろ。」

アシエンは無言でハーケンの指示に従った。

モニター上に映っているプレートはかなり錆付いていたが、そこに書いてある文字は何とか読むことが出来た。

『W O O    ハーケン・ブラウニング』

カイ「な・・・！？」

ゼオラ「え・・・！？」

ラトウーニ「まさか・・・！？」

アラド「これって一体・・・！？」

ハーケン「俺の揺り籠さ・・・」

寝心地はあんまり良いとは言えそうに無いがな。」

ラミア「だが・・・お前は・・・」

ハーケン「・・・最初のWシリーズは生身の人間だったのさ。」

遺伝子レベルでの身体強化と

先天的に機動兵器の操縦技術を刷り込まれてはいるがな。

「

アシエン「おまけに専用機体とセットでの運用を考えていたようなのです。」

ラトウーニ「（ある意味、私達よりも酷い・・・）」

ギリアム「（文字通り、人間兵器と言う事が・・・！？）」

カイ「（シャドウミラーめ・・・」

よくもまあ、そんな事を思いつくもんだな・・・）」

ハーケン「唯一の救いは、

俺のようなタイプは俺1人だけと言う事ぐらいだな。」

ラミア「どういうことだ？」

アラド「こういうのって、大概クローンとかでたくさんいるもんなんじゃない……」

ハーケン「例えどんなに強化したと言っても、素体は限りなく生身の人間だ。

成人になるまでは普通の人間と同じように育成する必要がある。

即戦力にはなりえん。

俺は試しに作られたに過ぎないと言うわけさ、これがな。

「  
カイ「連中にはそんな時間も余裕も無いはずだったから、なおさらだな……」

アシエン「そして計画は凍結され、

以降は私のようなアンドロイドタイプに移行したと言う訳だ。」

アシエンは自らモニターとの接続を絶った。

ハーケン「俺がシャドウミラーの関係者と名乗ったのはそういうことさ……」

ラミア「……」

ハーケン「ん？」

どうかしたのか、急に黙りこくって……？」

アラド「……何故、お前はそんな顔でいられる？」

……何故、笑っていられる？

……自分が造られた人間だと知ってなお……」

ハーケン「何だ？」

そんな事か。」

ゼオラ「あなたは何も思わないの！？

だつて、あなたは・・・」

ハーケン「リー、お前は自分が獣人であることをどう思っている？」  
リー「そんな事考えた事ありませんな、私は今の自分に満足しておりますので。」

ハーケン「エイゼルの旦那にヘンネにキュオン、アンタらはどう思う？」

ヘンネ「愚問だね。」

アタシは自分の翼に誇りをもっているさね。

他人がどう思おうと知ったこっちゃ無いよ。」

キュオン「確かに、キュオン達は他の種族から嫌われてるかもしれない・・・」

でもキュオンはキュオンの事が好きだよ。」

エイゼル「例えば他の種族に忌み嫌われようとも、我は我が種族を否定したことは無い。」

なにより、我は我が種族を誇りに思っている。」

カツツエ「つまり、そういうことなのよねえ。」

ラトウニー「え・・・？」

ハーケン「生きていくのに、そんなのは些細な事っていうことさ、これがな。」

ギリアム「・・・強いのだな、お前達は。」

錫華「こやつの場合ただ単にニブだけぞな。」

鞠音「それに種族だの生まれだので一喜一憂しては身が持ちませんわ。」

エイゼル「特に我等の世界ではな。」

ラミア「・・・アシェン・ブレイデル、

お前もそうなのか・・・？」

アシェン「私は私以外の何者にもなれない。

それだけの話だ。」

ラミア「・・・そうだな。」

（私もいつかお前のようになれるのだろうか・・・）

ハーケン「ラミア・ラブレス、一つ聞きたい事があるんだが・・・」  
ラミア「・・・なんだ？」

ハーケン「レモン・ブラウニングの事だ・・・」  
ラミア「・・・」

ハーケン「お前達の会話や雰囲気から察するに、

シャドウミラーがどうなったのかは大体見当が付く。

多分、レモン・ブラウニングも・・・」

ラミア「・・・」

ハーケン「やはりそうなのか・・・」

ラミア「・・・会いたかったのか？」

ハーケン「まあ、な。

お前がWシリーズと名乗ったとき、

もしかしたらと思ったんだがな・・・」

ラミア「・・・残念な思いをさせてしまったな・・・」

ハーケン「・・・どういう人だった？」

ラミア「・・・つかみどころがなく、不思議で、それでいてどこか  
寂しそうな方でした。

・・・そして、我々Wナンバーズの良き母でした。」

ハーケン「それだけ聞ければ十分だ。

礼を言うよ。」

錫華「チャラ助が礼を言うとは・・・

明日は槍でも降るかのう？」

キュオン「うゝん、キュオンはミサイルだと思う！」

ハーケン「（お前達の頭の中の俺はどんな奴なんだよ・・・）」

### 第3話 過去との再会 その5（後書き）

普通に書いていると「教導隊とハーケン達で振り返る無限のフロンティア」になっちゃいまい、マンネリ化しそうなので色々とカラミを入れた結果、余裕で2万字を超えてしまったためまた分割ですorz  
ちなみに私が1万字前後にこだわるのは読みやすさを優先した結果だからですが、読む人は読むんだろぅなあ・・・  
ああ、はやく第4話が書きたい（TTT）



### 第3話 過去との再会 その6

ギリアム「・・・これで幾つかの疑問が解けたと言う事か。」

錫華「まだ本題にはこれっぽっちも入っていないがのう。」

カイ「そうだな、お前達のあの崩壊した世界についての途中だったな。」

ラトウーニ「あの世界の変わりよう・・・

『ネバーランド』の落下が原因とは思えないもの。」

エイゼル「・・・では、我から話そう。

有る意味、元凶を招いたのは我らフォルミッドヘイムと言えるからな・・・」

ラミア「どういうことだ？」

エイゼル「『ネバーランド』の前半部分がフォルミッドヘイムに落下したのは話したな。」

ゼオラ「ええ・・・。」

エイゼル「調査開始に23年もの月日がかかったロストエレンシアとは違い、

我らはすぐに調査を開始した。

そして、幾つかのデータの解析に成功した。

カイ「何のデータだ？」

エイゼル「一つはパーソナル・トルーパーと呼ばれる機動兵器のデータだ。」

我らはそれらを元に人型機動兵器を完成させた。

ゼオラ「パーソナル・トルーパーを!？」

錫華「大きさはわらわの邪鬼銃王と大差ないがのう。」

アラド「一体どんなのを造ったんスか？」

エイゼル「一つは重兵装陸上戦闘機アルトアイゼン・ナハト。

もう一つは高機動空中戦闘機ヴァイスリッター・アーベントだ。」

カイ「アルトとヴァイスだと!？」

アラド「確か、『向こう側』のアルトって……!」

ラミア「キョウスケ中尉、いやバーオウルフのゲシュペンストMk  
- EIIの事だ。」

ラトウーニ「でも、『向こう側』のヴァイスは聞いた事がない……  
ラミア「『向こう側』ではヴァイス……」

Mk - IVはプランだけの存在だった。

(そのデータが『ネバーランド』に搭載されていたのは初  
耳だな。)」

ハーケン「その様子だと、こっちにもあんのか……?」

ラミア「『向こう側』と大きく異なるのは

アルトは扱いの難しさゆえ、制式採用が見送られた事と  
ヴァイスが実在すると言う点だ。」

カイ「同じ理由でヴァイスも制式採用はされなかったがな。」

ハーケン「(いずれにしろアレが20mサイズで存在するのは間違  
いないのか。)

考えただけでゾツとするぜ……)」

ギリアム「では、その他のデータは?」

エイゼル「……エンドレス・フロンティア以外の

異世界への転移座標だ。」

カイ「何!？」

ラミア「転移座標……ならばこの世界へのか?」

ギリアム「だが座標はシステムXNのもの……」

そう簡単には転用出来ないはずだが……」

エイゼル「その通りだ。

クロスゲートに転用するまでに実に10年の歳月を要し  
た。

そして我等は、1つの世界へのゲートの開通に成功した。

「  
ラトウーニ「……もしかして、それでこの世界に?」

カツツエ「残念だけど、今話しているのは13年も前の話よ。」

それに、繋がったのはこの世界じゃないわ・・・」

エイゼル「・・・繋がったのは『アインスト』と呼ばれる異形の者達の世界だった。」

ゼオラ「！！？」

ラトウーニ「アインスト！？」

アラド「なんでよりによってあいつらの！？」

ハーケン「おいおい・・・」

まさか連中もこの世界に？」

カイ「その通りだ。」

こちらの世界でもアインストと呼ばれる謎の生命体が来襲してきた。

こちらの呼びかけに何も応じず、ただひたすらに破壊活動を行っていた。

連中の親玉は『静寂なる世界の創造のために』と言っていたが・・・」

神夜「問答無用極まりないですね・・・」

ラミア「連中は幾つかの種類があり、おおそは20メートルサイズだったが

中には100メートルを超える個体も確認されている。」

アラド「ラスボスは40km超えてたっスもんね・・・」

カイ「・・・言うな！

思い出したくもない。」

ハーケン「俺達の世界じゃせいぜい2、3メートル、でかくて5mがいいトコだったか・・・」

インフレにも限度ってモンがあるだろ・・・」

ヘンネ「アタシはそんなのをぶっ潰したあんたの方が驚きだね。」

ハーケン「英雄譚は後で聞かせてもらおうとするよ。」

エイゼル「開通後、その世界に興味を持った

前フォルミッドヘイム王シユタル・ディープは

アルトアイゼン・ナハト、ヴァイスリッター・アーベント、そしてアークゲインと

親衛隊を引き連れて向こう側へ渡ったのだ。」

カイ「む？」

今、初めて聞く名があつたが……」

ラミア「アークゲイン……？」

エイゼル「『ネバーランド』調査の際に艦に搭載されていた兵器だ。

両腕部にブレード、両脚部にカノン砲を備えた紺碧の徒手格闘アンドロイド。」

アラド「腕にトンガリ、それに青くて徒手格闘つて……！」

ハーケン「おい、まさか……」

カイ「……こいつを見てくれ。」

カイはデータベースにアクセスし、一体のロボットの映像をモニターに映した。

ハーケン「冗談キツいにも程があるだろ……！？」

ヘンネ「この姿、どう見てもアークゲインだね。」

キュオン「色々足りない気もするけど……」

ラミア「シャドウミラー 特殊部隊隊長アクセル・アルマーが駆る機体、

その名はソウルゲイン。」

神夜「魂を、獲する者……」

錫華「こやつを小さくしたのか、闇騎士を大きくしたのかは知らぬが

ややこしい事甚だしいぞな……」

ラミア「いや、私もそのような機体が搭載されているとは知らなかった。」

エイゼル「我等はWシリーズに使用される躯体製作の際の試作機と  
考えていたのだが……」

ラミア「……すまないが、

私がロールアウトしたのは『こちら側』に転移する少し前・

・

初期段階のWシリーズに関するデータは殆ど持っていないのだ・・・」

ギリアム「真相は闇の中というわけか・・・」

ゼオラ「それはそうと、アインスト世界に行った王様達は・・・？」

エイゼル「・・・」

ラミア「全滅か・・・？」

エイゼル「・・・帰還したのは王と3体の機動兵器だけだった。」

アラド「命からがら逃げて来たんスね・・・」

ヘンネ「悪いけど、アンタが思っているよりずっとまずい事がおきたのさ。」

エイゼル「帰ってきた機動兵器達は

異常なまでの戦闘能力と自己修復能力を備えていた。

そして王は全世界に向けて戦争を仕掛けたのだ。

・・・『静寂なる世界のために』、と。」

ラトウーニ「それって・・・まさか!？」

ギリアム「・・・アインストに洗脳されたのか？」

カツツエ「そうだったらどれほどよかったのか・・・!」

ゼオラ「・・・？」

エイゼル「帰って来た王は王ではなく、『王の姿をした何か』だったのだ。

・・・そしてそれは王そのものに見えた。」

カイ「何!？」

ゼオラ「それよりも、王様がいきなり戦争を始めると言う事に

あなた達は何の疑問も浮かばなかったの？」

エイゼル「フォルミッドヘイムにおいて、王の命令は絶対だ。

疑念があろうとも、証拠が無い限り動くことは出来ぬ。」

カイ「(過酷な環境ゆえの絶対王政か・・・)」

ラトウーニ「ヘンネさんや、キュオンさんは・・・？」

ヘンネ「アタシはその頃、前線の傭兵部隊にいた。

お偉いさんが偽者かもしれないなんて考える余裕なんかありませんよ。」

キュオン「キュオンは後方支援部隊にいたけど、そういうことは分かんなかったよ。」

エイゼル「・・・どうしても確証が持てなかった我は、

当時のオルケストル・アーミー副隊長の

カツツエに王の身边調査を依頼したのだ。」

カツツエ「・・・出来ればエイゼルの予感が外れて欲しかった。

だが調べれば調べるほどその疑惑は確固たるモノに変わっていった。」

エイゼル「その後の調査で証拠を見つけた我々は王に返答を申し出た。

・・・そして奴はその本性を現した。」

カツツエ「隔離塔ノース・オリトリアでの死闘の末に、

アタシ等はソイツを倒す事に成功した。

その戦いでオルケストル・アーミーは全滅。

生き残ったのはアタシとエイゼルだけだ・・・」

エイゼル「大戦開始から10年

・・・あまりにも遅すぎた。」

カイ「長い戦争だったのだな・・・」

ギリラム「だが先程の映像を見る限りでは

世界全体の被害はむしろ少なすぎると思うのだが・・・

？」

ハーケン「フォルミッドヘイムのクロスゲートが繋がっていたのは

隣の世界エルフェティルだけだ。

連中の軍事用ゲートを備えた拠点もあったしな。

だから実質的にはフォルミッドヘイムと

エルフェティルとの戦争だったと言える。」

ラトウーニ「でも、その世界には他の世界へのゲートがあったの

では？」

アシエン「オリジナルのクロスゲートは常に安定しているわけでは  
ありません。

何日も開きっぱなしの時もあれば、何ヶ月も閉じちゃっ  
てる時もあります。」

ラミア「それ故に侵攻が遅れたと・・・？」

ハーケン「そのおかげで俺の世界、ロストエレンシアは

侵攻による被害は殆ど無かった。」

リー「それもありますが、ヴァルナカナイへのゲートは

その世界の連中ぐらいしか所在を知りません、

おまけに深海の世界、

フォルミッドヘイムだって容易に侵攻は出来なかったでしょ  
う。」

ゼオラ「入り口が分からなければ入りようがないものね・・・」

ギリアム「・・・では神楽天原は？」

アシエン「神楽天原へのゲートはフォルミッドヘイムのゲートのす  
ぐ近く、

おまけに結構安定しまくっていやがりました。」

カイ「だが、先程の映像では戦災の跡すら見られなかったが・・・」  
ハーケン「・・・神楽天原は戦争が始まって間もなく、

籠国ろうこくを行っ

た。そのため被害を全く受けずに済んだのさ・・・」

ゼオラ「ろうこく？」

アシエン「簡単に言えば、ゲートを完全に封鎖する事です。」

錫華「だが、事は簡単とは程遠いと言える・・・」

アラド「どういう事っスか？」

神夜「・・・籠国を行うためには、

不死桜内部にある使者の間で儀式を行う必要があるんです。」

ラトウーニ「儀式・・・？」

ハーケン「あの巨大なチェリーブロッサムはそれ自体がゲートに干渉するための装置、

そのエネルギー源は楠舞皇族の霊力・・・

ましてや10年もゲートを閉鎖するほどの霊力を消費すれば・・・」

ゼオラ「そ、それじゃあ・・・！」

神夜「当時、儀式を行ったのは楠舞羽衣なんぶうい・・・

私のお母さんです。」

アラド「そんなのって・・・！」

ギリアム「・・・非情かもしれんが、戦うという選択肢もあつたのでは？」

アシエン「エンドレス・フロンティアでは、

盗賊や野獣による襲撃や権力争奪のための争いで命を落とす事はそう珍しい事ではありません。

昔ほどではありませんが・・・」

鞠音「売られたケンカを買うのは当たり前前の考えと言えますわ。」

リー「この戦争で、賞金稼ぎから国王にまでの上がった奴もいるほんですからな。」

カイ「弱肉強食と言うやつだな・・・」

ハーケン「だから神楽天原が籠国すると聞いて一部の連中は

腰抜けと罵った・・・」

神夜「けどそんな世界にも平和を望む人もいます。

お母さんがそうだったように・・・」

ゼオラ「でも、止める事も出来たはず・・・」

錫華「わらわ達とて必死で説得はした・・・

だが民のために自ら命を投げ出す覚悟を決めた者を

誰が止めることが出来ようか・・・？」

アラド「神夜さんは・・・悲しくなかつたんつか・・・？」

神夜「私だって哀しい事極まりないです・・・

でもお母さんのおかげで神楽天原の民の血が流れることはあ



りませんでした。

その事を考えたら泣いてなんかいられません。

お母さんの思い、無駄にしたくはありませんから。」

錫華「よいよい。」

その笑顔なら、羽衣も安心しておろう。」

エイゼル「・・・神楽天原の話はハーケンから聞いていた。

もし、我等が門を開かなければ・・・

そなたの母は・・・

そしてそなたも・・・」

ハーケン「おっと、いい話の途中だがそこまでだ。」

キュオン「ちよっと！割り込まないでよ、キモハゲ！」

錫華「チャラノブが、少しは空気を読めぬのか？」

ハーケン「・・・スカルボス、あんたはその気持ちがあつたからこそ

後始末も手前で片付けようとしたんだろ？」

アラド「後始末・・・ってなんスか？」

エイゼル「王に成り代わったアインストを倒した我は

エルフェティルと和平を結び、戦争を終結させた。」

カツツエ「そしてアタシはオルケストル・アーミーを辞めて、

最も被害が酷かったデューネポリスで難民の救済活動を

行う事にした。」

ラミア「それがマーカス・タウンと言うわけか。」

ゼオラ「じゃあ、エイゼルさん達もその手伝いを？」

エイゼル「・・・王を倒し、アインスト世界へのゲートを完全封鎖

したものの、

彼らは少数ではあるが

依然として世界に存在し続けていることが判明したのだ。

そして戦争終結時に3体の機動兵器も行方不明に・・・

カイ「何だと!？」

エイゼル「我は新たにオルケストル・アーミーを再編成し独自に調査を開始し、

『ネバーランド』から新たにサルベージに成功したデータから

追撃用の機動兵器ゲシュペンストを製作した。」

アラド「今度はゲシュペンストっすか!？」

アシェン「どんなプログラミングをしたか解りやしませんか、世界中のあっちゃこっちゃを引っ掻き回しまくったせいで、

『ファントム』の通り名で賞金首に指定されやがりました。」

カイ「追跡者が目を付けられるとは、シャレにもならんな・・・」  
ハーケン「補足すると、そいつの制式名称はゲシュペンスト・ハーケン。」

俺の専用機体さ。」

ゼオラ「ある意味、もの凄い因縁ね・・・」

鞠音「ちなみにファントムはその後艦長達が回収し、

ツアイトの戦力として生まれ変わらせましたわ、この澄井鞠音が!」

アラド「どんなマ改造したのか想像したく無いっス・・・」

ハーケン「見た目や武装に変化は無いが、

俺達の言う事を聞くようにしたぐらいのもんだぜ?

まあドクターの改造のおかげ思わぬラッキーを運んでくれたワケだしな。」

ラトウーニ「どういう事・・・?」

アシェン「後のアルトやヴァイスとの戦いでの事ですが、連中をボコボコにした後

ゲシュペンストが勝手に命令系を並列化しやがりました。

「アラド「要するに味方にしたって事っすか!？」

ハーケン「おかげで戦力は大幅にアップしたのさ、これがな。」  
ラミア「では、アークゲインも・・・?」

ハーケン「いや、奴はそうなる前に自爆しやがった。

後で破片を回収してドクターに調べさせたが、

あらかじめそういう機能があつたという事ぐらいしか解らなかつた。」

鞠音「おそらく機密保持のための自爆装置だったのでしょうか。」

ラミア「(もしや、コードATA?)

いや、それならば破片も残らんはずだが……)」

ハーケン「ちなみにそいつらはツアイトに積んである。

調べたけりや好きにしてくれて構わないぜ。」

鞠音「……艦長? 私は許可した覚えはありませんが?」

ハーケン「……訂正する、調べるのはドクターの許可の下でやってくれ。」

アラド「(やっぱ世界が違っても、マイオン博士はマリオン博士っス……)」

カイ「ではそちらは後ほどよろしく頼む。」

鞠音「その代わりといつては何ですが、そちらの機体を分解しても構いませんか?」

カイ「分解されちゃこっちが困る。

見るだけにしてもらおうか?」

鞠音「まあ。今回はそれで我慢しましょう……」

ギリラム「(小型のゲシユペンストか……

興味があるな……)」

ラトウーニ「オルケストル・アーミーが動き出した頃、ハーケンさん達は何を……?」

ハーケン「その頃俺達は『ファントム』の話を聞いて搜索を開始したんだが、

その途中でバックにオルケストル・アーミーが絡んでいと知った。

連中と何度か接触し、ドンパチやらかしたしな。」

ラトウーニ「話そうとはしなかったの……?」

アシエン「秘密任務だ、シークレットだとかほざいて一向に話を聞きやがりませんでした。」

大方、次の戦争の下準備だと思いましたので、吹っかけられる前に早めに息の根を止めておこうかと。」

アラド「か、過激っスね・・・」

エイゼル「事情を知らぬ者達を巻き込むわけにはいかなかった。」

なにより、我等の罪は我等自身の手で償うべきだと思っただからだ・・・」

ハーケン「そう気に負うことはないさ。」

どんな結果になるかは誰も予想出来なかったしな・・・それに最後にはあんた達は俺達を信じて全てを話し後を託してくれた。

それでいいじゃないか。」

エイゼル「・・・そうだな。」

ギリアム「・・・それで、行方不明の機動兵器達はハーケン達によって回収されたわけだが、

アインストのほうはどうなったのだ？」

ヘンネ「・・・アインストが世界中で確認された頃から、

奇妙な結晶体があちこちで発生し始めたのさ。」

ラミア「結晶体？」

エイゼル「蒼と紅の二種類が確認され、

我等はそれを『ミルトカイル石』と呼んでいた。

その石は限りなく無機物でありながらも生きていたのだ。」

「

ギリアム「生きている・・・だと？」

エイゼル「ミルトカイル石は不思議なエネルギーを発していた。

その力に触れたものは自分の持つ力を限界以上に引き出すことが出来た。」

錫華「それに目を付けた滅魏城の主、守天は

諦めきれずにいた神楽天原転覆を目論んだほどだ・・・」

ラミア「だが、それほどまでのエネルギー……」

代償が無いと考えるのは不自然か……？」

カイ「それに出現発生時の状況から判断するに、

アインスト絡みであることは間違いないな……」

ハーケン「その通りだ、ミスターダンディ。

ミルトカイル石の力に当てられた連中は、

揃いも揃ってアインストにコントロールされちゃったの

さ。」

ラミア「おまけにミルトカイル石の周りには雑魚アインストがどこからともなく

わんさかうじゃうじゃ湧いてきやがりました。」

ギリアム「では、ミルトカイル石はアインストの卵のようなものなのか？」

ヘンネ「出てくるところを見たわけじゃないが、増殖していたのは間違いないさね。」

セオラ「そのミルトカイル石ですが、対処法はあったんですか？」

ハーケン「後に開発された特殊弾頭、あるいは強烈な衝撃を加えれば石は破壊できた。

それに石の純度にもよるが小さくなればその力を保てないらしい。」

ラトウーニ「アインストに支配された彼らは……？」

ハーケン「その支配も完全では無く一種の催眠状態に陥れる程度のモノだった、

多少ショックを与えればアツサリと解けちゃったのさ、

これがな。」

ギリアム「その程度だったのは不幸中の幸いだったな。」

エイゼル「だがミルトカイル石の解析を進める際にあることが判明した。」

ヘンネ「……ミルトカイル石はただの受信機、エネルギーの大元は別にあつたのさ。」

ラトゥーニ「だけど、世界中に結晶体を発生させるほどのエネルギー……」

「一体どこから……」

ハーケン「クロスゲートさ……」

ギリアム「大方の予想は付いたが、やはり……!」

アラド「じゃあ、ゲートをぶっ壊してしまえば万事解決っすね!」

ゼオラ「馬鹿アラド!」

「そんな事したらどうなるかわかんないでしょうが!」

ヘンネ「それに壊す必要は無い、

ゲートから出てくるエネルギーを遮断すれば言いだけの話さね。」

ギリアム「だが、ゲートを遮断する方法となると……」

ラミア「先程の不死桜か……?」

エイゼル「いや、アインストやミルトカイル石の調査、それに機動兵器の追跡は

フォルミッドヘイムが独自に行っていた。」

錫華「それに不死桜の力はそう易々とは使えぬ。」

カイ「ならば、他に方法があつたのか?」

エイゼル「……フォルミッドヘイムの中央に聳えるバレリアネア塔の力を使えばな。」

キユオン「元々、軍事用ゲートのコントロールタワーだからね。

オリジナルのゲートにも干渉する事は出来るよ。

改造して、パワーを調整すればだけど……」

ヘンネ「さすがに神楽天原の不死桜ほどの力はないが、

意図的にゲートを不安定にさせる事ぐらいは出来た。」

ハーケン「だがそれはあくまでも一時しのぎ……」

アインストの侵攻は遅らせることは出来るが、

それ以上のことは出来なかった。」

ヘンネ「それにゲートが不安定ということは、

普段繋がっていない世界からの侵入の危険性もあった。」

ギリウム「だが次元を不安定にさせるといことはそれ自体が世界崩壊の危機・・・」

早急に別の対抗策を打たねばならなかったのでは？」

ハーケン「毎度毎度理解とツツコミが速くて助かるぜ。」

エイゼル「この事をハーケン達に話した時に、楠舞 神夜が申し出たのだ。」

『神楽天原に任せて欲しい』、と。」

ゼオラ「それってまさか籠国・・・！？」

ラトウーニ「だけど、そのためには・・・」

神夜「不死桜を使い、全ての交鬼門を閉じる・・・」

・・・あの時、私が出来うることはそれしかありませんでした。」

アラド「ハーケンさん達は止めなかったんスか！？」

アシエン「我々は籠国がどの様にして行われるのか全く知りませんでした。」

ハーケン「・・・それに神夜は俺達に何も話してくれなかった。

籠国することも、それで自分の命が失われる事も・・・」

エイゼル「・・・だが、アインストの手は我等の遥か先に伸びていたのだ。」

カイ「籠国の妨害か！？」

錫華「・・・それ以上のことぞな。」

ハーケン「アインストはあろうことか不死桜を乗っ取ろうとしたのだ。」

アラド「な、なんだって！？」

ラミア「だが、不死桜は楠舞皇家の者でしか扱えないはずだが・・・？」

ヘンネ「忘れたのかい？」

ウチの王様がアインストに取って代わられた事を・・・！」

ラトウーニ「・・・まさか！？」

ハーケン「そう、アインストは神夜のコピーを創り出して

不死桜のコントロールを得ようとしたのさ。」

アシエン「勿論ただのコピーではありません。

容姿、体型、戦闘能力、はては特有の霊力まで寸分違わない

パーペキな物でした。

それも4体も。」

ゼオラ「か、神夜さんが4人も!？」

アラド「別の意味で驚きつス!？」

ラトウーニ「では、不死桜は・・・？」

錫華「いや、寸での所で阻止する事ができ、使者の間も無事だった。

」

神夜「だけど、いつまたアインストがやってくるか分かりません。

私はハーケンさん達を見送った後、すぐに儀式の準備に入り

ました・・・」

アラド「い、いくらなんでも急ぎすぎじゃないんスか!？」

錫華「・・・不死桜は満月の夜にしかその力を使うことが出来ぬ。

そして、その夜は満月だった・・・」

ラミア「・・・だが、こうして彼女が生きているということは、

何か別の方法があったのか？」

ハーケン「・・・そうだ。

俺は帰った後、トレイデル・シュタットにいる親父に呼ばれ、籠国の話を聞いた。

・・・俺は親父に懇願し、他の方法は無いのかと聞いた。

」

ギリアム「・・・あつたのだな。」

ハーケン「ロスト・エレンシアにあるシュラーフェン・セレスト、

あれは空中戦艦などの類ではなく、

かつては次元を旅する艦であつたのではないかと聞かされた。」

ギリアム「・・・次元転移戦艦、とでもいうのか？」



ハーケン「そしてシュラーフェンの主砲は攻撃用ではなく、

転移フィールド発生装置だと親父は言った。」

アシエン「そして、そこにアインスト世界への転移座標を加えれば・  
・・」

ハーケン「奴等の本拠地に殴りこみに行けるっていう寸法さ。」

カイ「だが、それはあまりにも・・・！」

ハーケン「『楽しかった』・・・」

カイ「？」

ハーケン「神夜が別れ際に言った言葉さ・・・

18の娘が言つていい科白じゃないだろ・・・

まだ何もやり遂げちゃいねえだろうに・・・」

アシエン「それに籠国を行ったとしても、所詮は時間稼ぎ。

その間に何も対抗策が見つからなければ・・・」

ギリアム「・・・だが、お前の策では・・・」

ハーケン「確かに傍から見れば“厚い”ギャンブルじゃない。

だが、やるからにはオールベットでいく・・・！

それに、男が命を賭ける時は一つしかねえだろ・・・」

ラミア「（感情や情緒に任せた上での行動か・・・

かつての私なら理解不能だった・・・だが今は・・・）」

神夜「・・・そして私もハーケンさんの賭けに乗らせていただく感じ  
で」

使者の間からさらって貰いました」

ラトウーニ「でも、それでは・・・」

鞠音「いえ、今思えば艦長の判断は正しかったといえます。

彼が神夜を連れ出した直後に全てのクロスゲートが暴走を始  
めましたから。」

錫華「神楽天原では満月が昇る前の頃だったかのう。」

アラド「ギリギリセーフっすね。」

ギリアム「そして転移装置を作動させてアインストの世界に渡った  
と言っ訳か・・・」

カイ「だが、そこは連中のテリトリー、

相当の数のアインストがいただろう。」

ハーケン「・・・いや、その世界にいたアインストは一体だけだった。」

錫華「おかげで分かりやすかったがのう。」

ラミア「・・・どういうことだ？」

ハーケン「アシェン・・・」

アシェン「・・・艦長、大分疲れまくりでございますです。

正直言つて、繋げたり切ったりでもうダリイです。

エネルギー維持のため、これよりお昼寝モードに移行します。」

アラド「（物臭極まりないっス・・・）」

ハーケン「そんなモードついてないだろうが。  
もつとやる気を出せ。」

・・・大体さつきから手え抜いてんのは分かってんだよ。

アシェン「・・・目敏いですね、艦長。」

ハーケン「・・・いいからさつさとやってくれ、

このままじゃ話にならん。」

アシェン「了解、では演算処理能力強化のため、特殊コードを発動します。」

ゼオラ「特殊コード？」

ラミア「おそらくは、コードDTDだ。」

アラド「なんスかそれ？」

ラミア「熱暴走によって一時的に性能を向上させるコードだ。

実装されているのは私と、私の元になったアシェン・レ

イデルだけの筈・・・」

神夜「え！？

ラミアさんにも付いてるんですか？」

錫華「・・・アレまであるとは・・・」

これは本当に姉妹と言って良いな・・・」  
カイ「・・・？」

何故そんな呆れた顔をしているんだ？」  
ヘンネ「・・・見ればわかるさ。」

アシェンは特殊コード『DTD』を発動した。  
頭部シールドと緑色のインナースーツが展開され、周囲には蒸気が立ち込めていた。

アシェン（DTD）「・・・」  
ギリアム「これがコードDTD・・・」  
アラド「うゝん・・・」

確かに露出度は上がったっすけどそんなに呆れるほどじゃあ・・・」

アシェン（DTD）「あーしんどい！メンド臭い！やんなっちゃう！  
ハーきゅん、ホント人使いが荒いったらありやしないよ！」

ラミア「な・・・！？」  
ゼオラ「なにコレ！？」  
アシェン（DTD）「ああ？何見てんの！？」

ムツツリヒゲにでかメロン！

それに肉まんにエロガキに根暗メガネに紫ワカメ

！」

ゼオラ「に、肉まん！？」

ラトウニ「（根暗メガネ・・・）」

ラミア「メロンとは私の事か？」

アラド「余計な所まで暴走してるっすね・・・」

ギリアム「・・・」

カイ「・・・成程な。」

これがさっきのお前達の反応のワケか・・・

・・・頭が痛くなるな・・・」

ハーケン「・・・ホント、これさえ無ければな。

おい、アシェン！」

アシェン（DTD）「なに、ハーきゅん？

ボク今めちゃんこ機嫌が悪いんだけど？」

ハーケン「機嫌もヘツタクレもないだろうが。

何のために熱暴走モードになったと思ってるんだ？」

アシェン（DTD）「わかってるって！

ハーきゅんの赤裸々なメモリーをここでぶちまけ

ればいいんだよね」

ハーケン「・・・そんなもんぶちまけてみる、跡形もなく消し飛ばしてやる。」

アシェン（DTD）「じょーだんじょーだん。分かってるって。

そんじゃいくよ」

レッツ！プラグイン！」

アシェンは意気揚々とモニターに回線を繋げた。

カイ「むう・・・！？」

ハーケン「・・・こいつが、俺達の見た連中の世界さ。」

ギリアム「（我々が知っているアインスト空間とは別物のようだな・・・）」

アラド「あ、あのデカイ奴って確か・・・！？」

ラトウーニ「コードネーム『ヘッド』・・・」

アインスト・レジセイア・・・」

ゼオラ「でも、なんだか様子がおかしい・・・」

アシェン（DTD）「これってさ、カンペキに化石化しちゃってるんだよね。」

ラミア「化石化だと？」

鞠音「おそらく数万年程前から活動を停止していると思われます。」

ハーケン「だが意識はまだあつたらしく、

ご丁寧に代理人、いや分身を創って出迎えて来たのさ。」  
ギリアム「それが、お前達がこの世界で会ったアインストと言う訳か。」

ハーケン「俺達が会ってきた中でも異質で、少しだが話す事が出来た。」

確か、ヴァールシャインとか名乗っていた・・・」

カイ「アインストの話か・・・」

神夜「彼は言っていました。」

元の世界に帰りたくてゲートを開いた。

でもいくら開いても元の世界には繋がる事は無かった、と。」

ハーケン「そして数万年が経ち、現在に至ったそうだ。」

ラトウーニ「では、エンドレス・フロンティアを創ったのは・・・！？」

ゼオラ「アインストだったって事！？」

ギリアム「その話から察するに、彼もまた、異邦者だったということとか・・・」

カイ「はぐれアインスト・・・とでも言うべきか？」

鞠音「帰れなくなった原因は、未だよく分かっていませんが・・・」  
ラミア「（・・・『こちら側』でのアインストとの戦いが原因とも考えうるな。）」

ハーケン「その後そいつは俺たちに襲い掛かり、見事に返り討ちにあつたわけだが、

最後の力を使って転移しようとしたのさ。」

アシェン（DTD）「そんな時ハーキゅんのぶつ放した一発でアインストは消えちゃって、

そのせいかどうかは知らないけど、

世界があんな風になっちゃったってわけ。」

ギリアム「それが先程の混沌とした世界の正体と言う訳か・・・」

アシエンはモニターとの接続を断ち、通常モードに戻った。

ラミア「だが、アインストが消滅しても世界がこうなってしまっ  
ては・・・」

ラトウーニ「相当の混乱が起きたでしょうね・・・」

カツツエ「あら？」

別にそんなことは無かったわよ？」

ゼオラ「え・・・！？」

リー「まあ、ハッキリ言って少々驚かされましたが。」

アラド「あ、あんな事になって感想はそれだけっすか！？」

ハーケン「エンドレス・フロンティアは元々が何でもアリな世界、

いまさら驚いたって仕方が無いってことさ。」

リー「とある王様は、自分の国が無くなってガッカリしております  
たがな。」

ヘンネ「それにアタシらのバイタリティ、舐めてもらっちゃ困るね。」

カツツエ「そうそう、意外にしぶといのよ、アタシ達。」

アラド「しぶといってレベルじゃねえっす・・・！」

エイゼル「だが、そうでないものもいるのは事実だ。」

小規模の戦争もあれば、

肉親と離れ離れになってしまったものも少なからずいた。

誰もが世界を受け入れられたと言うわけではなかった・・・

・

カイ「・・・むしろそれが当然だろうな。」

エイゼル「そこで我等フォルミッド・ヘイムは、救済プロジェクト  
の一環として、

新たなクロスゲートの開発を試みた。」

ギリアム「何！？」

ハーケン「もつとも、単なる長距離移動用のものではあるがな。」

アラド「それだったら、飛行機とか自動車とかでもいいんじゃない

んスか？」

ゼオラ「何ももう一度造らなくても・・・！」

リー「こちらの世界ではどうかは解りませんが、

そういうのはハッキリ言っていい選択とはいえませんか。」

ラミア「何故だ？」

現にお前たちは地上戦艦を所持しているではないか？」

アシエン「エンドレス・フロンティアは元々それほど広いと言うわけでは無かったので、

そういった交通手段は発達しやがりませんでした。

我々のように所持しているのは極稀なのです。」

ヘンネ「それにそういうのは盗賊からすれば絶好の力モなのさ。

アタシのような有翼人種もいるし、空だって同じさね。」

キュオン「海だって安全とはいえないしね。」

カイ「海・陸・空ともに安全ではないと言う事が。」

ハーケン「そして考え出されたのがクロスゲートと言う訳さ。

アレなら警備もそこに集中すれば良いだけだし、移動時間も殆どかからない。

それに俺たちには馴染み深いしな。」

ギリアム「だが、オリジナル無き今、開発は困難なのでは？」

エイゼル「・・・フォルミッド・ヘイムの力だけならばそうであった。

だが苦難の末、各国の協力を得る事に成功したのだ。

かつての世界ならば、不可能な事であった。」

ゼオラ「新しい世界もまんざら悪い事ばかりじゃないって事ね。」

エイゼル「各国の協力を得て、新型ゲートの開発は飛躍的な速度で進められた。

そして遂に完成を祝して開通セレモニーを行う事になった。

それがほんの数時間前の事だ・・・。」

ハーケン「そして俺達はそのセレモニーの

下準備に呼ばれた訳なのだが・・・」

ギリアム「事故が起きたのだな・・・」

ハーケン「ああ・・・」

ゲートが突然暴走し、それに巻き込まれたのさ。」

ラミア「それで、この世界に来てしまったと言う訳だな。」

ヘンネ「だが、ゲートにはまだエネルギーは送られていなかった。」

キュオン「それに設計段階で次元転移機能は取り除かれていたのに・

・・」

鞠音「私も開発に関わっていましたし、起動実験に何度も立ち会いましたわ。」

次元転移が起こりうる要素はゼロと言って良いですわ。」

ラトウーニ「では、この世界に辿り着いた理由は一体・・・？」

アシェン「全く持って不明ちゃんでございます。」

ギリアム「（可能性としては、彼らが『来た』のではなく『招かれた』と考えれば・・・」

・・・だがそうしても一体誰が・・・）」



### 第3話 過去との再会 その6（後書き）

これedyouやく長つたらしいエンドレス・フロンティアのあらすじが終わりました。

これedyouやく話が進められます（^^;）

所々説明不足の箇所や誤り、それにオリジナルの解釈等が含まれておりますが、あえて説明しなかった部分もあります（ナムカプキヤラとか）ので、ツツコミ等などはその上でお願いしますm（――）m

一応、次回で第3話は終了する予定です。

### 第3話 過去との再会 その7

ハーケン「・・・以上が、俺達が話せる事全部さ。」

アシエン「何か分からない事があれば、何なりと艦長に聞きやがりませ。」

ハーケン「俺に丸投げにするなよ・・・」

アラド「うん・・・」

正直、色んな事がありすぎて何がなんだかサッパリっス。」

カイ「無理も無いな。」

俺達にとって、突拍子も無い内容ばかりだったからな。」

錫華「この世界も十分突拍子もないと思うのだがのう。」

ギリラム「だが、彼らの話が事実だとすると、

彼らは望んでこの世界にやって来たのでは無いと言う訳か。」

エイゼル「そちらの会話や雰囲気から察するに、

我等のような存在は異端であることは理解している。」

ヘンネ「だからアタシ達としても早急に元の世界に戻りたい訳なんだが・・・」

ゼオラ「残念だけど、

私達の世界にはあなた達が言うクロスゲートは存在していないの・・・」

ハーケン「それは何となく気付いていたさ・・・」

だが、次元転移装置はあるんじゃないのか？

システムXN『アギユイエウス』は。」

ラトウーニ「何故そう思うの・・・？」

鞠音「異世界からやってきた技術は未知の技術である事が多い。

ましてや転移装置、その利用価値は計り知れませんか。」

アシエン「ですので、シャドウミラーをぶっ潰した後、

ぶん捕ってして研究しているもの考えるのは当然だと

思いますが。」

ギリアム「・・・残念だが、『アギユイエウス』は破壊した。  
俺がこの手でな。」

錫華「なぬ!？」

それはまことか？」

ラミア「私もその場に立ち会いました。

間違いありません。」

アシェン「アレを使えば色々出来てウハウハだと思うのですが。」

ギリアム「『向こう側』で俺はアレで自分がいた本来の世界に帰ろうとした・・・

だがその結果、新たな戦禍を招いてしまった。

二度と使われないようにするにはこうするしかなかった

のだ・・・」

エイゼル「全ては・・・己が罪を償い続けんがため・・・か・・・」

ギリアム「・・・」

ハーケン「オーケイ、ミスターエトランゼ。

アンタの覚悟、伝わったよ・・・」

神夜「じゃあ、私達帰れないんですか？」

錫華「うむ・・・これは由々しき事ぞな。」

エンドレス・フロンティアの住人たちは皆一様に黙り込んでしまった。

ラトウニ「（・・・急に静かになった・・・）」

ゼオラ「（無理もないわ・・・だってもう二度と帰れないかもしれ  
ないと思えば・・・）」

アラド「（誰だって落ち込・・・）」

リー「うゝむ・・・

なら獣人の私たちは山奥にでも住まなければなりませんな。

ハッキリ言って不満ではありますが。」  
カツツエ「あら？」

山奥で二人きりで余生を楽しむのも中々乙だとおもわよ。

ムフフ・・・」

ヘンネ「誰も二人きりだと言っていないだろうが・・・」  
エイゼル「カツツエの話はともかく、

この世界では異形である我も身を隠さねばなるまいな。」  
アシェン「私も面倒なので右に同じで。」

錫華「わらわ的には身を隠すなど我慢ならぬな。」

ヘンネ「アタシも今回ばかりは同意見だね。」

キュオン「だったらそのツノ、引っこ抜かなきゃ。」

鞠音「あなたもその羽、隠すなり切り落とすなりしたほうがよくてよ？」

錫華「そ、それだけは勘弁して欲しいぞな。」

ヘンネ「アタシも羽も伸ばせない人生なんて真っ平御免さね。」

神夜「でも、キュオンちゃんや博士もちよつと微妙なんじゃないんですか？」

ハーケン「違いは耳ぐらいのモンだな。」

鞠音「その程度、髪や帽子等で隠せば問題なさそうです。」

キュオン「キュオンも同意見。」

ラミア「・・・これっぽちも落ち込んでいないようでございます。」

ギリアム「というより、むしろ前向きだな。」

ゼオラ「どうしてそんなに落ち着いていられるのかしら・・・？」

ハーケン「悪いが、ボンバーガール。」

俺達はどういった状況には慣れっこなのさ、これがな。」

ラトウーニ「え・・・!？」

アシェン「我々の世界では、こういった事態はむしろ日常茶飯事で

すので。」

アラド「でもエンドレス・フロンティアじゃないんすよ、ここ！？」

錫華「どのような世界であろうとも世界を渡るには

それ相応の危険があるのは同じだと思うがのう？」

ゼオラ「だ、けどもう帰れないかもしれないのよ！？」

エイゼル「ならばこの世界に住む決意をするまでだ。」

アシエン「私達、こういう覚悟は完了しまくっているわけです。」

ラトウーニ「でも、こつも早く・・・」

ヘンネ「じゃあ、何か？」

涙の一つでも流せば良いってのかい？

それで元の世界に帰れるのかい？」

ラトウーニ「・・・」

神夜「・・・これでも私達なりに動揺はしているんです。

でも嘆いたり悲しんでばかりいるより前向きに考えるべきだ  
と思うんです。

それに後ろ向きな事ばかり考えたらお腹が空くだけですから

」

ハーケン「確かに事は重大だ、だからといって人生そう悲観するもんじゃないのさ。」

錫華「どうせ生きるなら、最後まで楽しんで生きたいしのう。」

キュオン「それに、生きていればいつかは帰れるかもしれないしね」

カイ「・・・凄まじいバイタリティだな。」

アラド「凄まじい過ぎて呆れるしかないっス・・・」

ラミア「だが、当分は我々の管轄下に置かれる事になるだろう。」

ハーケン「・・・解っているさ。

当分は検疫だの尋問だの調査だので自由には動けないんだろ？」

リー「特に私のような獣人はそうでしょうな。」

錫華「それ以前にわらわ達は異邦者であるからな。」

カイ「まあ、な・・・」

エイゼル「我としては身の安全さえ保障してくれれば、出来うる限りの協力をしよう。」

カツツエ「それが帰還への糸口になるかもしれないしねえ。」

ヘンネ「リーダーがそう言っているんだ。」

アタシもそうさせてもらうよ。」

キュオン「キュオンも賛成！」

鞠音「私はあのロボット達をじっくりと研究できるのであればなんだって良いですわ。」

ハーケン「・・・とまあ、俺達全員の意思は大体同じだ。」

アシエン「出来れば尊重しやがりませ。」

錫華「それが人にものを頼む態度か、ポンコツよ？」

カイ「そいつは可能な限り善処する。」

一応、この世界にはジュネーヴ条約というものがあつてな・

・・・

アシエン（DTD）「ジュテーム愛している条約？」

カツツエ「もしかして性別の関係なくラブラブオーケイって事？」

なんてステキな世界なのかしらん」

ハーケン「話をこれ以上拗らせるな、

ダンディがナイスミドルになっちまうだろうが。」

ラトウーニ「（それってどう違うのかしら・・・？）」

ラミア「ジュネーヴ条約・・・

旧西暦に締結れた捕虜に対する扱いについて定めた条約だ。

主に戦争犠牲者を保護し、戦闘不能になった要員や

敵対行為に参加していない個人の保護を目的とするものだ。

」

ゼオラ「確か、国際人道法の1つでしたよね。」

神夜「わ、解り辛い事極まりないです・・・」

アラド「俺も解んないっス・・・」

ギリアム「要するに我々は君達を保護する立場にあると言う事さ。」  
ハーケン「つまり、妙な人体実験や解剖モロモロは無しって事か。」  
神夜「それなら安心極まりないです」

エイゼル「（・・・だが、それが必ずしも守られているとは少々言いがたいがな。）」

エイゼルはラトウ二達を一目見てそう思った。

カイ「とりあえず一旦話はここまでにして少しばかり休憩とする。

後のことは、折り返しこちらから連絡する。」

ハーケン「オーケイ、少佐殿。

俺もさすがに疲れたしな。」

カイ「・・・わざわざすまなかつたな、ギリアム。」

ギリアム「いえ、礼を言うのはこちらの方ですよ、少佐。

それでは・・・」

ギリアムはそう言う通信を切った。

ハーケン「俺達はこの部屋で待機、と言うわけか。」

カイ「まあ、な。

拘留室に入れるわけにもいかないしな。

ゆつくり・・・とは言えんが、少しの間休んでくれ。」

ハーケン「ならせめて食料と水ぐらいは出して欲しいな。

腹の虫が鳴りそうな奴が何人かいるんでな。」

カイ「了解した、後で手配しよう。」

ハーケン「わざわざすまないな。」

カイ少佐達は軽く敬礼をした後、部屋を後にした。

エイゼル「・・・彼等をどう思う?」

ハーケン「まあ、悪い連中じゃなさそうだ。

それに俺達を必要以上にどうこうするつもりもなさそう  
だ。」

錫華「わらわ的にはワンパターンな反応ばかりで退屈であつたぞ。」

神夜「まあまあ、錫華ちゃん。

この世界の人達にとっては私達は奇天烈極まりないみたいで  
すから、

仕方がないよ。」

錫華「おぬしが言うと思議と説得力が増すのう・・・」

カツツエ「それよりも帰る手段が無いっていうのは少しキツイわね  
え。」

ヘンネ「無理なものは仕方が無いさね。」

リー「・・・さて、これからどうしましょうか？」

鞠音「まずは情報収集ですわ。

この世界で生きていくにしても、帰る方法を探すにしても情  
報は必要ですから。」

神夜「その前に私は何か食べたいです・・・」

キュオン「キュオンもお腹空いたー!」

アシェン「私も大分小腹が空きまくりです。」

カツツエ「んじゃとりあえずは食事が来るのを待つという事で」

ハーケン「オーケイ、ハングリーズ。

腹が減つては何事も出来んしな。」

<北米支部ラングレー基地 教導隊事務室>

アラド「あ・・・

な〜んかえらく疲れたつスよ。」

ラミア「忍耐が足らんな、アラド。」



カイ「普通取調べってのはこっちが耐え忍ぶもんじゃないんだがな。」

ラトウーニ「でも、彼等の証言の内容は驚くべきものばかりです。」

ゼオラ「幾つもの世界が重なり合って成り立つ世界……

そこに迷い込んだWシリーズとアインスト……

そして世界の崩壊……」

アラド「……コレ、上にはどんな風に報告すれば良いんスカね……？」

カイ「……彼らの歴史云々は別として、

異世界からやってきたことは報告せねばならんな。」

ラミア「……上手い事、もみ消しとか出来ませんでっしゃるうか？

私のように……」

カイ「彼らを目撃し保護したのが俺達だけならばそれも出来たかもしれない。」

だが、この基地だけでもかなりの人数が彼らを知ってしまった。」

ラミア「……」

ラトウーニ「それに何人かは私達とは姿形が大きく異なります。

あれでは異世界の住人では無いと言い通す方が無理が

あります。」

アラド「あれは映画の特殊メイクチームも真つ青つスよ……」

カイ「だが、出来うる限りの事はする。

……彼らはいわば漂流者だ、

手を差し伸べる事に誰にも文句は言わせんさ。」

ラミア「……寛大な配慮、ありがとうございますです、少佐。」

カイ「当然の事だ、気にするな。」

ゼオラ「じゃあ彼らの食事、私が運んでおきますね。」

ラトウーニ「……そういえば私達、お昼御飯の途中だったね。」

アラド「んじゃ続きと行きますか

オカズまだ残ってたしな」

ラミア「あれから数時間は経ってる。

既に下げられていると思うが。」

ラトウーニ「・・・それにこの時間だと、昼のメニューはもう無いわ。」

アラド「お、俺の昼飯・・・」

カイ「そういえばこのゴタゴタで昼飯を抜いていたな・・・」

ゼオラ「じゃあ、少佐も今から遅めの昼食にしませんか？」

アラド「もう昼のメニューは無いっすけどね・・・グス・・・」

カイ「いや、お前達だけで済ませてくれ。

今回の件を上報告せねばならんし、それに仕事も溜まっているからな。」

ラミア「いくら訓練された軍人とはいえ、

栄養摂取を怠れば、業務に差し支えまくりです。

集中力の低下によって些細なミスが連発しちゃって

余計に仕事が増えちゃうだけです。」

カイ「・・・いつからお前は俺の力ミさんみたいな事を言うようになったんだ？」

ラミア「せめて人間臭くなったと言っちゃってくださいまし・・・」

<????>

???「・・・ここ・・・は・・・?」

ハーケン達がカイ少佐達と接触した時とほぼ同時刻に

もう1つの存在が誰も知らぬ土地に転移してきた。

彼は深く傷ついていた。もはやその体と命を保つことは出来ないだろう。

彼はただひたすらに故郷への帰還を望んでいた。

そして最後の力を使い転移を行った。

だが・・・

「ここは・・・静寂なる・・・世界・・・では・・・な・・・  
もはや・・・する力は・・・

我は・・・消え去る・・・の・・・か・・・

・・・い・・・や・・・だ・・・」

「2「汝、静寂なる・・・世界を望むか？」

「・・・？」

彼が消え去ろうとする直前に何者かが現れ、彼に話しかけてきた。

それは黄色の髪に白に近い灰色の肌の青年の姿をしていた、

だがその目と表情は人のそれではなかった。

「2「我は汝に問う・・・静寂なる世界を望むか？」

「だ・・・れ・・・だ・・・？」

「2「お前と同じ・・・静寂なる世界の・・・」

「我・・・は・・・帰還を・・・静寂なる・・・へ・・・」

「2「その願い・・・叶えられぬ・・・なぜなら・・・」

「3「静寂なる世界・・・滅ぼされた・・・

望まぬ世界の・・・者達によつて・・・」

奥の暗がりからもう1人現れた。

それは金のメッシュが入った黒髪に赤いジャケットを着た青年の姿をしていた、

だが彼も同じく、目と表情は人のそれではない。

「そう・・・か・・・静寂・・・の・・・は・・・」

「3「お前が・・・自らの滅びを・・・望むのであれば・・・俺達は・・・何もしない。」

「2「だが・・・汝が・・・新たなる・・・

静寂なる世界の・・・創造を望むのであれば・・・」

「???3「お前が・・・望まぬ世界の・・・破壊を望むのであるならば・・・」

「???2&???3「今一度・・・汝に・・・力を・・・」

「???「・・・できる・・・の・・・か・・・」

「???2「我はエタ・・・新たなる・・・依代を・・・力を・・・」

「???3「俺は・・・手に入れた・・・世界を超える・・・力を・・・」

「

「???「・・・」

「???2&???3「汝に問う・・・静寂なる世界を望むか?」

「???「我・・・は・・・」

「・・・望む・・・静寂・・・世界・・・の・・・」

「???2「ならば唱えよ・・・汝の名を・・・」

「???3「・・・俺は『過去』・・・」

「???2「・・・我は『現在』・・・」

「???「・・・我は・・・」

「・・・『可能性』・・・」

『過去』と『現在』、そして『可能性』・・・導き出されるは『未来』

### 第3話 過去との再会 その7（後書き）

前々からの反動のせいか今回は割と短めです。

どんな世界の住人でも腹は減っては戦は出来ぬという事です（^^；

）

そして明確な敵組織がようやく登場しました。

『向こう側』の彼がいるのは特典ドラマCDの話の延長上だと思っ  
てください。詳しくは後の話で書きます。

そして依代となった彼は・・・

#### 第4話 彼方からの落とし子 その1

<北米コロラド テスラ・ライヒ研究所 上空>

クスハ「・・・！」

やっとテスラ研が見えて来たけど・・・」

ブリット「こいつは一体・・・！」

ブリットとクスハの目に飛び込んできたものは、  
無残にも半壊した研究所の姿だった。

ブリット「・・・壊れ方からして内側からみたいだな・・・

ということはやったのは・・・」

クスハ「龍王機と虎王機・・・

どうしてこんな事を・・・」

ブリット「・・・それよりも、博士達が心配だが・・・」

クスハ「・・・！」

ブリット君、見て！

あれ、カザハラ博士じゃない？」

クスハが飛行機の窓から指を指した先には出迎えてきたカザハラ博士がいた。

ブリット「ふう・・・

一応、無事みたいでほっとしたよ・・・」

<テスラ・ライヒ研究所 管制室>

カザハラ「ブリットにクスハ君、久方ぶりだな。」

クスハ「こちらこそ、カザハラ博士。」

「すぐ心配しましたよ。」

まさか研究所があんな風になっているなんて・・・」

ブリット「やったのはやはり・・・」

エリ「そう、龍王機と虎王機よ。」

リシュウ「えらく暴れてな。」

研究所はこの様な有様じゃが、職員は全員無事じゃ。」

ブリット「リシュウ師匠！」

クスハ「あの・・・お怪我は？」

リシュウ「ご覧の通り無傷じゃ。」

伊達に修行は積んでおらんて。

じゃがいきなり連中が目の前で暴れだした時には少々寿命が縮んだわい。」

ソフィア「・・・ええ。」

あの時は逃げるのが精一杯でしたから。」

クスハ「でも、どうして彼らはそんな事を・・・」

エリ「・・・これは推測だけど、彼らは貴方達を迎えに行こうとしたのだと思うの。」

ブリット「俺達を・・・！？」

カザハラ「・・・彼らが向かおうとしていた方向は西、

つまり、君達がいる基地の方角だ。」

ソフィア「でも彼らは突然その行動を中断したの。」

その時刻は貴方達が日本を離れたときの時刻とほぼ一致するわ。」

ブリット「彼らが辞めたのは、迎えに行く必要が無くなったのを知ったからですね・・・」

クスハ「・・・！」

そういえば、フィリオ少佐達がいませんが・・・  
まさか・・・！」

カザハラ「いや、彼らは仕事で他所の基地に出張っているよ。  
むしろこっちが心配されたぐらいだ。」

ブリット「・・・不幸中の幸いでしたね。」

クスハ「でも研究所が・・・」

リシュウ「心配せんでもええ。」

壊された施設は使えんが、幸いデータは無事じゃったのでな。」

エリ「それに彼らのおかげで、復旧作業は順調よ。」

ブリット「彼ら？」

ブリット達が会話している途中に、誰かが部屋に入ってきた。

ジョッシュ「エリ博士、超機人の格納庫収容、終わりました。」

リム「仮設ラボの設置もほぼ完了です。」

入ってきたのは二人の男女、若いながらもどこことなく老成した雰囲気を持つ青年と、  
快活でまだ幼さが残る印象を持つ女性だ。

エリ「二人とも、お疲れ様。」

ジョッシュ「・・・いえ。」

これからガレキの撤去作業の方を済ませますので、失礼します。

どうもお取り込み中のようなので。」

カザハラ「いや、構わんよ。」

少し休んでいたらどうだい？」

リム「じゃあ、わたし飲み物でも持ってきますね！」

カザハラ「・・・！」



エリ「・・・！」  
ソフィア「・・・！」

彼女が『飲み物』と口にした瞬間、博士達の空気が一変した。  
だが、ブリットはこの雰囲気を知っていた。

クスハ「（どうしたのかしら、みなさん？）」

ブリット「（なんか・・・似ているな・・・」

クスハのアレと・・・）」

リシュウ「じ、嬢ちゃん、僕は甘いものは嫌いじゃないんだが・・・  
その・・・」

ジョッシュ「・・・リム、お前はここで休んでいる。

飲み物ぐらいオレが持ってきてやるからさ。」

リム「じゃあ、わたし、ココアで！」

ジョッシュ「他の方はいつものでよろしいとして、そちらのお二人は？」

カザハラ「ああ。彼らにはコーヒーをお願いするよ。」

ジョッシュ「解りました。では。」

青年はそう言うのと部屋を出て給仕室の方へ向かった。

ブリット「・・・なんだか、随分とマジメそうな人ですね。」

リシュウ「ふむ。

随分と気配りの利く若者でな、僕らもいろいろと助かつ  
とるよ。」

クスハ「見かけない顔ですが、新しいスタッフの方ですか？

二人ともお若いようですが。」

カザハラ「ああ、そうか。

そういえば、二人にはまだ紹介していなかったな。  
エリ博士からの紹介でね、もう一月になるかな。」

クスハ「エリ博士の・・・ということは考古学の？」

お若いのに凄いですね。」

リム「い、いえ、そんなじゃ。」

私達のお父さんがエリ博士の知り合いってだけですから。

考古学とかはあまり・・・」

カザハラ「いやいや、君達もなかなか良い筋をしている。

あの教授の子ども達という事はあるよ。」

リム「えへ・・・」

わたしは養子何ですけどね。」

ブリット「博士はご存知なんですか、彼らの父親を？」

カザハラ「ああ、ラドクリフ教授と言えば、私達の間では割と有名な人だ。」

ここ数年は行方不明と聞いていたがな・・・」

クスハ「え・・・？」

ジョッシュ「・・・お待たせしました。」

先程の青年が8人分のコップを持って部屋に戻ってきた。  
まだ数分も経っていないと言うのに。

ブリット「(ち、ちょっと速すぎないか・・・!?)」

ジョッシュ「すいません。」

流石に8人分となると時間がかかりまして。」

クスハ「(じ、十分速過ぎるとおもうんですけど・・・!?)」

リム「お兄ちゃん、ココアちゃんと濃い目にしてくれた？」

ジョッシュ「そう焦らすなよ。」

俺達よりも、お客さんや博士達の方が先だろ？」

青年はそう言うのと全員に飲み物を配り始めた。  
手際がよく、一分の無駄のない動きだった。

カザハラ「では、飲み物も行き渡ったところで改めて紹介しよう。

彼がジョシユア君、彼女がクリアーナ君だ。」

ジョッシュ「ジョシユア・ラドクリフです。

ジョシユアで結構です。」

リム「わたしはクリス・・・

じゃなくて、クリアーナ・リムスカヤです。

よろしくお願いします。」

ブリット「俺はブルツクリン・ラックフィールド。

ブリットでいいよ。」

クスハ「私はクスハ、クスハ・ミズハです。」

リム「話はエリ博士達から聞いています。

伝説の超機人に選ばれた運命の人達・・・

わたし、ちよつと憧れちゃいますね。」

ブリット「い、いや、別にそんな・・・」

ジョッシュ「・・・頼むから、下手な事は言うなよ。

二人とも連邦軍の将校さんなのだからな。」

クスハ「そんな気を遣わなくてもいいですよ。

年齢も近いようですし、それに私、そういうの慣れてません

から。」

ジョッシュ「・・・まあ。

そちらがよろしければ・・・」

ブリット「そういえばさっき、養子って言っていましたけど、やはり・

・・・」

ジョッシュ「ええ。

リムは孤児で、小さい頃俺の親父に引き取られたんで

すよ。」

リム「でもお兄ちゃんもわたしも別に気にしていないから、

変な気遣いはなしって事で。」

カザハラ「まあ、私はラドクリフ教授に子どもがいたことすら知らなかったわけだがな。」

ジヨツシュ「親父はそういう事は人に話さない奴でしたから・・・」  
ブリット「・・・あの、ジヨシユアさんのお父さんって科学者なんですか？」

カザハラ博士が言うには有名人だそうぞ。」

ジヨツシュ「・・・有名・・・か・・・」

確かに親父達はある意味ではそう言えますね。」

カザハラ「・・・気を悪くしたのなら謝るよ。」

別にリ・テクを批判するつもりでいったわけじゃないんだ。」  
ジヨツシュ「別に構いませんよ。」

親父達はそういう連中ですから。」

リム「（お兄ちゃん・・・）」

クスハ「あの・・・」

リ・テクってなんなんですか？

どうも話が見えてこなくて・・・」

リム「・・・エリ博士達が、超機人のようなオーパーツや

EOTのような超技術を研究する科学者ということは知って

いますよね？」

クスハ「ええ、それはもちろん。」

ジヨツシュ「その中でもリ・テク・・・」

リ・テクノロジストと呼ばれるグループは異端中の異端なんです。

同じ学者連中からも白い目で見られているぐらいですから。」

ブリット「なぜ、そのような・・・？」

エリ「彼らが研究しているのは南極遺跡と呼ばれている施設だからよ。」

ブリッド「な、南極遺跡・・・！？」

クスハ「南極にそんなものがあるなんて・・・！？」

エリ「・・・発見された場所は分厚い氷床の遥か下、軽く見積もつ

ても

遺跡が造られたのは3000万年前になるわ。」

ブリット「3000万年前って……人類の誕生は500万年前じゃないですか!？」

ソフィア「詳しく言えば、我々の直系の先祖の出現は5万年前よ。

それ以前の人類が文明を持った痕跡は見つかっていないわ。」

ブリット「だったらなおさら凄い事じゃないですか!

人類誕生以前に文明が存在していた事になるのでは……

!？」

クスハ「もしかしたらその遺跡、異星人のものなんじゃ……!？」

カザハラ「そういう発言は当時でもあつたさ、だがその確証は得られていない。

……それにもう正式には調査は行われていないのだからな。」

ブリット「(当時……?)」

クスハ「ですが……そんな大事件、知らない方がおかしくくないですか？」

ブリット「まさか……メテオ3のような情報規制が……!？」

カザハラ「いや……発見そのものは世界中で話題になったさ。

ニユースのトップに挙げられた時は私も心が震えたもんさ。」

クスハ「ならどうして？」

ジヨツシュ「……ただ単に忘れられて久しいだけですよ。」

ブリット「忘れられている……?」

エリ「……南極遺跡は、メテオ3落下以前の遙か以前、

今から30年程前に発見されたの。」

クスハ「そんな昔に……!？」

エリ「発見された当時は世紀の大発見と称され、世間を騒がせたわ。私が所属しているLTR機構も、そのときに発足した組織が

原型なの。」

クスハ「でも、そんなに凄い遺跡がどうして世間に知られていないんですか？」

カザハラ「遺跡はその古さにも関わらず、歴史的な発見も得られないばかりか、

解析不能のシロモノばかりだったからさ。」

エリ「おまけに調査は難航を極めるどころか、

当時、他の場所でそれ以上の未知の技術は得ることが出来なかったため、

長い間、南極遺跡は政府の頭痛の種とされていたわ。」

ソフィア「・・・だけど、その種も吹き飛ばされる事になったの、

十数年後メテオ3が落下してきた事によって。」

クスハ「余計に増えそうなものだと思うんですが・・・？」

カザハラ「いや。

メテオ3の方が南極遺跡より遥かに解析しやすく応用が利く事が分かったとたんに、

連邦政府は遅延していた遺跡の調査を一方的に打ち切った。

以降はメテオ3解析に力を入れる事にしたのさ。」

リシュウ「それに人の噂は所詮一過性のものじゃ。

誰が造ったのかも分からんようなもの、

いつまでも人の関心を集め続けられる筈もなかるうて。」

カザハラ「こうして南極遺跡は人々の記憶から忘れられていったと言う訳さ。」

ブリット「なんだか、散々な話ですね・・・」

ジョッシュ「にも関わらず、未だにあきらめずに研究し続けているのが

親父達、リ・テクノロジストというわけです。」

エリ「でも、LTR機構も完全に遺跡から手を引いたわけじゃないの、

数年1度彼らとの接触して情報を得ているわ。

私も何度かその場に立ち会ったことがあるわ。」

リム「お父さんがエリ博士と知り合ったのはその時だったと聞いています。」

エリ「成果はお世辞にもいいものだったとはいえませんが・・・」  
クスハ「でも、そんな得体の知れない遺跡を何十年も研究し続けているなんて・・・」

ジョッシュ「他の事に無関心なだけです。」

現に近くにエアロゲイターが来た時だって

誰一人遺跡から離れようとはしませんでしたから。」

ブリット「(例の南極事件の時か・・・)」

カザハラ「だが、彼らとて、無駄に年月を過ごしてきた訳では無い事が

ジョシア君とクリアーナ君が持ち込んで来た物で知ることが出来た。」

ジョッシュ「・・・よしてください。」

あんなものを造れたところで、今更・・・」

エリ「いえ、謙遜する事はないわ。」

ある意味ではあなた達は我々より数段上を行っているかもしれないのよ。」

リム「そうだよ、お兄ちゃん。」

こういう時はもっと自信を持っていんだから。」

ジョッシュ「(だが・・・お前は・・・)」

ブリット「・・・一体何を持ってきたんですか？」

カザハラ「・・・ジョシア君、『ガナドール』は今どこに？」

ジョッシュ「直ぐに撤去作業に入れるように、ガレキの近くで待機させています。」

カザハラ「では、こうしよう。」

『ガナドール』を格納庫に移動させて解析を先に済ませよう。

撤去作業はその後で良い。」

リム「だけど、超機人の解析もあるんじゃないか．．．？」  
エリ「それは構わないわ。」

どうせやるなら、一度にやったほうがこちらとしても都合が  
良いわ。」

ジョッシュ「．．．分かりました。」

では、先に行っておきますね。」

カザハラ「ああ、よろしく頼むよ。」

ジョシユアは部屋を後にして、『ガナドゥール』の方へ向かった。

クスハ「あの、『ガナドゥール』って．．．？」

それが、ジョシユアさん達が持ってきたものなんですか．．  
．？」

ソフィア「正確に言えば『乗ってきたもの』といったほうが正しい  
かしら。」

ブリット「乗ってきた．．．？」

まさか．．．超機人の類．．．！？」

カザハラ「．．．まあ、見れば分かるさ。」

我々も格納庫の方へ向かうでしょう。」

カザハラ博士とブリット達は龍虎王とまだ見ぬ『ガナドゥール』が  
待つ格納庫の方へ向かった。



#### 第4話 彼方からの落とし子 その1（後書き）

やっとこさ出来ました（汗）

ハッキリ言って今までで一番苦労した話かもしれませんが（^^;）

『D』からジョッシュとリムが登場です、ストーリー的には南極に行く前の話です。

正直、D主人公達のキャラを殆ど忘れてしまっていたので、『D』をプレイしながら書きました。

某萌えスレの影響が多少あるかもしれませんが、その辺はツッコんでくれて構いません（爆）

OG3は据え置きが無理でも声付きにして欲しいですね。ジョッシュは野島健児さんでリムは桑島法子さんで・・・

妄想が止まらなくなるのでこの辺で失礼しますm（| |）m

## 第4話 彼方からの落とし子 その2

<テスラ・ライヒ研究所 格納庫>

クスハ「これが・・・ジョシユアさん達が乗って来たって言うガナドゥールですか？」

リム「はい。そうです。」

ブリット「人型機動兵器・・・

大きさはPTと同じくらいか・・・？

でもこの意匠・・・超機人とはまるで違いますね。」

ジョッシュ「実際その通りです。」

こいつは、超機人のように発掘されたものではありません。  
せん。

造られたのはごく最近です。」

カザハラ「サイズ的にはPTと同じだが、高出力で、内臓武器を多数装備している。

どちらかと言えば特機に近い。」

ブリット「ならこいつは、遺跡を解析してそれを元に作られた兵器なのですか？」

リシュウ「当たらずとも遠からずといったところじゃのう。」

ブリット「??」

リム「・・・確かに武装は奇抜なものが多いけど、  
それらは全て開発者の独自設計なんです。」

クスハ「開発者？」

ジョッシュ「名前はクリフォード・ガイギャクス。

親父とは旧知の仲で、オレ達にとっては兄貴みたいな  
もんです。」

カザハラ「もつとも、少々性格に難がある人物だそうだが。」

リム「悪い人じゃないんですけどね・・・」  
クスハ「・・・当たらずとも遠からず・・・」

では、解析された技術は他の部分にあるんですか？」

リシュウ「ふむ。それが正解じゃ。」

リム「使われているのはインターフェイスとジェネレーターなんです。」

ジョッシュ「インターフェイスは『シンパティア』、

ジェネレーターは『レース・アルカーナ』と呼んでいます。」

ブリット「もしかして、超機人の五行器のようなものですか？」

エリ「似て非なるもの・・・というのが現段階での推測よ。」

クスハ「推測・・・ですか・・・？」

カザハラ「『レース・アルカーナ』はジョシユア君が

ガナドゥールに搭乗する事で始めて起動することが出来る。」

エネルギー効率から見て、

五行器のような永久機関といっても差し支えないものだ。」

ブリット「そのあたりは龍虎王と似ていますね。」

エリ「でも、ジョシユア君はあなた達のような念動力者では無いし、

『レース・アルカーナ』がどこから無尽蔵ともいえるエネルギーを得ているのかも、

そもそもどのようなメカニズムなのかも分かっていないの。」

カザハラ「・・・『レース・アルカーナ』とはラテン語で謎、そして神秘。」

その名の通りブラックボックスと言う事さ。」

ジョッシュ「実際、リ・テクの連中もそれ以上の解析は出来ませんでした。」

とりあえず、ジェネレーターとインターフェイスの代わりになる事は

分かったから、組み込んで動かしているだけなんです。

「ブリット「ち、ちよつと待ってください。」

そんな謎だらけのシステム、危険性はないんですか!？」  
ジョッシュ「使ってみなければ、危険性の有無なんて分かりませんよ。」

「・・・オレがそのことを知ったのは今から半年程前、  
ガナドゥールに乗って一年ぐらい乗り続けた後ですが  
ね。」

クスハ「・・・じ、じゃあ、ジョシユアさんは実験台って事なんですか!？」

リム「それがきっかけで、お兄ちゃんはおたしを連れてリ・テクから出て行っただけです。」

ジョッシュ「・・・オレだって人が乗らなきゃ

動かないシステムの実験台にされたと知れば、  
親父達とこれ以上一緒にいる訳にはいかなかった・・・

「クスハ「(ジョシユアさん・・・)」

ブリット「・・・そもそも、どうしてジョシユアさんはガナドゥールに乗ったんですか？」

ジョッシュ「・・・まだガキだったからですよ。」  
ブリット「え・・・？」

リム「ごく稀にですが、

遺跡を襲いに武装したカルト集団が攻めてくる事があったんです。」

それにエアロゲイターがやってきた事もありましたし・・・  
クスハ「じゃあ、ジョシユアさんは皆を守るために・・・」

ジョッシュ「・・・当時はそいつらを撃退出来るって、喜んで乗り  
ましたよ。」

親父達を守れるってのもありましたし、

こいつを造った親父達を尊敬していました。

真実を知るまでは……」

クスハ「ジョシユアさん……」

ジョッシュ「……それに、オレが出て行った理由はもう1つあるんです。」

カザハラ「……クリアーナ君か？」

ジョッシュ「ええ……」

ブリット「どういことですか？」

ソフィア「……それだけが理由なら

クリアーナさんまで連れ出してまでいく理由としては薄いからよ。」

リシュウ「実験台がおぬしのみならばの。」

クスハ「もしかして……クリアーナさんも……」

ジョッシュ「……『レース・アルカーナ』の原型は

オレ達が子どもの頃に既に完成していました。

そして、そいつを起動させることが出来たのはオレと、妹のリムだけだったんです。」

ブリット「な、何だって……!？」

リム「造られた『レース・アルカーナ』は全部で、4つ。

2つがお兄ちゃん、もう2つはわたしに反応したんです。」

ジョッシュ「そしてそれらは全て、ガナドールのように

機動兵器のジェネレーターとして組み込まれました。」

ブリット「アレと同じものが、あと3体もあるのか……!」

クスハ「じゃあ、ジョシユアさんは妹さんのために……」

ジョッシュ「ええ……」

オレ達が『レース・アルカーナ』と繋がっている限り、

今後どのような影響が出るか分かりませんからね。」

ブリット「だったら！

そいつを破壊すれば……!」

ソフィア「・・・それはむしろ危険よ。」

ブリット「何故です!？」

エリ「『レース・アルカーナ』と彼が何らかのリンクをしているのであれば、

破壊や強制的な切断は命に関わるかもしれないからよ。

(そう、特にクリアーナさんは・・・)」

カザハラ「だからこそ、ここでガナドゥールを解析し、

彼らとのリンクを安全に断ち切る方法を見つけ出す必要があるんだ。

もつとも、事は簡単には行きそうにないがな。」

クスハ「悲しいですね・・・

信じてた人達に・・・それも自分のお父さんに裏切られてたなんて・・・」

リム「・・・そんなに気にしないで下さい。

これはわたし達の問題なんですから。」

ジヨツシュ「それに今はガナドゥールの解析よりも超機人の方が先です。

オレ達の方は時間がかかりますから。

そのために、お2人は来たのでしょうか?」

クスハ「ええ・・・

それは、そうですが・・・」

ブリット「・・・

虎王機達は、静かにしているようですね・・・」

ブリットとクスハはガナドゥールの隣の虎王機と龍王機の方に目を向けた。

2体はまるで眠っているかのようにピクリとも動こうとはしなかった。

数時間前の騒ぎが嘘のように・・・

エリ「・・・妙ね。

2人がこれほど近くにいるのに、まるで反応しないなんて・・・」

ソフィア「データは休眠時と全く同じ・・・

2人を求めていたのなら、覚醒状態に至ってもおかしくないはずよ。」

カザハラ「2人と話す準備をしているのか・・・？

それとも・・・」

エリ「・・・とりあえず、このままでは話にならないわ。

2人とも、準備して。」

クスハ&ブリット「はい・・・！」

2人はT-Linkシステムを起動させ、龍王機達と話す準備をした。

龍王機と虎王機はそれぞれが独立した意思を持っている。だが彼らは人間のように話すことは出来ない。

そこで修復の際に取り込んだグルンガスト参式のT-Linkシステムを介して、

搭乗者、つまりクスハとブリットと意思を疎通するのだ。

<超機人 意識下>

クスハ「教えて・・・龍王機。

どうして、私達を呼んだの・・・？」

龍王機「・・・・・・・・」

ブリット「・・・虎王機・・・また妖機人が来るのか・・・？」

虎王機「・・・・・・・・」

ブリット「(なんだ？・・・眠っているのか・・・

違う・・・話そうとしないだけ・・・?)」

クスハ「お願い・・・龍王機、虎王機。

私達を呼んだのは・・・あなた達が目覚めたのは・・・人を、世界を、百邪から守るためなんでしょう?」

龍王機「・・・!」

ブリット「(・・・!?)

何だ・・・?

この思念・・・今までのものとは違う・・・」

クスハ「(冷たくて・・・暗くて・・・寒い・・・

これは・・・)」

虎王機「・・・心せよ・・・」

ブリット「・・・?」

龍王機「・・・無間の底より・・・湿婆の王が降臨せしめん。

三千界を滅ぼさんがために・・・」

クスハ「湿婆の王・・・?」

龍王機「汝らを、人界を守護するのが吾らの使命。

だが・・・吾らの力、湿婆の王に遠く及ばぬ・・・」

虎王機「故に・・・今一度汝らに・・・

ウウ・・・」

龍王機「オオオ・・・」

クスハ&ブリット「(・・・!?)」

<テスラ・ライヒ研究所 格納庫 仮設ラボ>

ブリット「ぐあああつ!!」

クスハ「あああつ!!」

ソフィア「心拍数上昇・・・!

それにこの脳波パターンは・・・!?)」

エリ「いけない!



このままでは二人は・・・！」

カザハラ「システム強制解除だ！」

急げ！！」

博士達は2人の急激な変化に驚き、システムを強制的に解除した。  
クスハとブリットは意識を失い、医務室へ担ぎ込まれた。

2人はあきらかに意識を失っていないながらも、

まるで何かに怯える様に体を震わせ呻き声を上げ続けていた。

・・・そして、2人が意識を失って数時間が経過しようとしていた。

<テスラ・ライヒ研究所 医務室>

リム「・・・あの、クスハさん達、大丈夫でしょうか・・・？」

ジョッシュ「見たところ、大分落ち着いてきたように見えますが・・・」

・・・

ソフィア「・・・彼らのバイタルは正常値に近づきつつあるけど、

まだ安心はできないわ。」

リム「そうですか・・・」

ジョッシュ「・・・強制的にシステムを解除したのが原因でしょうか？」

リシュウ「いや。」

原因は超機人達じゃな。」

ジョッシュ「・・・？」

カザハラ「・・・彼らの症状は、念の逆流が起きた際における身体への影響と同じだが、

ここまで酷い症状が出たのは初めてだ。」

エリ「おそらく、龍王機と虎王機が2人に対して

これまでにない極めて強力な念を送ったのだと推測されます。

「  
ジョッシュ」では、あの2体が静かにしているのにも何かしらの関係が？」

エリ「その可能性は高いでしょうね・・・」

龍王機と虎王機は格納庫で休眠に入っていた。

外からのあらゆる刺激に一切反応しないその状態はまるで石像のようであった。

だがその姿は何かを待っているかのようにも見えた。

リム「どうして、龍王機と虎王機はそんな事を・・・？」

カザハラ「・・・理由は分らんが、2人が龍王機達から

なんらかのメッセージを受け取ったのはまず間違いないだろう。」

ジョッシュ「それを聞き出すのは難しいようですが・・・」

誰もが暗い表情を隠せなかった。

未だに意識不明の2人、物言わぬ超機人達、謎は深まるばかりである。

先行きにこうも暗雲が立ち込めれば、誰だってそうなるだろう。

・・・だが、その空気を裂くかのように、爆音が鳴り響いた。

その衝撃は研究所全体を揺らし、建物の倒壊を進行させるほどだった。

そして、衝撃と爆音は鳴り続けた。

リム「きゃああー!!」

ジョッシュ「・・・何だ一体!？」

連邦一般兵「カ、カザハラ所長!

こちら管制室!

げ、現在連邦軍所属のPT部隊から襲撃を受けていま

す！』

カザハラ「れ、連邦だと！？」

リシュウ「そんな馬鹿な冗談があつてたまるかい！」

連邦一般兵『ほ、本当です！見間違えるはずはありません！

あれは、ウチの基地の・・・』

ジヨツシュ「・・・！？

管制室！管制室！！」

カザハラ「くっ！

このままでは状況も分からん・・・！」

ジヨツシュ「・・・リム、お前は博士達とここにいろ。

ここなら多少は頑丈な造りになっているはずだ。」

リム「お、お兄ちゃん！？」

ジヨツシュ「オレだつて通信機の操作ぐらいはできる。

・・・オレが戻ってくるまで、博士達と待っていてく

れ。」

リム「で、でも・・・」

カザハラ「おっと待った。

私達も付いて行かせてもらつよ。」

ジヨツシュ「・・・！？

しかしカザハラ博士、管制室の状況は不明です。

最悪の場合を考えて行動すべきです。」

エリ「だからこそ、よ。」

ジヨツシュ「え・・・！？」

リシュウ「聞いておらんかったかの？

この研究所、以前インスペクターに乗っ取られた事があ

つての、

それに比べればこの程度屁でもない。」

ソフィア「それに私達、こうみえて結構タフなのよ。」

ジヨツシュ「・・・分かりました。

だけどリム、お前はここで2人の様子を見てやってく

れ、

流石に誰もいないのはまずいからな。」

リム「うん・・・」

カザハラ「では、決まりだな。」

ジヨツシュ「急ぎましょう・・・！」

< テスラ・ライヒ研究所 管制塔 >

リシュウ「こりやまた酷い有様じゃのう。」

エリ「半分は消し飛んでるわね・・・

・・・でもまだ使えるわ！」

ジヨツシュ「・・・博士！」

まだ通信装置は生きています。」

カザハラ「近くの基地に至急連絡を・・・！」

それと通信回線をオープンチャンネルで開いてくれ！

あと、敵PTのデータ照合を急げ！」

ソフィア「了解です・・・！」

ジヨシュアと博士達は持ち前の手際のよさでそれぞれの仕事を始めた。

見た目のダメージは酷かったが、

幸いにも内部の損傷は軽微だったため、作業は直ぐに終わった。

エリ「カザハラ博士、通信回線の準備終わりました！」

カザハラ「よし、では繋げてくれ。」

エリ博士はすぐさま回線を繋げた。

カザハラ「・・・こちらはテスラ・ライヒ研究所所長のジョナサン・カザハラだ。」

諸君らの所属と目的を明らかにして欲しい。」

その呼びかけに応じてか、P T部隊は破壊活動をやめ、カザハラ博士の言葉に耳を貸した。

???「・・・」

カザハラ「諸君らの目的がこの基地の制圧なら、これ以上の破壊行為は無意味だ。」

現に先程の攻撃でデータが大量に失われた。

これ以上攻撃を続けられれば君達が手にできるものは何もないぞ。」

???「・・・」

カザハラ「(何の反応もない・・・)

ただ単に黙りこくってるだけか・・・?)」

ソフィア「・・・照合できました！」

こ、これは・・・!?

カザハラ「どうかしたのか!?

ソフィア「は、はい。」

彼らはコロラドスプリングスのエント基地所属のP T部

隊・・・

真正正銘の連邦軍です!」

エリ「エント基地って、すぐ近くの基地でしょ・・・?

確か、ここに駐在している連邦兵もその所属・・・」

リシュウ「なら、なおさら腑に落ちんな。」

連中、儼らとは何度も出会っておるが、あのような事をするそぶりなど・・・」

カザハラ「ジョシユア君、至急エント基地に!」

ジヨツシュ「駄目です博士・・・！」

先程から何度も試していますが、どことも繋がりません！

なにかしらのジャミングがされているとしか・・・！」

リシュウ「なんじゃと！？」

ジヨシユア達に新たな疑問が浮き上がったのも束の間、  
無言のPT部隊は再び基地の破壊活動を始めた。

テスラ研究所は軍事基地よりは劣るが高い耐久性を持っている、  
だが、そういつまでも長くはもたない。

エリ「ああっ・・・！」

カザハラ「（くっ・・・万事休すか・・・！？）」

ジヨシユア「・・・カザハラ博士、オレのガナドールでしたらいつでもいけます。」

カザハラ「何っ・・・！？」

ジヨツシュ「オレが連中の目を引き付け、研究所から引き離す事ができれば、

これ以上の被害を受ける事はありません。」

リシュウ「確かにアレは目立つがのう・・・」

エリ「ただど相手は訓練された軍人、あなたもそれなりの腕を持つてはいるけど、

そう長くは持たないわ。」

ジヨツシュ「ここで黙っているよりはマシです。

それにここで死んだら元も子もありませんから。」

カザハラ「他に選択肢は無いようだな・・・」

リシュウ「・・・じゃが、数はそう多くは無いとはいえ、

一筋縄ではいかぬ相手じゃぞ・・・？」

ジヨツシュ「それは百も承知です。ですが・・・」

ソフィア「・・・？」

ジョツシュ「分の悪い賭けをするつもりはありません・・・！」

ジョシュアはそう言うと、格納庫の方へ走って行った。

#### 第4話 彼方からの落とし子 その2（後書き）

ハッキリ言って急展開極まりないですね（^^;）

伏線もバリバリ張ってますし（汗）

その割には文章がうまく纏まらないのがくやしいですorz  
次回はバトル一色＆更なる急展開の予定です。

でもこれ以上やると流石に詰め込みすぎかなあ・・・？



#### 第4話 彼方からの落とし子 その3

ジヨツシュ「『レース・アルカーナ』出力安定、武装プロテクト解除、

『シンパティア』正常に作動・・・  
行くぞ！ガナドール！」

掛け声とともにガナドールは起動した。

???「任務・・・守護者のしもべを・・・」  
???「世界の・・・新生を・・・」  
ジヨツシュ「・・・？」

ジヨシアは通信装置を管制塔に繋げた。

ジヨツシュ「・・・博士、聞こえますか？」  
カザハラ「ああ、この距離なら通信に支障はなさそうだ。」  
ジヨツシュ「それよりも、連中の通信を傍受したのですが・・・」  
エリ「ええ、それはこちらでも確認したわ。」  
ソフィア「・・・どうやら彼らは何かしらのコントロールを受けているようですね。」

リシュウ「守護者のしもべ・・・」

連中の狙いは超機人か。」

エリ「それにあの物言いは・・・」

まさか・・・！？」

ジヨツシュ「・・・来ます・・・！」

P T部隊はガナドールに目掛けて突起してきた。

「??? 障害は・・・破壊・・・」

「??? 『静寂なる・・・ために・・・』」

「ジョッシュ」・・・どうやらこちらの手に乗ってくれるようだな。

だがこの戦力差・・・そしてこの状況・・・」

ジョシアの思惑通りに彼らの注意を引きつける事は出来るようだ。だが相手は量産型ヒュッケバイン Mk - II が5機、何機かは研究所から離す事が出来ても

残りが研究所を破壊してしまうのは目に見えている。

それに彼らが何かしらの洗脳を受けているのであれば、撃墜するわけにもいかない。

第一、ここで機体が爆発すれば研究所に被害が及ぶ。

「ジョッシュ」・・・研究所を守り、かつ彼らの破壊活動を停止させるには・・・！」

「??? 「・・・！」」

ヒュッケバインのフォトン・ライフルの銃撃が容赦なくガナドゥールを襲う。

だがガナドゥールは避けなかった、いや避ける事は出来なかった。

ガナドゥールの前方投影面積はヒュッケバインよりも広いが避けようと思えば避けられる。

しかしここで避けてしまつては研究所に被害が及ぶ。

故にガナドゥールは研究所の被害を最小限にするために

敵の攻撃を受け続けなければならない。

特機に近いガナドゥールの装甲は小型とはいえPTより厚い。

ライフルの銃撃ごときでは墜ちはしないが、立て続けに受けられそう長くは持たない。

ジョツシュ「くっ・・・！」

流星は制式採用機だな、だが・・・！

フィガ、照準固定、モードアクティブ・・・

射出！」

銃撃の最中、ガナドールは特殊自律兵器フィガを敵にめがけて発射した。

???「回避・・・」

だが、それはあっけなく避けられた。

フィガの攻撃モーションはスラッシュ・リッパーに近いものがある。

スラッシュ・リッパーはG系に広く装備された事もあるポピュラーな兵器だ、

それ故にそれに対する回避パターンはあって当然であろう。

・・・だが両者には決定的な差がある。

???「攻撃再か・・・！」

攻撃を再開する直前に、後方から何かが深々と突き刺さった。

先程大きく外れたはずのフィガがヒュッケバインの動力バイパスを貫いたのだ。

フィガはスラッシュ・リッパーと違い、

高性能の自動追尾機能と遠隔操作機能が備わっている。

数こそは少ないものの、R-3のストライクシールドと同じ様な事が可能である。

ヒュッケバインは力尽きたように前のめりに倒れた。

動力部を狙っただけならば簡単ではある。

しかしそうすれば機体は爆散し二次被害が出てしまう。

そこでジョシユアは動力バイパスに狙いを定めたのだ。  
例え出力を最大にしてもバイパスが切断されてしまえばPTは動けなくなるからだ。

並大抵の腕ではそんなことは不可能である。  
だがジョシユアはそうではない。

ジョツシュ「・・・まずは1つ！」

???「パターン・・・変更・・・」

ヒュツケバインの動きが変わった。

闇雲に突起するのではなく、連携で攻めて来るようだ。

ジョツシュ「フォーメーションか・・・

させるか！」

ジョシユアは連携を組まれる前に崩そうと突起してきた。  
だがそれは研究所の守りをがら空きにする事になる。  
しかしジョシユアはそれを承知で突っ込んできた。

ジョシユア「出力調整・・・

ジェノサイドクロー、セット・・・！  
フィガ、リアクティブ・・・！」

ジョシユアはガナドールの盾に内蔵されている光学式非実体剣  
ジェノサイドクローを起動させ最も近いPTに向けて突起した。  
しかしこの戦術はあまり賢いとは言いがたい。

闇雲に突っ込む事は避けられるばかりか、カウンターを取られる場合が多いからだ。

こういった戦術はアルトアイゼンのように  
急加速して強力な近接武装で攻めるのが妥当である。

生憎ガナドゥールにはアルトのような瞬発力も無ければ強力な近接兵器もない。

だが・・・ガナドゥールにはガナドゥールの戦い方がある。

???「・・・な・・・に・・・!？」

ヒュッケバイン達はガナドゥールとは正反対の方向から攻撃を受け、メインモニターを潰された。

だがこちらはガナドゥール1機、味方機などいるはずがない。

視覚を潰されて混乱する暇もなく、彼らはジェノサイドクロウの餌食となった。

ジョッシュ「パターン『アルティメット・ランサー』・・・

やはり使えるな。」

彼らを攻撃したものの正体・・・

それは最初のヒュッケバインの機能を停止させ、突き刺さったままの筈のフィガだった。

ガナドゥールに内蔵されているフィガの弾数は僅か2機、

この手の武装としてはあまりにも数が少ない。

だがそれでいいのだ。

何故ならフィガは使い捨ての武装ではないからだ。

通常、攻撃終了時にフィガは自動的にガナドゥールに戻ってくる。

グルンガストシリーズに見られるブーストナックルと同じようなものだ。

だがジョシユアはあえてそれをせず、フィガを使い捨ての武装の様に見せかけ、

わざと突起して隙を見せ、その瞬間に待機させていたフィガを再起動させたのだ。

ジョッシュ「これで3機・・・！」  
「・・・突起・・・」

今度は向こうが突っ込んできた。

内臓バルカン砲とフォトン・ライフルで牽制しつつ、  
片手のビームソードで切りつけるようである。

敵が完全にガナドゥールに狙いを絞ったのはジョシユアにとっては  
好都合だ。

後は迎え撃つだけで済むのだから。

しかしこの間合いではジェノサイドクロウで切り払うのは難しい。

ジェノサイドクロウの収束率はビームソードよりも低いからだ。

元々ジェノサイドクロウは切りつける武装ではなく突き刺す武装で  
あるため

取り回しが利くようにあえて射程は低く抑えられている。

その穴を狙う彼らは良い軍人と言えるだろう。

だが彼らはガナドゥールの全てを知ったわけではない。

ジョッシュ「このフォルシオンセイバー、なら・・・！」

ジョシユアは

もう1つの非実体剣フォルシオンセイバーを起動させた。

それはビームソードなど比べものにならないほど収束率が高く、  
間合いも長い。

「・・・なん・・・だと・・・？」

ジョッシュ「もう一撃・・・！」

彼が驚いたのも束の間、切りつける前に  
ヒュッケバインは2機とも切りつけられた。  
その瞬間、2機のパワーはカットされた。

2機と同じ場所、動力バイパスを正確に破壊されたのだ。

ジョツシュ「ふう……」

ジョシアは深呼吸をした後、再び管制塔に回線を繋げた。

ジョツシュ「……博士、全機の無力化に成功しました。

生体反応は6……

全員無事です。」

カザハラ「いやいや。

話には聞いていたが、かなりの腕前だな。」

リシュウ「伊達に修羅やNDC残党を相手に生き残っただけはあるの。」

ジョツシュ「NDC残党の場合、大抵は気づかれる前に逃げていますが、

戦わざるを得ない状況もありました。

それに修羅の連中は問答無用でしたから。

……こいつと縁を切るためにここまで来るのに、こいつを使いこなせるようになってしまったなんて、

変な話ですよ。」

エリ「でも助かったわ。

そのおかげで今回は難を逃れる事が出来たから。」

ジョツシュ「お礼なんて良いですよ。

それよりも彼らですが……」

ソフィア「ええ。

ハッチを開けて彼らを回収して。」

カザハラ「だが作業はガナドールに乗ったまま行ってくれないか。下手をすれば暴れて君に襲いかかって来るかもしれんからな。」

ジョツシュ「分かりました。

一応、簡単な尋問も試みてみますので、通信はつなげ  
たままにしておきます。』  
カザハラ『ああ、わかった。』

ジョシユアは倒れたヒュツケバインの方に向い、作業を始めた。

ジョツシュ「（それにしても連中を殺さずに済んで助かった。

．．．あの連携の手際のよさや、崩されたときの建  
て直しの速さから察するに

相当の腕前だと分かる。

下手をすればこちらが持たなかったかもしれない。

．．．ともかく、話してみるか。）」

ジョシユアはヒュツケバインのハッチを開け、  
外部スピーカーのスイッチを入れて搭乗者に声をかけた。

ジョツシュ「．．．ヒュツケバインのパイロット、聞こえるか？」

一般兵「う．．．うう．．．

こ、ここは一体．．．？」

ジョツシュ「ここはテスラ・ライヒ研究所、オレはこのパイロッ  
トだ。

そちらの所属を言ってもらおうか？」

一般兵「じ、自分はエント基地所属のPT部隊の者です．．．」

ジョツシュ「．．．どうやら話は出来るようだな。」

一般兵「え．．．？」

ジョツシュ「答えてもらおうか。

．．．何故研究所を襲撃した？」

一般兵「研究所．．．襲撃．．．？」

ジョツシュ「．．．お前達は突然この基地に現れ、研究所を破壊を



試みた。

それを止めるために、機体を破壊させてもらったがな。

「

一般兵「・・・そ、そういえば・・・薄っすら記憶が・・・」

ジョッシュ「（・・・洗脳が解かれたのか？」

まあ、そのほうが手っ取り早くて助かるが・・・」

一般兵「あ、あの・・・何故自分達は・・・このような事を・・・」

ジョッシュ「それを聞きたいのはこちらの方なんだが・・・

・・・何か覚えていることはあるか？」

一般兵「は、はい。

自分達は基地周辺の哨戒任務に当たっていました。

ですが、突然奇妙なエネルギー反応を感知しまして。

確認のため、その反応の方へ向かったのですが・・・」

ジョッシュ「エネルギー反応・・・？」

一般兵「え、ええ。

なんというかあれは巨大な・・・」

だが、彼が言いかけている途中で彼の話は終わってしまった。  
何故なら、突然大地が揺れ始めたからだ。

一般兵「おわああっ!？」

ジョッシュ「おおっ・・・!？」

エリ「じ、地震・・・？」

違う・・・これは転移反応!？」

ソフィア「・・・過去のデータと一致・・・？」

こ、これは・・・シャドウミラーです!？」

カザハラ「何だと!？」

空が歪み、それらは地に降り立った。

蒼い鋼鉄の体、怪しく光る紅い眼の機械の群像が現れた。

ジョッシュ「あれは確かゲシュペンスト・・・!?

・・・それに今、突然出現したような現れ方をしたが・  
・一体・・・」

ジョシユアが南極から出たのは今から約半年前だ、それ以前は殆ど南極暮らしだったため、

彼が知りうる情報は民間人が得る情報以下と断言していい。

それにこの半年で戦った敵と言えば、修羅やNDC残党ぐらいのものだ。

彼がシャドウミラーや転移技術に関して疎いのは当然と言える。

カザハラ「あれらが『向こう側』の量産されたゲシュペンスト部隊か・・・

話には聞いていたが、こう見ると壮観だな。」

リシュウ「感心しとる場合じゃなからう!」

???「・・・」

博士達の雑談を他所に、ゲシュペンスト達はテスト研へ進撃を開始した。

その動作はまるで部隊そのものが生物として機能しているかのようなものだった。

そして、正確無比に獲物を狙うM950マシンガンの弾雨は動けなくなったヒュッケバイン達にとっては防ぎようが無かった。

一般兵「うつ・・・うわあああああ!」  
ジョッシュ「・・・くっ!」

ヒュッケバインが爆発し、ジョシユアの目の前で名も無き連邦兵は

爆炎に吞まれていった。

それは、他のヒュッケバイン達も同様である。  
ジョシユアは目の前にいながらそれを黙ってみているしかなかった。

エリ「こ、こちらに仕掛けてきた!？」

ソフィア「問答無用・・・と言う事かしら。」

カザハラ「目撃者を生かす気は無いという事か・・・!」  
リシュウ「万事休すか・・・!」

爆発や銃撃の影響でテスラ研はみるみる崩れて行き、  
もはやその機能を保てなくなっていった。  
さすがの博士達もこれには少々参ったようだ。

リム「はあっ・・・はあっ・・・!

は、博士・・・!」

その最中、突然リムが管制室に入ってきた。  
彼女は息を切らせ、汗をかき、動揺を隠せないでいた。  
彼らのことを伝えるために、必死でここまで来たのだ。

カザハラ「クリアーナ君!？」

ソフィア「ど、どうしてここに・・・?」

エリ「クスハさんとブリット君は!？」

リム「そ、それが2人とも・・・

いきなり目覚めて、そのまま格納庫の方へ・・・  
リシュウ「何じゃと!？」

エリ「そ、そんな!？」

とても歩けるような状態じゃないのに・・・!？」

< テスラライヒ研究所 格納庫 >

クスハ「龍王機・・・！」

龍王機「・・・」

ブリット「虎王機・・・！」

虎王機「・・・」

崩れ行くテスラ研の中、二人は超機人の目の前に立っていた。

しかし彼らの顔色は死人の様に白く、目の下の隈は墨で塗ったように黒く、

体中から冷や汗が止まらず、体は震え続けていた。

その姿はまるで深い絶望の中にいるようにも見えた。

・・・だが彼らはそれでも倒れることは無かった。

クスハ「全部受け止めたわ・・・

あなた達が私達に何を伝えたかったのか・・・

そしてあなた達が今何を感じているのか・・・」

ブリット「正直・・・今すぐにでもここから逃げ出したい気持ちでいっぱいだ・・・」

クスハ「・・・でも私達は逃げたりなんかしない！」

ブリット「・・・そしてそれをばら撒くそいつを黙って見逃すつもりも無い・・・！」

なぜならば、それでもなお彼らの眼は死んでいなかったからだ。  
輝きを失わず、真っ直ぐと前を見据えていた。

クスハ「そのために・・・

龍王機、虎王機・・・！」

ブリット「共に行くぞ！」

湿婆の王から、世界を救うために・・・！」

龍王機&虎王機「ならば、今一度唱えよ・・・！」

我らと共に・・・！」

ブリット&虎王機「必神火帝っ！」

クスハ&龍王機「天魔降伏っ！」

クスハ&ブリット&龍王機&虎王機「・・・龍虎っ合体っ！！」

「

<テスラ・ライヒ研究所 屋外>

ジヨッシュ「くっ・・・！」

全装甲大破・・・

それに『レース・アルカーナ』の出力がもう・・・！」

ガナドゥールは先程の戦闘に加え、

突如転移してきたゲシュペンスト部隊の攻撃を受け続けていたため、  
もはやあと幾許も保たない。

そんなガナドゥールに出来ることは、たった一つだけだ。

ジヨッシュ「・・・博士、急いで避難を！」

ここはオレが殿になります！」

それは博士達が脱出するまでの間、囿になる事である。

リム『お、お兄ちゃん、それじゃあ・・・！』

ジヨッシュ『リム！お前も急げ！』

ガナドゥール「・・・もう長くは保たない！」

リム『で、でも・・・』

でも・・・!」

ジョッシュ「心配するな。後で脱出する。」

・・・博士達をよろしくな。」

ジョシユアは交信を断った。

ジョッシュ「・・・何が脱出装置だ。」

そんなもの、当の昔に壊れてるのにさ・・・  
すまんガナドゥール、分の悪い賭けだったようだ。」

目の前に迫るゲシュペンスト達を見て、ジョシユアは覚悟を決めた。

???「その役目、私達に任せてください!」

ジョッシュ「そ、その声は!!!?」

格納庫から光の柱を上げ、龍の咆哮と雷鳴と共にそれは現れた。

我 激 燃 超 機 人 無 敵 蒼 龍 龍 虎 王

ジョッシュ「あ、あれが龍虎王・・・!」

エリ「ク、スクハさん?ブリット君?

大丈夫なの?」

ブリット「・・・はい。大丈夫です。」

龍虎王も分かってくれたようですし。」

カザハラ「い、一体これはなにが・・・!?」

クスハ「話は後です!

今は彼らを止めます!」

ゲシュペンスト達は怯むことなく龍虎王に向かってきた。  
だがそれが彼らの敗因となった。

クスハ「・・・行きます！」

九天応元雷声普化天尊！

龍王爆雷符！」

龍王機、七十一の術符の1つ爆雷符は広範囲にわたって雷を呼びよせる。

この技にかかれば電子機器は勿論、生物とてひとたまりも無い。  
それによつてゲシュペンスト達は指1つ動かすことも出来なくなつてしまった。

クスハ「今です・・・！」

龍虎王、移山法！

神州靈山！移山召喚！

急々如律令！」

天に暗雲が立ちこめり、上空から巨大な岩石がゲシュペンスト達を押しつぶした。

空間転移によつて靈山の一部を召喚したのだ。

これではゲシュペンストと言えども、叩き潰された蠅と同じだ。

ジヨツシュ「あれだけの数のを・・・

一瞬で・・・！？」

20機はあろうゲシュペンスト部隊は一瞬にして壊滅した。  
決してゲシュペンスト達が弱いのではない。  
あまりにも龍虎王が強すぎるのだ。

リシュウ「龍虎王・・・」

完全に目覚めおったか・・・！」

エリ「計測は出来ていませんが、

見る限りでは以前より力が増しているように見えます。」

カザハラ「彼らの念動力によるものか・・・？」

それとも・・・」

クスハ「・・・！」

博士「・・・安心するのはまだ早いようです・・・！」

カザハラ「！！？」

ソフィア「・・・エ、エネルギー反応が増大しています！？」

エリ「このパターンは・・・」

・・・ア、アインストです！」

リシュウ「なんじゃと！？」

エネルギー場の中心にいたのは、破壊をかうじて免れた一機のゲ  
シュペンストだった。

だがそれが機械ゲシュペンストで無いことはすぐに分かった。

何故なら、剥がれた装甲の下は無数の生物的な触手で覆われていた  
のだから。

ジョツシュ「あ、あいつは一体・・・！？」

？？？「オオオオオ・・・！」

ゲシュペンストはおぞましい雄叫びを上げ、体内の触手を伸ばし、  
周囲の残骸はおろか、パイロットの遺体までも取り込んでいった。  
その様子はとても直視できるものではなかった。

リム「う・・・何あれ・・・」

エリ「取り込んでいると言っても言うの！？」



ゲシュペンストはあらゆる物を取り込み、新たな姿を創り出した。  
角を象った頭部のブレード、両肩には炸裂弾を詰め込んだユニット、  
右腕の炸薬式バンカー、  
背部の過剰ともいえる程の大量のアフターバーナー・・・  
それはクスハ達にとって、とても馴染み深い姿をしていた。

クスハ「あ・・・あれはまさか!？」

ブリット「ア、アルト・・・アイゼン!？」

#### 第4話 彼方からの落とし子 その3（後書き）

色々あつて書くのが遅れました（^^;）

半分以上は3日ぐらい前から出来ていましたが、途中で練り直しまくったのでこうなっていました。

追伸：この話が終わったら、今後の展開のためにもう一度スパロボをプレイしたいので少し間が開くと思いますのでご了承ください。  
というかホントにすいませんorz

#### 第4話 彼方からの落とし子 その4

ジョッシュ「・・・クスハさん達は、あの機体をご存知なので？」

ジョシユアはクスハ達の反応を見て、

アレが彼らが見知っているものではないかと直感した。

ブリット「あ、ああ。よく知っている・・・

アレはアルトアイゼン・・・

俺達、ATXチームの隊長機だ。」

ジョッシュ「それが何故、あのような形で？」

・・・そもそもアレは何なのですか？」

クスハ「あれらは・・・おそらくアインストです。」

ジョッシュ「アイン・・・スト？」

ブリット「詳しいことは後で話すが、

奴らはインスペクター事件中に突然現れた化け物共だ。」

ジョッシュ「（化け物・・・インスペクター事件・・・？

まさか・・・！？）」

クスハ「・・・彼らは以前、アルトアイゼンをコピーして来た事がありました。」

ジョッシュ「成程・・・

では前回と同じ手を使ってきた、と言う事ですか。」

クスハ「いえ・・・今いるアレは以前とは違うんです。」

ジョッシュ「・・・と言う事です？」

ブリット「奴らがコピーしたアルトはシルエットや武装こそは似通っているものの、

もつと有機的なデザインだった。」

そつ、目の前にいるアルトモドキは、以前のアインストアイゼンと

は異なり、

アルトアイゼン

見た目は機械そのものだった。

違う点を挙げるとすれば、細部のデザインが異なり、  
武装はどちらかといえば改造機のアルトアイゼン・リーゼに近く、  
何より機体の色は蒼い色をしていた。

クスハ「それに、残骸を取り込むなんて事は一度もなかったんです。

第一、アインストシリーズは全て消滅したはずなんです。」

ジョッシュ「では、こいつはその生き残り・・・ということでしょうか？」

クスハ「恐らくは・・・

（でもこの思念は以前から感じていた胸騒ぎとは違う・・・  
ならいったい・・・）」

ジョッシュ「謎が多いですが、いずれにせよ倒すべき敵だという事は理解できました。」

ブリット「ああ。どのみちやつらを野放しには出来ない！

敵は奴一体・・・ならばッ！

・・・クスハッ！！」

クスハ「ええ！」

ブリット「必神火帝っ！」

クスハ「天魔降伏っ！」

ブリット&クスハ「虎龍！ 合体ッ！！」

龍虎王が光に包まれたかと思うと、

炎の柱を上げ、虎の咆哮と共にそれは現れた。

我 咆哮 超 機 人 無 敵 白 虎 虎 龍 王

ジョッシュ「こいつが・・・虎龍王か・・・！」

ブリット「行くぞ！虎龍王！！」

神速槍っ！！」

虎龍王は神速槍を召喚し、目にも留まらぬ速さで一氣に間合いを詰めた。

ブリット「化け物め！

覚悟しろ！！」

???「それはこちらの科白だ・・・」

ブリット「！！？」

ブリットは神速槍で貫く刹那に声を聞いた。

その声は彼がよく知っている者の声だった。

そして神速槍が敵を貫くことは無かった。

なぜならば、その穂先は打ち貫かれていたのだから。

ブリット「な・・・に・・・！？」

ブリットがそれを認識した直後、火花が散り、凄まじい金切り音が辺りに響いた。

それはこのやり取りが僅か一瞬の出来事であった事をブリットに認識させた。

ブリット「くそっ！

だがそれならっ！！」

ブリットは直ぐに槍を手放してランダム・スパイクを召喚した。

この近距離ならば取り回しの利くランダム・スパイクが有利だからだ。

だが、その動作は相手にとってはあまりにも遅い動きだった。

???「噛み砕け・・・！」

ブリット「な・・・！！？」

その声は虎龍王の後方から聞こえた。

だが虎龍王は相手に背を向けてなどいない。

相手が一瞬で虎龍王の背後をとったのだ。

事実、ブリットはその動きに付いていく事は出来なかった。

そしてブリットが気付いた頃には相手のステークが虎龍王の背後を貫いた。

だが・・・

???「手ごたえが・・・ない・・・？」

貫いたかに見えた虎龍王は霧のように姿を消した。

ブリット「そいつは分身だッ！」

ヴァリアブルドリルウツッ！！

虎龍王の能力、身分身の術はその名の通り分身を作り出す。

ブリットはとつさにその術を使って難を逃れ、カウンターを取る事に成功したのだ。

???「くっ・・・」

とつさの事で反応することが出来なかった相手は殴り飛ばされた。そのままでは地面に激突して大きなダメージを負ってしまうだろう。だがアルトモドキは背部のアフターバーナーで勢いを殺して難を逃れた。

しかも、虎龍王から受けた傷は不気味に再生を始めていた。  
だがそれ以上に、ブリットやクスハはそいつに対して奇妙な違和感を拭いきれずにいた。

ブリット「・・・クスハ・・・気付いたか・・・？」  
クスハ「・・・ええ。」

あの動き・・・あの戦い方・・・そしてあの声・・・」

以前に戦ったアインストシリーズはパワーこそあれど、その戦い方は本能的なものだった。

だが、こいつはそうではない。

そしてブリットとクスハはこの戦い方を知っていた。

だからこそ身分身でギリギリ躲す事が出来たのだ。

それ故に初めに感じていた奇妙な違和感が徐々に増していったのだ。突撃に対してのカウンター、その後の急加速での反撃、そして聞き慣れたあの声・・・

???「・・・やはり寄せ集めではこの程度が限界か・・・

だが・・・さすがは守護者の僕・・・と言った所だな・・・

故に・・・その力は・・・!!」

ブリット「ッ・・・!!」

両者は互いの殺気を感じ取り、共に構えを取ったまま硬直した。

先程の戦いを見れば、両者の力はほぼ互角、ならば先に隙を見せたほうが負ける。

あるいは第三者が隙を作れば勝機はあるが・・・

ジョッシュ「ガナドウル・・・損傷率80パーセントオーバー・・・  
・全兵装使用不能・・・

くそっ・・・!!オレは・・・!!」

しかしジョシユアの駆るガナドールはもはや歩く事すらままならない。

先程のダメージはそれほどまでに深刻なものだった。

・・・ジョシユアはただ黙って見ている事しか出来なかった。

???「・・・む？

この・・・反応は・・・」

アルトモドキは何かを感じ取り、その方角を向いた。

ブリット「（・・・なんだ？

戦闘中に余所見だと！？）」

???「・・・ククク・・・フフ、フフフ・・・

ハハハ・・・ハハハハアッ！

間違い・・・ない、奴だ・・・奴だアッ！！」

クスハ「な・・・なんなのこの感じ・・・

これは・・・憎悪と歓喜・・・？」

ソフィア「・・・！

こちらに急速で近づいて来る反応が・・・！」

カザハラ「まったく、次から次へと・・・

今度はなんだ？

インスペクターか？それともエアロゲイターか？」

エリ「カザハラ博士、冗談とはいえ、不謹慎ですよ。」

リシュウ「もうここまで来ると大概の事じゃ驚かんぞい・・・」

カザハラ「・・・で、数は？」

ソフィア「・・・！

該当データでました！

数は2！



マスタツシユマンとレッド・オーガです!!」  
リシュウ「何じゃとっ!？」

荒野の彼方から風を切って現れたそれはその場の空気を一変させた。  
蒼い巨人と紅い魔人……

どちらも、ここにいる殆どの人間が知っている。  
その力の強大さと搭乗者の強さを。

ブリット「ソウルゲイン……!

それにペルゼインだと!？」

クスハ「アクセルさんとアルフィミイちゃん!？」

ジョツシュ「ま……また新しい敵か!？」

アクセル「……ちっ!

少し遅かったか……!」

アルフィミイ「研究所……

大分壊されているようです。

……でも人は殆ど大丈夫のようです。」

アクセル「だが、それよりも奴だ……!

先程のゲシュペンスト共で分かっではいたが……」

???「ハハ……ハハハハアツ……!!」

久しぶりだなあ。

アクセル・アアルマー!!」

アクセル「その姿……その物言い……そしてこの悪寒……

やはり貴様か……!

ベーオウルフツ!!」

ベーオウルフ「ああ、そうだ……その声だ……!

その声を聞く度に、

お前から受けた傷が疼いて疼いて仕方がないぞ……

!

フハハ・・・ハ・・・ハ・・・！」

クスハ「ベーオウルフって確か・・・」

ブリット「『向こう側』のキヨウスケ中尉の・・・！」

ジョッシュ「・・・な、何なんだ・・・こいつら・・・？」

アクセル「・・・『こちら側』とはいえ、

再びこの場所でお前と出会う事になるとはな・・・」

ベーオウルフ「つくづく、因縁だなあ・・・」

アクセル「貴様を叩き潰す前に1つ聞く・・・

どうやって『こちら側』に辿り着いた？」

ベーオウルフ「貴様が残してくれた転移装置のおかげだ・・・」

アクセル「リユケイオスか・・・！？」

自爆させたはず・・・

・・・だが、貴様がここにいるということは失敗したの

か・・・」

ベーオウルフ「否ア・・・

貴様が転移した直後、確かにおれは爆炎と共に消え

去った・・・」

アクセル「何・・・？」

ならば何故・・・？」

ベーオウルフ「・・・それ以上・・・貴様に言う必要があるのか？」

アクセル「何・・・？」

ベーオウルフ「・・・ここで消える貴様にいつ！」

痺れを切らしたかのように、アルトモドキ・・・

いやゲシュペンスト Mk-II はソウルゲインめがけて突撃してきた。

アクセル「ぐっ・・・！」

ベーオウルフ「ハアア・・・ッ！」

アアアアクセエルウウ

・・・アアアアル

ウマアアアア　　ッ！！

貴様だけはあ・・・貴い様だけはああああ！！！」

Mk-IIIIの主武器、炸裂式パイルバンカー『リボルビング・ブレイカー』が特有の撃鉄音を鳴らし

ソウルゲインの装甲を貫いた。

だが、アクセルは身動き一つしなかった。

アクセル「・・・多少は話せるようになったかと思つたが・・・

さらに悪化しただけのようだな、こいつは・・・」

ベーオウルフ「ほおおおざあくうなああああああ！！！」

ベーオウルフの咆哮と共に、Mk-IIIIはさらに加速した。

ブースターが焼き切れんばかりに火を噴き、ソウルゲインごと岩山に向かつて突っ込んだ。

ベーオウルフ「全弾・・・もつていけ・・・！」

岩肌に激突する瞬間、Mk-IIIIの両肩に仕込まれている近距離指向性炸裂弾

『レイヤード・クレイモア』のハッチが開き、チタン製の鉄鋼弾が目標にめがけて発射された。

アクセル「ぬかつたか・・・！」

岩山は粉塵を上げて無残にも崩れ去った。

Mk-IIIIはソウルゲイン共々崩れ行く岩山の下敷きとなった。

クレイモアは射程が短いうえに射角が広いため近接しなければ目標以外に着弾してしまう、一方で近接して使用すれば跳弾によって自身に誘爆してしまうため扱いが非常に難しい武装である。

だがそれは搭乗者がマトモな人間で、MK-IIIが設計図通りの機体である事が前提での話だ。

ベーオウルフ「フフ・ハハハ・ハハハハハ・・・・！」

ハアーハツハツハ・・・・！」

Mk-IIIは何事もなかったかのように瓦礫の下から這い出て、勝利の雄たけびを上げた。

ジョッシュ「あ、あんな無茶苦茶な戦い方をして・・・無傷だとい!?」

クスハ「違うわ・・・ダメージは受けているけど、その場で自己修復しているだけよ・・・」

(でも・・・あの速度は・・・)」

クスハは冷静に分析したが内心では動揺していた。

過去のインストールにも自己修復機能はあったが、あれ程までの速度は備わっていなかったからだ。

アクセル「・・・何を勝ち誇っている？」

ベーオウルフ「な・・・に・・・!？」

ガレキの下から眩い光の柱が天へと貫き、瓦礫をMk-IIIごと吹き飛ばした。

ベーオウルフ「おおああああ!？」

Mk-IIIIは宙を舞い、激しく地面に激突した。

油断していたせいかダメージはかなり大きなものだった。

アクセル「最大出力の青龍鱗・・・貴様とはいえ、この距離では避  
かせなかったようだな・・・」

だが・・・！」

アクセルは相手より一手先を打つ事に成功したにも関わらず何故か  
残念な表情を見せた。

アルフィミイ「アクセル、どうしましたの・・・？」

アクセル「弱い・・・弱すぎるぞ・・・ベーオウルフ・・・！」

貴様の实力はこんな甘っちょろいモノではなかった筈だ

！！」

ベーオウルフ「フフ・・・フハ・・・ハ・・・」

起き上がったMk-IIIIは攻撃をする構えをしようとはしなかつ  
た。

それどころか、その体は泥人形のように崩れ始めていた。

ベーオウルフ「やはり、寄せ集めでは・・・ここまでが限界か・・・」

」

アクセル「・・・何？」

アルフィミイ「アクセル・・・あれは・・・！？」

装甲が剥げたコクピットブロックから現れたのはパイロットなど  
はなかった。

人間の死体に無数の触手と機械類が絡みついた人の形をした何かだ  
った。

クスハ「うつ・・・あ、あれって・・・」

ブリット「さつき取り込まれた人達か・・・」

ジョッシュ「あ、あんなのがアレを操っていたのか・・・？」

アクセル「ベーオウルフ・・・その姿は・・・？」

人の形をしたそれはその問いに答えた。

ベーオウルフ「・・・言わなかったか？」

この体は寄せ集め・・・おれの僕と血肉と鋼で創り上げたモノだ。」

アルフィミイ「それを・・・あなたは操って・・・？」

ベーオウルフ「貴様には分かるようだな。」

どうやら、おれの嘗ての同胞のようだが・・・？」

アルフィミイ「わたしはもうアインストではありませんの。」

そして、あなたは私の知るキョウスケではありませんの。  
んの。」

アクセル「迎合するつもりはないということだ、これがな。」

ベーオウルフ「ならば・・・こちらも、だ・・・」

会話の最中も機体はさらに崩れていった。

ベーオウルフ「もう・・・この体も・・・保たぬ・・・か・・・

だが・・・次は・・・こうはいかんぞ・・・

貴様がもたらした新たな力で・・・

この世界で出会った同胞と共に・・・

この世界を・・・そして・・・静寂・・・を・・・」

アクセル「薄気味が悪い・・・！」

・・・もう何も喋るな！！」

アクセルはソウルゲインの玄武剛弾で崩れゆくMk-IIIIを文字

通り粉微塵にした。

ベーオスルフ「フハ・・・ハ・・・」

また会おう・・・アクセル・アルマー・・・

ハハ・・・クハハ・・・ハハハ・・・ハハ・・・」

完全に姿が崩れ去ったにもかかわらず、不気味な笑い声だけが辺りに木霊し続けた。

ジョツシュ「何だったんだ・・・奴は・・・？」

アクセル「相変わらず何を言っているのか分からん奴だったが・・・

本人じゃないことは確かのような。」

アルフィミイ「ええ、あれは只の人形・・・」

可哀想な人形ですの・・・」

ジョツシュ「あんたたちはアレがなんなのか知っているのか？」

アクセル「詳しくは俺も分からん。」

だが奴とは因縁がある。

それだけは間違いないのさ、これがな。」

アルフィミイ「・・・それにわたしも無関係ではありませんので。」

クスハ「（やはりあのアルトは・・・）」

ジョシュア「・・・取り敢えず情報を交換したほうが良さそうだな、互いのために。」

#### 第4話 彼方からの落とし子 その4（後書き）

虎龍王が囃ませっぱいのは龍虎王伝奇からの伝統みたいなモンです（苦笑）

今回搭乗したゲシュペンストMk-3は見た目はオリジナル（ナハト）と同じですが、搭乗者が遠隔操作で本領が発揮できないし本人もまだ本調子ではない+急改造したために本来の性能が再現されないばかりか長くは保たないって事で弱体化を計りました（^^;）本物はもの凄いチート機体ですから序盤はこのぐらいが妥当かと（詳しくはドラマCDで）

でも本編に出すときはそれ以上のチートっぷりでいききたいと思えます、その頃になると主人公勢もチート集団になってますから（笑）次回は説明パートです。

後付たつぷり、伏線バリバリ、脳内妄想大盛りでいきますのでご了承ください（汗）



## 第4話 彼方からの落とし子 その5

<テスラライヒ研究所 屋外>

戦闘が過ぎ去ったあと、彼らは互いの情報交換のための話し合いの場を設ける事にした。

だがこのままの状態ではいささか問題がある。

博士達がいる建物は倒壊寸前のため危険極まりない。

クスハ達パイロットにとっては、機体に搭乗したままでは十分な情報を得られ難いと言える。

結論として、全員が屋外に出てその場で話し合う事になった。

アクセル「・・・こうやって直に話すのは初めてだな。

超機人のパイロット。

確か名は・・・」

ブリット「・・・ブルックリンだ。

だがそう言われればそうだな・・・

互いの会話は戦闘中での通信のみだったからな。」

アルフィミイ「あの時は・・・お互い敵同士でしたものね。

それにイエッツトやソーディアンときは状況が状況でしたから。」

クスハ「でも、いいじゃないですか。

今はこうやって話し合えるんですから。」

アクセル「フ・・・そうだな。」

アクセルとアルフィミイ、クスハとブリットは搭乗機から降りて、互いの再会を噛み締めていた。

いや、『再会』と表現するのは多少違うのかもしれない。

彼らは互いのことを通信でしか知らないのだ。  
本当の意味で彼らは今日始めて互いの顔を知ったと言える。

カザハラ「ほう・・・」

こいつがマスタツシユマン・・・いや、ソウルゲインか。

「  
リシユウ「僕も戦場で見たことはあったが、やはり中々の機体じゃな。」

ソフィア「それにペルゼイン・・・レッド・オーガ・・・」

エリ「100%アインストの技術で造られた機体ね。」

ある意味で、これも超機人といえるのかしら？」

一方、倒壊寸前の管制塔から降りてきた博士達は  
ソウルゲインとペルゼイン・リヒカイトに並々ならぬ興味を抱いていた。

両者ともデータはあるものの未知の技術の結晶である。

それが目の前にあれば、学者でなくとも興味を引かれるのは当然の事だろう。

リム「なんだか、みんな盛り上がっているみたいだね」

ジョツシユ「遠くて会話は聞き取れないが、

あの様子だと久しぶりに会った昔の知り合いといった

ところか？」

リム「うん・・・ちょっと違うみたいだね。

博士達も二人が乗ってきた機体に興味津々みたいだし。

知り合いだったら、ああいう反応はないとおもっただけど・・・

「？」

ジョツシユ「・・・別に誰だっていいさ。

彼らが敵でないのならば、

重要なのは彼らが何者なのかって事よりも、襲ってい

た敵が何なのかって事さ。

互いのことを知るのは情報をやり取りしてからでも出来る。」

リム「・・・なんか、お兄ちゃん冷たいね。」

ジョッシュ「冷静といってくれ、冷静と。」

ジョシユアとリムは双方の輪に加わずに、ガナドウールのシステムチェックを行っていた。

ガナドウールが先程の戦闘で致命的なダメージを受けていたのであれば、

それによって彼らに何らかの影響を及ぼす可能性が極めて高い。

レース・アルカーナと彼らがリンクしている限り、互いにどのような影響が出るかは全く分かっていないからだ。

リム「・・・で、どうなの？

ガナドウールの調子・・・？」

ジョッシュ「・・・サーボモーターや装甲はもう駄目だな。

フレームも数箇所はオシヤカだ。

だがメインはほぼ無傷だ・・・

当然、レース・アルカーナもな。」

リム「頑丈に作ってくれたお父さんやクリフに感謝しないとね。」

ジョッシュ「あ、ああ・・・」

幸いにもレース・アルカーナは頑強な防御ブロックに守られていたため損傷は無かった。

だがジョシユアはその事に対して複雑な気分になった。

少なくとも自分達に影響が出るのが免れたのが嬉しくもあったが、

反面、頑強な防御ブロックを施した父親達リ・テクが

レース・アルカーナ損傷の際の搭乗者への影響が

早い段階で懸念されていた事を知っていた事に怒りを感じていた。

そして妹のリムがその影響を最も受けているにも関わらず、そんな親父達に対して笑って感謝している様子を見てそんな自分が虚しくなった。

自分がいかに矮小で弱く、リム達がいかに強いのかを改めて痛感した。

アルフィミイ「……ところで、彼らとあの機体は……？」

アクセル「機体の方はテスラ研が造ったにしては大分趣が違っし、

連中も軍人には見えんな。」

クスハ「南極遺跡調査団の人達です。」

あの機体もそこで造られたそうです」

アクセル「南極遺跡……？」

聞いたことがないが？」

ブリット「……俺達もついさつき知ったばかりだ。

普通の人達にはまず知らないようだし……」

アルフィミイ「……」

アクセル「ん……？」

どうした、今日はやけに大人しいな。」

アルフィミイ「いえ……」

（何でしょう……あの機体……？）

何か……不吉なモノを感じますの……）」

嘗て、アインストの眷属であつたアルフィミイだけには、ガナドール、いや『レース・アルカーナ』に対して直感的ではあるが、

不穏な影が見えたような気がした。

だがもはやアインストでない彼女にはそれが何なのかを知る術は無かった。

ジョッシュ「……何見てるんだ？」

アルフィミィ「あ・・・あの・・・

べ、別に・・・その・・・」

ジョッシュ「どうした？」

「そんなに慌てて・・・？」

リム「もう、お兄ちゃん！

いきなり話しかけたら誰だつてびっくりしちゃうでしょう？」

ジョッシュ「・・・それもそうだな。

驚かせてすまなかつたな。」

アルフィミィ「いえ・・・別に大丈夫ですよ。」

ジョッシュ「オレは名前はジョシユア、こいつは妹のクリアーナつて言うんだ。

君の名前は？」

アルフィミィ「うふふ・・・

わたしはアルフィミィと申しますの・・・

以後・・・宜しくお願いいたしますの・・・」

リム「よ、宜しくね。アルフィミィ・・・ちゃん・・・？」

（・・・なんだか、不思議な感じの子ね・・・

変わった喋り方だし、服装も妙だし・・・

こういうのを浮世離れていうのかな・・・？）

アクセル「・・・お前があん機のパイロットか？」

ジョッシュ「そうですが、あなたは・・・？」

アクセル「・・・アクセル・アルマーと言う。

ソウルゲイン・・・あの蒼い機体のパイロットだ。

お前の機体、かなりのダメージを受けているようだが・・・

・？」

ジョッシュ「メインは生きているので、修理すれば問題ありませんよ。」

アクセル「・・・奴を相手にしてこの程度で済んだ事を幸運に思うんだな。

奴が本気ならば、撃墜は必至だった筈だからな。」

ジヨッシュ「奴・・・？」

あのアルトアイゼンとか言うやつのことですか？」

アクセル「・・・それ以外に誰がいる？」

ジヨッシュ「残念ですが、この損傷はそいつのせいじゃありませんよ。」

アクセル「何・・・！？

ならばどいつが・・・？」

クスハ「・・・あのゲシュペンスト部隊ですよね？」

アクセル「なに・・・！？

ゲシュペンストだと・・・！？」

ブリット「俺達が出撃したとき、

ジヨシユアさんは先にガナドールでテスラ研の護衛にまわっていた。

・・・そのときにはかなりの損傷を負っていたんだ。」

ジヨッシュ「それだけではありませんよ。

最初に現れたのは味方であるはずの連邦軍でしたから。

「

クスハ「え・・・！？」

ブリット「な、何だつて・・・！？」

アクセル「どういうことだ・・・話がまるで見えんが・・・？」

アルフィミイ「すいませんが・・・最初から説明してもらいたいのですの。」

この二人が知らない事も含めて・・・」

ジヨッシュ「分かりました。

ですが、オレにも分からない点があるので博士達も呼んできます。」

ジヨシユアは機体の整備と調査にあたっていた博士達を呼びだして、話し合いのための場所のセッティングを始めた。

モニターにパイプ椅子、ホワイトボード等々、

瓦礫の中からまだ使えそうなものを捜してかき集め、簡易的な会議場を作った。

その一連の動作における無駄なさと、  
ついでお茶まで用意してしまうほどの手際のよさに周囲は啞然とするしかなかった。

ジヨツシュ「すいません、とりあえず使えそうなものを集めてきましたが、

このぐらいしか・・・

ありあわせのものですし・・・」

カザハラ「いや十分すぎるよ。」

流石はジヨシュア君だ。」

リシュウ「本当によく出来た若者じゃの。」

ブリット「やつぱり・・・速過ぎるよな・・・？」

クスハ「う・・・うん。」

アクセル「手際がいい・・・とか言うレベルじゃない気がするんだが、な。」

アルフィミイ「これ、美味しいですよ・・・」

状況に慣れていないクスハ達は飲み物を片手に呆然と突っ立っていた。

アルフィミイだけは貰ったレモネードを飲んでご満悦のようだ。

ジヨツシュ「それでは、今回の事件のあらましを説明しましょう。」

アルフィミイ「むむ・・・！」

なぜなに解説というやつですね。

アクセル、BGMと着ぐるみの準備を・・・」

アクセル「・・・そんなものは無い。

あつたとしても出さん。」

アルフィミイ「ノリが悪いのですね・・・」

リム「あの．．．何か．．．？」

アクセル「何でもない．．．！」

気にせず続けてくれ。」

ジヨッシュ「ではまずは龍王機と虎王機の説明からです。

彼らの不可解な行動も関係していると思われますので。

「  
アクセル「不可解な．．．？」

カザハラ「今から数日前のことだ。

オペレーション・オーバーゲート以来休眠状態にあった

超機人が

突然目覚めて暴れだしたんだ。

お陰で研究所は半壊、地下ドックも使用不能さ。」

アクセル「成程な。

テスラ研のこの有様は奴らのせいでもあるのか。」

ブリット「その知らせを聞いた俺達は研究所に急行したんだが．．．

「  
エリ「その頃、あれほど暴れていた超機人達は気が変わったかのよ

うに暴走をやめて、

再び休眠状態に入ったわ。

その時刻はクス八さん達がこちらに向かった時刻と一致する

わ。」

「

アルフィミィ「守護者のしもべは．．．彼らを迎えに往こうとした

のですのね。」

アクセル「そして往く必要がなくなったと分かり、寝て待つ事にし

た、か。

迷惑かつマイペースな奴らだな。」

アルフィミィ「ですが．．．腑に落ちませんの．．．

守護者のしもべがそのような行動をとるなんて．．．

「  
ソフィア「私達もその辺りが気になってクス八さんたちに依頼して



彼らとの対話を試みたわ・・・

でも・・・」

アルフィミイ「・・・？」

アクセル「・・・その様子ではしくじったのか？」

ジョッシュ「しくじったかどうかは不明だが、

超機人達はクス八さんとブリットさんに対して強力な

思念を送り、

その結果、心身ともに衰弱して危険な状態に陥った。」

アクセル「そうなのか・・・？」

あの二人を見る限りではそんな風だったとはとても思え

んがな・・・？」

ソフィア「何があったのかは私達もまだ彼らから聞いていないわ。」

エリ「・・・クス八さん、ブリット君、話してくれる？」

彼らはあなた達に何故、あのような事を？」

ブリット「龍王機と虎王機は・・・俺達の覚悟を問うためにしたん

だと思っています。」

リシュウ「覚悟じゃと・・・？」

クス八「彼らは言いました。」

無間の底より、湿婆の王が降臨せしめん。

三千界を滅ぼさんがために・・・

人界を守護するのが吾らの使命。

だが吾らの力、湿婆の王に遠く及ばぬ。

故に今一度汝らに問う・・・と」

アクセル「・・・もったいぶりすぎてサッパリ意味が分からんな、

こいつは。」

アルフィミイ「わたしにもサッパリですの。」

エリ「無間・・・仏教思想における無間地獄の事ね。」

リシュウ「確か八大地獄の八番目・・・地獄のどん底だったかの。」

エリ「はい。」

苦しみが無間に、つまり絶え間なく続く地獄で、

その苦しみは他の7つの地獄が夢のような幸福に感じるほどだとか。」

アクセル「そんな場所の底ってことはどん底のどん底という事か・

・  
俺は自分は地獄行きだとは思ってはいるが、流石にそんな所は御免だな。」

エリ「湿婆は・・・三大神の一柱、シヴァ神の事ね。」

アクセル「今度は神サマか・・・

どうせろくなヤツじゃあるまい。」

エリ「シヴァは三神一体論においては

世界の破壊を司り、次の世界創造に備える役目をしているとされているわ。」

ブリット「・・・その辺りはアインストがやろうとしていた事に近いな。」

アクセル「ならば湿婆の王とはアインストかそれと同質のもの・・・  
つまりはあの連中の事を指しているのか？」

クスハ「いえ・・・

超機人はアインストの事を羅喉神と呼んでいました。

湿婆の王とは、おそらくは全く別の存在を指していると思います・・・」

アクセル「それにしても三千界やら人界やら訳が解らん言葉が多すぎるな・・・

語感からすると世界の事を指しているように思えるが・・・

・？」

エリ「半分解よ。」

超機人たちが言う人界とはおそらくこの世界や地球の事を指していると思うけど、

三千界・・・つまり三千大千世界は少し違うわ。」

カザハラ「どう違うのかね・・・？」

エリ「仏教思想では一つの世界の事を須弥山世界と呼びますが

三千大千世界はそれが1000の三乗・・・10億個集まった空間を指します。」

ブリット「じ、10億個!？」

リム「それって・・・どのくらいの数なの？」

カザハラ「私も詳しくは知らないが、

確か銀河系の生命体が存在する可能性がある星は、

樂觀的に見積もっても1000万、低くて20前後だと

聞いた事がある。」

ジョッシュ「なら10億ならば、前者だと100倍、後者だと500万倍になりますね。」

リム「そ、その倍率の数って・・・そのまま銀河の数って事になるんだよね・・・？」

アクセル「何ともスケールがでかい話だな、こいつは。」

カザハラ「となると、湿婆の王というのは新たな異星人か、

もしくは宇宙の破壊者という事になるな。

それも今までとは比較にならない力を持つ・・・」

ブリット「ですが・・・もう一つ可能性があります・・・」

アクセル「何が言いたい・・・？」

クスハ「龍虎王が指す『人界』が地球ではなく、

『世界そのもの』を指しているのだとするならば・・・」

カザハラ「・・・!」

湿婆の王とは並行する世界を崩壊させる存在である、と

!？」

アクセル「もしそうならば、話は更に厄介だな・・・」

クスハ「あくまでも直感ですが・・・」

リム「並行する世界って・・・？」

ジョッシュ「おそらくパラレルワールドの事だろう。」

こことは違う分岐を選択した世界、

こことは似て非なる世界の事だ。」

リム「物知りだね、お兄ちゃん。」

ジョッシュ「だがあくまで空想の範疇・・・」

それが実在しているとは言いが・・・」

アクセル「・・・俺がお前が言う『空想』から来た人間だとしたら？」

ジョッシュ「え・・・！？」

カザハラ「彼は、アクセル・アルマーはことは違う可能性を持った世界、

『向こう側』から来た人間だ。

それが妄言でない事は私達が保証するよ。」

ジョッシュ「にわかには信じられないが・・・」

アクセル「貴様が信じようが信じまいが勝手だ。

だが俺は『世界』の危険性についてはそれなりに理解しているつもりなのさ、これがな。」

リム「わたしは信じるよ。」

あなたがそうって言うならきつとそうなんだし、

博士達が嘘をつく理由なんかないもん。」

ジョッシュ「お前はもう少し疑うという事をだな・・・」

リム「それよりもお兄ちゃん・・・」

あの子・・・」

リムはうとうとしているアルフィミイを指差した。

彼女は器用にもジュースを飲みながら寝ていた。

アルフィミイ「・・・・・・・・・・はっ・・・・・・・・！」

ね・・・寝てなんかいないですよ。

ちゃんと聞いていましたの。」

アクセル「道理で静かだと思っていたが・・・こいつは・・・」

アルフィミイ「むう・・・・・・・・だってさつきからムズカシイ話ばかりですよ・・・」

リム「まあ、そうだよね。」

実はわたしも半分・・・」

ジヨツシュ「お前はもう少し聞け・・・」

リム「・・・はい。」

アルフィミイ「・・・で、結局どういうことですか・・・？」

アクセル「掻い摘んでいえば、

とてつもなく嫌な所からとてつもなく嫌な奴が現れて世界を壊しに来る。

超機人の力じゃそいつには敵わんらしい・・・  
ということだそうだ。」

アルフィミイ「・・・そしてお二人に今一度・・・覚悟を決めていただくために・・・

死にかけてもらった・・・という事でしたのね。  
理由はさっぱりですけど。」

カザハラ「ああ。

彼らを死にかけさせる事と覚悟を決めさせる事に一体何の関係が？」

エリ「正確には二人が瀕死になる程の強力な念を龍虎王が送ったという点ですが・・・」

ブリット「周囲にはそう見えませんか・・・？」

ソフィア「ええ。

あなた達は意識を失っていながらも、  
まるで何かに怯える様に体を震わせ呻き声を上げ続けて

いたわ。」

アクセル「・・・想像したくない光景だな。」

クスハ「龍虎王が私達に送った念は、

これからと湿婆の王との戦いの時に感じるであろう、ある感情であると同時に、

彼ら自身が感じていたもの全てだと言えます。」

エリ「龍虎王が感じていたもの・・・？」

ブリット「ええ、俺達にとっては最も根源的で忌むべき感情・・・

『恐怖』です。」

カザハラ「恐怖だと!？」

エリ「確かに彼らは一定の意思を持つてはいるけれど・・・

彼らが恐怖するなんて・・・」

それは、長年に亘って超機人を研究していたエリ博士にとっても信じがたい事だった。

龍王機と虎王機は機械の塊ではなく、半分は生きているとも言える存在だ。

それに彼らには高度な自己認識能力、言うなれば感情や意思を持っている。

彼らが恐怖や怨恨といった負の感情を持つてもなんら不思議ではないが、

数千年の時を経て戦い続けた彼らの精神力は人間のそれとは比較にならない程高いと推測される。

彼らが恐怖に屈したという事は、折れないはずの心が折れたという事なのだ。

クスハ「彼らは私達に伝えたかったんです。

自分達を感じているモノ、そしてそれが何なのか分からないくて・・・

どうしようもなくなってしまうて・・・」

アルフィミイ「恐怖・・・それに屈するはずのない彼らが、それに屈してしまったのであるならば・・・」

アクセル「・・・暴れるのも無理は無いな。

恐怖にかけられた奴は何をするか分かったもんじゃない・

・・・!」

ブリット「それに彼らは同時に理解しました。

自分達の心を折ったこの感情が、湿婆の王の予兆であるという事に。」

クスハ「それで、彼らは私達に問うことにしたんです。

こんな自分達ともう一度共に戦ってくれるかどうかを。

もし戦ってくれるとしても、

これから訪れる嘗て無い恐怖という感情に私達自身が耐えられるかを。」

エリ「兵士であり、超機人に選ばれたあなた達にそれ程の事をするなんて・・・

よっぽどのことだったのね・・・」

カザハラ「『勝てる見込みはまるで無く、どうしようもなく恐くてたまらない。

そして、それでも立ち向かうのであるならば

君達は自分達以上の恐怖を感じてしまっただろう。

それを知ってなお、共に戦ってくれるか？』

・・・これが龍虎王のメッセージか。」

ソフィア「そして、彼らはそれでもなお立ち向かう事を選んだのね。

その心が折れてなお・・・」

リシュウ「・・・こんな言葉を聞いたことがある。

不屈とは、折れた事がない事ではなく、折れてなお立

ち上げれる事じゃと。」

アクセル「・・・奴らは兵器などではなく、俺達と同じ心を持った戦士であるという事だな。」

アルフィミイ「アクセルがそう言うなんて・・・なんだか不思議ですの。」

アクセル「学んだのさ、ラミア・ラプレスから、な。」

カザハラ「・・・そして、君達も戦うことを選らんだのか。」

クスハ「はい。

龍虎王は私達の覚悟を認め、体を万全の状態にしてくれました。

これからの戦いに向けての彼らなりの気遣いだと思っています。

・・・それに彼らが言うには、湿婆の王は恐怖を広める者だそうです。」

ブリット「そんな奴を黙って見過ごすわけにはいきませんから。」  
リシュウ「（二人とも良い目をしておるわい。」

龍虎王が彼らを選んだのは正しかったのう。

我が先祖も誇りに思うとるじゃろうな。」

クスハとブリット、龍王機と虎王機。

古の戦士達と若き戦士達。

彼ら4人のこの先の戦いに、幸あらんと願いたいものだ。



#### 第4話 彼方からの落とし子 その5（後書き）

今回はぶっちゃけ、第三話解説：龍虎王編です（汗）

データが消えたり、推敲を繰り返したり、内容が煮詰まったりした結果がこれだよ！

前回の投稿から一週間以上が経過してしまいましたね・・・

おまけに字数がもの凄いい事になりそうなので今回も分割せざるを得ませんでした。

龍虎王にも負の感情はあると思っています。

彼らの強さは、力や術ではなく、それを乗り越えようとする心の力なのだと。

だからこそ古代人は彼らに感情を与えたんだと思います。（脳内補

正甚だしいですね・・・）

あとアルフィミイがどうやって寝ながらジュースを飲んでいるのかはご想像にお任せします（笑）

ちなみにレモネードに特別な意味はありません。

当初はイチゴ牛乳でしたし。

ようするにノリで書いただけです（^^;）

#### 第4話 彼方からの落とし子 その6

カザハラ「・・・となると、龍虎王が目覚めたのは全く別の理由であるという事になるな。」

リシュウ「連中に襲われて目覚めたと思っておったが、

それは偶然が重なっただけという事か。」

ジヨツシュ「その偶然に助けられたオレは運がよかったというべきですね・・・」

エリ「ですがこれで彼らの覚醒と、あの敵との関連性が無いことが解ったわ。」

アクセル「同時にアインスト以上に危険な存在が目覚めつつある事も解ったがな。」

アルフィミイ「・・・これから先のことを考えると・・・気が重くなりますの・・・」

リム「そうですね・・・」

一同に重たい空気が立ち籠め始めた。

龍虎王覚醒の謎が分かっただけでもこの様だ。

先行きが不安になるのも無理はない。

ジヨツシュ「・・・とにかく、話を先に進めましょう。

時系列的にはクス八さん達が気を失い、

龍虎王に搭乗して出撃するまでの間の話になります。」

アクセル「・・・確か貴様は最初に襲ってきた連中は連邦軍の兵士だと言っていたな？」

ソフィア「それは本当よ。

照合もしたから間違いないわ。」

アクセル「今までの流れを考えると、クーデターという線はまずありえんな。」

ジョッシュ「ええ。

彼らは何者かのコントロール下にあつたと推測されます。

彼らの通信を傍受しましたが、その内容は支離滅裂としか言いようがありませんでした。」

アクセル「どういった内容だ・・・？」

ジョッシュ「・・・世界の新生とか、静寂がどうか・・・」

ブリット「・・・それではまるで・・・！？」

アルフィミイ「アインスト・・・そのもの・・・」

アクセル「確か・・・エクセレン・ブラウニングはアインストの影響で

一時的ではあるが、お前達と敵対したことがあつたな。

もしや今回も・・・？」

アルフィミイ「それは無理ですの・・・」

アインストがエクセレンを引き込めたのは・・・

彼女の体がわたしのペルゼインの中で修復されたか

ら・・・

体と魂を調べられたから・・・」

リム「ち、ちよつと待って・・・！」

あなたのペルゼインがアインストのモノって事は・・・

あ、あなたは・・・」

アルフィミイ「わたしは・・・その後エクセレンを元にして造られました・・・」

アインストの目的のために・・・」

アクセル「だがアルフィミイはもはやアインストとは関係ない。

最終的には自らの意思でアインスト殲滅の手助けをした

そつだ。」

ジョッシュ「・・・彼女が我々の味方であるならば、それ以上はもう聞きませんよ。

あなたと同じくね。」

アクセル「・・・？」

俺がこいつとつるんでいる理由は聞こうとは思わないのか？」

ジョッシュ「今話すべきことはそれではありませんので。」

そういつた事は、後で個人的に聞かせてもらいますよ。

この事件について、自分なりに理解もしたいので。」

アクセル「（・・・随分ハッキリと割り切る奴だな、こいつは。）」

リム「じゃあ、アインストは無差別に人をコントロールする事は出来なかつたんですね。」

だとすると一体・・・？」

ジョッシュ「・・・オレはアインストについてはまだ殆ど知りませんが、

人知を越えた何かであることぐらいは理解しているつもりです。

ですが・・・それ故に腑に落ちない点が・・・」

カザハラ「どういうことかね・・・？」

ジョッシュ「・・・博士達は、彼らの狙いが超機人だとおっしゃいましたね。」

リシュウ「ああ。」

あやつらが言っておった『守護者のしもべ』とは龍虎王の事じゃ。」

エリ「それを破壊するような旨の言葉も発していましたし、間違いないわ。」

ブリット「・・・当然といえば、当然だな。」

アルフィミイ「アインストがここを狙ったとすれば・・・

それ以外の理由は考えられませんものね・・・」

ジョッシュ「オレにはどうしてもピンとこないんです。

あれ程の力を持つ彼らが、

何故たつた一体のロボットを狙って襲ってきたのかが。」

エリ「成程ね・・・」

何も知らないあなたから見ればそう映るわね。」

ジョッシュ「確かに龍虎王は現代の特機系を遥かに超えるスペックや数々のオーバーテクノロジーを持っていますが、それだけではどうも・・・」

ブリット「・・・龍虎王は古代においてアインストと戦っていたんだ。

そして現代ではアインストの統率者を殲滅する役割の一端を担っていた。」

アクセル「つまり奴等にとって、龍虎王は仇敵と言う事になるな。

だとすれば、そいつの寝首を掻こうとするのは当然だな。

「  
ジョッシュ「両者にはそれほどの因縁があつたのですか・・・」

アルフィミイ「(そう・・・守護者のしもべは・・・脅威でしたの・・・」

嘗てのわたしにとっても・・・)」

クスハ「その・・・さっきジョシユアさんが言っていた操られた人達の事ですが、

彼らは私達が出撃したときには、もう既に撃墜されていますした。

もしかして・・・ジョシユアさんが・・・？」

ジョッシュ「・・・」

ブリット「・・・君は操られていたとはいえ、襲ってくる者に対して皆を守ろうと

抗おうとした、そこに罪は無い。

それに彼らが君を撃墜しようとしていたのであるならば、君が彼らの命を奪ったとしても誰も責めたりは・・・」

ジョッシュ「・・・オレは彼らを撃墜してなどいない。」

ブリット「え・・・？」

カザハラ「ジョシユア君が言っていることは本当だ。

彼はあの猛撃の中、

研究所の盾になりつつ彼らを撃墜することなく沈静化させることに成功したんだ。

あの手際の良さには頭が下がるよ。」

ジョッシュ「相手はヒュッケバインが5体だけでしたし、

これといったカスタムもされていませんでした。

確実に沈静化させるために動力バイパスを狙うのは難しかったですが。」

アクセル「二次災害を未然に防ぎ、かつ相手も無事に済む攻め方を選んだわけだな。」

ジョッシュ「はい。」

彼らが操られているだけなら無闇に命を奪うのは酷だと判断しました。

それに、彼らが生きていれば尋問も可能ですので。」

アクセル「甘いように見えるが、情報が不足した状況ではそれがベストだな。」

ブリット「（だが・・・口で言うほど簡単な事じゃないはず・・・！）」

クスハ「も、もし・・・爆散していたら・・・二次被害どころかパイロットまで・・・」

ジョッシュ「そのぐらいの覚悟は承知のうえです。」

だからといって分の悪い賭けをするつもりはありません。

んよ。」

アクセル「フツ・・・」

中々肝っ玉が据わってるな、おまえ。」

アルフィミイ「（アクセルが人を褒めるなんて・・・！

・・・明日は間違いなく雨ですの）」

ジョッシュ「ですが成功させてもその後油断したのが命取りでした。

パイロットの尋問中に突然現れたゲシュペンスト部隊に沈静化させた全機体は全滅させられましたから。」

アクセル「パイロット共には気の毒としか言えんな、こいつは・・・」

ブリット「今、尋問したと言いましたが・・・彼らと話すことが出来たんですか？」

ジョッシュ「ええ、幸いにも洗脳が解かれたパイロットを確認することが出来たので、

その場で尋問を行っていたのですが・・・

彼は・・・オレの目の前で・・・」

ブリット「（流石にそういうのは割り切れないか・・・

俺だってそうだろうしな・・・）」

アクセル「・・・」

そいつからは何か聞き出せたか・・・？」

ジョッシュ「・・・はい。

自分がテスラ研の近くのエント基地所属の兵士である

事、

哨戒任務中に奇妙なエネルギー反応がありそこに向か

い、

何かを見た後の事はぼんやりとしか覚えていなかった

事、

意識がハッキリしたのは、オレの攻撃の直後であ

る事、ぐらいです。」

カザハラ「・・・彼らは無意識下で操られていた、と考えるのが妥当だろうな。」

ブリット「それに・・・何かを見たとは・・・？」

ジョッシュ「いえ、それはオレにも・・・

巨大な何か、とまでしか聞けませんでした・・・」

アクセル「巨大な何か、か・・・

その見当はついているのさ、これがな・・・」

クスハ「え・・・？」

アルフィミイ「わたし達がここに来た理由は・・・

その事を伝えるためだったのです・・・」

アクセル「テスト研ならば、オレ達のことを知っているからな。

情報を伝えるにはそれが手っ取り早い。」

ブリット「い、いつたいなにを・・・？」

アクセル「・・・こいつだ。」

アクセルはモニターにソウルゲインの戦闘記録映像を映した。

リシュウ「何と・・・！？」

ブリット「こ、これは・・・！？」

アクセル「・・・ここからそう遠くない基地、いや『基地だった』ものの映像だ。

面影はどこにも見当たらないがな。」

アルフィミイ「おそらく操られていた兵士達の基地だったと思いますの・・・」

そこに映っていたものはおよそ理解しがたいものだった。

それは基地全体が巨大な紅い結晶体によって埋め尽くされていた光景だった。

よく見ると、基地の周辺にも同サイズのものがいくつかあるのが分かった。

エリ「これは・・・巨大なクリスタル・・・？」

アルフィミイ「はい・・・わたし達はこのクリスタルのエネルギー反応を感じ、

その場所を探していましたの・・・」

ジョッシュ「そして・・・見つけたのがこいつか・・・！」

アクセル「・・・もし俺達が反応をキャッチした時にこいつが出現したと言う事ならば、

一時間足らずで基地は壊滅した事になる。」



ブリット「な、何だつて・・・!?」

クスハ「でも・・・このクリスタル・・・どこかで見た気が・・・」

アルフィミイ「これは本来・・・アインストの世界にあつたもの・・・」

あの世界ではごくありふれたものですの。」

ブリット「アインスト空間にあつたアレか・・・!」

クスハ「・・・じゃあ、基地を壊滅させたのはアインストなの・・・?」

アルフィミイ「おそらくは・・・」

このクリスタルのエネルギーは・・・アインストのそれと同質のものでしたので・・・」

アクセル「・・・連中が操られたのもおそらくはこいつのせいだろう。」

試しに近付こうとしたが、危うく意識を持っていかれそうになつたからな。」

カザハラ「近付いただけでそうなるのであれば、基地にいた彼らは・・・」

クスハ「・・・」

アクセル「それだけじゃない。」

このクリスタルのエネルギーを浴びたソウルゲインは通信系が一時的に使用不能になつた。

俺が意識を失いかけたのもそのときだ。」

カザハラ「通信系の類はこちらも同じだ。」

彼らが襲撃してきた際、救難信号を発しようとしたが使えなかつた。」

ジョッシュ「長距離通信が繋がらなかつたのはそのせいだったのか。」

アクセル「あと・・・この映像も見てくれ・・・」

アクセルは映像を早回しし、特定の箇所を映し出した。  
そこに映っていたのは、この基地を襲ったあの者達の映像だった。

ジョッシュ「これは、ゲシュペンスト・・・!?」

カザハラ「それかなりの数だな・・・!」

アクセル「ああ、俺も最初は驚いた。

まさか・・・奴らが『こちら側』にやって来ていたとは  
な・・・

クスハ「奴らって・・・

まさか・・・!」

アクセル「地球連合軍特殊鎮圧部隊ベーオウルブズ・・・」

ジョッシュ「・・・もしや彼らもあなたと同じく、『向こう側』の  
?」

アクセル「ああ。

・・・俺が所属していた部隊、  
特殊任務実行部隊シャドウミラーを壊滅させた連中さ。

結果、俺達は『こちら側』に転移せざるを得なくなった。

お前も奴らと戦ったのなら、その恐ろしさは分かるはずだ。」

ジョッシュ「ええ。

彼らは突然何も無いところから出現し、いきなりこちらを攻撃してきました。

・・・あの攻撃力と統率力はまさに驚異的でした。

くやしいですが、反撃の余地すらありませんでした。」

アクセル「何・・・?」

連中は転移してきたのか?」

ジョッシュ「ご存じ無かったと・・・?」

アルフィミイ「わたし達の場合は・・・すでにその場におりました  
ので。」

アクセル「それは・・・本当なのか・・・?」

ソフィア「本当よ。」

それも、シャドウミラーの転移反応でね・・・」

アクセル「なに・・・!？」

クスハ「ど、どういう事ですか!？」

確か、シャドウミラーの転移装置は・・・!」

カザハラ「完全に破壊されたと聞いている。

ギリアム少佐とラミア少尉が立ち会っていたそうだから、間違いないだろうな。」

アクセル「・・・ならば、考えられる可能性は一つだけだな。」

ブリット「知っているのか!？」

アクセル「お前達が破壊したのは転移装置アギュイエウス・・・  
そいつを解析して作り上げたもう一つの転移装置リュケ  
イオスが存在する。」

ラミアからは聞いていなかったのか？」

ブリット「あれが・・・もう一つ・・・!」

アクセル「だがリュケイオスは『こちら側』には来ていない。

アレには装置ごと転移させる力はないからな。

それにオレが『向こう側』で転移した直後に

自爆するようにセットしておいたはず・・・!」

ソフィア「ならば・・・爆破が失敗し、彼らが追撃してきたと・・・  
?」

アクセル「いや・・・自爆そのものは成功したらしい。

その場にいた奴自身が言っていた事だ、まず間違いない  
だろう。」

ブリット「なら、何故『こちら側』に？」

アクセル「・・・解らん、だが転移反応がリュケイオスのものであ  
ると言う事は、

連中がそれを使っていると言う事になる。

もう存在していない筈のものを、な。」

リシュウ「ふむ・・・」

文字通り矛盾しておるな。

これも謎の一つということじゃな。」

クスハ「謎といえば、彼らが転移装置を使ってきたことがそもそも謎です。」

アインストは独自に転移能力を持っていたはず・・・  
なんでわざわざ・・・？」

アルフィミイ「アインストが持っている力は本来・・・

彼らの世界とこちらの世界を行き来するためのもの  
ですの・・・

ですから・・・」

カザハラ「・・・ではアインストの転移は次元転移のみであると・・・？」

アルフィミイ「それに・・・もうアインストの世界は存在しません  
ので・・・

もしその力を使ったら・・・」

アクセル「・・・どうなるかは目に見えているな。」

リム「ど、どうなっちゃうの・・・？」

カザハラ「・・・そうだな。」

クリアーナ君、目隠しして車で目的地まで行けるかい？」

リム「そ・・・そんなの無理に決まってます・・・！」

行けるかどうか以前に、絶対に事故っちゃいますよ！」

カザハラ「つまり、アインストが無理に力を使うことはそういうこと  
なのさ。」

ジョッシュ「辿りつく可能性はゼロに等しい上に、消滅する危険性  
が極めて高い・・・

ということですね。」

アルフィミイ「わかりやすい解説・・・どうもですの。」

アクセル「その話が本当ならば、連中は空間転移にリユケイオスを使  
っている事になるな・・・」

エリ「・・・彼らが転移してきたとするならば、それ以外ないわね。」

「ジョッシュ「空間転移・・・俗に言うテレポーションですか？」  
ソフィア「そうとらえて間違いないわ。」

カザハラ「だとすれば連中はこの世界・・・

それも地球圏のどこかに潜伏していると言う事になるな。

「アクセル「だが連中がそう簡単に見つかるような場所に隠れているとは思えん・・・

奴がついているならばなおさらだ、これがな。」

ジョッシュ「奴、とはあのアルトアイゼンの搭乗者の事ですか・・・？」

確かあなたはベーオウルフと言っていましたか？」

アクセル「あの部隊長の通り名だ。

あの機体の本当の名はゲシュペンストMk-IIII・・・

『こちら側』ではアルトアイゼンと呼ばれている機体だ。

「カザハラ「付け加えて言うと、その『こちら側』のアルトアイゼンのパイロットは

クス八君やブリット君の直接の上司にあたる。」

アクセル「・・・俺は『こちら側』にたどり着いて奴の存在を知った。

もし奴が『向こう側』の奴と同じ存在ならば危険以外の何者でもない。

俺はそれを懸念して何度も奴と戦った。

・・・結果的には俺の取り越し苦労だったがな。」

ブリット「こつちからすれば身に覚えのない事で因縁つけられたようなモンだったからな、

シヤレにならないぞ、全く・・・！」

アルフィミイ「そうですのアクセル・・・

ちゃんと謝ってもらわないといけませんの・・・」

アクセル「（お前が言えた義理じゃないだろうが・・・！）」  
ジョッシュ「・・・さっきの奴の力を見れば、その心配は当然とも言えますが・・・」

その様子では『こちら側』の奴は・・・？」

アクセル「ああ、ただの人間だった・・・」

それが分かっただけでも良しとしないとな。」

アルフィミイ「はい・・・『こちら側』のキョウスケには・・・」

何も手を加えていませんので・・・」

でも・・・おそらく『向こう側』のキョウスケは・・・

・」

ブリット「（そうか・・・！」

確か『向こう側』のエクセレン少尉は・・・！）」

クスハ「（だから・・・キョウスケ中尉が・・・）」

アクセル「だが、先程戦った奴のあの機体・・・」

奴が言うには、どうやらあれは奴自身ではないらしいが・

・

何か知っているか？」

クスハ「・・・私達が龍虎王でゲシュペンスト部隊を殆ど撃墜した直後の話です。」

半壊した1機のゲシュペンストが周囲の残骸や、パイロットの死体を取り込んでいき、

最終的にあの姿になったんです。」

ジョッシュ「オレのガナドールはその時には既に動けない状態になっていましたが

なんとか避わす事ぐらいはできました。

・・・もし撃墜されていたら取り込まれていたのかも  
しれません。」

アルフィミイ「あらゆるものを取り込んで・・・あの姿形に・・・」  
アクセル「なるほど・・・」

お前の機体が大破した理由がベーオウルフではないとい

うのがようやく分かった。

奴があゝの姿を人形といった理由もな。」

アルフィミイ「はい・・・あれはただ僅かな間だけ・・・

あの機体を操るためだけに・・・意思をより伝えやすくするためだけに

作り出された・・・可哀想な人形ですの・・・」

アクセル「・・・あえていうならば人形ではなく、

オートマトン  
マリオネット

傀儡という事か・・・

いずれにせよ木偶には変わらんがな・・・」

カザハラ「過去に、アインストが他の物質を吸収しようとした例はあるにはあるが・・・

明らかに今回は今までとは異質なものだな。」

クスハ「彼らはインスペクター事件時にSRXを取り込もうしました。

結局はあきらめたようでしたが・・・」

ブリット「吸収とは違うが、こちら側の機体が連中に奪取されて

アインストによって変質した例もあった・・・！」

アクセル「俺達はイエッツがPTやAMの残骸を取り込んでいるのを見たが、

そいつは自己を保つ事は出来なかったようだ。」

アルフィミイ「時間をかければ・・・出来ないことはありません・・・

・

しかし・・・無理にしようとすれば・・・」

ジヨッシュ「・・・その話からすると、

アインストは他の物質を変化させたり取り込む事は出

来ますが、

それに伴う変質が短時間の場合、自意識が耐えられないようですね。」

ブリット「だが今回の奴は短時間の吸収でありながら

アインストとしての自己を保っていた・・・！」

アクセル「そして奴は同時に人間であつたベーオウルフとしての記憶を持っていた。」

イカレ具合は進んでいたようだがな・・・！」

ジョッシュ「・・・もしそいつが人間としての思考を持っていたとするならば

今回の事件はただの破壊活動ではなく戦略的行動といえますね。」

リム「え・・・どういうこと？」

よくわかんないんだけど・・・」

ブリット「彼らの目的が超機人ならばただここを攻めればいいだけだ。」

他の基地まで襲う理由はない。」

クスハ「事実、以前のアインストの戦略は物量戦のみで、

その戦い方は本能的なものでした。」

アクセル「・・・今回の作戦はおそらくはこうだろうな。」

まず周囲の基地を潰しジャミングをかけて退路を絶ち、

第一陣は自分達ではなく、その場で洗脳した兵士を向か

わせた・・・」

カザハラ「おそらく龍虎王に対する刺激を極力避けるためだろうな。」

アルフィミイ「アインストが直接赴けば・・・

彼らが目覚めるのは目に見えておりますの。」

アクセル「・・・その後、第一陣と戦っている超機人の不意を突く形で

ゲシュペンスト部隊を転移させて袋叩きにし、

Mk-IIIでトドメを刺すつもりだったのだろうな。

そして基地にいた部隊はテスラ研への注意を逸らすため

のオトリ・・・！」

回りくどいやり方だ・・・！」

ブリット「でもそのためには予めこちらの情報を知っておかなけれ



ばならないはず・・・」

クスハ「どうやってこちらの情報を・・・？」

まさか基地の人達から！？」

カザハラ「確かにあの基地には君達のテスラ研へのフライトプランは伝えてはいたが・・・」

君達の健康状態の良し悪しなんて彼らが知る筈もない筈だ。」

エリ「それに彼らが事前にあなた達が超機人のパイロットだと知っていたのなら、

なおさら仕掛けにくいはずよ・・・！」

リム「じゃあ、どうして・・・？」

エリ「・・・これはあくまで推測だけど、

あのクリスタルがジャミングやコントロールだけでなく、  
広域探知能力を備えていたとするならば・・・」

クスハ「・・・！！」

アクセル「・・・辻褄は合う、な。」

ジョッシュ「・・・それに最後に自壊した奴の言葉が正しければ、

奴らは再び出現してくる事になりますね。」

カザハラ「・・・無差別洗脳・通信攪乱・広域探索能力を備えたクリスタル、

周囲の物質を吸収してパワーアップする能力、

さらには人間のように高度な戦術を組むことが出来る・・・

・

リシュウ「もはや卑怯を通り越しておるのう。」

リム「な、なんとなく物凄いことだけは分かった・・・ような気がする・・・」

アルフィミイ「そうですね・・・お弁当で例えるなら、

豪華ミックス特盛り弁当7割引・・・といったところですよ。」

リム「そ、それは凄い・・・！」

ジョッシュ「その例えで理解するなよ、その例えで。」

アルフィミイ「でも割引はワケアリだったりしますのよ……これが。」

クスハ「え……？」

アクセル「この映像を見てくれ……これが最後だ。」

アクセルはゲシュペンスト隊との戦闘映像を早送りにした。  
……すると、映像にある変化が現れてきた。

リム「え……なにになに？」

別に何も変わったトコないけど……？」

ジョッシュ「よく見てみる……クリスタルの色を……」

リム「あ！

紅から蒼になっている……！

でも、色が変わったぐらいで別にこれと言って……？」

アクセル「……よく観てみる。」

色の変化に伴って、ゲシュペンスト共の動きが鈍くなっているのさ。」

アルフィミイ「それに……あのエネルギーも徐々に下がっておりますの。」

アクセル「……最後までは撮ってはいないが、

おそらく今頃、あのエネルギーは消え失せている筈だ。」

ソフィア「あのクリスタルの力はそう長くは保たないということね。」

アクセル「それだけじゃない。

ベーオウルフが龍虎王に対してとった行動は、作戦に反している……

作戦失敗ならば追撃などしても無意味だからな。

おまけに俺を見るや否や、目標を無視して俺を潰しにかかった。

制限時間付きの身であるにも関わらずに、な。」

ジョッシュ「よほどの自信があつたか、あるいは判断も出来ないほど錯乱していたのか・・・

いずれにせよ、奴が出てきたおかげで連中の事をここまで分析する事が出来ました。

それに彼らの洗脳能力もそう強い物ではなさそうですしね。」

カザハラ「一見無敵に思える彼らの能力は実のところ不完全で穴だらけであり、

自身の感情や情緒も制御できていない、と言うわけか。」  
アクセル「それも一時間足らずで分析解ってしまうあたり、たかがしれるな。」

リム「・・・つまり、大した事ないってことなの・・・？」

ジョッシュ「弱点がハッキリしたって事だよ。

いずれにしろ脅威である事には変わらないんだからな。

「  
アルフィミイ「ですがそれは『今』の彼らの話ですの・・・

・・・いつまでも・・・欠点だらけのままのはずがありませんの・・・」

リム「え・・・？」

アクセル「『向こう側』に居た時の奴の力はあるものではなかった・・・！

単純にパワーもだが、奴自身の能力自体も下がっていた。

・・・その気になれば奴だけでも研究所を制圧できた筈

だ。」

ジョッシュ「それをせずに、回りくどい方法で攻めてきたと言う事は・・・」

アクセル「・・・奴はまだ本調子ではない。

だからこそ、傀儡や僕を使って攻めてきたのだらう。

ならば攻め込むなら今だが、奴らの居場所が分かん限

りはそれも出来んな……」

リシュウ「……厄介な連中じゃのう。」

アルフィミイ「それに……気になることが……」

でもひょっとしたら気のせいかもしれませんの……

以前とは随分と変わってしまいましたので……」

アクセル「……ここで聞かなければ余計に気になるだけだ。

言ってみろ。」

アルフィミイ「彼らから……思念を感じましたの……それも複  
数の……」

ブリット「なん……だと!？」

クスハ「確かに私達も感じたけれど……そこまでは……」

ジョッシュ「何故そこまで驚いているんですか？」

敵は複数でしたし……当然では？」

エリ「アインストは我々とは違って、

種全体が一つの意識を共有しているの。

むしろ彼女のように自分の意思を持っている存在のほうが特  
別なのよ。」

アクセル「複数……か……」

どういったものか分かるか？」

アルフィミイ「……少なくとも3つ……」

歪んだもの……揺らぐもの……そして……

彼方より出でしもの……」

アクセル「……漠然としていて分からんな、こいつは。」

アルフィミイ「わたしにも……幽かにしか分からなくて……」

アクセル「……だがこれで確証はできた。

確固たる確証が、な。」

リム「え……それはどう言う事ですか……？」

全っ然分かんないんですけど……」

カザハラ「本来一つの意味しか持たない連中から複数の意思が感じ  
られたって事は、

連中は単独ではなく、複数の存在が共闘している可能性が高いって事だよ。」

アクセル「それも・・・同じような連中が、な。」

アルフィミイ「そうですね・・・  
と・・・

今までのがただのバニラアイスのシングルだとする

今回のチョコとストロベリーを足してさらにキャラメルソースをかけた感じになりますの」

リム「そ・・・それはビックリだ・・・！」

ジヨツシュ「だからそういう説明で理解するなよ・・・！」

アクセル「あとお前は少々食い物で例えるんじゃない・・・！」

アルフィミイ「むう・・・だって食べたいんですもの・・・」

リム「そうよね・・・久々に食べたいなあ・・・」

アイス納豆ストロベリーソースがけ・・・

おいしかったよね、お兄ちゃん」

ジヨツシュ「・・・！！」

あ・・・ああ。」

ジヨシュアは冷や汗流しながら、苦笑いで答えた。

今まで常に冷静であった彼がうるたえたのを見て、周囲は驚かざるを得なかった。

・・・特にごく一部の者は、彼女の言うそれがどんなものか想像できてしまった。

ブリット「（彼女・・・ひょっとして・・・もの凄い味音痴なのか・・・！？」

そしてジヨシュアさんは・・・）」

クスハ「・・・納豆アイス

フフ・・・健康に良さそう・・・」

ブリットは見逃さなかった、クスハの一瞬の黒い笑みを。

ブリット「（クスハ　ッ！

まさか混ぜる気か！？

アレに混ぜる気くあ　　ッ！！？）」

リム「え？

納豆アイスじゃなくてアイス納豆だよ？

まず納豆を・・・」

ジョッシュ「・・・リム！

その話はまた後でしょう！

これ以上話がそれるのは良くないからな！

なっ！」

リム「う・・・うん。」

ジョシュアは朗らかな顔と声でリムに言い聞かせたが、その目は血走っていた。

周囲には蘇るトラウマを何とかして押さえ込もうとする彼の必死さがいやおうなしに伝わってきた。

アクセル「（同情を禁じえんな、こいつは・・・）」

アルフィミイ「（でもちよつと面白かったですの・・・）」  
ジョッシュ「えーと・・・」

まず、目的が同じ者同士や似通った者同士が徒党を組むことは

別に珍しい事では無いと思うのですが、  
話を聞くとところによると、以前のアインストでは考えられなかった

事なのでしょうか？」

エリ「え・・・ええ、そうよ。

彼らの形態は多種多様だけど、

ほぼ全てのアインストは一つの意味、一つの目的の元で行動していたわ。

このあたりは、さつきも説明したわよね？」

カザハラ「例えるならば、蜂や蟻などの社会性昆虫や群体生物に近い。

一つの群れが一つの生命体・・・

いや、プログラムとして機能している。」

リシュウ「じゃが奴らの群れは一つのみ。

そして奴らにとって他の連中は自らを進化させるための餌・・・

共存などありえぬはずじゃった。」

ソフィア「・・・表現は悪いですが、共食いの結果とは考えられませんか？

つまり、互いに吸収しあつて・・・」

アルフィミイ「いえ。

それならば・・・感じ取れる思念は一つだけですよ・

・

でもそうではありませんでしたので。」

アクセル「最初はただ奴が強化しただけと踏んでいたが・・・

複数のアインスト共が組んでいたとなるならば話は違ってくる。

今回出てきたあいつは俺達が遭ったアインストとイエッツトの能力を備えていたからな。」

ジヨツシュ「先程の会話にもありましたが、

そのイエッツトというのは、アインストの亜種のようなものでしょうか？」

アクセル「簡単に言えば、アホな科学者共がアインストを捕らえて兵器運用しようとして

色々いじくった結果、暴走した奴の事だ。

とつくの昔に倒した筈だったんだが、な・・・」

アルフィミイ「あなたが見たと言うあの驚異的な吸収能力も本来は彼らのもの・・・」

少なくとも以前のアインストには無かったものの。」

アクセル「おまけにあのクリスタル・・・あれは俺達も始めて見た。」

あんなものはベーオウルフにもだが、アインストにもイエツトにも無かった。

だとすればおそらく・・・」

アルフィミイ「ええ・・・、わたしが感じた3番目の力だと思えますの・・・」

クスハ「はつきり言つて・・・彼らの能力は未だに未知数・・・今回出てきたのが全てとは言い切れないんです。」

ジョツシュ「・・・その3番目は一体何処から？」

アクセル「・・・それは俺達にも分かん。」

イエツトのように改造でもされたのか・・・

ベーオウルフのように別の世界からやってきたのか・・・

「リム「謎が謎を呼ぶ・・・ってやつですね。」

カザハラ「と言うより、今回の事件では分かった事よりも

分からない部分が圧倒的に多い。

龍虎王の敵、共闘するアインスト、存在しないはずの転

移装置・・・」

ブリット「どれも今回だけでは結論を出せそうにありませんね。」

ソフィア「当然よ、なにしろ情報が少なすぎるわ。」

アクセル「だがこの話し合いもさほど無意味ではない。

・・・地球圏に再び混乱が起こる事は間違いないのさ、

これかな。」



#### 第4話 彼方からの落とし子 その6（後書き）

前回に引き続いて解説編です。

今回はアインスト（？）編になります。

・・・というより本当は一つに纏めていた物を分割して色々推敲を繰り返した結果、かなりの量に・・・

ジョッシュやリムのように全く知識がない人がいるからそのたびに軽く解説しなくちゃいけないので、

リムは会話の内容を聞き取るだけで精一杯でダンマリ。

ジョッシュは必要最低限の事以外はバツサリと割り切り、そのうえで解説&分析をしています。

なんだかこの話を進めるほどにジョッシュの超人スキルがどんどん上がってく・・・

『割となんでもテキパキ出来る苦勞人』のつもりで進めていたのにどんどん底上げされていくなぁ・・・

一応次回で第4話&第4話解説：完結編の予定です。

アクセル達の所存をどうするかが現在の悩みどころです（^^;）

追記：3/12/2009 解説パートをさらに追記、ギャグパートも追加しました。

#### 第4話 彼方からの落とし子 その7（前書き）

誠に勝手ながら、前回のパートにさらに解説部分&ギャグパートを追記致しましたので、お読みになられていない方は、そちらを読んでからこちらのパートを読む事をお勧めします。

申し訳ございませんm（――）m 03/12/20

09

#### 第4話 彼方からの落とし子 その7

ジョッシュ「カザハラ博士・・・これからどういたしましょうか。

各種データの採集はともかくとして、研究所がこれでは・・・」

カザハラ「復旧には当分時間がかかりそうだな。

その間はどこか南の島でバカンスといきたいが、そうもいかんだろううしな。

軍の事情聴取とここの調査で当分は寝る暇もないな。」

ジョッシュ「では軍の方へ連絡を入れるのはいいとしても、

ここの調査をするとなればそこそこの基地でないといけませんね。

それなりに機材が必要になるでしょうから。」

カザハラ「その心配はない。

北米のラングレー基地に連絡を入れてくれ。」

ジョッシュ「ラングレーに・・・？」

随分と遠いですが？」

カザハラ「先日、あそこからとある依頼があつてね、

予算も機材もそれなりにあるらしいからな。

それにデカイ基地だ、なんとでもなるだろう。」

ジョッシュ「・・・分かりました。

先程の話が確かならばもうジャミングは収まっているはずですから、

検証も兼ねてやってみます。」

カザハラ「ああ、頼むよ。

くれぐれも、気をつけてな。」

ジョシユアはその場を離れ、通信装置のある管制塔の方へ向かった。

ブリット「ラングレー基地から・・・？」

「いったいどんな？」

クスハ「と言うか、良いんですか？」

依頼とこの調査は別物だと思うんですけど・・・？」

カザハラ「いや、この調査も依頼とはあながち無関係とは言えないかもしれないからな。」

ブリット「それは・・・どういう・・・！？」

カザハラ「・・・先日、ラングレー基地の近くで転移反応があったらしいんだ。」

ブリット「・・・！？

まさか奴らの？」

クスハ「確か今、あそこには教導隊のみんながいるって聞いていましたけど・・・

もしかして・・・！」

カザハラ「いや、彼らなら多分無事だよ。

依頼を入れてきたのはカイ少佐だったからな。

それに話によれば依頼を入れて来たのは転移反応があつ

てから

数時間が経った後だそうだしな。」

クスハ「よかった・・・」

ブリット「その様子だとこちらとは違いますね・・・

となると転移してきたのは奴らでは無い、と？」

リシュウ「いや、詳しい事は僕らにもよく分かん。

何でも機密事項らしくての。」

アクセル「・・・もしや転移者か？」

カザハラ「それを確かめるためにも、だよ。」

エリ「ところで、龍虎王のことなんだけど・・・」

ブリット「軍に接收されるでしょうね。

おそらく、今の追撃任務にあてがわれるかと。」

カザハラ「今まで通り『原因不明の機能停止』なんて言い訳は通じ

ないだろうな。

「これだけ暴ればあの伊豆のタコ頭にだってバレるさ。」  
エリ「・・・おそらくケネス指令は最初からこれが狙いだっただのかもしれない。」

過去の経験上、再び目覚める可能性が高いと踏んだのだと思います。」

カザハラ「・・・で、その上で向こうで運用する、か・・・」

ブリット「見た目に反して細かい奴ですよ、まったく・・・」

クスハ「・・・まあ、結果的に私達と行動できるんですから、いいじゃないですか。」

リム「・・・軍の人ってそういう所が狭く苦しいそうですね。」

わたしだったら、きっとまいっちゃうな。」

クスハ「私も最初は・・・」

でもすぐに慣れちゃいました。」

ブリット「・・・そういえば、さっきのジョシアさんの話なんだけど・・・」

詳しく聞かせてくれないか？」

リム「え・・・？」

何をですか？」

ブリット「・・・いくらあれがカスタム機だからって、

5対1で、動力部のバイパスのみを破壊し、それを攻撃を受けながらやるなんて、

俺にでも出来るかどうか・・・」

リム「・・・」

ブリット「あの驚異的な戦闘技術・・・」

武装カルト団如き相手じゃあそこまで出来るようになるて成れる筈がない。

その理由を聞かせて欲しいんだ。」

リム「・・・」

リムは少し沈黙したが、暫くするとその重い口を開いて話し始めた。

リム「・・・ここに来たのが一ヶ月前、南極を出たのが半年前って  
言いましたよね？」

私達「・・・ここに来るのに丸々五ヶ月かかったんです。」

クスハ「ご、五ヶ月も!？」

じゃあ、その間に・・・!？」

ブリット「だが半年足らずでそこまで出来るものなのか!？」

リム「生きるため・・・ここに来るために・・・」

・・・食料もお金もあの頃は殆ど無かったし・・・」

クスハ「も、もしかしてジョシユアさん・・・南極を出たときに持ち出したものって・・・」

リム「私とガナドール・・・それにほんの少しばかりの食料だけでした。」

ブリット「そ、そんな無鉄砲な・・・!」

クスハ「い、いくらなんでも無謀すぎます・・・!」

アクセル「だが今のあいつを見る限り、そう言う事はしそうななさそうだが・・・!？」

アルフィミイ「どちらかといえば・・・計画性がありそうなタイプです。」

リム「お兄ちゃん・・・今ではああだけど、

昔は頭に血が上りやすく、口より先に手が出ちゃうタイプだったんです。」

けっこう荒れていた時期もありましたから・・・」

アクセル「想像できんな、こいつは・・・」

リム「でも・・・この半年ですっかり変わってしまったんです。」

お兄ちゃんは自分が出来ることは何でもやりましたから。」

アルフィミイ「何でも・・・?」

アクセル「・・・PTの操縦できて、それを所持している奴が出来ることは・・・」

強盗か傭兵のどちらかだな。

ましてや命懸けだ、何をするか分かったモンじゃないが・

・

．．．まあ、妹がいる手前、出来るのは後者だけだったろうが．．．」

リム「お兄ちゃんが本当は何をやっていたのかはわたしにもわかりません。」

仕事をやっていた間は、わたし達は別の安全な場所にいましたから．．．」

アルフィミイ「（わたし．．．達．．．？）」

アクセル「．．．傭兵つてのは技術は元より、

互いの信用や一定以上の対人能力を求められる面が強い。  
一匹狼じゃ食い殺されるのがオチだ。

出しゃばりはせずに、チームの和を乱さない奴が生き残

りやすい。」

アルフィミイ「ようするに、よく気が利く下っ端と言う事ですのね。」

ブリット「．．．妙に気配りが聞いていたり、手際がいいのはそのせいか．．．」

アクセル「それに時によつては仲間が死んだり、敵になったりなんてのは

俺やお前達のような軍人より遙かに多かった筈だ。

．．．割り切らなければ生き残れないのさ、これがな。」  
クスハ「なら．．．ああいう性格になるのも．．．」

ブリット「だが．．．叩き上げの戦闘技術ではあそこまでは．．．」  
リム「．．．多分、あの頃は一番戦いが激しかったからだと思いません。」

ブリット「そうか．．．！」

半年前は修羅やNDC残党との抗争が一番激しかった時期、

ゲリラ戦が一番多かった時期だ……！」

アクセル「その中で生き残ったのであれば……戦闘技術が上がるのは当然だな。」

ましてや一対多数のシュチュエーションは最も多かっただろうしな。」

アルフィミイ「それに彼には護るべき人が……あなたがいましたものね。」

アクセル「技術向上の一役になっていたのは間違いないな。」

リム「そう……お兄ちゃんは……全部わたし達のために……」  
クスハ「クリアーナさん……」

アクセル「……お前のため、と言ったな。」

詳しく聞かせる、中途半端なのは好きじゃないのさ、これがな。」

ソフィア「……彼らの目的はガナドールの動力部の解体よ。」

アクセル「解体だと……!？」

あの機体……曰く付きなのか？」

カザハラ「……彼とシンクロしているんだよ、原因不明のね。」

それに、南極にある同じものが妹のクリアーナ君と、ね・

……」

アルフィミイ「呪縛……あるいは枷のようなものですか？」

それを解くために……」

アクセル「成程な……テスト研に来たのはそのためか……」

なにか重大な副作用でもあるのか……?」

エリ「そ、それは……」

エリ博士はその事を言うのを躊躇った。

それを話す事は、彼女達を傷付けるのと同じだと思っていたからだ。

ジョッシュ「……それならオレが話しますよ。」

ソフィア「ジョ、ジョシユア君……!？」



アクセル「・・・聞いていたのか？」  
ジョッシュ「一部始終、ね。」

もちろん仕事はちゃんとやりましたよ。

ここの近くの基地に連絡を入れてくれるそうで、

1時間もすれば救援が来るそうです。

あとついでに、シエルターに避難していた職員達に直に救援が来る事を話して、

使えそうなパーツやデータの回収をするように指示を出しておきました。」

カザハラ「あ、ああ、それは結構だが・・・」

リム「あの・・・お兄ちゃん・・・」

これは・・・その・・・」

ジョッシュ「・・・別に隠す必要は無いさ。

俺が傭兵をやっていたのは事実だし、否定できないしな。

まあ、話す機会が無くて説明不足だったことは認めるよ。」

エリ「でも、いいの？」

レース・アルカーナの弊害・・・

そのことをここで話しても・・・？」

ジョッシュ「博士達があえてその部分に触れないように話してくれていたのには感謝します。

ですが、ここまで来て話さないのはフェアじゃないですから。」

リム「わたし達も・・・そう思います。」

リシュウ「そうか・・・」

クスハ「博士達は知っていたんですか？」

その・・・副作用について・・・」

カザハラ「副作用というか、影響だな。

・・・クリアーナ君にはそれがハッキリと出ているんだ。

「ブリット「え．．．!?」

クスハ「クリアーナさんに．．．!?」

リム「．．．．．」

アクセル「．．．だがそうには見えんが．．．」

ジヨツシュ「見れば分かりますよ。

．．．クリス、リアナと話せるか？」

リム（???）「いや、別に問題ないけどさ、アニキ。

いきなり話振られてもこっちも困るんだよね。

ずっと黙っているのって結構キツイんだからさ。」

ジヨツシュ「いきなり代わるなよ。

せめてワンクッション置いてだな．．．」

リム（???）「ハハ、いゝじゃん別に。

どうせすぐに慣れるよ。」

カザハラ「いやいや、私達だってまだ慣れていないよ。」

クスハ「こ、これって．．．!?」

アルフィミイ「まるで別人みたいですの．．．!」

ソフィア「．．．俗に言う二重人格よ。」

ブリット「に、二重人格．．．!?」

リム（リアナ）「えゝっと、一応自己紹介するね。

アタシはリアナ、さっきまではクリスだよ。

あ、そっちの自己紹介はいいから、全部聞こえて

いたし。」

クスハ「は、はあ．．．」

リム（リアナ）「あと．．．二重人格って言い方はやめて欲しいな。

アタシ達、二人いるわけだし。」

ブリット「それって．．．どう違うのか．．．?」

リム（リアナ）「んゝ．．．まあ、簡単な言い方をすれば、

二人で一人用のゲームをかわりばんこでやっているような感じかな。」

アルフィミイ「分かりやすいご説明、どうもですの。」

（でも・・・この感じ・・・なんだかモヤモヤしますの・・・）」

アクセル「影響とはそういう事か・・・

確かにこれは問題だな。

ということはお前も・・・？」

ジョッシュ「・・・いえ、オレにはそういった影響はまだ出ていません。」

ですがいずれは何らかの形で出てくるでしょうね。

オレがガナドールに乗り続けている分、そう遅くはない筈ですから。」

アクセル「・・・それを承知の上で乗り続けているという事は、

お前自分を・・・！」

ジョッシュ「ええ、オレへの影響のプロセスがリム達にも応用できるかもしれませんがね。」

リム（リアナ）「でも・・・アニキには悪いけど、

正直、今のままで構わないんだよね、アタシ達。

もうずっと昔から二人だったし、どっちがこの体の本当の持ち主だから

分からないんだから。」

リム（クリス）「（リアナ、わたしもってお兄ちゃんに言って。）」

リム（リアナ）「クリスもそうだってさ。」

ジョッシュ「・・・だがこれから先はどうだかな。

今はいいかもしれないが、いずれどうなるか・・・」

カザハラ「クリアーナ君の例を見る限り、精神になんらかの影響を及ぼす可能性が高いな。

人格の変貌・・・記憶の混乱・・・精神の崩壊・・・」

アクセル「・・・どう考えてもいい方向には行きそうになさそうだな、こいつは。」

リム（リアナ）「なんか嫌なんだよね、そういう考え方。」

まるでアタシ達がビョーキみたいじゃない。

アタシ達はこれがフツーなのにな。」

クスハ「でも、病気じゃないにしても普通じゃありませんよ……」  
リム（リアナ）「……………」

事実を知った一同は、リムに対してある種の哀れみと恐怖が交わったなんとも言えない視線を向けた。

リム（クリス）「（リアナ……なんならわたしが代わるよ?）」  
リム（リアナ）「（大丈夫だよ、クリス。」

ある程度予想はしていたからさ、こういうのは  
それにこういう空気、クリスじゃ耐えられない  
でしょ?）」

リム（クリス）「（で……でも……リアナだって……）」

クリアーナ・リムスカヤの中にいるクリスとリアナは性格はほぼ真逆といっていい。

クリスは引っ込み事案で臆病であるが、リアナは勝気で思った事は遠慮なく口にするタイプだ。

彼女らには上下関係などないが、リアナがクリスを守っている傾向が強い。

だが一方でクリスが突っ走りがちなりアナを上手くサポートする場面もある。

だからこそ彼女らは誰よりも互いの事を理解し合い、誰よりも互いの事を心配し合っている。

それ故にこういった意見の衝突が起こる事も屡見受けられる。  
もっとも、傍から見ればただ黙っているようにしか見えないが。

アクセル「……急に黙ったな。

どうかしたのか?」

ジョッシュ「2人で会話しているんですよ。

・・・まあ、よくある事です。

・・・リム、大丈夫か？」

リム（リアナ）「いやさ。

クリスが代わろうかって言い出したんだよ。

さつきから空気悪いしね。」

クスハ「ご・・・ごめんなさい・・・その・・・」

リム（リアナ）「クリスにも言ったけどある程度は想定していたから大丈夫だよ。」

ジョッシュ「いや、オレが悪かったな・・・

やはりまだ黙っていたほうがよかったかもな。」

リム（リアナ）「それは違うよ。アタシは今話せてよかったと思っているよ。

後々面倒になるんだし、ハッキリさせたほうがい

いじゃない？」

ジョッシュ「お前がそうなら・・・それでいいが・・・」

リム（リアナ）「それに、アニキ言ってたじゃない。

どこかに隠れていれば嫌なことはしなくても良い

かもしれない。

でもそれでいいのかって。」

ジョッシュ「・・・」

リム（リアナ）「アタシは嫌だよ。

そんな生き方はしたくないよ。」

アクセル「・・・随分と勝気な奴だな、こいつは。

それに根性もあるな。」

リム（リアナ）「でも、アンタ達は隠れたほうがいいんじゃない？

さつきの話、ずっと聞いていたし、アンタ達の事

も見ていたけど、

お尋ね者が何かじゃないの？」

アルフィミィ「・・・おまけに結構鋭いですのね。」

リム（リアナ）「こうして話している間にも軍はどんどん近づいているよ。」

「どうするの？」

アクセル「・・・察しの通り、俺達は軍の人間ですらない。

と言うより元々連中の敵だったのさ、これがな。

それにベーオウルフの事もある・・・

奴を探し出して決着をつけねばなるまい。」

ジョッシュ「・・・どの道、ここは去るしかない、と言う事ですか。」

アルフィミイ「わたしと致しましては、できれば皆さんと一緒にいたいのです・・・

今回の件、アクセルとわたしだけでは限界がありますので。」

カザハラ「こちらとしては出来るだけ戦力が欲しいところだから利害は一致するが・・・」

アクセル「それができれば苦労はせん。

・・・とつとと行くぞ、アルフィミイ。」

ジョッシュ「でもあては無いのでは？」

彼らの所在の手がかりはゼロなんですから。」

アクセル「・・・アルフィミイは、幽かだが連中を感じ取ることが出来る。」

以前もそうやってイエッツトを追跡していた。」

ブリット「成程・・・あの時はそうやって・・・！」

アルフィミイ「心配御無用！」

「というやつですの。」

アクセル「・・・それで・・・連中の居場所は分かるか？」

アルフィミイ「・・・・・・・・東・・・そう・・・ここからずっと東の方・・・」

アクセル「相変わらず漠然としているな、こいつは。

もっとはつきり分からののか？」

アルフィミィ「分かりませんの・・・」

彼らも以前とはまた変わってしまいましたし。」

ブリット「ここから東か・・・」

・・・ちょうどラングレー基地があるな。」

アルフィミィ「あら、偶然ですね

ならここはひとつ予定を変更して皆さんと一緒  
と言う事で・・・」

アクセル「それが出来んから単独行動するんだろうが・・・

大体お前・・・本当に東なのか？

単に楽しただけじゃないのか？」

アルフィミィ「別に信じなくても構いませんのよ？

北でも南でも西でもお好きなほうに・・・

でも・・・カピカピに干からびて野垂れ死んでも知

りませんから。」

アクセル「・・・信じるも信じないも、オレにはお前の勘意外にア  
テなど無い。

それに野垂れ死になど真つ平ゴメンだ。」

アルフィミィ「ふふ・・・」

分かってればそれでいいですよ。」

ジョッシュ「（苦労してるんだな・・・彼も・・・）」

アルフィミィ「と言うわけで、私達のほうはよろしいですよ。

あとはそちらのご都合がよろしければ・・・」

リム（リアナ）「えーっと・・・もう一度確認するけど、

あんたたち一応お尋ね者なんだよね？」

アルフィミィ「まあそう言えなくもないようなあるような感じだ  
の。」

アクセル「・・・以前は敵対関係にあったが、今はこちらにはその  
意志は無い。

だが向こうは聞く耳持たん・・・といったところだな。」  
リム（リアナ）「ラングレーって言ったら北米最大の基地じゃない。

鴨が葱背負って鍋に飛び込むようなもんじゃ・・・

「ブリット・・・あれ？それって鶏じゃなかったっけ？」

クスハ「えーっと・・・確か燕だったような・・・」

リム（リアナ）「そ、そう言われると、何か自信が・・・」

アルフィミイ「ふふ・・・三人とも間違いですの・・・

正解は・・・番組の最後」

リム（リアナ）「ち、ちよつと今教えてよ！

気になるじゃない！」

アクセル「鴨で合っている・・・

と言うより茶番はそのぐらいにしろ。

俺達がラングレーに出向くのは元々無理な話だ、これが

な。」

アルフィミイ「むう・・・」

カザハラ「いや・・・あながち不可能じゃないな。

君らの人相は殆ど割れていない。

それに2人とも、データ上では既に死亡扱いになってい

る筈だからな。」

ジョッシュ「なら話は簡単ですね。

こっちで個人情報でっちあげるだけで済みますから。

」

カザハラ「それに、君達がいればこちらとしても助かる面が多そう  
だ。」

アルフィミイ「あら・・・なんだか無理じゃないみたいですの。

アクセル・・・」

アクセル「・・・本気か？

こいつはともかく俺は・・・」

カザハラ「本気も何もこっちから依頼したいぐらいだ。

滅多にない機会だからな。」

エリ「私としてはあなた達の機体のデータが



超機人解析の何らかの糸口になるのかと思っています。」

ソフィア「それに、あなた達に敵対する意思は無いのであれば、

申し出を拒む理由は無いわ。」

クスハ「た、確かにそうですが……」

ブリット「いや……でも上層部<sup>うえ</sup>がなんて言うか……」

ジョッシュ「まあ、誤魔化せばあとはどうにでもなりますよ。

バレたときには巻き込むなり弱みを握るなりして口を封じれば良いだけの話ですから。」

ブリット「（い、今……さらつと凄い事を言った気が……）」  
アルフィミイ「じゃあ、わたし達もごいっしょにと言う事で。

おひとつよろしくですの。」

ジョッシュ「ですが……二人が協力者という事でなんとか誤魔化せ  
ても……

あの機体のほうは……」

リム（リアナ）「うん……

あれが目印って言うんならなおさらだね……」

彼らとの同行を阻む最大の問題は、彼らの機体そのものである。

彼らの機体はあまりにも目立ち、一度見たら忘れないほどの強烈な  
インパクトがあり、

なおかつ連邦軍にはしっかりとデータが残っているからだ。

搬送するのは困難を極めるだろう。

アルフィミイ「ああ、それでしたら心配後無用ですの……

それっ  
」

アルフィミイの一声で、ペルゼインは勝手に動き出し、ソウルゲイ  
ンの後方に立った。

そして、埋もれるかのようにソウルゲインと一つになっていった。

エリ「ペルゼインが・・・ソウルゲインに・・・！」  
カザハラ「こいつはいたい・・・！」

アルフィミイ「このペルゼインはアクセルの巨人の一部を使って創り上げたものです。」

ですからその逆もできますのよ。」

リシュウ「器用というかなんというか・・・」

アクセル「・・・で、どうするつもりだ？」

いくらペルゼインを隠せても、俺のソウルゲインは目立つぞ？」

アルフィミイ「それはそれ。」

ちよつと分割して適当に誤魔化せば・・・」

アクセル「何を言い出すかと思えば・・・」

・・・ソウルゲインはそう簡単に分解できるものじゃ・・・」

アクセルが説教をしている最中、ソウルゲインは音を立てて崩れていった。

正確に言えば各部パーツごとに分けられて重力に逆らえずに落ちたのだ。

さらにそれぞれのパーツはソウルゲインとはまるで違う・・・  
どちらかと言えばグルンガスト系の色彩に変わっていた。  
一同は・・・特にアクセルは開いた口が塞がらなかった。

ジヨツシュ「・・・出来ましたね、分解。」

ブリット「ご丁寧に擬装用のペイントまで・・・」

カザハラ「これなら・・・まあ、運べるな・・・」

アクセル「おい・・・」

アルフィミイ「ああ・・・これはあれですの。」

さっき一つになるときちよちよいと・・・」

アクセル「ハア・・・」

アクセルはため息をつき、頭を抱えて大きくうなだれた。

ジヨツシュ「・・・苦労しますね。」

アクセル「お前が言っていると嫌味にしか聞こえん・・・」

・・・だが彼の苦労はここから始まるのだ。

#### 第4話 彼方からの落とし子 その7（後書き）

ようやく第4話完結です。

1パート一週間のペースで書き上げているつもりなのですが、中々上げられなくて自分としても辛いです（泣）

今回はジョッシュの苦労話と

リムもとい、クリスとリアナの話です。

原稿段階ではジョッシュは裏でかなり黒い仕事をしていたような事を書くつもりでしたが、書けば書くほどジョッシュじゃなくなるのでそのあたりは没にしました。

アクセル達をどうやって続投するか悩んでいましたが、ペルゼインの力とアルフィミイの駄々を持つてすれば造作も無い事でした（笑）この辺りはかなりツッコミ所満載なのでツッコミたい方は遠慮なくツッコんで下さい（^^;）

今回は舞台を変えて宇宙の予定。

前々回出てこなかった彼らが出てくる予定なので楽しみにノシ

## 第5話 a 交わる『刻』 その1

<????>

ベーオウルフ「ハアアア・・・

フウウウウ・・・

アクセルウウ・・・アルマーめ・・・

だが、次こそは・・・この手で・・・

ククク・・・フフフフ・・・ハハハハハ・・・」

男は激しい痛みと怒りに襲われていた。

だがその顔は不気味な笑みを浮かべながら古傷を掻き毟っていた。

人の力を超えた彼の指は容赦無く彼自身の肉を抉り、骨を砕き、血と髄液が床一面に滴る。

だが彼はやめようとはしない。

仇敵に再び巡り会えた歓喜とそれへの殺意がそうさせるのだ。

???「・・・そのくらいにしておきな、大将。

見ているこつちまで痛くなる。」

ベーオウルフ「・・・!？」

おまえ・・・ら・・・」

薄暗い空間、その中にいるのは彼だけではない。

彼以外の二つの意思が存在する。

現れたのは彼と似た姿をした青年、そして数mはあろう異形の魔人だ。

???2「貴様がしでかした事は・・・

妨害分子の排除・・・という点から見ても大きく外れている・・・」

???「ま、アイツがあんたにとってどういう奴なのかは

俺達もよく分かっているつもりだがな。」

ベーオウルフ「・・・ならば・・・何故？」

???「おいおい・・・」

あんた仮にも元軍人でおまけに部隊長さんだったんだろう？

『任務に私情を持ち込むな』って下っ端だった俺も散々聞かされたモンさ・・・

ま、俺達やもう軍人でも人間でもないんだけどな。」

ベーオウルフ「・・・」

???2「確かにあれらは・・・我等にとって障害に成りえるかもしれぬ・・・」

???「だが俺達にはそんな余裕も時間も無い事ぐらい解っているだろ？」

???2「破滅の刻は迫りつつある・・・」

その前に我等は本懐を・・・」

ベーオウルフ「そのために・・・」

邪魔者を・・・目障りな奴を・・・叩き潰して何が・

・・・ワるイ？

奴は・・・やつGa・・・Yaツの・・・！」

???「ハア・・・」

頭冷やせよな、大将。

思考が乱れてるぜ？」

???2「我等は・・・未だに完全ではない・・・特に貴様は・・・」

ベーオウルフ「それが・・・な・・・ん・・・」

男は気を失い、そのまま倒れた。

傷口から溢れ出る大量の血液のせいだろうか。

否、原因は別にある。

「あーあ・・・またぶつ倒れちまったか  
世話焼かせるなよ・・・ったく。」

青年がそう呟くと、それに應えるかのように床が蠢きだし、  
倒れた男を飲み込んでいった。

「また・・・か・・・」

「もしや・・・我の・・・？」

「・・・と言うより奴自身が耐えられないだけさ、

むしろあんたのおかげで大分マトモになったんだぜ？

俺もかなり安定してきているしな。」

「・・・彼奴を・・・どうする？」

「あの様子じゃ当分は戦力として期待できないな。

つたく幸先悪いつたらありやしねえぜ・・・」

「だからといって・・・彼奴を切り捨てるわけにもいかぬ。」

「

「回復するまでは、アイツが持ってきたアレの調整でもやつ  
てもらっさ。」

「ならば・・・次は？」

「元からそのつもりだ。」

頼むぜ、だが無理はするなよ。

なにせこれは・・・」

「無論、解っている・・・」

<地球連邦軍北米支部ラングレー基地 格納庫>

カイ「お久しぶりです、カザハラ所長。

遠いところ、わざわざ呼びつけるような真似をして申し訳あ

りません。」

ジヨナサン「いやいや、こちらこそお世話になるよ。

なにせ、研究所があのだまでは、ね。」

ラミア「・・・報告はこっちの方にも入っておりますでございます。」

ラトウーニ「龍虎王の目覚め、新たなアインスト、そして迫りつつあるもう一つの勢力・・・」

リシュウ「儂らが言うのもなんじゃが、全く持って謎だらけじゃない。」

アラド「・・・そういや龍虎王といえば、

クス八少尉とブルックリン少尉の姿が見当たらないんすけど?」

ジヨナサン「彼らは元々、別任務の合間にテスラ研に来ていただけさ。」

向こうの指令の鶴の一声でトンボ返りさ。

龍虎王も一緒にね。」

ラトウーニ「ですが少尉達はともかくとして、龍虎王も行ってしまうてはデータ採取が・・・」

ソフィア「私達も一応は反対したのだけれど・・・」

ジヨナサン「『データ採取なぞ任務完了後でかまわんだろうが!』って言われてそれで終わりさ。」

カイ「(ふむ・・・」

あのケネスといえど、少々横暴だな。

その『任務』とやらが余程重要なのか・・・

それとも・・・)」

ジヨナサン「まあ迎えが来るまで出来る限りのデータは採っておいたから、

そっちのほうは当面それでやるしかないな。

問題はこちらでの仕事だが・・・」

リシュウ「トリプルAクラスの機密とは・・・」



僕らが呼ばれたということは何かしらの機体開発かEOT関連のものか？」

カイ「・・・それについては後ほど別室においてお話いたします。

そこで会わせたい人物もおりますので。」

ジョナサン「ほう、奇遇ですな。

実は私達のほうからも会わせたい人物がおりましてな。

」

ラミア「会わせたい人物・・・？」

リシュウ「ああ、僕もおぬしらも知っておる奴らじゃわい。」

カイ「では博士、これより客室の方へ案内いたします。

それとラミアと他の皆は彼らを連れてきてくれ。」

ラミア「了解しちやったりですのことよ。」

カイ少佐は博士達を客室へ案内するために格納庫を後にした。

ラミア「・・・では、我々も行くぞ。」

アラド「うゝん・・・」

ゼオラ「どうしたの、アラド？」

アラド「いや、リシュウのじいちゃんが知っていて・・・

俺達も知っている奴・・・って誰かなゝって。」

ゼオラ「クスハ少尉達はここには来ていないし・・・」

ラトウーニ「名簿にも、知った名前は無いわ・・・」

アラド「うゝん・・・一体どこの誰っスかね？」

<ラングレー基地 内部通路>

アクセル「・・・物資搬入の手続き、終わったぞ。」

ジヨッシュ「ありがとうございます、おかげで助かりました。」

アクセル「そっちのほうは？」

ジョッシュ「問題ありません。」

ジョッシュは2枚の認証カードをアクセルに渡した。

アクセル「（ほう・・・？）」

ジョッシュ「・・・あなた達の許可証です。」

一応偽名で登録したので、注意しておいて下さい。」

アクセル「フ・・・忠告すまん

だが、生憎そういうのは慣れているのさ、こいつが。」

ジョッシュ「あと、機密レベルは博士達のワンランク下のダブルAです。」

アルフィミイ「同じではありませんのね？」

ジョッシュ「流石にトリプルAは軍でも佐官、民間でも博士達のような重要人物でないと無理だからな。

オレやリムだってデータ弄くってなきや手に入らなかったよ。」

リム（リアナ）「じゃあ、わたし達は博士達とは別行動って事になるの？」

アクセル「どうだかな。

俺達は一応この度の事件の関係者だ。

何かしらの都合で呼ばれる可能性は十分にありえる。」

ジョッシュ「そして俺達の立場は書類上、博士達直属のアシスタントと言う事になっている。

それにワンランク差なら上の承認さえあれば博士達と同席も可能だ。

その辺りの根回しならカザハラ所長がなんとかしてくれるだろう。」

リム（リアナ）「つまり・・・特に問題ないって事・・・

・・・でいいのかな？」

アルフィミイ「私に聞かないで欲しいのです。」  
アクセル「・・・それにしても手回しが良いな。」

データ改竄をはじめとして、ここの手続きまで大したものだ。」

ジョッシュ「博士達の協力もありましたからね、以外とすんなり通りました。」

それよりも、こちらにあなたの知り合いがいると聞きたので

オレとしてはそちらが多少気がかりでしたが・・・  
幸い、あなた達のデータ更新はされていなかったので

助かりました。」

アクセル「知り合いだと・・・？」

ジョッシュ「ええ、カザハラ所長から聞きました。」

特殊戦技教導隊所属、ラミア・ラブレス少尉・・・

現在、任務で他のメンバーと共に、このラングレーに  
駐在しているそうです。」

アクセル「何だと!？」

アルフィミイ「ラミア、というと・・・

あのございましたりでっしゃろうの人ですか・・・  
ちよつと会うのが楽しみだったりしちゃったりござ

いますですの。」

リム（リアナ）「な、何語なのそれ？」

アクセル「つくづくあいづらとは縁があるな、こいつは・・・

一応変装しておいて正解だったな。

話の前にバツタリ会いでもしたら流石に困る。」

リム（クリス）「変装って・・・

研究用の白衣に着替えてダテ眼鏡を掛けて、

髪をオールバックにしただけじゃない。

似合っていない上にモロバレだよ。」

ジョッシュ「普段と違う髪型や服装に変えているんだから十分『変

装』だよ。」

リム（リアナ）「え・・・？」

特殊メイクとかラバーの仮面とか要らないの？」  
ジョッシュ「・・・どここの怪盗だよ。」

あとオレ達や博士達のいないところでコロコロ代わらないように気をつけてくれよ。」

一々説明するのが面倒なんだからな。」

リム（クリス）「はは。」

分かってるよ、アニキ。」

アルフィミイ「アクセルのそのダサイ格好は別として・・・

わたしまで着替える必要は無かったと思うのですの。  
ばれちゃってるの声だけですし。」

アクセル「さりげなく俺への罵倒が入っていたのはこの際聞き逃すとして、

お前が普段通りの格好で基地内をウロウロするのは流石にマズイだろうが。」

ジョッシュ「100歩譲ってもパイロットスーツには見えませんしね。」

アルフィミイ「正直・・・ちょっと動きづらいのですの、コレ。」  
アクセル「それしか着れる服が無かったんだから仕方ないだろう。」

しかし、まあ・・・なんと言うか・・・」

アルフィミイの普段の服装は一般世間から見てもアバンギャルドな部類だ。

人前で出歩こうものならば、いやおうなしに目立つ。

ならべくなら服装を変えたほうが動きやすい。

だが女性が勤務しているとはいえ、

普通、研究所のような場所に、彼女が着れるサイズの服・・・

つまり子供か小柄な女性の服はまず無い。

・・・しかしテスラ研には1人だけそれを可能とする人物がいた。

案の定、研究所の自室にそれを大量に持ち込んでいた。

おかげで着る服には困らずにすんだ。

・・・全てがフリフリの衣装だったという点に目を瞑れば。

アクセル「・・・なんでテスラ研にこんな服なんかがあるんだ？」

ジョッシュ「・・・なんでもとある研究員の趣味だそうです。」

アクセル「なんだそりゃ・・・」

その人物の名は、ツグミ・タカクラ。

他人をフリフリの衣装でドレスアップするのが趣味のプロジェクトTDのチーフである。

リム（クリス）「でもさ、すっごく似合ってると思うよ。」

アルフィミイ「フフ

それはどうもですの」

アクセル「（はぁ・・・

幸先悪そうだな、こいつは。）」

<ラングレー基地 地下監禁室>

ラミア「・・・入るぞ。」

ハーケン「・・・よう、マイシスター。

今日はまた一段と綺麗だな。」

ラミア「綺麗・・・？」

10番台ナンバーの新陳代謝は人間のそれとは異なり・・・

「  
ハーケン「・・・挨拶だ挨拶、一々真面目に答えられるとこっちの  
身が持たん。」

ラミア「む？」

普通・・・逆なのでは？」

ハーケン「なにせこっちはお前と同じツラした不真面目の物臭と20年付き合っていたからな。」

調子が狂って仕方ないのさ、これがな。」

ラミア「そ、そうか・・・」

(いかな・・・どうも慣れん。)」

ハーケン「・・・ところで、この間お前の仲間に頼んでおいたブツの件なんだが、

手ぶらの所を見ると、どうやら許可が下りなかったようだな。」

ラミア「ブツ・・・？」

ハーケン「いや、こちらら検査以外は暇であることが無いからな。」

何かしら暇を潰せるものを頼んでおいたんだが・・・

・・・もしかして聞いていないのか？」

ラミア「アラドが話していた嗜好品の件か。」

それならば少佐が指定する範囲のものでよければ構わないそうさ。

現に、何人かはもう既に幾つか注文をしている。」

ハーケン「成程・・・」

という事は他の連中も俺と同じ様に独房暮らしって訳か。

「  
ラミア「・・・正直、上からの命令とはいえ、すまないと思っ  
てる。」

ハーケン「まあ、俺は別に構わないさ。」

日当たりだけは最悪だが、メシは不味くはないし、  
ベッドの寝心地もまあいいほうだ。

ただ・・・」

ラミア「・・・？」

ハーケン「いいかげん仲間と話ぐらいさせてくれないか？」

こう長い事顔を会わせていないと色々と不安だな。

でもどうせ、そういうのは……」

ラミア「いいだろう。」

ハーケン「無理だって事は百も承知……

……って今なんつった？」

ラミア「会合を許可する、と言ったんだ。

元より、今日来たのはそのためだ。」

ハーケン「これはまた……

一体どういう風の吹き回しだ？」

ラミア「詳しいことは後で話す。

表に出てもらおう。」

ハーケン「へいへい……

解りましたよ。」

ハーケンは渋々部屋を後にした。

<ラングレー基地 ブリーフィングルーム>

ゼオラ「あ、ラミア少尉。」

アラド「お疲れ様っス！」

ラミア「今、到着した。

……コレで全員か？」

ラトウニ「……はい、ハーケン・ブラウニングを含む以下10名、全員揃っています。」

神夜「あ！ハーケンさん！！

お元気でしたか？」

ハーケン「久しぶりだな、神夜。

それに皆も、な。」

アシエン「お久しぶりでござんす、艦長。」

中々来ないのでてつきり死んだものと。」

ハーケン「その毒舌も久々だと不思議と嬉しいもんだな、こいつは。」

リー「まあ、ハッキリ言つて私もアシエンと同じ意見でしたが。」

鞠音「右に同じで。」

キュオン「キュオンもー！」

ハーケン「・・・たく、

お前らつて奴は・・・」

錫華「人間、死んだほうが世のためという事もあるのだぞ？

チャラの介よ。」

アラド「なんか・・・久々なのに散々な言われようっスね、ハーケンさん。」

ハーケン「お慰めどうも・・・

だが、いつもの調子のようにで安心したよ。

俺が思っていたよりずっと元気そうだな。」

鞠音「艦長を待っている間、皆に一通り聞きましたが検査内容は差なかったそうです。

具体的には血液検査と身体のスキャンング、それに尋問が日に数回程。」

エイゼル「それはこの世界において異形である我らに対しても同じだった。」

リー「検査にあたつた学者や医師達は少々面食らっていたようですが・・・

それ以外の扱いはそれなりでしたからこれといって文句はありませんな。

あるとすれば生きた肉が食えなかった事ぐらいでしょうか。」

神夜「私は部屋から出られなくて退屈極まりなかったです・・・

あ、でもご飯はおいしかったですよ。」

ハーケン「まあ、それには同意するな。」



錫華「ふむ。多少バラエティに欠けるが・・・

悪くは無かったぞ。」

エイゼル「先ほどこの者達に聞いたのだが、我らに出された食料は全て合成モノだったそうだ。

だが、とてもそうとは思えぬ良い味だった。」

ヘンネ「・・・もし戻れたらウチの食料事情も見直したほうがいいのかもね。」

キュオン「フォルミッドヘイムの合成レーション、あんまり美味しくないしね。」

ハーケン「なるほどな・・・

んじゃ部屋割りはどうだった？

俺は地下の独房だったが。」

鞠音「多少の差はあれど皆似たようなものです。

検査と尋問以外部屋から一步も出られない軟禁状態だった事には変わりません。」

ハーケン「・・・ん？

俺はてつきりドクターは解析の手伝いをしているかと思

っていたが・・・？」

鞠音「勿論、私としてはやる気マンマンでしたわよ？」

ハーケン「・・・となると、原因はアンタ達か。」

ラトウニ「・・・ええ。

あなた達が持ち込んだ物品や銃火器類は、

ここのスタッフだけでは手に余る代物ばかりだった・・・

だから解析は専門家を呼ぶまで一時保留という事になったの。

それにあなた達の体のほうもまだ断片的な事ぐらいしか解っていないの。」

ハーケン「成程な・・・となると出来る事は尋問と軟禁ぐらいか。

お互いに暇な一週間だったってわけか、こいつは。」

ゼオラ「ちよつと癪に障る言い方だけど、その通りだわ・・・」

アシエン「ちなみに正確には6日と11時間です、艦長。」

ハーケン「お前は相変わらず一々細かいな、アシエン・・・」

カツツエ「ちよつとアンタ達、おしゃべりはその辺にしときなさいよ。」

そろそろ本題に入らないと、コッチの人たちが困るでしよ？

向こうはオシゴトなんだし。」

アシエン「私はいつも真面目ちゃんですが？」

ハーケン「どの口がいつてるんだ、どの口が？」

エイゼル「さて、我らを一箇所に集めたその理由、聞かせてもらおうか？

・・・この世界の兵士達よ。」

ラミア「・・・理由は至極単純だ。」

先程テスラライヒ研究所から博士達を含むスタッフと機材が到着した。」

ハーケン「つまり、本腰を入れて調査に入る・・・と？」

ゼオラ「・・・そう。」

でも機材の設置にはまだ少し時間がかかるの。

だから・・・」

カツツエ「その間に博士達やスタッフにアタシ達の事を色々と知ってもらったほうが仕事が早く済むわね・・・」

そしてそれを手っ取り早く済ませるには。」

ハーケン「オレ達と直接会って話し合う・・・って事が。」

ラミア「理解が早くて助かる。」

錫華「とはいっても・・・」

わらわ達、この数日間で話せることは全て話してしまったぞ？

今更何を話せばよいのやら・・・」

ラミア「博士達の前で質問を挟んで話してくれるだけでいい、これまでの経緯を含めたものもな。」

キュオン「えゝ!？」

それってなんかメンドくさゝい!」

ハーケン「百聞は一見にしかず、百見は一触にしかず……って昔から言うだろ?」

神夜「え、ええつと……つまり……?」

アシエン「……つまり女性のバストはサイズを聞くよりも直に揉んだ方が良い、

と言う事でござりやがりますね、艦長。」

ハーケン「……概ね正しいが、俺に同意を求めるな。」

アラド「(否定はしないんスね……)」

ラミア「ちなみに会合は我々の監視下の下で行う。

何か質問はあるか?」

ハーケン「特にこれと言つて無いが……

じゃあせつかくだし、一つだけいいか?」

ラミア「なんだ?」

ハーケン「その……

あんた達が前に話していたマリオン博士って人も来ているのか?」

鞠音「ああ、私にソックリという方でしたね。」

ラミア「残念ながらマリオン博士はこちらには来てはいない。

それに博士はこの手の問題においては専門外だ。」

エイゼル「妙だな……

ナハトにアーベント、それにファントムと似た機体がこの世界に存在しているとしても、

あれらは我らの技術で再現したたもの……」

カツツエ「技術者じゃなくても、じつとしていられないものなんじゃないの?」

アラド「前にも似たようなことがあつたんスけど。

思いつきりガン無視キメてたぐらいスから……

多分今回も……」

鞠音「・・・成程、つまり彼女は自身の能力、そしてこの世界の技術力に絶対の自信があるのですね？」

フフ「・・・倒しがいきますわ。」

ハーケン「・・・倒してどうするんだよ。」

リー「その話から察するに、

私らのような輩など存在自体真つ向から否定しそうですね。」

ゼオラ「いえ、そこまで酷くは・・・」

錫華「だが、互いのために無意味な衝突は避けるべき・・・

この度の会合もそれを踏まえた上で行うのであろう？」

ラミア「無論そのつもりだ。

博士達には会合の前に諸君らの存在を含めて今回の件を一通り説明する。」

アシエン「では、それが終わるまで我々はここで待機・・・というところか。」

キュオン「それって、どのぐらいかかるのかな？」

カツツエ「その辺は博士達のさじかげんじゃないの？」

ひよっとしたら何時間もかかりたりして。」

神夜「それだと・・・退屈極まりませんね。」

ハーケン「・・・ま、気長に待とうぜ。」

鬼や蛇が出るわけじゃあるまいし、な。」

## 第5話 a 交わる『刻』 その1（後書き）

大変長らくお待たせいたしました（^^;）

前回から実に、2ヶ月と1週間と2日ぶりの更新です（汗）

仕事や体調不良のせいではなかなか書けないせいもあり、遅れに遅れてしまいました。

現在、仕事等の都合で以前のように数日や一週間で書き上げることが不可能に近くなってしまいましたので、これからは10日あるいは二週間に一本のペースで更新していこうと思います。

宇宙編の予定でしたが中々構想が纏まらず、地上編の方を先に進めることにしました。

こちらはハーケン組とハガネ（ヒューゴ）組の話を中心に書く予定です。

## 第5話 a 交わる『刻』 その2

<ラングレー基地 客室>

ジヨナサン「ふむ・・・成る程、ね。

これはまた随分と風変わりな連中が来たもんだな。」

リシュウ「それにしても獣人に魔物、はては鬼か・・・

まるで御伽噺から飛び出てきたような輩じゃのう。」

エリ「しかし驚くべきは彼らがいた世界・・・

あらゆる種族や技術が混ざり合った世界はまさに無限の開拓地・・・！」

ソフィア「実に興味深いですが、一方で彼らが恐ろしくもあります。

彼らが協力的なのがせめてもの救いですが・・・」

カイは博士達にこれまでに調べ上げたハーケン達のデータと、これまでの経緯を全て話した。

これまで数々のEOTを解析し、その力を目の当たりにしてきた彼らではあるが、やはり動揺は隠せないようだった。

カイ「（・・・まあ、いくら博士達といえどもこの反応は当然か。

ここ数年で非常識のモノを見知り過ぎたとは言え、彼らの存在は一際異質だからな・・・）」

ジヨナサン「つまり我々の仕事は彼らの調査、と言う事か・・・

私が言うのもなんですが、上層部はこの件をどうとらえておいで？」

カイ「詳しい事は審議中だそうで・・・

ですが修羅の事もあり、少々過敏になっておりますな。

彼らは調査や移動の際には手錠の着用を義務付けされており、

調査以外は部屋に軟禁。

互いにコンタクトを取ることが出来ないように部屋はバラバラ。

スケジュールも分単位で調節し重複しないようにといった感じで……」

ジョナサン「……彼らには気の毒としか言いようが無いな。

調査報告によれば、

あの地上戦艦には転移装置らしきものは積んでいないそうじゃないか。

他の積荷は彼らが言っていたパーソナルトルーパーのレプリカ以外では

武器の類が幾つか、それと日用雑貨らしきものと食料がほんの少し……

まだ詳しくデータを採ってみたいと断定できないが、証言通り不慮の事故でやってきたとみて間違いなさそ

うだな。」

ソフィア「ええ。

彼らの身体能力や技術力を持つてすればここから脱出することも

そう難しいことでは無い筈。

にも関わらず素直に従っているという事は自身の状況下を理解し、

そして自身の力に溺れていない証拠……」

エリ「……少なくとも、彼らは我々に近いメンタルであると考えられますわね。」

ジョナサン「それ故に彼らの処遇は慎重にせねばなりませんな。

……なにか対策は？」

カイ「彼らへの対応や解析に関する事柄は第一発見者である我々に一任されましたが、

いかんせん、待遇に関する件は上層部の許可が中々下りずに

苦労しております。

この間、ようやく嗜好品所持の許可が下りたばかりでして。」

リシュウ「おぬしはどうも苦労が絶えんのう・・・」

カイ「・・・もう慣れっこですよ。」

ソフィア「ですが彼らの保護という観点からみれば

教導隊を選択したのはベターな判断といえますね。

少佐達はこれまでに何度も異邦人や異星人と実際に接触をしてきたのですから。」

カイ「不本意ながら・・・そうなりますな。」

エリ「ところで今彼らは・・・？」

こういった場合、コンタクトは早ければ早いほどいいのですが。」

リシュウ「善は急ぐに越したことはないしのう。」

カイ「そうおっしゃられると思い、現在ブリーフィングルームにてラミア達の監視の下、

待機させております。

もしよろしければ、これからご案内いたしますが・・・」

ジョナサン「ふむ。ではそうさせてもらおうとしよう。

何より、女性を待たせるのは良くないしな。」

<ラングレー基地 ブリーフィングルーム>

カイ「・・・というわけだ、今からそちらに行く。」

ラミア「了解しちやいましたりなのです。」

ラミアはカイからの通信を受け、それを皆に伝えようとした。  
だが・・・



ラミア「アラド、カイ少佐からの連絡があつた。

もうすぐこちらに来るそうだ、だから・・・」

アラド「わ、分かつてるっス！

で、でもこの勝負だけは・・・！

この勝負だけは・・・！！」

ハーケン「どうやら、もうすぐリミットのようだな。

ここでありてもいいんだぜ？」

アラド「負けっぱなしじゃ男が廃るっス！

それに、こういうのは最後に勝ったほうがカッコイイス

！！」

ハーケン「フッ・・・

その強がり、いつまでもつかない・・・？」

ラミア「（この二人・・・何をそう意固地になっているのだ・・・

？）」

話は十数分前に遡る

アラド「あ、そうだハーケンさん。

ついでは何スけど、これ渡しとくッス。」

ハーケン「ん・・・？」

ああ、コイツか。ありがとな。」

神夜「何々？

なんですか、それ？」

ハーケン「何って、暇つぶしに頼んでおいたモノだよ。

お前らも何かしら頼んだと聞いてたんが・・・？」

エイゼル「嗜好品の件か・・・

我は特に頼まなかったな。」

ヘンネ「あたしも特に。」



アシエン「道は果てしなく険しい事ですね。」

神夜「とほほ・・・」

残念極まりないです・・・」

ハーケン「カグラアマハラガールズには少々厳しかったようだな、こいつは。」

リー「そういった点は諦めるしか無いでしょうな。」

私も食事に出てきた肉が合成品だったという時点で・・・」

ラトウニー「・・・うん。」

天然食材はとても高いの。」

リー「やはりですか・・・」

神夜「アシエンさんは何頼んだんですか？」

アシエン「別に何も。」

私はこの一週間爆睡しておりましたので。」

神夜「い、一週間も・・・！？

いくらなんでも長寝にもほどがあります！」

鞠音「・・・長寝というのは例えですよ、楠舞姫。」

大方、アシエンの機能を停止させてたのでしょうか？」

ラミア「その通りだ。」

アシエン・ブレイデルは白兵戦特化の初期型Wシリーズ、

いかに本人が抵抗の意思が無くとも野放しにする事はできません。

よってこの一週間は機能維持以外のシステムをオフにしていたもらったまでだ。」

神夜「ちよつとそれってあんまりなんじゃ・・・！」

アシエン「そこまです無駄乳姫。」

私のような戦闘アンドロイドに対しては当然の措置です。

実際、今もプロテクトがかかっていて戦闘モードへ移行できないのであります。

何故かコードDTDも発動できませんし・・・」

錫華「それで妙に大人しいのだな・・・」

ラミア「・・・その不具合は恐らくセーフティプロテクトに私のものを流用したからだろう。」

初期型と後期型ではプログラムに多少の差もあるだろうし、私はコードＤＴＤを殆ど使用した事がないからな。」

鞠音「ちよつとあなた・・・」

アシエンの後継機のくせに生意気ですわよ？

彼女は24年間、私がこの手で整備してきました。

あんなところからこんなとこまでもう隅々まで解析しつくしておりますので、

その気になればそんなプロテクトの一つや二つ作ってやりますのに。」

ラミア「協力的な発言は感謝する。」

私とてやむを得ずやった事だ・・・

上層部の許可が下りなかった以上、こうするしかなかったのだ。」

アシエン「いや・・・むしろ、このような形でも

この場に引き合わせてくれた事を感謝する、ラミア・ラ

プレス。」

ハーケン「・・・おまえの口から感謝なんて言葉、初めて聞いた気がするぜ、アシエン。」

アシエン「何かおっしゃりやがりましたか、白髪頭？」

ハーケン「いや、なんでもない。」

ラミア「(アシエン・ブレイデル・・・」

お前は不思議な存在だな・・・

自らをアンドロイドと割り切っていないながらも、一方で人間らしくもある・・・

私は・・・どうなのだろうな・・・)」

鞠音「まあ・・・アシエンの件は一万歩譲るとしても、

私のほうはどうにかなりませんか？」

ラミア「そればかりは我々にはどうにもならないな。」

ハーケン「・・・一体何を頼んだんだ、ドクター？」

鞠音「何って、あのロボット達に関する情報ですよ？」

なのに写真の一枚も寄越さないなんて・・・」

ハーケン「・・・そりゃ無理な相談だな。」

こういった状況下ではその手の情報はシャットダウンつてのがセオリーだろうしな。」

鞠音「でも私だって別にダダで見せろとは言っておりませんわよ？  
そちらの解析に手を貸す代わりに、という条件で申し出たのですが・・・」

ハーケン「・・・なら、なおさら無理な話だな。」

さっきの話からするとこの世界では

イレギュラーの介入はなるべく避けたいってのがココのルールみたいだし、な。」

鞠音「残念ですわね・・・」

ところで、艦長は何を？」

アシェン「見たところカードの束・・・」

エロエロなブロマイドといったところでしょうか。」

ハーケン「・・・んなわけあるか、思春期のガキじゃあるまいし。」

トランプだ、トランプ。」

神夜「あれ？」

ハーケンさんって確か自分のとらんぷ持っていないませんでしたっけ？」

ハーケン「あれはカード型爆弾だ。」

今頃は他の武器と一緒に解析でもされてんだらうな。」

一応普通のもあるんだが、ツアイトに置き忘れちゃったしな。」

ラミア「・・・私が持っているデータによると、トランプは通常二人以上で遊ぶものでは？」

ハーケン「ご忠告どうも、突っ込みシスター。だが情報不足だな。」

一人用ゲームもあるのさ、こいつが。」

キャンフィールド、クロック、ピラミッド、etc etc  
c・・・」

ラミア「・・・済まない、私には娯楽に関するデータがあまり無いからな。」

本来、Wシリーズには『娯楽』という概念すらないのだが・

・」

ハーケン「・・・」

ならこれから学ばいだけの話さ、これがな。

それに、知らないことは別に恥ずかしい事じゃないんだぜ。

ま、親父の受け売りなんだがな。」

アシェン「それに能天気の方が長生きするといえますので。」

・・・と私が言っても説得力ありやしませんか。」

ハーケン「・・・お前は絶対長生きするぜ、アシェン。」

アラド「あ、そうだ！

せつかくトランプもあることですし、それで俺と勝負しま

せんか？」

ゼオラ「ちよつと！

今は仕事中でしょ！？」

アラド「いや、このまま待ってるだけつても退屈だし・・・」

ラミア「そんな理由では許可できんな。」

ハーケン「俺は別に構わないぜ。」

退屈には飽き飽きしていたところだしな。」

アラド「ほら・・・！

ハーケンさんだってああいつてるじゃないツスカ！」

ハーケン「それに、親睦を深めるためのレクリエーションは大切だろ？」

ラトウーニ「確かに一理あるわ・・・」

ラミア「・・・い、いいだろう。」

だが博士達が来るまでだ。

それから先は少佐の管轄に入るからな。」

アシェン「なんやかんだで結構話が解りやがるですね、ラミラミ。」

ラミア「(むう・・・」

こいつらの雰囲気はどうもいかな・・・

調子が狂うというか・・・乗り気になってしまふというか・・・)」

アラド「んじゃ、少尉の許可も下りたことだし、早速やるッス！」

ハーケン「オーケイ、じゃあ何をやる？」

スピード？セブンブリッジ？ブラックジャック？

それとも・・・」

アラド「ポーカーで・・・！」

ハーケン「ほう・・・！？

自信は・・・あるようだな。

言っておくが、俺は強いぜ？」

アラド「俺もッス！」

なんつったって勝率高い方ッスから！」

神夜「なんだか・・・ドキドキ極まりないです」

リー「暇つぶしにはもってこいだな。」

錫華「むほっほっほ。

血が滾ってくるのう。」

ヘンネ「妙にテンション高いね、アンタら・・・」

ハーケン「オーケイ、スタボーンボーイ。

だが俺だって負けるつもりは無いぜ・・・！」

かくして火蓋は切って落とされ・・・

ラトウーニ「・・・水を差すようで悪いけどルールは大丈夫なの？」

アラド＆ハーケン「あ。」

・・・る前にルールの相違点を細かくチェックする事になった。  
こういうゲームにはローカルルールが多く、そのために揉め事が起こることが多々ある。

ましてやお互い違う世界の者同士、名前が同じなだけで中身は全く違うゲームなんてこともありえる。

実際のところ、揉めに揉めた。

原則的なルールは同じだったが用語の違いは勿論、ポーカー・ハンドの強弱、

ジョーカーの有無、アンティにベット等々・・・

例を挙げればきりが無かった。

最終的にアンティルール無しのジョーカーありのワイルド・ポーカーに落ち着いた。

ハーケン「これで・・・もう文句は無いな？」

アラド「ああ・・・！」

これで準備は整ったツス・・・！」

ハーケン「・・・さあ、ショウタイムと行こうか！！！」

かくしてようやく火蓋は切って落とされた。

ゼオラ「ところで・・・

なんで私がディーラーなの？」

アシェン「ここは一つ、事なかれという感じで。

お願いしやがります。」

そして時間は現在に戻る

ゼオラ「・・・じゃあ二人とも、心の準備はいいかしら？」



アラド「勿論完了だ！」

ハーケン「当然こちらも、な・・・！」

神夜「ハーケンさん！」

ここで勝てば全勝ですよ！」

ラトウーニ「アラドはここで負ければ全敗ね・・・」

リー「ハッハッハ。」

お二人とも華があつて実に羨ましいですな。」

錫華「片方は明らかに違うぞな・・・」

渋々ディーラーになったゼオラも中々乗り気になっていた。

ハーケンとアラド以外のみんなもいつの間にか集まってこの勝負の結末を知りたがっていた。

ゼオラ「ではまずアラドから・・・！」

アラド「スピードのフラッシュでどうだ！」

錫華「ほほう？」

黒剣の同色揃いか・・・！」

リー「今までで一番良い手ですな。」

ハーケン「この土壇場を出してきたか・・・！？」

アラド「ダテに実力を運でカバーしてるわけじゃないッス・・・！」

ラトウーニ「それ、全然自慢になっていない・・・」

ハーケン「フツ・・・」

だがその運もこれまでだ、これがな。」

ハーケンは自分の手札をアラドに見せた。

アラド「何・・・だと・・・！？」

ヘンネ「キングのフルハウスか・・・」

ホント、運がないねえ、アンタ。」

ハーケン「・・・さて、もうそろそろ博士達が着ちまうが、また後

でやるか？」

アラド「も、もう勘弁ツス・・・」

ラトウーニ「結果はアラドの12戦12敗0勝・・・」

リー「ハッキリ言ってボロ負けですな。」

錫華「情けない事このうえないぞな。」

アシェン「この解消無しが・・・」

アラド「うっ・・・」

もうカンベンしてください・・・」

ラミア「ようやく終わったか。」

しかしどうも娯楽というものは良くわからんな・・・

一体なんの意味が・・・？」

ハーケン「・・・意味が無いからこそ意味があるのさ、これがな。」

ラミア「む・・・？」

どういうことだ？」

ハーケン「ま、暇潰しにはなっただろう？」

ナゼナニガール。」

アシェン「・・・艦長、こちらに接近しちゃってくる動体反応をな

んぼか確認しちゃいますた。」

ハーケン「お前は相変わらずテキトーだな、アシェン。

じゃ、ご対面といきますか。」

ラミア「（遊び・・・娯楽・・・暇潰し・・・無意味の意味・・・

さっぱりわからんな・・・？）」

数回ノックをした後に、カザハラ博士達を連れたカイが入室してきた。

カイ「・・・入るぞ。」

ハーケン「お・・・？」

久しぶりだな、ダンディ少佐。

元気・・・そうでもなさそうだな。」

カイ「む・・・」

まあ、な・・・」

ツヤの無い髪、荒れた肌、目の下には隈が出来かかっている。  
疲労が溜まっているのは一目瞭然だ。

アシエン「前回より疲労と老け具合が数%ほど上昇してやがりますな。」

原因は過労と寝不足かと。」

神夜「お勤めが大変なのは分かりますけど、

適度にお休みになられた方がいいですよ？」

錫華「まあ、何が原因かは知らぬが、ご苦勞なことであるな。」

ハーケン「・・・プリンセシーズ、

その原因はどう考えてもオレ達だろうが。」

ジョナサン「（こりや思った以上に苦勞しているみたいだな・・・

少佐・・・）」

エイゼル「・・・貴殿らが研究所から来た博士達か。

無礼をお許しいただきたい。

何分、我等はこの世界のことに関してはよく知らないの

でな。」

エリ「い、いえ。別にこのぐらいは・・・」

ハーケン「・・・エイゼルの旦那、あんまり顔を近づけないほうがいいんじゃないのか？」

レディースが怖がってらっしゃるぜ。」

エイゼル「む・・・これは失礼した。

いかに博士達が我々の事を事前に説明を受けたとはいえ、  
初対面である事は変わらない。

ご婦人が驚かれるのは至極当然、私の顔は少々厳ついで  
すからな。」

ソフィア「いえ、そんな事は・・・」

ハーケン「（いやいや、あんたのは厳ついつてレベルじゃないぞ・  
・!?!）」

錫華「（もしかしてこやつ・・・天然なのかえ?）」

リシュウ「（ふむ・・・）」

いかに姿が異形といっても、儼らとそう違いはないよ  
うじゃのう。

ちと騒がしそうな輩じゃがな・・・」

カイ「ところで、ここでの生活にはもう慣れたか?」

ハーケン「まあ、慣れる事には慣れたが、

みんな正直言つて不平不満が無い方がおかしいって感じ  
だな。

ずっと籠りっきりの生活だしな。

体が鈍っちまうぜ。」

カイ「・・・窮屈な思いをさせてすまない。

俺も待遇改善のために上層部に掛け合っているんだが・・・」

ハーケン「その気持ちだけでも感謝するぜ、ミスター。

まあ、さっき軽いレクリエーションをして、気も晴れて  
いるしな。」

カイ「レクリエーション?」

ラミア「その件に関しましては後ほど私とアラドが説明いたしちゃ  
ったりしちゃいますので。」

アラド「どうぞ・・・博士達の紹介を・・・」

カイ「あ、ああ分かった。

（アラドが妙にしょぼくれているな・・・何かあったのか?）

・・・では紹介しよう。

彼らがテスラライヒ研究所から派遣された博士達だ。」

錫華「博士というからもっと味気ない輩を想像しておったが・・・

中々どうして個性豊かであるな。」

ジヨナサン「褒め言葉と受け取ってよろしいですか、錫華姫?

私はテスラ研究所長のジヨナサン・カザハラです。

この度の解析チームのチーフでもありますので、  
何卒、宜しくお願い致します。」

錫華「む……？」

こやつ中々……」

神夜「な、なんだか……素敵なおじさまですね……」

ハーケン「気をつけなよ、お姫さん方。」

こういう男程、心の中はウルフと相場は決まっている。」

ジョナサン「そういう君も人の事は言えないんじゃないのかな？」

ハーケン「……だがウルフがいない人生なんてつまらない事この  
うえない、だろ？」

ジョナサン「よくわかってるじゃないか。」

アシエン「……どうやら艦長やダディの同類のようでやがります  
のね。」

リー「まあ……我々こういうタイプには慣れておりますからな。」

これはこれでよしとしましょう。」

鞠音「失礼……？」

今、チーフとおっしゃいました？」

ジョナサン「ええそうです、ドクター鞠音。」

わざわざそちらからお声をおかけになられるとは恐縮  
ですな。

それにしても、私のよく知っているマリオン博士と瓜  
二つで少々驚きました。」

鞠音「……茶番は結構です。」

それよりも解析の件ですが、私も是非参加させていただきた  
いのですが。」

ハーケン「おいおい、ドクター。」

さっきの話聞いていなかったのか？」

鞠音「艦長は少々黙ってください。」

大体私のツアイトをこれ以上他人に色々と弄られるのは癪に  
さわりますので。」

ジヨナサン「いいでしょう。」

神夜「返答早ツ・・・！」

ハーケン「・・・どういつもりだ、ドクター・ジヨナサン？」

「こういう場合、俺達の介入はご法度なんじゃないのか？」

ジヨナサン「何、君達の物は君達の力を借りて解析したほうが手っ取り早いと思っただけさ。」

我々の力だけじゃどうにもならないところだってありそうだしな。」

カイ「とはおっしゃられても、上層部は許可など出さないでしょうな。」

ジヨナサン「何、結果さえあればバレたって文句はいわんでしょう。」

錫華「お主、無断でやる気マンマンであると申すか・・・

軽率というか大胆というか・・・」

鞠音「・・・まあ、よしとしましょう。」

あなた方の力、どの程度のものか見せてもらいますわ。」

ジヨナサン「ハッハッハ。」

我々の力を見くびってもらっては困りますな。

でも重要な箇所はあなたの手を貸していただきますので互いに持ちつ持たれつという事で・・・

分からない点がございましたら手取り足取りという事

で・・・」

ヘンネ「・・・どうもああいう輩は気に入らないね。」

底が知れないっていうか、何と言うか・・・」

カツツエ「ま、基本的にオトメの敵ですものねえ。」

アタシも身の危険を感じちゃうわあ。

中々よさげなオジサマで・・・し」

ジヨナサン「うっ・・・な、なんだか背筋が・・・」

あの手の輩はどうもリアクションに困る・・・」

ハーケン「気にせず話を進めてくれ・・・」

そのほうが身のためだぜ？」

リシュウ「・・・ではそうさせてもらうとするかの。

儂はテストラ研顧問のリシュウ・トウゴウと申す。

今回は主にお主らのモーシヨンデータ、特に剣撃系のサ  
ンプリングを担当する。」

錫華「むう・・・

わらわは横文字はどうも好かぬ。

翁の分際で生意気であるぞ・・・！」

神夜「錫華ちゃん、お年寄りにはもつと優しく接してあげないと・  
・」

錫華「ではそなたは分かると申すか？」

神夜「・・・い、いえさっぱり・・・」

アシェン「要するに乳牛姫の剣術を盗もつってハラと言つ事でござ  
んす。」

神夜「ああ、そうなんですか、アシェンさんどうもありがと・  
・・・つてええ!？」

錫華「おぬしは反応がちと鈍いのう・・・

じゃが楠舞の技を盗もつなどと不届き千万であるぞ？  
というかそちに出来るものかの？」

リシュウ「まあ、無礼な事じゃと分かつておるから無理にとはいわ  
ん。

じゃが儂も一端の剣術使いじゃからしてな、

他流の、特に異界の剣技となれば一目見たくもなるわい。

」

神夜「お爺さんも剣術使いなんですか!？」

錫華「成程のう・・・

身のこなしからしてただの翁ではないと思うておったが。」

アシェン「流石はなまこ姫、伊達に年は食っていないようさんの  
ね。」

錫華「そち、褒める気ないであろう?」

リシュウ「そういえばお主らは儂らと比べて寿命が長いそうじゃの。おまけに若い時期も長いとは全く持って羨ましい限りじやわい。」

ハーケン「いや、俺や神夜なんかはこの世界の人間と大差ないさ。他の連中がちよつとばかり長いだけさ。

でも問題は長く生きるよりも、どう生きるのか、だろ？」  
リシュウ「フフ・・・口が達者なのは若者の特権じゃな。

じゃが、おぬしがその台詞を言うのはもう少し生きてからじゃな。」

錫華「まあ、あと二世紀は早いのだ。」

リシュウ「嬢ちゃんや・・・」

・・・儂、六十余年しか生きておらんのが。」

アシエン「その辺りの問題はツツコムのもメンド臭いのでどうかスルーの方向で。」

エリ「でもそういった問題こそ無視できるとは言い難いですね。

あなた方の文化や風俗、倫理観等の解析担当は私なのですから。」

エイゼル「ほう？」

解析するのは我らがもたらした兵器や戦闘に関するデータばかりと思っていたが・・・？」

エリ「・・・軍という組織である以上、それらが優先されるのは致し方ありません。

ですが、その他の事をおざなりにしていい理由にはならないと私は考えています。

あなた方の証言がこの世界のオーパーツや

ロストテクノロジー解明の手がかりになるのかもしれないのですから。」

ハーケン「オーパーツ・・・」

たしか考古学関係の用語だな。

もしかしてあんたは・・・？」



エリ「自己紹介が遅れましたが、私はエリ・アンザイ。

考古学者であると同時に、ロストテクノロジー調査研究機構のメンバーでもあるの。」

神夜「お、お若いのに凄いですね・・・」

錫華「そち、分かったうえで申しておるのか？」

神夜「い、いえ・・・なんとなく・・・」

エイゼル「（それにしても考古学者まで呼び出されるとは・・・

この世界、我らの世界以上に混沌としているのやもしれんな。）」

ソフィア「最後は私ね。

私はソフィア・ネット。

主に武器の材質とあなた方の身体の解析を担当いたします。」

ヘンネ「身体、ね・・・

あんたらから見ればアタシらみたいな連中は大層なお宝に見えるんだろうね。」

ソフィア「・・・正直に言えばその通りよ。

本来、生体工学は私の分野ではないのだけれど、それでもあなた達の超人的な肉体には興味が尽きないわ。

「  
カツツエ「超人的、ねえ・・・

アタシ達の体を解析したらどんな事ができるのかしら？」

ソフィア「・・・例えば、私達から見て驚異的ともいえる肉体の若さと長寿、そしてパワー、

その秘密を解明することが出来れば、寿命と青年期の延長化は勿論、

身体機能の強化も可能となるでしょう。」

ハーケン「・・・まるで夢のような話だな、こいつは。」

エイゼル「だがそれは、そこにいる子らのような悲劇を生む悪夢にもなりえる。

・・・違うか？」

カイ「な・・・！？」

ラトウーニ「あなたもしかして・・・！？」

ヘンネ「・・・あんたも感付いていたのかい、エイゼル？」

連中の態度を見る限りどうやら本当らしいが・・・」

ハーケン「・・・リー、まさか『匂う』のかこいつら？」

リー「・・・ええ。それはそれは。」

カツツエ「もうプンプン『匂う』わねえ・・・」

ハーケン「成程な・・・そういうわけか、スカルフェイスの言う『悪夢』って奴は・・・」

アシエン「この世界も中々どうしてえげつないようだ。」

錫華「『えげつない』という言葉ではとても済まぬがな・・・」

鞠音「なんですか・・・みんな氣付いていらしたのですね？」

驚くかと思つてあとで言おうと黙つていたのですが・・・」

神夜「え・・・？」

な、なんですか悲劇とか悪夢とかえげつないとか・・・

わけの分からない事極まりないんですけど？」

キュオン「勝手に話進めないでよ！」

キュオンもわかんない！」

アシエン「・・・約二名分かつていないアホポンがいやがりますな。」

ハーケン「エイゼルの旦那・・・あんたが話してくれないか？」

俺よりもあんたの方が深く見抜いているようだし、な。」

エイゼル「・・・いいだろう。」

楠舞神夜姫、キュオン、心して聞け。

アラド・バランガ、ゼオラ・シュバイツァー、

そしてラトウーニ・スウボータ・・・

この三名には長期に渡る過酷な特殊強化訓練と

薬物投与による身体強化施術の形跡が見られる。」

カツツエ「付け加えて言えば精神操作の類もやってたんじゃなくて

？」

キュオン「それってつまり、

こいつら無理やり強くされたって事なの？」

カツツエ「そゆこと・・・」

それも本人の意思とは無関係だね。」

神夜「それって・・・非道い事極まりないじゃないですか！！」

ゼオラ「・・・どうしてそこまでわかるの？」

ハーケン「俺はお前らを見てなんとなくそんな気がしていただけだが、

後は猫科の二人の鼻とお前らの反応でおおよそ分かった。

俺としては勘が外れて欲しかったがな。」

カイ「・・・いつから気付いていた？」

エイゼル「初めて会った時から違和感を感じていた。

始めは少年兵や新兵の類かと思っていたが、

それを差し引いてもその子らは兵士としては少々幼すぎ

る・・・

だが身のこなしや挙動には熟練した兵士のような動きを

感じた。

そしてその身体は年齢にしては無駄が無さ過ぎる・・・」

ヘンネ「一言で言えばあんたらは不自然に見えたのさ・・・」

他所の世界から来たアタシ達から見ても、ね。」

リー「まあ匂いの具合からみて、もうそういった事はやっていないのは分かっておりますがな。」

ジヨナサン「こいつは驚いた・・・」

凄まじい洞察力と嗅覚だな。」

ラトウーニ「でも、あなたが言いたいことは別にあるんじゃないの・・・？」

アラド「・・・エイゼルさんが言った『悪夢』って言葉の意味ツスね。」

カイ「・・・おまえさん方の身体を解析し、それを軍事的に利用す

るとなれば

ラトウー二達のような犠牲者がまた出でしまう恐れがある、  
という事だな。」

エイゼル「・・・そうだ。

子供らの『完成度』を見る限り、以前のそれは途中で頓  
挫したのであろう?」

ジヨナサン「・・・元々は君達のイメージしているようなものじゃ  
なかった。

純粹にパイロットの早期育成を目的としたものだった  
んだ。

だがある科学者の暴走により孤児を使った人体実験場  
と化し、

あまりにも強引な強化と無理な訓練により死亡者や精  
神崩壊した者が数多く出たそうだ・・・」

ゼオラ「私達三人は・・・その生き残りなの。」

ハーケン「胸糞悪い話だな、こいつは・・・」

神夜「むごいこと極まりないですね・・・」

カイ「だがその事が明るみに出てしまいその機関は解散。

その科学者も既に戦死しており、

生き残りである彼らを利用しようとした連中も同じ末路を辿  
った。

・・・彼らがここにいるのは純粹に彼らの意思だ。」

ハーケン「まあ、それならいいんじゃないのかい。

あんたは悪い人間じゃなさそうだな。

だが、この世界にはまだ心無い連中がいる事も事実、だ  
ろ?」

ジヨナサン「・・・つまり君達は懸念しているんだな。

自分達の存在により、彼らのような悲劇がまた繰り返  
されるのでは、と。

なにより自分自身がその火種になってしまつのでは、

と。」

カツツエ「そんな大それた事じゃないわ。

異世界の技術を使って痛い目にあった先輩として、忠告しているだけよ。」

エイゼル「我らフォルミッドヘイムは結果的にはいえ、

世界全体を滅ぼしかけてしまったのだからな……」

ラミア「……理解しているのだな。

この世界にとってお前達イレギュラーがどのような存在なのかという事を。」

リシュウ「じゃが、一つ疑問がある……

それを知っておるのなら何故お主らはここにおるんじや？

儂がおぬしらなら真つ先に逃げ出そうとするがのう。」

ハーケン「……単に逃げられなかっただけってのもあるな。

転移のショックでツアイトが損傷して動けなかったし、身を隠そうにもあんたらと鉢合わせしちまったしな。」

アシエン「ボ口艦一隻と巨大ロボ5体では勝負にもなりません……

ならば大人しく投降したほうが身のためかと。」

ラミア「しかし、お前達の身の安全が保障される根拠は無かったのだろう？」

ヘンネ「その辺はアンタらの口振りとアタシらの扱い方からみておおよそ分かったさね。

情報を言えば、それなりの扱いはしてくれる連中だってね。」

ラトウーニ「あなたが妙に自分達の事を素直に喋っていたのかが不思議だったけど……

そういうわけだったのね。」

ハーケン「それもあるが……本当のところは別だな。」

エイゼル「我らはこの世界の理を知り、見極める必要があった。」

錫華「そのためにはわらわ達の理をそなた達に知って貰うのが妥当

であろう?」

ハーケン「あんたらは俺達の事を理解できるだろうし、

何よりあんたらのリアクションを見れば俺達との違いも分かる・・・」

まあ、ギブアンドテイクってやつさ。」

ジョナサン「・・・・・・」。

もし・・・

この世界に君達の言う『悪夢』が起こってしまった時はどうするつもりかい?」

ハーケン「本来、俺達のような異邦人は早々に元の世界に帰らなきゃならない。

イレギュラーは世界のバランスを崩壊させかねないからな。

それが出来ない以上、俺達はこの世界で生きていくしかない・・・

危険を承知の上でな。」

ヘンネ「その過程でアタシ達の利用するのはこの世界の人間の勝手さ、

キツイ言い方かもしれないが、

そのせいで泣きを見る結果になったとしてもそれはこの世界の人間の責任さね。」

リー「ですが自分達のせいでこの世界が滅んでしまうような事が起きるのは

ハッキリ言っただけ良い気分ではありませんからな。

例え世界全体は無理だとしても、目の前の小火くらいは消したいってのが人情でしょう。」

ハーケン「大火事でもかまわないぜ、俺は。

それで事が収まれば万々歳だしな。」

ラミア「・・・それがお前達の意味なのだな。」

カツツエ「そういう事、

あとはあなた達の返答次第。」

エイゼル「・・・そなた達に今一度問う。

我らを知る『自覚』と『覚悟』はあるか？」

カツツエ「・・・返答次第によつては、ココを突破してでも出て行くわよ、アタシ達・・・」

ジヨナサン「フツ・・・答えるまでもないな。」

エイゼル「何・・・？」

リシュウ「それしきの自覚と覚悟・・・初めから持つておると言う事じゃ。

そうでなければここにはおらんで。」

エリ「ここにいる人間は過去に大なり小なり異世界や異星の技術に触れ、

その危険性を身を持って知っていますからね。」

ソフィア「（そう、特に私は・・・）」

アラド「そうツス！」

俺達みたいなのは俺たちだけで十分ツス！！」

ゼオラ「『悪夢』なんて繰り返させたりなんかするもんですか！」

ラトウーニ「そうさせないために・・・私達はここにいる・・・！

私達が今そう思えるのは・・・私達を支えてくれる人

がいたから・・・！」

ラミア「あいも変わらず甘い考え方だな・・・

だがその甘さが私を・・・そして世界を救ったのも事実。

まあ、なによりも、悪くはないし、な。」

カイ「フツ・・・

また成長したな、ラミア。」

ジヨナサン「ようするに私達はこういう人間の集まりなのさ。

・・・我々を信じてはくれないか？」

ハーケン「・・・。。。

・・・オーケイ、レディース&ジェントルメン！

そこまで言われて「NO」じゃ締まらないよな？」

ゼオラ「じゃあ・・・！」

リー「私は艦長がそうおっしゃるのであれば。」

・・・あと欲を言えば生きた肉さえ出れば。」

鞠音「私はパーソナルトルーパーをこの手で分解できればなお。」

ハーケン「そこはガマンしてくれないか、リーもドクターも。」

アシェン「ここでKYな発言もアレなので、取り敢えず同意という事でひとつ。」

ハーケン「取り敢えずってなあ・・・」

まあ、その方がアシェンらしくていいか・・・」

カイ「お前も苦労が絶えん性質なのだな・・・」

ハーケン「ダンディほどじゃないさ。」

アラド「じゃあ皆さん、改めてヨロシクッス！」

エイゼル「うむ。」

これからも全面的に協力させてもらおう。」

アラド「（でも顔は怖いッス・・・）」

キュオン「キュオンも大賛成」

ヘンネ「ボスがそういうなら仕方ないさね・・・」

錫華「わらわ的にもそなた達ならば信じてても良いと考えておるのでな。」

このたびは大賛成であるぞ。」

神夜「そういう事で、皆さんよろしくお願いしますね」

ジヨナサン「ではお近づきの印に、お茶でもしませんか、神夜姫？」

なんでしたら錫華姫も・・・」

錫華「すまぬがわらわには故郷に想い人がおるのでな。」

二股を掛けるわけにはいかぬ。」

ジヨナサン「ははは。」

これはまた手厳しいですな。」

リシュウ「おぬしは相変わらずじゃのう・・・」

ハーケン「いいんじゃないか？」

人間、『自分らしく』が一番だぜ？」



## 第5話 a 交わる『刻』 その2（後書き）

またしても一ヶ月ほど間が開いてしまいましたorz

今回は上っ面だけだった関係を互いに信頼する関係にシフトする過程を書いたつもりです。

人付き合いがないんで、こういうのを書くのはどうも苦手です、上手く書けているかどうか非常に心配です。

予定通り10日前後で書きあげたものに修正と削除と付加と思いつきの悪ノリが加われればアラ不思議、元々の原型がすっかり無くなってしまいおまけに二週間以上経ってしまいました！（爆）

本当は体調の良し悪しもありそのたびに考えが変わったりして結構難産でした。

皆さんも体にはお気を付けて下さいね。

### 没案抜粋

・完全オリジナルキャラのラングレー基地指令の登場。ひたすら危険性を煽るビビリキャラ。

空気読めない上に存在自体空気になるので没。

・上層部にはハーケン達の事は報告していない。

そのうちバレるし、話の幅が狭まるので没。

・楠舞霊術、錫華・美糸等を駆使して博士とカイ少佐達を拘束して本当に覚悟があるのか問いただす（ハーケン達は演技）

暴力的な手段に出る時点で円満解なんてありえないので没。大体、神夜が協力するわけない。

・・・とまあ色々ありました。

今回は今回ハブられた彼らが登場します。

## 第5話 a 交わる『刻』 その3

<ラングレー基地 第5大型倉庫兼テスラライヒ研究所仮設研究室>

リム（クリス）「・・・お兄ちゃん、この装置の取り付けなんだけど・・・」

ジョッシュ「どれどれ・・・？」

ああ・・・これはサブ関係だからメインのB-4に接続すれば・・・

あつ、でも規格が違うから接続に変換プラグがいるな、これ・・・

それっぽいのが無かったか？」

リム（リアナ）「それが・・・もうサッパリ。」

二人がかりで探したけどそれらしいのが全然・・・

「  
ジョッシュ「じゃあ・・・先にこっちの書類整理のほう手伝ってくれ。」

そっちのほうは後で俺も一緒に探すから。」

リム（リアナ）「OK、アニキ。」

博士達がハーケン達との会合を行っていたその頃、

ジョシユア達はテスラ研から輸送した機材の組み立て作業に取り組んでいた。

機材といっても特機やPTに使うための大掛かりなものではない。高性能遠心分離機や小型原子間力顕微鏡のような所謂解析装置ばかりだ。

彼らの仕事は、それらを博士達が来る前に出来うる限り組み立てて設置する事と、

大量の書類（機材の代金請求書、許可申請書、事件の報告書など）の整理である。

アルフィミイ「・・・向こうはテキパキと進んでおりますのね。

それに比べてアクセルときたら・・・」

アクセル「少しでもそう思うのなら眺めていないで手伝ったらどうだ？」

アルフィミイ「だってさっぱりわけわかんないんですもの。

そもそも組み立て方以前に、どれから手をつけていいのやら・・・

というより、どう考えても多すぎますの。」

アクセル「・・・確かに4人で片付く量じゃないが、な。」

ジヨツシュ「まあ、お二人は休んでもらっても構いませんよ？

テスラ研ではこういうのは日常茶飯事ですから俺達は慣れてますけど、

それでも今回はかなりキツイ方ですから。」

リム（リアナ）「この量じゃ、4人でやろうが2人でやろうがそんなに変わらないしね。」

アルフィミイ「ではお言葉に甘えさせて・・・」

アクセル「いや、喜んでやらせてもらうさ。

自分の食い扶持は自分で稼ぐのが俺の性分だな。

何よりコイツをこれ以上付け上がらせる訳にはいかん。」

アルフィミイ「むう・・・

そもそもなんでこのだっ広い倉庫に私達だけしかおりませんか？

はつきり言って理不尽ですの。」

ジヨツシュ「ここに入れるのが俺達しかいないからだよ。

機密レベルダブルA以上の認証カードが要るからな。」

アクセル「それに仕事の契約上、ここはテスラ研の管轄に入った。

ラングレーの研究員や軍人は原則的に入ることは出来な

いのさ、こいつが。」

アルフィミイ「でも私達の他にもテスラ研の人は・・・」

アクセル「連中なら許可申請の手続きの真っ最中だ。」

だが期待はするなよ、どうせ丸一日はかかるだろうからな。

俺達がこうして早々とここにいられるのは、ひとえにジョシュアのお陰なのさ。」

ジョッシュ「まあ、博士達の協力があつてこそですよ。」

アルフィミイ「でもそのお陰でとんだとばかりを喰らっているわけですので・・・」

アクセル「文句を言う暇があつたら少しは手を動かせ、手を。

わかつたらそのコードよこせ。

あとレンチ。」

アルフィミイ「・・・はいですの。」

アクセル「（しかし・・・身を隠すには都合はいいと思ったが、

この仕事、4人だけだと流石にキツイ。

・・・強がりもそれなりにしないと、な。）

ジョッシュ「なんでしたらそっち手伝いましょうか？」

アクセル「おまえ達も忙しいんだろ？」

・・・あとで間違えてないかチェック入れてくれる程度でいい。」

アルフィミイ「要するに『べ、別に困ってなんかいないんだからね』」

と言う事ですのね。」

アクセル「・・・お前には後でゲンコツを入れてやる。」

アルフィミイ「ぼ、暴力反対ですの・・・」

アクセル「あんな機体に乗っているお前だけには言われたくない・・・！」

リム（クリス）「どっちもどっちだと思っけどな・・・」

リム（リアナ）「アニキはどうだと思っけ？」

ジョッシュ「……………」

リム（リアナ）「あ、ゴメン。」

うるさかった？」

ジョッシュ「いや、ちよつと考え事しててな。」

リム（クリス）「考え事……………」

ジョッシュ「この倉庫の床、巨大なハッチになってるんだよ。」

多分、地下に格納庫かドックがあるんだろうな。」

アクセル「なるほど、な。」

大きさから判断すると……………」

レディバードでも余裕で入れるな、こいつは。」

アルフィミイ「要するにワンダバな倉庫ですね。」

リム（リアナ）「……………」それがどうかしたの？」

地下格納庫なんてテスラ研にもあつたじゃない。

ラングレーって北米最大の基地なんですよ？」

別にあつてもおかしくないんじゃないんじゃ……………」

アクセル「おかしくないどころか、実際この基地にはあるのさ、こいつが。」

リム（クリス）「へ……………」

ジョッシュ「ラングレーには特機用の地下ドックがあるんだよ。」

テスラ研から持ち込んだ零式もそこに収納されたはずだしな。

特機の試作パーツに偽装したソウルゲインもな。」

リム（クリス）「へえ、そうなんだ……………」

アクセル「だがジョシアが言いたいのはそこじゃない。」

……………」その中身が気になるんだろ？」

アルフィミイ「中身……………」

ジョッシュ「……………」リム、カザハラ博士から今回の仕事の内容聞いたか？」

リム（クリス）「えつと……………」

確か何かの調査がどうか。」

それ以外は全く・・・

博士も詳しい事は知らされていないって言った。

「アクセル「・・・その話が本当だとすれば、今回の件、かなりのヤマかもしれないな。」

リム（リアナ）「・・・でも、ただの調査でしょ？」

ジョッシュ「ただの調査にトリプルAレベルの機密がかかるはずが無いだろう。」

仮にここの地下になにかがあるとしても、

入り口に過ぎないこの倉庫に入るのにも認証がいることと自体、妙だとは思わないか？」

アクセル「大体所長であるジョナサン・カザハラにまで秘密にする理由がわからん。」

機密の一つや二つ知ったところで他人に喋るような人間ではない事ぐらい分かっている筈・・・」

アルフィミイ「これでもか！

・・・ってくらい怪しさムンムンですね。」

リム（クリス）「きつと凄い秘密があるんだね。」

例えば生きた宇宙人を捕まえた、とか？」

ジョッシュ「そのぐらいで秘密にするか？」

今特別に珍しくも何とも無いだろ、宇宙人だの異世界人だの、さ。」

アクセル「フツ・・・違うない。」

だが今の俺達があればこれ考えたところで何がどうできるわけでもない。

なにせ、何も知らされていないのだから、な。

それに・・・今すぐに知る必要も無いだろ？」

ジョッシュ「それもそうですね、じきに俺達も説明を受けることになるかもしれませんし。」

それよりも目の前の問題をどうにかしましょう。

この機材と書類の山、こいつを早いとこ済ませないと・

・・」

アルフィミィ「うつ・・・」

ジョシユアが雑談を終わらせて作業を進ませようと提案したその時、アルフィミィが突然倒れこんでしまった。

リム（クリス）「ど、どうかしたのアルフィミィちゃん・・・？」  
アルフィミィ「・・・・・・・・・・。」

リム（リアナ）「・・・ア、アルフィミィ！？？」

すかさずリムが寄り添い呼びかけたが、アルフィミィは返事をしなかった、いや出来なかった。

なぜなら彼女は気を失ってしまったのだから。

リム（リアナ）「な、何なの一体・・・？」

この子、どんどん冷たくなっていくよ・・・

ア、アニキ！！」

ジョッシュ「わかつている！

すぐに救護室に・・・！」

アクセル「ぐっ・・・！！？」

やめておけ・・・そいつは病気の類じゃない・・・

（だが・・・こいつは・・・）」

アクセルもアルフィミィ程ではないが、変調をきたしていた。

顔は青ざめ、息も絶え絶え、立っているのがやっとだったところだ。

明らかに普通の状態ではない。

ジョッシュ「ア、アクセルさんまで・・・どうしたんですか？」

アクセル「俺は大丈夫だ・・・

多分そいつも・・・

・・・それよりも・・・お前達、ここから逃げる・・・  
いや、もう無理かも・・・しれんがな、こいつは・・・」

ジョッシュ「・・・!??」

ジョシユアはアクセルの言動と彼らの容態の変化に戸惑ってしまった。

だがそれは始まりに過ぎなかった。

ジョッシュ「これは、地震・・・!??」

いや違う・・・この振動は・・・!??」

突然の揺れ。

それは倉庫全体を揺さぶった。

組み立てていた機材が次々に倒れ、倉庫の鉄骨は悲鳴をあげ、  
天井からはボルトや切れたワイヤー等、あらゆる金属片が落ちてきた。

さらに不可解な事に、揺れは地からではなく、空から起こっていた。

ジョッシュ「一体・・・何が・・・!??」

ジョシユアは度重なる状況の変化に対応できず、彼の頭の中は混乱が渦巻いていった。

<ラングレー基地 管制室>

連邦軍将校「何事だ!??」



この揺れは一体!？」

揺れが起こっていたのはジョシユア達がいた倉庫だけではなく、ラングレー基地全体に及んでいた。

あまりにも突然の出来事で、皆半ばパニック状態に陥っていた。警戒のサイレンがけたたましく鳴り響き、基地内の非常灯が煌々と瞬き続けていた。

オペレーター「き、巨大な質量反応と転移反応を観測しました!

予測座標は・・・

こ、この基地の真上です!」

連邦軍将校「何だと!？」

基地を揺るがすほどの空の揺れの正体。

それは転移反応、それも巨大な質量を持った何かが。

オペレーター「目標・・・転移します!」

そしてそれがこのラングレー基地上空に転移してきた。

オペレーター「目標の位置が断定、基地上空約2000m付近・・・

映像出ます!」

この基地は北米の守りの要という特性上、過去に何度も敵勢力の被害にあっている。

またエアロゲイターやインスペクターや修羅のせいで、転移反応⇨敵勢力の出現という固定概念が出来上がってしまったため、

ここにいる誰もが敵の襲来を迎え撃つ覚悟で挑むつもりだった。だが・・・

連邦軍將校「な・・・何だあれは・・・!?」  
オペレーター「・・・・・・・・・・」

綺麗・・・・・・・・」

現れたのは戦艦でもなければ、機動兵器群でもなかった。

それはまるで巨大な宝石のような、いや、まさに宝石そのものに見えた。

例えるならば血のように紅いルビー・・・

そしてその結晶は天を遮る様に現れ、空を夕焼けのように紅く染め上げた。

その幻想的な光景に皆は魅了されてしまった。

まるで吸い込まれてしまったかのように・・・

連邦軍將校「・・・ハッ!?

な、何をしている!

早く目標のデータを!」

オペレーター「・・・は、はい!」

だが、さらにけたたましく鳴り始めたサイレンのおかげで皆がろって正気を取り戻す事が出来た。

オペレーター「も、目標に反重力反応等は見られず・・・

このままだと基地に向かって自由落下します!」

連邦軍將校「ええい!

迎撃システムを作動させる!

対空防御だ! 急げ!」

オペレーター「りよ、了解です!

第5、第8、パトリオット起動!

地对空ミサイル装填完了!

目標との相対距離確認！

ターゲット・ロック！

誤差修正・・・

・・・発射準備完了！」

連邦軍将校「全弾射出！！

あんな石ところなど砕いてしまえ！！」

多数のミサイル群が結晶体めがけて轟音と共に発射された。

ただの隕石やミサイル相手ならこの戦法で間違いないだろう。

だが相手は転移してきた謎の結晶体、普通なら迂闊に攻撃など出来ない。

しかし向こうはこちらに向かって真つ逆さまに落ちてくるのだ。

迎え撃たなければこちらの被害は甚大になってしまうのは目に見えている。

したがって、ここで迎え撃つ以外の術は無い。

オペレーター「目標との到達まであと

3・・・2・・・1・・・！」

基地の空は一瞬で紅い閃光と爆音に包まれた。

基地の上空でミサイルが目標の結晶体に着弾したのだ。

連邦軍将校「状況は・・・！？」

オペレーター「・・・センサー、回復します！

目標は・・・完全に粉碎されました！」

連邦軍将校「ふう・・・やったか。

だがまだ安心は出来ん、残りの迎撃システムで基地に

落下してくる破片を・・・」

目標の結晶体は粉々に破壊された。

指揮を執っていた連邦軍将校はもとい、管制室にいた者達は皆、危機を無事に回避できた事に安堵した。

だが彼らは目の前に迫ってくる危機的状況を回避しようとするあまり、

その中に隠された危険な可能性を見逃してしまっていた。

オペレーター「・・・！」

そんな・・・ありえない・・・！」

連邦軍将校「ど、どうした！？」

オペレーター「粉碎した目標の破片のエネルギー反応が増大しています！」

連邦軍将校「な、何だと！？」

オペレーター「さ、さらに、確認しうる範囲ですが、全ての破片が基地に向かって急速に落下を始めました！」

は、速過ぎます！

迎撃システム間に合いません！！」

連邦軍将校「・・・まさかこれは！？」

彼らが見逃してしまった隠されたもの、それはこれが罠である可能性である。

結晶体はミサイルの爆発を利用しあえて砕け散りつたのだ。

そしてその破片群は爆発の際に発生したあらゆるエネルギーを取り込んで

一気に落下速度を加速したのだ。

連邦軍将校「あ、あれは一体・・・！？？」

彼があれが何なのかを理解しようとした矢先、それは彼ごと管制室を貫き、彼とその場にいた全員の命を終わらせた。  
それは例えるならば雷。

一片の大きさが数メートルで金属壁に衝突しても砕ける事のなく貫通する紅い電である。

その無数の紅い電は基地全体に降り注いだ。

基地に響き渡るのは人間の悲鳴と爆発音のみ。

結晶は人の返り血を浴び、より一層深い紅に色付いた・・・

<ラングレー基地　ブリーフィングルーム>

カイ「・・・み、皆大丈夫か？」

ラミア「え、ええ、そのようで・・・」

突然基地が揺れ出したかと思えば、轟音に爆発音、さらには妙な落下音が続いた。

この唐突で不可解な事態に誰もが混乱していた。

ソフィア「それにしても一体何が・・・？」

神夜「じ、地震ですか・・・？」

錫華「な、ならば臍を隠さねば・・・」

ハーケン「それは雷だろう、へそプリ？」

リシュウ「いや、地震ではない・・・揺れは空から起こっておった。

そして雷でもない・・・！」

ハーケン「リシュウグランパの表情から察するに・・・

この世界の自然現象ってわけでもなさそうだな、こいつは。」

神夜「じ、じゃあ一体何なんですか・・・？」

エイゼル「揺れは三つ・・・

一つ目の揺れは分からぬが、

二つ目の揺れはおおよそ見当がつく。

壁越しからでも聞こえる空を裂くような轟音……

そして数秒後の上方から聞こえた爆発音……

カイ「迎撃用の地对空ミサイルか……！」

アラド「ってことは敵襲!？」

ゼオラ「もしかしてさっきのはMAPW!？」

ということとは今の落下音は2発目の……!？」

ラトウーニ「落ち着いてゼオラ、

だとしたら私達も無事ではすまない……！」

キュオン「な、なんなの？」

その、エムエーなんとかって？」

エリ「大量広域先制攻撃兵器……

主に大型の弾道ミサイルを指す言葉だけど……」

ハーケン「オーケイ、物知りビューティー。

要するにこの基地を軽く吹っ飛ばせるほどのモノって事

だろ？」

エリ「種類や威力にもよるけど……

そう解釈して構わないわ。」

錫華「な、なんちゅう物騒な代物なの……」

鞠音「錫華姫、私達の世界にも似たようなものはありましたから、

別に驚くほどのものではありませんわよ？」

錫華「わ、分かっておる。

ちいと驚いただけぞな。」

エイゼル「そしてそれへの対応策もあるようだ。

現にこの基地の迎撃システムは作動した……」

カイ「ああ。

だがどうやら二発……いや二段構えだったようだ。」

エイゼル「二段構え？」

二発ではなく……？」

ラミア「二発目もMAPWだったとすればこの基地はもう跡形もない。

・・・おそらくは撃墜されても

なんらかの被害が出るような仕掛けが施されていたと考えるべきだ。」

ハーケン「成程・・・それで二段構え、か。

爆発音の後の大量の落下音・・・

今なお続いているあちこちから聞こえる爆発音と人間の悲鳴はそのせいだ。」

リー「ハッキリ言って悲惨な状況ですな。」

カイ「だが敵の目的が分からん・・・

基地の破壊が目的ならこのような二段構えにする必要は無い。

何発もぶち込めばいいだけの話だ。」

アラド「・・・もしかして二段構えとかじゃ無くて

ただ破片が落ちただけだったりして・・・」

ラトウーニ「無いと思うけど・・・

でもただの破片でここまで被害がでるものなの・・・

？」

アシェン「む・・・!？」

・・・確かにただの破片ではないようだ。」

アシェンは身構えた、まるで何かを迎え撃つかのように、だ。

もっとも今の彼女では戦う事は出来ないのだが。

アシェン「艦長、落ちてきたのはかなりマズイ代物のようでございます。」

ハーケン「・・・どういことだアシェン？」

アシェン「現在、この部屋の外に複数の動体反応を確認しちやいました。」

ゼオラ「救助に来た人かしら・・・？」

アシェン「残念ながら人間のモノではありません。

おまけにエネルギー反応も確認しちやいました。

それにこの反応・・・過去のデータと酷似しちゃってお  
ります。」

ラミア「お前達が知っているモノ・・・？」  
ハーケン「・・・！」

おいアシエン、外にいる連中はまさか・・・！？」

アシエン「はい、アインストです！」

カイ「！！？」

アシエンが答えたのとほぼ同時に招かれざる異邦者達が次々と強引  
に入室してきた。

分厚い金属の壁を異形の腕でやすやすとぶち破り、散乱した机や椅子  
を踏み潰しながら。

それらは骨のようなモノもいれば、植物のような姿をしたモノもい  
れば、重厚な鎧を着込んだモノもいた。

そしてそれらは明確な敵意を持っていた。

カイ「・・・こいつらが！？」

ハーケン「ああ、間違いない俺達の世界にいたアインストだ・・・  
！」

エイゼル「しかもこやつ等は・・・！」

エンドレスフロンティアの世界にいたアインストは、この世界のア  
インストでは僅かながら違いがある。

一つはその大きさ。

この世界のアインストは全てPTサイズだがエンドレスフロンティ  
アでは全て人型サイズだった。

アラド「な、なんだこの真っ黒けなアインストは！？」

ヘンネ「下がれ！」

こいつらは上位種だ！」



そしてもう一つの決定的な違い・・・  
それは上位種が存在。

姿形は下位種と同じだが、全身が黒く細部が紅くなっているのが特徴で、パワーも段違いである。

そして部屋に入ってきた10体はいるであろう全てのアインストは黒一色だった。

カイ「ちいつ・・・!!」

カイがすかさず懷に持っていた拳銃でアインストを撃った。  
だが彼らは銃撃にひるむことなくこちらに向かって進んで来た。

カイ「た、弾が効かんのか!？」

こいつら?」

ヘンネ「だから言っただろ!上位種だって!

そんなの効きやしないのさ!」

ラミア「(強力な武器ならば効くかもしれないが・・・

私の手持ちも拳銃が一丁のみか。

白兵戦特化のアシエン・ブレイデルも戦闘モードに入れない。  
何か他に手は・・・)」

ラミアが策を模索している間にも

アインスト達はゆっくりと、しかし確実に近づいてきた。

重厚な金属壁をもベニヤ板のように破壊できる彼らの力、

Wシリーズであるラミアは勿論、生身の人間が喰らえばひとたまりも無い。

そして逃げ場も無い。

カイ「（くっ……ここまでか……!）」

誰もが万策尽いたと思った。死を覚悟した者もいた。  
……だが、諦めていない者達もいた。

カツツエ「はい

お嬢ちゃん&オジサマ達。

ちよつと下がってね、巻き添え食うわよ?」

カイ「!???」

カイが「何を言っているんだ?」と言おうとしたが、  
次の瞬間、それを言う必要は無い事を理解した。

カツツエ「手加減無しでいくわよ?

マウス……イイタアアツツ!」

なぜならカツツエの姿が消えた次の瞬間、  
10体は居たであろうアインストが一瞬にして消滅してしまったか  
らだ。

リシュウ「な、なんじゃ今は……?」

アラド「何か……カツツエさんが消えて、

もの凄い音がして……

そしたら……あいつら皆消えて……」

ラミア「（どうやらアラド達や博士達にも無理だったようだ。

当然だ、私のセンサーを持ってしても対応出来なかつ  
たのだから……!）」

ハーケン達以外の者は何が起こったのかさえ理解できずに居た。  
カツツエの一連の動作を肉眼で追い、判断できる人間はここにいる

この世界の住人には一人もいなかった。

ハーケン「ヒュー

久々に見たが、相変わらず凄いな、ネコバロン。

あんたの『マウスイーター』は。」

カツツエの得意とする技、『マウスイーター』が炸裂したのだ。

簡単に言えばサマーソルトキックを複数の相手に連続で叩き込む技だ。

だが説明が簡単だからと言って、誰でも出来るというわけではない。カツツエの強靱な脚力と身のこなしの軽さによって初めて成立するのである。

リー「私は初めて見ましたが、同じネコ科の獣人の私でもとても真似出来ませんな。」

カツツエ「ムフフフ。」

アナタはもっとカラダ絞らなきゃねえ。

それに、今のアタシを煽てたって何もでないわよ?」

アシェン「別になんの見返りも期待しちやおりませんが。」

ハーケン「まあ、いいじゃないか。」

バロンのおかげで俺達は無駄弾撃たなくて済んだ事だし、な。

でも、見せ場ぐらいは残して欲しかったかな?」

カイ「・・・!」

お前らいつの間に!?!」

カイが驚くのも無理は無い。

ハーケンを含め、彼らの手元には彼らの武器があつたのだから。嚴重に管理されているはずの武器が、である。

ヘンネ「アタシらが敵に奪われた場合とか想定しないでも思っていたのかい？」

エイゼル「同一空間での転送など我らには造作も無い。」

キユオン「元々無かったんだけど用心に越したことは無いからね。

まあ前にどっかの誰かさんにやられちゃったからね。」

主にファントムとかだけど。」

ハーケン「きっかけはそれか・・・」

まあ、肝心のファントム達には付いていないわけなのだが。」

鞠音「付ける時間が無かったのだ。

それに試しも無しでやるのは気が引けましたのだ。」

ハーケン「それでナイトファウルを実験台にしたってわけか、親父が聞いたらなんていうか・・・」

鞠音「黙ってれば問題はありません。

問題があれば外せばいいだけの話ですし。」

ハーケン「まあこの際いいさ・・・」

でも本当に来るとはな、正直言って半信半疑だったんだがな。」

鞠音「私の技術を疑っていたと？」

錫華「チャラ蔵はただ単に軽く文化的な衝撃を受けているだけぞな。

もっと素直に喜ばんか、邪鬼銃王もこうして戻ってきた事だしのう。」

神夜「そのうち慣れますよ、ハーケンさん！」

ハーケン「励ましをどうも、プリンセス達。」

ハーケン達は比較的穏やかだったが、こちらの世界の住人達はそうではいらなかった。

ラミア「あの転送技術・・・供述には無かった。

それに加えあの身体能力、

測定に基づいて算出した最大値を大幅に超えている・・・！  
小口径とはいえ、銃弾をもつとしない相手をいとも簡単に・・・」

ゼオラ「隠していたのね・・・あなた達！」

ハーケン「おいおい、そうムキになるなよな、ガン飛ばしガール。

誰も全てを話したとは言っていないだろ？」

錫華「ほっほっほ。

まあ確かに話せる事は全て話したとは言ったが・・・

おいそれと話せぬ事までは話したとは言っておらぬしのう。」

アラド「（それ、思いつき屁理屈だ・・・）」

ジヨナサン「その、身体能力もかい・・・？」

リー「そっちのほうは結果的にそうなってしまった、と言うべきでしょうか。」

本当は気遣いのつもりだったのですが・・・

ハッキリ言って身から出た錆になってしまいましたな。」

ラトウーニ「どういう意味・・・？」

カツツエ「アナタ達の測定器、壊しちゃまずいでしょ？」

アラド「へ・・・？？」

エイゼル「我らが本気を出せば壁や床ごと破壊しかねんからな。

修繕費用も馬鹿にならないだろう？」

カツツエ「結構大変だったのよ？」

壊さないように手加減するの。」

カイ「そ・・・そんな理由でか？」

リー「本気をだせばそちらは損害を被り、私らはより厳重な監視下におかれるわけですから。」

互いのため、と思ってやったことですので、ここはどうか平にしてもらいたいものですな。」

カツツエ「でももうちょっと加減しておくべきだったかしら？」

あの程度で『超人的』なんて言われちゃったぐらいだしねえ。」

ソフィア「（彼らを侮っていた・・・

全てを出してはいないだろうとは思っていたけど、これ程のものだったとは・・・）」

ハーケン「切り札は最後までとっておくもんだろ？」

そしてここにきて俺達が先に切り札を見せた意味、わかるか？」

ジョナサン「『全面的に協力する』・・・

その証明というわけだね。」

アシェン「そういう事です、スケベ博士。」

ラミア「・・・もしかアシェン・ブレイデル、お前が戦闘モードに移行できないというのも？」

アシェン「いや、そっちは本当でござんすのよ。

なんかもう色々ダメな感じに調子が狂って狂って仕方なくって

困り果てておりますのことでございやがりますのよ。」

ハーケン「・・・このままだと俺達まで調子狂っちまうな。

ドクター何とかできないか？」

鞠音「了解しました。

では副長・・・」

リー「・・・アイアイ。

ふんっつ！！！」

鞠音の言葉に答えるかのようにリーは躊躇無くアシェンに踵落としを極めた。

アシェンは勢いよく床にめり込み、周囲には破片が飛び散り、粉塵が巻き上げられた。

アラド「ゲホッ・・・ゲホッ・・・！

な、なんスか？」

ラミア「私の視覚系がおかしくなければ、

リー副長がW07めがけて攻撃を行った事になるが・・・」  
ジョナサン「ああ、大丈夫。」

私の目にもそう見えた。」

ソフィア「一体何を・・・？」

アシェン（DTD）「いつつつつつつ・・・たっ！」

もつと手加減してよ！

この脳筋ネコ！」

リー「ハッハッハ。」

いけませんな、蹴りなぞ久しぶりでしたからな。」

ハーケン「まあ、結果オーライって事にするか・・・」

ラミア「コードDTDが発動している・・・！」

一体どうやって？」

アシェン（DTD）「あゝ・・・メンドウだからドクターヨロシク  
ウ！」

鞠音「仕方ありませんわね、では僭越ながら。

・・・DTDは熱暴走により一時的に身体能力と演算処理能  
力を上昇させるもの、

付け加えれば自己修復能力も上昇します。

いわば火事場の馬鹿力、本来は緊急用ですよ？」

ハーケン「そういえばそうだったな・・・」

アシェンは普段から息するみたいにホイホイ使っている  
から忘れてたぜ。」

錫華「ようするにこ奴の脳味噌は年がら年中沸騰しておるといっ  
わけか。」

アシェン（DTD）「スージー、後でその角引っこ抜くよ？」

鞠音「ゴホン・・・このDTDを発動する方法は二つあります。

一つはアシェンの意思でコードを発動させる意識的なもの、

もう一つは自身の緊急事態の時に強制的に発動させる反射的  
なものです。

前者はプロテクトによって発動を止めることが出来ますが、後者はいかなる場合においても優先させられます。」

ジヨナサン「あゝ・・・分かったぞ。」

つまりはアシエン君を『緊急事態』に追い詰めて強制的に発動させたんだな。」

リー「なに、調子の悪い機械は叩いて直すに限りますからな。」

ちなみにアシエンの場合はサイドから延髄を狙って踵落としを極めるのがコツです。」

リシュウ「お、大昔の家電製品じゃあるまいし・・・」

エリ「無茶にもほどがあるわ・・・」

ソフィア「もし壊れたりでもしたら・・・」

アシエン（DTD）「その時はそんな時だよ。」

神夜「む、無計画極まりないです・・・」

鞠音「ちなみにアシエンは暫くこのままです。」

DTDで新陳代謝を高めて自己修復していますからして。」

錫華「うざったい事このうえないぞな・・・」

ハーケン「まあ、そのうち治まるだろ。」

アシエン（DTD）「それはそうと、大分マズイ状況みたいだよ、ハーキュン！」

ボク今センサーの感度ビンビンだから分かつちゃうんだけどさ、

今この基地、ミルトカイル石そっくりの反応がうじゃうじゃあるんだよね。」

ハーケン「なんだと!？」

神夜「楔石が・・・!？」

カイ「そいつは確かお前達の世界にあったという・・・」

ゼオラ「アインストの結晶体・・・!」

アシエン（DTD）「しかもエネルギーの流れ見た感じだとさ、

どうもこの基地のエネルギー吸いまくって成長してるっばいんだよね。」



おまけに通信波のジャミング電波垂れ流してるし。

「ラトウーニ「確かに、そうみたいね・・・」

ジョナサン「D・コンか・・・!」

ラトウーニは自分のD・コンを取り出して通信状況の確認をした。

ハーケン「見たところ通信端末ってトコロか。

んでもってその様子からすると・・・」

ラトウーニ「ええ。

一般回線、軍用回線にも繋がらないわ。

おまけに救難信号も・・・」

アラド「き、救難信号もダメって事は俺達もう・・・」

ゼオラ「落ち着いて、アラド。

無線は無理でも有線ならまだ・・・」

ラミア「今試してみたがこの部屋からでは有線通信も無理だ。

おそらく結晶体によって物理的に遮断されてしまったのだろつ。」

ハーケン「・・・となれば、自力で脱出するしかない、な。」

カイ「成長するアインストの結晶体・・・

そして通信波のジャミング・・・

・・・まさか!」

ジョナサン「ああ、エント基地のパターンと全く同じだな。」

ハーケン「ちよつとまで、今なんて言った?」

ソフィア「今現在この基地に起こっている事態、これと全く同じことが数日前にもあったの。」

エイゼル「その基地はどうなった・・・?」

ジョナサン「・・・完全に壊滅しそうだ。

それも一時間も経たずにね。

基地の規模はここの方が大きいがおそらく時間はそう

かからないだろう。」

リシュウ「おまけに基地にいた連中はアインストの支配下に置かれてしまつてのう。」

農らのいた研究所を襲いに来よつたわい。

おそらく農らもじきに・・・」

神夜「そ、それつて逃げた方が良くないですか？」

ヘンネ「それ以外の選択肢があるかい！」

こんなところに長居は無用さね!!」

錫華「丁度ドデカイ穴も開いておる事だしの。」

ラミア「それにこの部屋以外ならば有線通信も可能かもしれん・・・！」

ハーケン「ならさっきの連中が来る前にさつさとトンズラするに限るな、こいつは。」

カイ「無論だ！」

総員、緊急退避！

全力でこの基地を脱出する！」

ハーケン「活路は俺達が開く！」

あんたらは道を指示してくれ！」

アラド「合点承知ツス！」

ゼオラ「さあ、博士達も早く！」

私達がフォローします！」

リシュウ「う、うむ。」

ソフィア「（でも彼らが・・・）」

ネート博士がジョシユア達の事を言おうとしたが、エリ博士がそれを止めた。

エリ「（ソフィア・・・

酷な言い方だけど、今は自分の命を優先させなさい。

そうしないと救える命も救えないわ。」

ソフィア「（……）」

リシュウ「（何、心配要らんわい。）」

あ奴らの底力は並みではないからのう。」

ジョナサン「（まあ彼らならきつと自力でも脱出できますよ。）」

途中で出会えたら合流しよう。」

ソフィア「（え、ええ……）」

リシュウ先生もカザハラ博士も気丈に振舞っていたが、それがポーズであることは明らかである。

心配なのは皆一緒なのだから。

だが今は心配するような余裕は無い、自分達の事だが精一杯なのだから。

ソフィア「（ジョシユア君、皆……どうか無事でいて……！）」

できる事は彼らの無事を祈る事だけである。

## 第5話 a 交わる『刻』 その3（後書き）

今回はモンスターパニックモノでよく見かける孤立無援の脱出劇（開始編）です。

同一空間内転送の設定はオリジナルです（漫画版の設定の曲解ともいえますが）。

本当は武器保管室まで取りに行く予定でしたが、ハーケン達の見せ場を作るためにあえて没にしました。

ファントム達がいなのはパワーバランス調整の為です。

最初から一緒にいたら流石に余裕過ぎて緊張感がなくなるのでw

脱出の手立てはあるのか？ジョシユア達とは合流できるのか？アクセルとアルフィミィに何が起こったのか？そして来襲したアインストの目的とは？

・・・まあこの話が終わる頃には大体分かりますがw

それにしてもラングレーは一体何回壊滅すれば気が済むのでしょうかね（笑）

私はきつと本家でもまた壊滅するに違いないと思っております（ヒデエ）

今週は体調も良く何とかほぼ一週間で書き上げる事が出来ました。来週はどうなるか分かりませんが・・・（^^;）

## 第5話 a 交わる『刻』 その4

<ラングレー基地 通路>

ラミア「・・・少佐、進路クリアでござんす。」

カイ「よし、だが警戒を怠るな。」

次はこの先のつきあたりを左へ、だ。」

ハーケン「オーケイ・・・」

今のところはそれなりに順調のようだな。

・・・で、次はどう進めばいい、ダンディ？」

カイ「この先の突き当りを真っ直ぐに」

アシェン（DTD）「あ、チョイ待ち！」

ハーケン「おいおい、まさか・・・」

アシェン（DTD）「ああ・・・来たよ、奴らがね・・・」

通路の奥から出てきたのは不気味に鈍く光る紅い眼をした異形の群像達、

それらは狭い通路の中をひしめき合いながら、ゆっくりとしかし確実にこちらに近づいて来た。

その血まみれの腕はまるで何かを求めるように、力なくだらりと前に突き出していた。

物事は順調に進まないのが世の常、あるうことがアインスト群と鉢合わせになってしまった。

ハーケン「よりもよって団体さんか、しかも逃げようにもどうせ逃げ道は・・・」

アシェン（DTD）「うん、ぶっちゃけて言うと袋小路だね。」

ハーケン「だと思ったぜ。」

ヘンネ「どこからともなくワラワラと・・・

ゴキブリかこいつら!？」

錫華「沸いた虫は駆除するに限るぞな。

わらわの邪鬼銃王で纏めて葬ってやろうか？」

神夜「いえ、錫華ちゃん。

ここは私が・・・!」

神夜の手には彼女の刀『護式斬冠刀』が握りしめられていた。

護式の名が指す通り、その刀は人を殺める為の刀ではない。

人を護り、悪を薙ぎ、善を助く活人剣である。

彼女の刀はまさにこのような時の為にこそ真価を発揮する。

その事は神夜自身、そして長年彼女と共にいる錫華はよく知っている。

錫華「・・・まあ、よからう。

どの道このような狭いところでは邪鬼銃王は扱い難い。

ここは一つ、稽古見がてらおぬしに任せるとしよう。」

神夜「では・・・!」

神夜はその場から跳躍、そのまま回転して天井を蹴りアインストの目の前に出た。

リシュウ「(なんとという身のこなしの軽さ!

それにあの大刀、並々ならぬモノを感じる・・・)」

ゼオラ「け、剣一本であの数と戦おうって言うの?

いくらなんでも無茶ってものが・・・!」

ハーケン「オーケイ、テンパリガール。

少し黙ってくれよ、見てりや分かる事だし、な。」

ゼオラ「!!!?」

リシュウ「(さて、楠舞一刀流・・・

どれほどのものか見せてもらうつとするか。」

神夜「先鋒、楠舞神夜・・・

推して参ります！

舞え！月輪の渦よ！」

彼女は刀を振ると同時に、言葉を発した。

そしてその言葉に応じるかのように、刀の峰に施された装飾部分が突然宙を舞い始めた。

その装飾の正体は三日月形をした戦輪『月輪』である。

それは神夜の思うがままに舞い、万物を切り刻み、巻き起こす旋風は鎌鼬を生み出す。

神夜「・・・楠舞一刀流、火鼠の衣。」

彼女は刀を一振りしただけである。

だがその一振りの間に敵対するアインスト群は鋼鉄と真空が織り成す斬撃によって

バラバラに切り刻まれてしまった。

だが彼らのしぶとさは人間の比ではない、急所であるコアを破壊されなければ自己再生できる。

現に間合いの外にいたためかコアの破壊をかるうじて免れた個体は既に修復を始めていた。

神夜「・・・逃がしません！」

だが、それを黙って見逃すほど、彼女は甘くもなければ容赦もない。彼らはコアをその届かなかった筈の間合いから、刃で突かれ、峰の月輪で抉り裂かれ、  
たちどころに物言わぬ塵と化した。

神夜「蓬萊の枝・・・！」

それは刀身を分離させることで、間合いそのものを伸ばす技である。

錫華「ふむ、腕は劣っておらぬようだのう・・・

むしろ磨きがかかっておるな。」

神夜「はい。

お師匠様に稽古つけて貰いましたから。」

錫華「それに技名の後言いとは、なかなか・・・

わらわ的にも高得点であるぞ。」

ハーケン「確かに・・・

あの腰のキレ、そして揺れ具合、以前より増しているな。

」

ジョナサン「やや不謹慎だが、

ボディコンはやっぱいいものだ、うん。」

錫華「普通、そこに目がいくかいの・・・？」

この二人・・・やはり同類よな。」

アシエン（DTD）「ハーキゅんとそのエロオヤジが特別なだけだ  
と思うけどね。」

カツエ「他の方達はみんな開いた口が塞がらないって顔してるの  
にねえ。」

リシュウ「楠舞一刀流、か・・・

儂の示現流、そして儂が見てきた

どの流派にも当てはまらん動きじゃな。

強いて言えば舞に近いものを感じる・・・」

錫華「ほほう。

剣の使い手だけに、中々良い目をしておるな、翁よ。」

アラド「うゝん、動き云々の事はよくわからないんスけど、

その刀、もの凄え仕掛けだらけだったんスね・・・

色々飛ばしたり、バラバラになったり。」



エリ「どうやって動かしているのかとても興味深いわね。」

神夜「まあそのあたりは霊術で軽くちょちょいのちょいですよ」

ラトウーニ「それにしても、ココも酷い有様ね・・・」

錫華「分け入っても分け入っても血の海とは・・・」

許されがたき暴虐ぞ、アインスト共め・・・！」

ヘンネ「血の量と散らかし具合から察するに、随分派手にやらかしているようだな。

バラバラすぎてどれがどの部分かわかりやしない。」

リー「まさに、ミンチですな。」

ラミア「（それにしても肉片が少なすぎるような・・・？）」

ハーケン「ここで立ち止まってもどうしようもないだろ？」

さつさと、逃走劇の続きと洒落込もうか、フォーリナーズ。

ちゃんとエスコートしてくれよ？」

アシェン（DTD）「ついでに脱出方法も考えてちょくダイ！」

ラミア「つまりは丸投げという事か。」

カイ「・・・みなまで言うな。

ある程度は考えてはいるが、何分敵の数は多い。

そこでここは一つ、アシェン・ブレイドルの力を使わせてもらおう。」

アシェン（DTD）「ボクをご指名？」

アンタも好きねえ。」

カツツエ「オジサマはロボフェチって訳？」

ヒトのシユミにとにかく言うつもりはないけれど、

アタシの魅力に気付かないなんて不憫だわあ。」

ハーケン「そういう意味じゃ無いだろうが。

アシェンを使ってどうするつもりだ、ダンディ？」

カイ「彼女の探知能力を利用させてもらうだけだ。

障害となる結晶体や小型アインストの反応を探ってもらう。」  
ハーケン「それならさつきからやってるだろ？」

カイ「流石に気まぐれでやっているような調子では困る。

可能ならフルタイムかつ最大出力で頼みたい。」

アシエン（DTD）「うつひゃゝ・・・」

ハーキュンよりロボ使いが荒いなこのヒゲオヤジ

は。」

ハーケン「ここで鉄屑になるよりはマシだろ？」

アシエン（DTD）「まゝね」。

と言うわけでこのほとばしる熱暴走のフルパワー、  
最大限に活用しちゃうよん！

熱探知、動体探知、電磁波探知、その他もろもろ  
のシステム、フルドライブ！」

神夜「な、なんだか物凄い事極まりないですね！」

錫華「大掛かりなだけぞな。

で、脱出のツテはあるのか？

髭よ？」

カイ「・・・輸送機が幾つかある。

だがこの大惨事だ、使える機体があればいいのだが・・・」

ハーケン「輸送機？

俺達を運んだあのマツシブなヤツか？」

カイ「レディバードか・・・」

他にもあるがなるべくならそのぐらいの大きさがいい。

アレなら大人数での脱出も可能だ。」

鞠音「と言う事は、その輸送機で脱出するのは私達だけではないと  
？」

カイ「ああ、可能な範囲内でこの職員や兵士の救助を行う。」

ゼオラ「出来ればみんな助けてあげたいけど・・・」

ラトウーニ「分断された状況ではそれは不可能に近いわ。

でも救える人は救ってあげたい・・・」

ラミア「ですが少佐、彼らを無関係の人間に見せるのは機密に反します。

後に重大な処分を受ける事になると思いますが？」

カイ「そんなもんは救える命と引き換えになら幾らでも受けてやるわ！」

ハーケン「・・・全く、熱い男だな少佐。」

俺も一口乗らせてもらうぜ、ダンディズの人助けにな。

そういうのはやって気分が悪くない仕事だしな。」

リー「ハッキリ言って面倒ではありますがね。」

錫華「そう言う出ない。」

仁義を欠いては世はまかりならんものぞ？

例え戦場いくさばと言えどもな。」

アシェン（DTD）「ここで頑張ればポイント高いからね。」

流石ハーキュン、黒い！汚い！」

錫華「黒いのはお主の腹だけぞな・・・」

ヘンネ「この状況下で味方の救援とはねえ、

随分と優しいんだな、この世界の軍隊は。」

ゼオラ「何だか癪に触る言い方ね・・・！」

ラミア「ある意味で予想内の答えではあるがな。」

ヘンネ「そんなつもりじゃないさね。」

我が身可愛さに仲間を見捨てたり裏切る連中はゴマンと見  
てきた。

そしてアタシ自身も・・・

だから正直羨ましいのさ、そういう優しさが許される軍隊  
つてのは。」

ラミア「（優しさ、か・・・）」

エイゼル「あの戦争を止められなかった我としては正直耳が痛い話  
だ。」

ヘンネ「別にアンタが気にする事じゃないさね、エイゼル。

十年以上も前の話さ。

第一、傭兵風情にそんな事言うのがアンタの仕事じゃない  
だろ？」

エイゼル「……………」

「……そうだな。」

ハーケン「ほう……」

ウイングガールにもセンチな面があるとはな。」

ヘンネ「アタシはそんな柄じゃない。」

「少しばかり昔を思い出しただけさね。」

ハーケン「色々聞きたいのは山々だが、

そいつは脱出した後のお楽しみとしようか。」

アシェン（DTD）「まあそれがベストかもね」

ぶつちやけて言うのと、只今アインストが絶賛接近

中だよん」

ハーケン「そう言う事は早く言え……！」

念のため人間の生体反応も重複して調べとけ、

ここへ向かって逃げ延びている人間がいる可能性は捨て

きれんしな。」

アシェン（DTD）「ういゝっす！」

ハーケン「……それと、神夜はさがってくれ、次は俺が行く。」

神夜「え！？

私まだまだイケますよ？」

エイゼル「体力温存のためだ。」

「なるべく足手まといは増やしたくない。」

ハーケン「だがバックアップは頼むぜ。」

「後ろと博士達の護衛は任せる。」

神夜「は、はい！」

カイ「ふう……」

「頼りがいがあるが、何も出来ない自分達が情けなくなってしまうな。」

ソフィア「仕方ありません。」

「私達にはアレを倒せる強力な武装も強靱な体力もないのですから。」

ジョナサン「我々は例えるなら無力な子羊と言ったところかな？」  
ハーケン「そう寂しい事言つなよな。」

ところで、その輸送機つてのは何処にあるんだ？」

カイ「幾つかあるが、最も近いのは第5区画の格納庫エリアのモノだ。」

先程、博士達を資材と共に運んだヤツがまだある筈だ。」

ソフィア「(第5区画)・・・！」

確かあの倉庫もあそこに・・・

・・・いえ、この状況ではもう・・・)」

ハーケン「オーケイ、セオリー通り言つたとしてそこへの進路は？」

カイ「このまま屋内通路を通ればいけるはずだが・・・」

アシエン(DTD)「あー、ダメだね。」

ドでかいエネルギー反応がビンビンしてるよ。

あとビンビンしている連中も急接近中だね。」

カイ「数は分かるか？」

アシエン(DTD)「ぱつと見てさっき桃乳姫が倒した数の2、3

倍つてとこかな？」

アラド「ち、チョイ待ち！

さっきのでもこの通路いっぱいだったじゃねえか

！」

ゼオラ「その2、3倍つて・・・！」

一体どれだけの数のアインストがこの基地にいるのよ！」

ラミア「アインストが物量戦なのは今に始まつたことでは無い。

気になるのは生きている人間の数だが・・・？」

アシエン(DTD)「それがさ、

さっきから人間の反応拾おうとしてもこいつらし

か引つかからないんだよね。」

ゼオラ「ひょっとして・・・生き残っているのは私達だけなの！？」

ラミア「あのアインストは我々の携行武装程度では全く歯が立たない。」

結果を想像するのは至極容易だ。

我々が助かっているのは彼らが側にいたからに過ぎない。」

アラド「生き残ってこう言うのもナンすけど、

気の毒としかいいようが無いツス・・・」

カイ「（彼らにはなんの言葉をかけていいのかわからん・・・

しかし妙だ・・・

連中にやられたとしても、死体の一つも見当たらないのは何故だ？）」

ハーケン「おっと!？」

ストップだぜ、みんな。

行列の先頭がご到着のようだ。」

ハーケンの言う通り、アインスト達は獲物に群がる蟻の様にこちらに向かつており、

その先頭集団が今まさに目の前にいる。

そして後続には先ほど対峙したものととは比べ物にならない程のアインストが控えている。

ラミア「（まるできりが無いな。

この数の多さ・・・過去のアインストの比ではないが、  
全て転移してきたとしても多すぎるな・・・

小型ゆえの特性なのか・・・？）」

アシェン（DTD）「・・・どーするよハーキュン。」

錫華「こやつらを纏めて相手をする暇はわらわ達にはないぞよ?」

ハーケン「えーっと、ダンディ?

他のルートは?」

カイ「あとは屋外に出て直接向かう以外にないが・・・」

ラトウーニ「この状況では一步も進めませんね・・・」

ハーケン「オーケイ、ようは外に出りゃいいんだな・・・!」

アラド「・・・トランプ!？」

ハーケン「レディース&ジェントルメン！

怪我したくなかったら伏せてな！」

ゼオラ「え……？」

ハーケンは目の前にいるアインストめがけてカード型爆弾を投げた。それは接触した瞬間、爆散し、アインストを怯ませた。

ハーケン「やっぱ怯ませるので精一杯か……

だが……！」

ハーケンは仕留めるためにカードを投げたわけではない。  
チャージの為の時間を稼ぐために怯ませるのが目的である。

ハーケン「……クロンダイク・モード！

エネルギー充填完了！」

ハーケン・ブrouningが持つリボルバー『ロングトウム・スペシャル』はその銃身を展開させ、

大出力のエネルギー弾を発射する形態『クロンダイク・モード』に変化させることが出来る。

その威力は彼が携帯する武装では最大の破壊力を有するが、それ故に隙は大きく、連射する事は出来ない。

正に最後の切り札である。

ハーケン「……でiiiiiiiiやつー！」

ハーケンはエネルギー弾を打つと同時にロングトウム・スペシャルを大きく振りかぶった。

それはまるで巨大な光の剣のようであった。

そう彼は撃つたのではない、薙ぎ払ったのだ。

アインスト「・・・!!?」

先行したアインスト群は迫り来る巨大な光の刃になす術も無く飲み込まれ

塵一つ残さず消滅してしまった。

錫華「ほっほう・・・！」

これはまた爽快であるな。」

アシェン（DTD）「今ので敵の半分ぐらいは消えちゃったかな？」

ハーケン「ふう・・・久々にフルチャージでぶっ放したが、

・・・何か前よりパワーアップしてないか？」

鞠音「フフフ・・・」

これも一重に私の調整の賜物です。

それに艦長、今のは中々の使い方でしたわ。」

神夜「ハーケンさんとっても凄かったです！」

まるで光の剣みたいでしたね。」

ハーケン「一度やってみたかったのさ、これがな。」

アシェン（DTD）「でもクリスタルのほうはビンビンのギンギンだね。」

鞠音「ちっ・・・忌々しい！」

ジヨナサン「この切れ味、まるでPT用のプラズマカッターだな・・・！」

ソフィア「一体その小さな銃の何処にそんなエネルギーが・・・？」

ハーケン「さあな。」

詳しい事はドクター・マリオンにでも聞いてくれ。」

鞠音「後でじっくりとお聞かせしますわ。」

できれば生き残った後で。」

ラミア「確かに凄まじい威力だ・・・」

だが今の攻撃で通路が分断されてしまったな。」



ハーケン「慌てんなって、揚げ足ロイド。

道をふさいだんじゃない。

作ったんだよ。」

エネルギー弾はアインストのみならず、

基地の外壁を部屋や柱もろとも破壊してしまった。

だがそのお陰で外に繋がる大きな穴を作る事が出来た。

ハーケン「ま、一挙両得ってやつさ、こいつがな。」

ジヨナサン「成程・・・

で、ここから降りようというのかい？」

ハーケン「ああ、我ながら悪くない作戦だと思うが？」

ラトウーニ「一つ聞きたいんだけど・・・

ここからどうやって降りるつもりなの？」

ハーケン「ん・・・？」

ハーケンは嫌な予感を胸に穴の外を覗いた。

ハーケン「あー・・・思ったより結構高いな、こいつは。」

カイ「高いも何も・・・

ここを何階だと思っているんだ、貴様は！」

鞠音「全く・・・

その場のノリで後先考えないからこうなるのです。」

リー「艦長の悪いクセですな。」

ラトウーニ「・・・いつもこんな調子なんですか？」

ハーケン「まあ、な。

だがなんとかなっちまうのが俺の凄ところさ、スマー

トガール。」

アラド「(うわ)・・・

失敗を棚に上げて自慢話する人間なんて初めて見た・・・

」

アシエン（DTD）「うん・・・

だいたい20メートルちよいつてトコロだね。」

ヘンネ「騒ぐと思えばその程度かい。

なら、迷う事はないさね。」

ヘンネはそう言うつと翼を広げて飛び立った。

予想していたとはいえ、この世界の住人には衝撃的であつた。

エリ「あの翼・・・本当に飛行用のものだったのね。」

カツツエ「伊達や酔狂で生えてるわけじゃないじゃない？

ま、あの子の場合他にも使えるらしいけど。」

ジヨナサン「あれで羽が白ければまさに天使だな。」

ハーケン「だが当の本人がアレじゃ良くて破壊天使だな。」

ヘンネ「何か言ったかい・・・？」

ハーケン「おっと、お早いお帰りで。

どうかしたかい、ブラックエンジェル？」

ヘンネ「ただの質問さね。

飛べるのはアタシとキュオンだけだろ。

他の連中はどうする気だい？

飛び降りるのか？」

エイゼル「我やカツツエなら問題はないだろうが・・・」

アラド「む、無理ツス！無茶ツス！

こんなところから落ちたらあの世行きツス！」

ヘンネ「・・・ったくこの世界の連中は本当にヤワだね。」

神夜「わ、私だつて落ちたらぺちゃんこですよ！？」

錫華「わらわもだぞよ、烏女よ！」

鞠音「いかに妖精族<sup>エルフ</sup>の血が入っているとはいえ、体の強度は人間と大差ないのでしょ？」

ハーケン「俺は遺伝子段階で身体強化されてると思うが、この高

さで無事に済むとは思えん。」

エリ「改めて聞くと本当に多種多様なのね、あなた達。」

ヘンネ「ただのごった煮ってだけさね。」

エイゼル「こうなれば一人ずつ抱えて降ろしていくしかないな。

頼むぞ、ヘンネ。」

ヘンネ「はあ・・・」

リーダーの命令じゃ仕方ないさね。」

エイゼル「キュオン、お前には先行して降下地点周辺の斥候と降下中の護衛を命ずる。」

キュオン「え、何でキュオンが？」

エイゼル「地上での護衛と警戒は我にでも出来るが、空中ではそうはいかん。

ヘンネの手が離せないうえに、非常に危険を伴うが、この任務はお前しか任せられんだ・・・」

キュオン「キュオンは頼りにされてるって事？」

じゃあ・・・思いっきり張り切っちゃうからね！」

キュオンは嬉しそうに戦術砲機『ブロンテ・クラフト』に乗って外に飛び出した。

先程この世界の住人はヘンネの飛行に啞然としたばかりだが、またも同じリアクションをとらざるを得なかった。

ラトウーニ「・・・飛べるってそういう意味だったのね。」

アラド「ホウキに乗って空を飛ぶって・・・」

まんま昔話の魔法使いだな、アレ。」

ジョナサン「全く、君らのやる事は我々の科学の常識を悉く破壊してくれるな。」

ソフィア「それよりも、彼女を1人で行かせて大丈夫なのかしら？」  
ハーケン「あ・・・あのリトルデーモンなら心配ないさ。」

前に言わなかったか？

ああ見えてやり手だつて。」

ゼオラ「でもあの子、全然強そうに見えないけど・・・？」  
錫華「あやつは見た目で判断するなといういい見本ぞな。」

何度痛い目にあつた事やら・・・」

アシエン（DTD）「ホント、あの見た目であの火力つてのは正直  
反則だよな。」

ヘンネ「伊達にオルケストル・アーミーの幹部やってたわけじゃないさね。」

親衛隊もいたぐらいの実力もあつたしね。」

アラド「（あの見た目じゃ親衛隊つーより、ただのファンクラブ  
なんじゃ・・・）」

キュオン「やつほー！

たっだいまー」

エイゼル「・・・戻ってきたか！」

アラド「つていうか早ッ！」

エイゼル「状況は・・・？」

キュオン「えーっとね。」

あいつら、基地の外にはあんまりいないみたいだよ。

あ、そのぶん建物の中にはギツチリ詰まっていた感じだ

つたよ。」

ハーケン「つまり、外の方が安全って事なのか・・・？」

キュオン「うん。」

ミルトカイル石がちょっと生えている程度であとはフツ

ーな感じだよ。」

エイゼル「・・・念のため、我が先行して降下地点の護衛をする。

我が着地したら、降下作業を始めろ。」

カツエ「アラ、そういうのはネコ科のアタシの仕事じゃなくって？

この程度の高さ、余裕なのはアナタも知っているでしょ

？」

エイゼル「・・・いや、カツエ、お前には殿を願いたい。」

カツツエ「上階のほうの護衛ってワケね・・・

それは構わないけど、アナタ1人で大丈夫かしら？」

リー「何でしたら私がお供いたしましょう。

何を隠そう私もネコ科でありますからして。」

錫華「隠すもなにも全面的に宣伝しておるではないか・・・」

ハーケン「・・・ついだアシエン、お前もいつてやれ。

センサーで護衛のサポートと生存者の探索をしておけ。」

アシエン（DTD）「えー！？

この高さから落ちたらボクしんじやうよ」（棒）」

鞠音「私の調整は完ペキでしょ？」

この程度の落下の衝撃程度で壊れるような事はありません

わ。」

アシエン（DTD）「うゝ・・・

こっちはまだ修復中だって言うのに・・・」

鞠音「黙らっしゃい。

そう思うのならさっさと治しなさい。

なんなら私がこの場で素直に言う事を聞くように調整してあ

げま<sup>s</sup>」

アシエン（DTD）「あー！もう！！

1番、アシエン・ブレイデル！

行っきまーす！」

リー「ハッハッハ。

気の早い奴め。

では私もお先に失礼いたします、エイゼル殿。」

アシエンとリーは率先して飛び降りた。

前者は半ば自棄で、後者はそれに呆れて。

鞠音「・・・つたく、アシエン。

そんなに私の調整がイヤだと・・・！？」

ハーケン「カリカリすんなよ、ドクター。」

結果オーライだろ？」

鞠音「まあ、今回だけはよしとしましょう。」

エイゼル「・・・では我也続こう、

後は頼むぞ、ヘンネ、キュオン。」

ヘンネ&キュオン「了解！」

エイゼルはヘンネとキュオンの言葉を確認すると躊躇無く飛び降りた。

ゼオラ「あ、あの人達・・・本当に飛び降りちゃったわ・・・！」

ヘンネ「ウチのボスはあるのなんでもないさね。」

ハーケン「・・・ヤレヤレ、この高さでもなんとも無いとは。

流石は特殊任務実行部隊のリーダー、ヤワな体はしていない、か。」

一同が呆れている中、暫くすると地響きのような着地音が聞こえた。

ヘンネ「・・・着地したようだね。

行くよ！

取りあえず、そのボウズからだ。」

アラド「え！・・・え！？」

な、なんでオレ何スか！？」

ハーケン「持ち運びがよさそうで、丈夫そうだからじゃないか？」

アラド「そ、そんな理由ツスか！？」

ヘンネ「グダグダぬかすな！

時間が無いんだ、しっかりつかまっとくんだよ！」

アラド「ホ、ホントに大丈夫何スか、コレ？」

カイ「落ちて着け、降下訓練だと思えば・・・。」

錫華「落下傘は無いがな。」

アラド「そ、それってただの飛び降り自さ・・・って  
うぎゃあああああああ・・・」

アラドはヘンネに抱えられて悲鳴と共に下に落ちた。

ジョナサン「うゝむ、美女に抱えられるのも悪くはないと思っ  
たが・・・」

不安になって来たな。」

ハーケン「こういう時、この世界ではどうするんだ？」

ジョナサン「とりあえず神に祈る。」

ハーケン「どこも同じだな。」

#### <ラングレー基地 第5大型倉庫>

リム（クリス）「（ううゝ、リアナ・・・わ、わたし怖いようゝ  
・・・）」

リム（リアナ）「（それ何べんも言わないの！

怖いのはアタシやアニキだって同じなんだから。

お願いだからちよつと黙ってて！）」

リム（クリス）「（わ、分かったからどならないでよう・・・）」  
ジョッシュ「・・・リム、アルフィミイの様子は？」

リム（リアナ）「熱も元に戻っているみたいだし、呼吸も安定して  
いる・・・」

多分、もう大丈夫。

アクセルさんのほうは？」

ジョッシュ「アルフィミイと似た症状だが大分軽い・・・」

この分だとすぐにでも起きられると思う。」

ジョシユア達はあの騒動の中にもかかわらずその場から動こうとはしなかった。

理由は二つ、

一つはアルフィミイが謎の昏睡状態に陥ってしまい、

そしてアクセルも暫くして同じく気を失ってしまったからだ。

リム（リアナ）「良かった・・・」

二人とも一時はどうなるかと思ったけど・・・」

アクセル「う・・・」

気を失っていたか・・・不甲斐ないな、こいつは。」

リム（リアナ）「ア、アクセルさん・・・!？」

大丈夫なんですか!？」

アクセル「だから言っただろ・・・こいつは病気の類じゃないとな。

ウツ・・・?」

アクセルは立ち上がろうとしたが、何故かその場で転んでしまった。目覚めたばかり、というのもあるだろうが、彼はそうとは思えなかった。

アクセル「（何だ・・・?」

体が動かしづらい・・・?」

いや、何か違うような・・・?）」

ジョッシュ「ほら、

あまり無理はしないほうが・・・」

アクセル「・・・いや、もう大丈夫だ。

それより何が起こった?」

ジョッシュ「けたたましい警報音とミサイルの発射音、その後何か  
が大量に落下して・・・」

奴らが・・・」

アクセル「奴ら・・・?」



ジョッシュ「・・・お見せします。

リム、アルフィミイを頼む。  
すぐ戻る。」

リム（クリス）「・・・分かった。」

ジョッシュはその場から離れ、倉庫の扉の方へ向かった。  
そして扉をほんの少し開け、その隙間からアクセルに外の様子を見せた。

ジョッシュ「どうぞ・・・」

アクセル「こいつは・・・!？」

そこには地獄があつた。

どう控えめに見ても地獄にしか見えなかった。

耳に入るのは銃声と人間の阿鼻叫喚と獣の嘶き。

目に映るのは半壊した建物と

外からでも識別できるほど彩られた紅い通路と

そこで群れなす異形の群像達、

そして血を吸って成長しているかのような紅い結晶体。

扉の隙間から漏れてくるのは肉が焦げるような嫌な臭い。

そこにもはや兵も人間もない。

いや、いられる筈が無い。

これがジョシアが動かなかったもう一つの理由である。

ここから出ると言う事は、地獄の釜に身を投げ出すのと同じ語だからだ。

ジョッシュ「過去のデータには無い小型のアインストです。

人間を集中的に襲っているようです。」

アクセル「あちこちに落ちているのは拳銃に、サブマシンガンか？

何故武器があんな所に？」

ジョッシュ「使っても意味の無い武器なんて逃げるのに重くて邪魔なだけです。」

それに対して向こうは人間をボロ雑巾のように引き千切る事ができる馬鹿力に加え、

飛び道具も備えています。」

・・・そんな奴らとまともに戦おうとする方がどうかしていますよ。」

アクセル「対人戦に特化したアインストというわけか。」

（そしておそらくはアルフィミイが話していた第3のアインスト・・・！）」

ジョッシュ「エント基地の生存者が全くいなかったのが不思議ですが、

その理由がようやく分かりました。」

アクセル「ああ。」

こうなってしまうえば近代的な兵器は無意味、あるのは一方的な虐殺だ。」

ジョッシュ「・・・これでもまだマシになったほうです。」

数分前までは悲鳴と断末魔で酷いもんでしたよ。」

アクセル「・・・俺とアルフィミイが倒れてどのくらいだ？」

ジョッシュ「10分あまりと言った所でしょうか。」

アクセル「たった10分で、か。」

それにあのクリスタル・・・

となると、通信回線はオシヤカか？」

ジョッシュ「確かに強力なジャミングですが、短距離用の通信なら何とか。」

ですが長距離用は完全に使用不能、SOS信号も出せないので救援要請は無理です。」

アクセル「外の連中、そして俺達を見る限り、まだ操られているよ

うな様子は無いな・・・

（通信回線もまだ一部生きているところを見ると、単純なパワー不足なのか？

それとも何か別の・・・？）

ジョッシュ「・・・戻りましょう。」

ここに長くいると連中に気付かれます。」

アクセル「ああ・・・」

ジョシユアは扉を閉め、アクセルと共にリアナ達のいる場所へ戻った。

あの地獄から逃げるために。

リム（リアナ）「アニキ、外の様子は？」

ジョッシュ「酷くなる一方だ。」

悲鳴がだんだん聞こえなくなってきた。」

リム（リアナ）「そ、それってつまり・・・」

ジョッシュ「向こうの建物にいる人間がいなくなったら、次はここに来るかもしれない。」

リム（リアナ）「他所の基地から救援とか来ていないの？」

こんなになってるんだから気付いてもいいんじゃない・・・

・

ジョッシュ「まだこうなって10分かそこらだ、いくらなんでもそんなに早くは無理だ。」

一番近い基地から出発したとしてもここまで到着するのに最低でも一時間以上かかる。

気付いてはいるだろうが、望みは持たないほうがいい。」

アクセル「救助が来る頃には基地の様<sup>よう</sup>様<sup>よう</sup>替えは終わっちまってるだろうな。」

そしてそいつらも俺達もテスラ研を襲った連中の仲間入

りってわけだ。

その前に俺達がアインスト共の餌食になるのが先かもな。

「リム（リアナ）」「だ、だったらこんなところ・・・！」

ジョッシュ「長居は無用、と言いたいだろうが、よく考えてみる。

まずこの基地には生半可な銃火器をものもしない化物が何百もいる。

強行突破は出来ない。」

リム（リアナ）「じゃあ隠れながら出口を探すってのは？」

ジョッシュ「この基地は広すぎる。

それにいつ連中のコントロール下におかれるか分かったもんじゃない。

出口を探す時間なんて殆ど無いに等しい。

そもそも出口なんかあるのかすら怪しいがな。」

アクセル「戦力的に、時間的に、こちらが圧倒的に不利、というわけなのさ。」

リム（リアナ）「ようするに絶望的ってわけね・・・」

気休めでもいいから望みがあるとか言って欲しいな・

・・

ジョッシュ「現実的に物事を述べただけだ。

もっとも、励ましてこの戦況が変るとは思えないがな。

「リム（リアナ）」「なんかクリフみたいな言い方だな・・・」

アクセル「なら、白旗でも掲げるか？」

ジョッシュ「だが、それ通じないからなんとかするしかない、でしょ？」

アクセル「フツ・・・おまえも大概に諦めが悪い奴だな。」

ジョッシュ「でなければ南極くん dari からここまで来たりしませんよ。」

もっとも、手の打ちようが無ければ別ですがね。」

アクセル「違いない。」

リム（リアナ）「アニキ、ひょっとして何か策でもあるの？」

ジヨツシュ「思いつき程度ならな。」

リム（リアナ）「聞くんじゃなかった・・・」

アルフィミイ「なにやら・・・すさまじい展開になってきたようですね。」

リム（リアナ）「ア、アルフィミイ！？」

アクセル「何だ、起きたのか・・・」

アルフィミイ「アクセル、その言い方はあんまりではありませんの？

もっとうるさくいっぱい抱きしめて泣いて喜ぶとか・・・

・

ジヨツシュ「冗談が言えるようですから心配は要らないようですね。」

・

アクセル「だな。」

アルフィミイ「あ、あんまりですの。」

これでもまだ結構フラフラなのに・・・」

ジヨツシュ「冗談だよ。」

体の具合は流石に本調子じゃない、か。」

アルフィミイ「はい。」

ですが、そうも言っていられないようですので。」

アクセル「まるで今まで起きていたような口ぶりだな？」

アルフィミイ「そう睨むのは勘弁して欲しいですの・・・

確かに先程から意識はハッキリしていましたが、

体の自由が利くようになるのに時間がかかりまして・

・

リム（リアナ）「なるほど・・・

狸寝入りを決め込んでいたってわけ？」

アクセル「いや、今回ばかりはそうではないようだ。」

俺も目覚めた直後は似たような目に遭った。」

アルフィミイ「（やはり、アクセルも・・・）」

アクセル「金縛りとはまた違うような感じだったけど・・・

何か分かるか？」

アルフィミイ「恐らくは、私とアナタと彼らの同じ部分が互いに引かれたのだと思いますの。」

リム（リアナ）「同じ部分・・・？」

アクセル「掻い摘んで言うと、俺は昔こいつに命を助けられた。

こいつの持つアインストの力を使つてな。」

ジョッシュ「では、アクセルさんが彼女と共にいるのは・・・！」

アクセル「変に考えるな。

ただの成り行き同士だ、こいつがな。」

リム（リアナ）「（な、なるほど・・・！）」

アルフィミイ「でもあの時私は既にアインストではなくなっていました。

ですがアインストを祖とする事には変わりませんの。

そしてその力で命を取り留めたアクセルも・・・」

ジョッシュ「・・・引かれたって事は、一種の感応のようなものか？」

アルフィミイ「近いけど遠い・・・今の私に分かるのはそのぐらいですの。

もう彼らは違いすぎてしまっていますので・・・」

アクセル「違いすぎる、か・・・

ベーオウルフの事もある、イエッツトの時のように

ただ暴れまわっているだけと言っわけではなさそうだが・

・・・？」

アルフィミイ「ごめんなさい、彼らの声はもう私にも・・・」

ジョッシュ「正直、謎だらけで困るな・・・」

アクセル「言うな、それよりも

今はこの状況をどうきりぬけるかだが・・・

む・・・？」

アクセルは話を切り出そうとしたが、その時一つの異変が起こった。ほんの数秒だが空気を劈くような音が外から聞こえてきた。

アクセル「何だ・・・この音は!？」

建物が崩れる音ではないぞ!？」

ジョッシュ「まさか・・・!？」

ジョシユアは扉の方へ走り、外の様子を見た。

ジョシユアは見た、基地が両断されているほどの巨大な破壊の爪跡を。

そしてこの状況でそんなものを見て希望を連想する人間はいない。

ジョッシュ「クッ・・・!」

ジョシユアは扉を閉め、リム達の待つほうへ体を向けた。

その時、まるで地響きのような音が遠くから聞こえたのを彼は耳にした。

リム（リアナ）「どうかしたの、アニキ!？」

ジョッシュ「・・・奴らが、基地の破壊を始めた・・・」

ハーケン達の実在を知るはずも無いジョシユアにとってはそう判断するしかなかった。

リム（リアナ）「そ、それってつ、つまり・・・!？」

アクセル「・・・一つの目的が完了し、次の段階に移ったと言う事だ。」

ジョッシュ「最初の目的が人間を殺す事、だとすると・・・」  
アルフィミイ「もうあの基地には誰も・・・」

アルフィミイが言いかけたのとはほぼ同時に、  
赤く光る何かが、倉庫の天井を貫き、リムの体をかすめた。

リム（リアナ）「あ……？」

ああ……あ……？……？」

リムの足元の床には穴が開き、熱を帯びた色をしていた。

彼女の肌は余波の熱により火傷をしてしまったが、

今のリムにとってはそんな事を気にする余裕など無かった。

穴の開いた天井から覗くそれは新しい獲物を見つけた事を確認した。

そして彼女もその事を理解した。

その瞬間、彼女の意識は遠のいた。

ジョツシュ「！！？」

リム                      ツ！！」

ジョシュアは叫びながらリムに駆け寄り、

その硬直した体を抱きかかえ、すばやく身を引いた。

数コマ遅れてアクセル達も気付き、ジョシュアと同じ場所に移動した。

アクセル「天井からだと！？」

奴らが近づくような音などは全く……！！？」

アクセルの疑問はもつともである。

アインストは基本的に空を飛べない。

飛べるのはアルフィミイのペルゼインとクノッヘンの亜種だけだ。

だが前者と後者には大きな違いがある。

ペルゼインは宙に浮いて空を飛ぶが、

クノッヘンは翼で羽撃くかあるいは変形した体で飛行機のように飛



ぶ事しか出来ない。

だが、今の攻撃の前後には羽撃きの音はおろか一切の移動音が無かった。

そもそもクノツヘンは物理的な攻撃しか出来ない。

ビームや電撃の類など撃てるはずがない。

アクセル「こいつは一体・・・！？」

だがアクセルの疑問を他所に、紅い雷が次々と天井を突き破り、そしてついには大穴が開き、その無音の飛翔体が降下してきた。それと同時にアクセルの疑問は解けることになる。

アクセル「なるほど、な・・・」

現れた異形は鳥のようなシルエットをしていたが、その姿は鳥とはかけ離れていた。

異形の殻を身に纏い、触手が寄り集まってできた異形の翼を持ち、その体は血のような紅とヘドロのような黒で彩られた毒々しいモノだった。

そのモノの名は『ヘルツォーク』

音も無く空を浮遊し、雷を操るアインスト。

そしてこの世界には存在しないアインストである。つまり、彼らには知りようが無い存在なのである。

ジョッシュ「あ、あんな奴はデータには・・・！？」

アクセル「ああ、俺も初めて見た。

真正正銘の新顔ってワケだ。」

天から舞い降りたそれはたった一体。

だが抵抗する術を持たない彼らにとっては十分すぎる恐怖を与えた。

そしてそれは獲物を追い詰める獣のようにゆっくりと降りてきた。  
だが彼女にはそうは見えなかった。

ヘルツォーク「……………」

アルフィミイ「(そう……アナタは……そしてアナタ達は……  
)」

ヘルツォークはその異形の翼を前に伸ばし  
アルフィミイ達のいる方へ近づいていった。  
アルフィミイだけはその行動を理解していた。  
だが彼女以外は敵が迫っているようにしか思えなかった。

アクセル「(……まいったな、こいつは)」

ジョッシュ「(……すまない、リム。)」

<ラングレー基地 屋外>

リシュウ「と、年寄りにはこいつはちときついのだ……」

ヘンネ「それでも精一杯なんだよ、ジイさん。

じゃ、次行くからな。」

ヘンネはそういつと翼を羽ばたいて一気に上昇した。

リシュウ「凄いもんじゃのう、一瞬で上に……」

エリ「降下速度より早いかもしれませぬね。」

ソフィア「あれは降下というよりむしろ落下と言ったほうが適切ですよ。」

リシュウ「全く、悲鳴をあげる暇も無かったわい。」

エイゼル「博士達はどうか今のうちに少しでもお体を休めるように勤めてもらいたい。」

護衛は我等が致しますので。」

ジヨナサン「そうさせてもらうさ。」

リー「しかしハッキリ言って手間がかかりますな。」

アシエン（DTD）「いゝんじゃない？」

もう少しなんだし。」

アラド「だ、だれか少しは俺の心配もしてくだしい・・・」

リー「何を言うかと思えば、

大の男がだらしないですな。」

アラド「こういうのに男も女も関係ないと思うけど・・・

うっ・・・」

最初のダイブの時にヘンネはいつものように降下した。

落下速度に翼のパワーを加えて高速で降下、そして地面ギリギリで羽ばたいて落下速度を相殺して着地する。

それは彼女にとってはなんとも無い事だったが、

アラドにとっては胃と脳が口から出てしまいそうなほどの一大事だった。

お陰でヘンネは手加減をして降下するように気をつける事にしたが、最初で最後の被害者アラドは未だにまともに立ち上がる体力すら回復していない。

ジヨナサン「こういつては何だが、

最初がアラド君で助かったよ。

君は肉体強化と訓練を受けていたからその程度ですんでいるが、

そうでない我々だったら降下どころか昇天してしまっていたらろっからな。」

ソフィア「でも一歩間違えればアナタとも言えども危なかったわ。」

アラド「へへ・・・」

悪運の悪さとしぶとさが俺の長所ツス！

それより・・・何か暑くないツスカ？」

リー「あー・・・それはアシェンのせいですな。」

なにせ熱暴走モードですからして。」

アシェン（DTD）「今ならマジでヘソでお茶が湧かせるよ〜ん。」

アラド「出来れば熱いのより冷たいのが欲しいツス・・・」

ジョナサン「やれやれ・・・ところでアシェン君？

ハーケン君から言われた生存者の探索のほうはどうなっているかい？」

アシェン（DTD）「それが中々どうしてサツパリなんだよね。」

ミルトカイル石の怪電波が強くなっているって探しくいっただけやしな。」

リー「ハッキリ言って、期待できそうにはありませんな。」

アシェン（DTD）「一応生体反応は出ちゃいるんだけど、

なんかミョーな感じで・・・

ん・・・？」

リー「どうした、アシェン？」

アシェン（DTD）「ちよいまつて・・・今は・・・

人間の声！？」

アシェンは確かに耳にした。

近くから聞こえる人間の叫び声、それは断末魔でも悲鳴でもない。

誰かの名を叫ぶ声だ。

アシェンは声がした方向にあらゆるセンサーを向け解析を始めた。

アシェン（DTD）「人間の生体反応・・・間違いない生存者だよ

！！

場所は・・・あの倉庫の中！！」

ジョナサン「本当か！？

（確かあの倉庫は・・・！）

アシェン（DTD）「けどこれは、限りなくヤバイ！  
リシュウ「どう言う事じゃ！？」

ソフィア「もしや、すぐ側にアインストが・・・！？」

アシェン（DTD）「ザッツライツ！」

エリ「じゃあ、このままだと！？」

リー「間に合うか、アシェン！？」

アシェン（DTD）「違うね！」

間に合わせるんだよツ！！

アシェンは蒸気を上げながら全速力で生存者のいる倉庫の方へ目指した。

彼女がいた場所には高温に熱せられた空気だけが残った。

アラド「な、なんつーデタラメな速さ・・・！」

ジョナサン「・・・詳しく聞く間もなく行ってしまったか。」

リー「しかし、アシェン・・・今回は結構長いすな。」

アラド「あのDTDってヤツツスか？」

ジョナサン「それだけ君の踵落としが強烈だったんだろ？」

リー「いえ、それでも元に戻ってもい頃合だと思いますが・・・

そうなると少し厄介な事になるやもしれませんな。」

エリ「どう言う事かしら？」

リー「いえ、以前ドクターから気になる事を聞いたのですが、

アシェンのやつ、モードを解除すると一時的にパワーが落ちるそうで、

その度合いはDTDの長さに比例するとか。

あと今回のような場合はモードは自分で制御できないので何時終わるのか

アシェン自身にも分からないとか・・・」

ソフィア「・・・つまり、もし今の状態で強制的にモードが解除さ

れでもしたら・・・」

リー「おっと、その先は言わないでください。

アシエンが離れた今、私までココを動くわけにもいかんでしょう。

行くのは艦長か、姫様方が着き次第、それまでは・・・私は・

・・・」

ジョナサン「ふう・・・神に祈るのは今日で二度目だな。」

リー「（だが問題は、アシエン、おまえがそれを知っていると言う事。

知っていて何故・・・？）」

そうアシエンは気付いていた。

もうリミットはすぐそこにまで迫っていると言う事を。

だが彼女は戸惑うことなく助けに行く事を選んだ。

それは彼女自身の意思でもあるが、彼女の失ったはずの記憶メモリーが叫んでいたからだ。

あの人を守れと、あの人を救えと。

アシエン・ブレイデル、その名前は魔法にかけられた物語の主人公のもの。

その魔法は彼女をとびきりにしてくれるがタイム・リミット12時の鐘を過ぎれば、元のみすばらしい姿に戻ってしまう。

物語の主人公はそれを知って王子様の前から逃げ出した。

だがこの彼女はそれでもなお逃げる事を選ばなかった。

何故ならそこにいるのは彼女の大切な人の大切な王子様なのだから。

## 第5話 a 交わる『刻』 その4（後書き）

次週はどうなることやらって書いた矢先にもう一ヶ月半近く経ってしまいました（TT）

その分、今回は大幅増量です。

ついでにこぼれ話も増量です（オイ

最初書いたときには半角で5000字程度だったのでアイデアを練り直したり付け足したりした結果4倍近くなってしまいました（笑）

分割も考えましたが間がかなり開いたのと分割すると少しテンポが悪くなるのであえてそのまま掲載です。

かたやズルに近い無敵兵器満載で順調に脱出中なのに対し、かたや抵抗手段ゼロの四面楚歌状態という酷い格差が出てしまいました（^^;）

正直、両サイドのパワーバランスの差が激しすぎて書いてて困りました。

妙に多いアインスト軍団、その正体が分かるのは次回。

でもワリとストレートに書いたつもりなので大方の人は分かっているはず（汗）

実は今回グロ描写多めの予定でもっと事細かく書くつもりでしたが、OG組とEF組で温度差があったり、

アラド達が倒れたり吐いたりやさぐれたり立ち直ったりと

話が一向に進まないののでその辺りは削除&書き直しをしました。

今回終盤のアシエンの『シンデレラ』になぞらえたりは

『無限のフロンティア』をプレイしてハーケンと神夜の名シーンを  
見て思いついたもの。

モチーフになぞらえながらモチーフに反する事で

キャラとして確立する手法は書いて楽しいけど正直難しい(汗)

さて次回はどうなることやら・・・



## 第5話 a 交わる『刻』 その5

<ラングレー基地 第5倉庫>

アシエン（DTD）「だああつりやああああああッ！」

異形の翼がアクセル達に迫ろうとしたその刹那、  
アシエンは両の脚で壁に大穴を開け、そのままヘルツオークを倉庫の壁に叩きつけた。

「ジョッシュ&アクセル&アルフィミィ」「……ツツツ!?」「」

アシエン以外の全ての者は攻撃の衝撃波でその場から吹き飛ばされた。

そして土煙の舞う中、アシエンは動けずにいた。

アシエン「（モード解除を確認……

だがパワーの消耗が激しすぎた……

……何……だ……この……妙なノイズは……

？）

「……?」『W O……の子を……がい……それと……』

何故なら今、彼女自身にとっても不測の事態が起こっていたからだ。  
長時間の熱暴走モードがそうさせたのかどうかは定かではない、が、  
彼女の失われたメモリーの一部が呼び覚まされようとしていた。

<???>

アシエン『・・・』

ここは・・・どこだ・・・？

調整力プセルの中・・・？

声が・・・聞こえる・・・』

アクセル「まだこんなところにいたのか、レモン？」

レモン「あら、アクセル？」

てつきりもう行ったものかと思っていたのだけど。」

アクセル「これから行くところさ。」

ここに来たのはついでだ、これがな。」

レモン「フフ・・・相変わらず口下手ね、アナタは。」

ま、そういう事にしておいてあげるわ。」

アクセル「・・・こいつに、何を吹き込んでいる？」

レモン「ただのメンテナンス。」

これが最後になるかもしれないし、ね。」

アクセル「・・・まだソイツらに未練があるのか？」

レモン「・・・さあて、ね。」

アクセル「こいつ等のプロジェクトはとうの昔に凍結された。」

本来なら、破棄されてもおかしくは無い。

プランE Fとやらで『向こう側』へ行くことになったと

してもそいつ等は・・・」

レモン「でも、用心に越した事は無いでしょ。」

転ばぬ先の杖って言うじゃない？」

アクセル「・・・なら俺はそんな事が起きないように祈るさ。」

じゃあな、テスト研で待っている。」

レモン「行っちゃったか・・・」

私もそろそろ行かなきゃね。

・・・お休み、W07。

あの子をお願いね、それと・・・出来ればアクセルも、ね。

「  
アシエン『……………」

レモン……サマ……アクセ……ル……』

<ラングレー基地 第5倉庫>

アシエン「……今のビジョンは……

メモリー……なのか、私の？

何故今になって……

いや、それよりも今は……)」

ジョツシュ「な、何が起こったんだ！？」

アルフィミイ「もの凄い音が……

この人は一体……！？」

アクセル「(ラミア・ラプレス……

いや、違う……こいつは！？)」

アシエン「……生体反応と敵沈黙を確認。

寸でのところで間に合ったようだな。」

ジョツシュ「特殊装備……いや、サイボーグか！？」

アクセル「……どちらでもない。

コイツは戦闘用アンドロイドだ。」

ジョツシュ「アンドロイド！？」

アクセル「(コイツは確かW07……

成程、ならばテスラ研への依頼というのは……)」

アシエン「(この声……！

さっきのメモリーの……

そうか……私を駆り立てていたのは恐らく……

……だからといって、私がするべきことは変わらな

い。  
)

救援に来た、負傷者はいるか？」

ジョッシュ「あ、ああ。

俺は良いが、リムが・・・

そうだ！リムッ！リムッ！！」

ジョシユアは慌ててリムを探し、側により、呼びかけ続けた。

リム（クリス）「う・・・うつ・・・

お、お兄・・・ちゃん？」

ジョッシュ「よ、よかった・・・」

アシエン「外傷は軽微・・・生体反応も正常値だな。

・・・立てるか？」

リム（クリス）「は、はい！大丈夫です、なんとか・・・」

リム（リアナ）「（アニキ、何この変なカッコした人？）」

ジョッシュ「（救援に来たんだそうだ・・・

よくは知らないがアクセルさんの話によれば、アン

드로이드らしい。」

リム（リアナ）「（アンドロイド・・・？）」

アクセル「・・・おい、W07。」

アシエン「何ですか、ロリコン野郎。」

アクセル「・・・誰がロリ・・・まあいい、構ってたら話が進まん。

」

リム（リアナ）「（・・・の割には、随分口は悪いようだけど？）」

アクセル「・・・救援に来た、と言ったな。

他に生存者がいるのか？」

アシエン「その回答に関してはイエスちゃんだったりしちやいますのだ。」

リム（クリス）「（それに何か、喋り方も変だよ・・・???）」

アクセル「・・・人数は？」

アシエン「もうそろそろ来る筈なのでご勝手に見やがりませ。」

ジヨツシュ「???」

<ラングレー基地 脱出組 第5倉庫に向かって移動中>

ハーケン「まったくアシェンのヤロー」。

まさかとは思うがヘマしてねえだろうな・・・!？」

錫華「そう思うのならもつと速う走らぬか、チャラ男よ。」

あのポンコツなら十分ありえる話ぞ？」

ハーケン「そういう台詞は自力で走ってから言うもんだぜ、横着プリンセス。」

皆が走る中、錫華は邪鬼銃王の上に乗って移動していた。

だがハーケンのように文句をいう輩はいても、その横着な行為をやめさせる人間は1人もいなかった。

錫華「別にわらわだけが楽しようとしてやっているわけではないぞ？」

ジヨナサン「まあ楽ではあるのは事実だがね。」

リシュウ「揺れも思っていたより大分少ないしのう。」

何故なら錫華は博士達、非戦闘員を邪鬼銃王を使って運んでいたからだ。

アラド「しっかし・・・」

まあ、なんとというかよく乗せられるよなあ・・・」

錫華「ほっほっほ！」

流石に百人は無理だが、

この程度の数、わらわが作った邪鬼銃王にとっては無きも同

然ぞ！」

ゼオラ「確かに、強度的には問題ないかもしれないけど・・・」

ラトウーニ「姿勢制御装置はおるか、動力も無いのにどうやって・・・？」

錫華「強いて言えば、ひとえにわらわの天才的な腕がなせる技、と言ったところかのう。」

アラド「（微妙に答えになってない気が・・・）」

ハーケン「で、ドクター・カザハラ。」

あの倉庫に居るのは4人、全員あんたらの部下、って事でいいんだな？」

鞠音「というか、私達を調べるというのに数が少なすぎませんか？」「ジョナサン「もちろん本来なら数十人のスタッフで対応するところだ。」

だが彼らの仕事はそのスタッフが来るまで下準備を済ませておく事だ。」

エリ「それに機密上の関係もあって人数には制限が付けられているの。」

リシュウ「下準備程度に人数は割けられんという訳じゃわい。」

リー「どこの世界でも泣きを見るのは下っ端と相場は決まっておりますな。」

ハーケン「ウチの場合・・・逆じゃないか？」

鞠音「それは艦長がまだまだひよっこだからですわ。」

錫華「そろそろ駄弁りはそのぐらいにしておけ。」

ほれ、見えてきたぞ？」

彼らの視界はアシエンが向かった第五倉庫を捕らえた。

願うことなら無傷でいて欲しかった、がその倉庫には甚大な被害が及んでいた。

カイ「・・・壁に大穴が開いているな。」

リー「あの壊し方からしてやったのはアシェンですな。  
これはまた随分とハデにやらかしたものですな。」  
ハーケン「ハア・・・何事も無いわけがなかったか、こいつは。」

<ラングレー基地 第5倉庫>

ハーケン「おーい！

アシェン、いるかー！？」

アシェン「これはこれは艦長、それに皆々様方。

遅いおつきで。」

ハーケン「おまえが突っ走るからだろうが、おまえが！」

アシェン（DTD）「あゝあゝ、聞こえない。」

錫華「誤魔化すのも大概にせい、ポンコツが。」

ヘンネ「・・・分解するなら手伝おうか？」

リー「それは勘弁して欲しいですな。」

アシェンがいないとドクターの科学者としての欲望の捌け口  
が一つ減りますからして。

それはそれは大変な事になりかねませんので。」

鞠音「副長、少し冗談が過ぎましてよ？」

リー「ハハッ、これは失敬。」

ハーケン「その分だと、いつもの調子に戻ったようだな。」

状況は？」

アシェン「見たままでやります。」

ハーケン「オーケイ、シンデレラ。」

いつもの調子だな、こいつは。

1, 2, 3, 4・・・っと一応人数は合うな。」

ハーケンは道中博士達から聞いた倉庫にいる人間の人数と生存者数

を照会した後、

後方で待機している邪鬼銃王にいる博士達のほうへ報告しに向かった。

ジョシユア達というと、この珍妙なチームに啞然としていた。

この半年間、非日常を日常としてきたジョシユアでさえ、呆然とするしかなかった。

ジョッシュ「(な、なんだ、この人達・・・?)

いや、それ以前に人・・・なのか?)」

リム(クリス)「(ね、ねえ、あれって・・・マスク?)」

リム(リアナ)「(ア、アタシに聞かないでよ!)」

アルフィミイ「何だかとても賑やかな人達ですね、アクセル。」  
アクセル「今俺に話しかけるな・・・頭痛がしてきた。」

(『ネバーランド』でも落ちてきたのかと思っていたが、

・

どうやら考えを改める必要があるな、こいつは。)

ハーケン「ドクター・カザハラ?

どうやら、全員無事のようだぜ?」

ジョナサン「それは何より。」

大丈夫だったかね、ジョシユア君。」

ソフィア「よかったわ・・・」

あなた達が無事で・・・本当に。」

ジョッシュ「カザハラ所長!それにネート博士!

よくご無事で・・・!」

エリ「フフ・・・それは私達が言いたいぐらいだわ。」

ジョッシュ「安西博士・・・!」

い、いえ、あの女の人が来てくれなければ自分達は・・・

・

アシェン「そうだ、もっと褒め称えるがいい。」

錫華「おぬしはその口を閉じよ。」



リシュウ「まあ、そう自分を卑下するでない。

儂らも運で助かったようなもんじゃわい。

それに、ほれ、運も実力の内というじゃろて。」

ジョッシュ「リシュウ先生・・・！」

ハーケン「おっと、再会でハッピーになるのはいいが、

そのガールは大丈夫なのかい？

見たところ、怪我しているようだが・・・？」

リム（クリス）「だ、大丈夫です。

なんとか歩けますし・・・」

ハーケン「アシェン・・・」

アシェン「言っておきますが、わだすのせいではありません事よ。」

アクセル「W07の言つとおりだ。

そいつの怪我は侵入したアインストによるものだ。

寸でのところでこいつに助けられた、それだけの事だ。」

ハーケン「フォローどうもな、ミスター。」

アクセル「礼には及ばんさ、これがな。」

ハーケン「ん・・・そいうや、アンタ何でアシェンのコードナンバ

ーを？」

アラド「ゼエツ・・・ゼエツ・・・や、やっと追いついた。」

アシェン「おやおや、これはまた遅い到着で。」

ゼオラ「ア、アナタ達が速すぎるのよ！」

神夜「そうですよ！」

置いてけぼりなんて酷いじゃないですか！」

ラミア「確かに・・・いかに人命救助を最優先させるとはいえ、

理由無くチームを分裂させるのはいささか同意しかねるな。

戦力的にバランスがとれん。」

カイ「それ以前に各チームの生存率が下がるだろうが。」

エイゼル「故に我とカツエは後詰に回ったのだから。」

カツエ「お姫サマは単純に足が遅かったただけのようだけどねエ。」

ハーケン「そいつはどうも、オコゴトは脱出した後でたんまり聞く

とするか。」

ジョッシュ「（………）

猫が増えた……それに骸骨……？？？？

リム「……いいか、気をしつかりもつんだぞ。」

リム（クリス）「（うう）……お兄ちゃん、ゴメン。」

気が遠くなりそう……」

リム（リアナ）「（ちよっとクリス、根性見せなさいっ！）」

カイ「……状況は？」

ハーケン「生存者は4名、うち1名が怪我をしているが大丈夫のようだ。」

例によってこれから質問攻めになるハズさ、これがな。」

ラミア「……お前は！」

アクセル「久しぶりだな、ラミア・ラブレス。」

そして教導隊の面々、か。

どうやら今日はとことん運が悪いらしいな、こいつは。」

アルフィミイ「あら、この状況で知り合いばかり、

という点では決して悪いとは言いませんのよ、

アクセル？」

ゼオラ「アクセル・アルマー！！

それに、もしかしてその子は……！」

ラトウーニ「アルフィミイ……なの？」

アルフィミイ「大正解ですの

っていうか全然変装の意味がありませんでしたね、

アクセル。」

アクセル「この状況では意味があるまい。

それに俺からバラしたんだから変装云々は関係無いだろうが。」

ハーケン「軽くツツコミが入ったところで尋ねるが、

知り合い同士か、あんたら？」

カツツエ「というより因縁めいたものを感じるわねエ。」

アシエン「先日のラミアっちの証言に

ソウルゲインの操縦者の名前がアクセル・アルマーとな  
っていらいます。

それと・・・先程復旧した私のメモリーの中にもその男  
がいました。」

錫華「あの大きな『闇騎士』の使い手か・・・！」

鞠音「ちよっとお待ちなさい！」

アシエン、今メモリーが復旧した、といいましたね？」

アシエン「はい。

数分にも満たないノイズ的な映像記録でしたが。」

ハーケン「20年以上も眠っていたメモリーがこのタイミングで目  
を覚ますとは・・・

（あの暴走もそのせい、か・・・？）」

アクセル「（20年・・・だと！？？）」

アルフィミイ「と言うか、いい加減あなた方がこういった方達なの  
か教えて欲しいのです。」

カツツエ「ヨソの世界からの異邦者<sup>エトランゼ</sup>・・・

こういえば分かるかしら、お嬢ちゃん？」

ジヨツシュ「じゃあ、あなた方もアクセルさんと同じ・・・！」

アクセル「そう言う事らしい。

同じにされてあまりいい気分にはならないがな。」

ラミア「だが聞きたいことはそこではない。

そうでっしやる？」

アクセル隊長。」

アクセル「・・・ああ、聞きたいことは山ほどある。

だが、どうやらそんな暇はないらしいな、こいつは。」

ハーケン「む・・・？」

アクセルは気付いていた。

何かが暗がりをついて回り回るような音を立てて何かが動いているの

を。

そしてそれが、小動物の類ではないと言う事を。  
それは幽かな呻き声をあげていた。

???「タ・・・テ・・・ス・・・」

ジヨツシュ「何か・・・動いている？」

アシエン「艦長、反応が何か妙です。」

ハーケン「どう妙なんだ？」

アシエン「数十cm程度の小さな動体反応を確認したのですが・・・」

神夜「こつちに近づいている・・・？」

錫華「姿がおぼろげながら見えてきたが・・・」

カツツエ「迎撃なら、いつでもオーケイよ。」

アルフィミイ「いえ・・・その心配はありませんの・・・

何故なら・・・」

這いずり回っていたそれは日の光の下に現れた。

そしてその姿をみて誰もが驚愕せざるを得なかった。

ラトウーニ「まさか・・・！」

アラド「こんなのって・・・アリかよ！」

そこにいるのは今まで斃してきた異形の一体の一部だった。

だが、破壊され、中身が溢れ出たそれは、

おぞましくも哀れな姿をしていた。

???「タ・・・ス・・・ケ・・・テ・・・」

ハーケン「・・・アシエン、もう一度言ってくれ。」

アシエン「・・・はい。」

映像解析の結果、殆どが解析不能でしたが、

数%ほど人間のそれと・・・合致しました。」

アルフィミィ「(そう・・・彼らは人を襲っていたわけではありませんの。)

ただ、助けを求めているだけ・・・)」

その正体は、ほんの数分前までは自分達と同じ姿をしていたものだった。

かろうじてそれがそうと分かるのは、所々に自分達と同じ目や口や手や足などがあつたからだ。

『かろうじて』でしか分からなかったのは、それら全てが蕩けて混ざり合っていたからだ。

そう、彼らは助けを求める一心で手を伸ばし、声を上げていただけ・・・

ただ、その手はもう他者を傷付け、死に至らしめる事しか出来なくなり、

その声は他者を恐怖に陥れる悍ましい唸り声になっていたのだ。

<ラングレー基地　???>

地獄と化したこの建物の奥深く、

薄暗く気味悪いほどに静かな場所にそれはいた。

この地獄を作り出した亡者達を統括するに足りうる存在はこの基地における戦果を分析していた。

だが、その後姿はどこか虚ろめいていた。

???「・・・」

融合係数・・・持続時間・・・

思念体への影響・・・

やはり・・・これでは・・・」

「???2「どうみても駄目、だな。」

「???」「・・・貴様か。」

そこに音も無くそこに現れた者は、彼と同じ、統括者足りうるもう一つの存在。

だが彼とは異なり人に限りなく近い姿と振る舞いをしていた。

しかしこの光景を目の当たりにして眉一つひそめない事が、それが人間では無い事を証明していた。

そしてそれも彼と同じく、戦果を分析し始めた。

「???2「うゝん・・・やっぱ本来の目的とは大分ズレた事になってるな。」

個体差はあるようだが、体が元の状態を維持出来てねえし、思念もオシヤカ、

残ってるのは生存本能の欠片ぐらいか。

駒として使うならこれで十分だが、この分だと他所のほうも期待は出来ねえな・・・

「・・・ん？」

「???」「ならば我らの悲願は・・・」

「???2「・・・たく、なんであんたはそう短絡的且つ自己完結なんだよ。」

大体こうなるのはあんたも分かっていたはずだろ。

ま、後押ししたのは俺だけだよ。

それに、今回は・・・」

「???」「皆まで言うな・・・」

しかし・・・」

「???2「ふう・・・」

そうガツカリするなつて。

俺達の不安定さが再確認できただけでも儲けモンだろ？

やっぱ『力』が足りねえ以上、先走んなってこつたな。  
いくら時間が無いとは言え、な。」

???「ならば今は『力』を・・・」

???2「・・・ああ。」

今回は元々そのための作戦だからな。

俺はちよつくら他所の方を見てくる。

あんたは、ここを頼むぜ。

くれぐれも計画通りに、な。」

突然現れたそれはまた消えるように突然その場からいなくなった。

???「分かっている・・・全ては再生と進化のために・・・!」

その言葉を発すると同時に、その場所そのものがまるで生きているかのように脈動を始めた。

## 第5話 a 交わる『刻』 その5（後書き）

えー・・・今回『も』大分遅くなっていました。

ぶっちゃけると創作意欲が全く湧かなかった事と、アイデアが煮詰まってしまった事が原因です。

本当に申し訳ありませんでした。

（反省タイム終了）

この4ヶ月の間に色々起きましたね。

『スーパードット大戦NEO』

参戦作品が世代的には直撃なんですけど、

テレビ東京系列が全く映らなかったり、当時エルドランシリーズ見ていなかったり、見ていたのはむしろ勇者シリーズ一択だったりなので喜んでいいのか悪いのか微妙な気分です（苦笑）

でもやってみるとストーリー爽やか、頑張りすぎなポリゴンアニメーション（特にガンバルガー）、頑張りすぎなBGMとやって楽しいスパロボでした。

更に来年2月には『無限のフロンティア』の続編が出ちゃうよ！

しかも前作のキャラ続投だし、

まさかのアクセルとアルフィミィ（両方生身）も参戦だよ！

おまけにロアまで・・・

バンプレストは鬼です、今から待ち遠しくてたまりません、もちろん真っ先に予約しましたよ、ええ。

でもこの小説は書き続きます。

昔の偉い人は言いました。『アレはアレ！コレはコレ！』

アクセルとハーケンの関係はとりあえずここでは明かしません。

互いに軽い説明のみにしたのは単純に話が進まなくなるから（血涙）



B級ホラーゾンビ系まっしぐらなインストール。

ゾンビと違うのは人を襲う動機が食欲だの殺意だのではなく、『助けて欲しい』生きる事への執着』である事。

今回は・・・というより今回は一つのパートを書き上げた後、すぐにアップするのではなく、次のパートを書きつつ、修正していくという手法をとっていますので、現在書き上げている『その7』が終わり次第『その6』をアップします（^^;）  
ではまたノシ

## 第5話 a 交わる『刻』 その6

<ラングレー基地 第5倉庫>

アシエン「・・・目標の消滅を確認。

これでよろしいでしょうか、艦長・・・」

アシエンは内蔵式小型ミサイル『ドラゴン・スケイル』にて『目標』を攻撃し、跡形も無く焼き払った。

ハーケン「・・・助けられない以上、こうするしか他に無いだろうが。」

神夜「それに、いままで私達が斃してきたのも多分・・・」

錫華「それ以上は言うな、神夜・・・」

アシエン「・・・勝手ながら、破壊する前に各種データをサンプリングしましたが、

アレからは既に生命反応が感知できませんでした。」

ハーケン「代わりに、アインストの反応が、か・・・？」

アシエン「・・・その通りです。」

ソフィア「・・・死んだ体組織を新たにアインストとして再構成していた、と？」

エリ「そう予測して間違いはないわ・・・」

リム（クリス）「ど、どういう事・・・？」

ジョッシュ「理屈は分らんが、ここで死んだらみんなあなっちまうって事さ・・・！」

アラド「畜生ッ！」

俺たちや将棋の駒かよ！」

ラトウーニ「あまりにも惨い・・・惨過ぎる・・・！」

ジヨナサン「だがこれで分かった・・・

この広い基地で生存者が殆ど発見できなかった理由が・

・・・！」

エイゼル「いなかったのではなく、変えられてしまったのだな、全て・・・」

カツツエ「・・・冷たいようだけど、感傷に浸っている暇は無くてもよ？」

『一秒でも早く脱出してこの事実を知らせる。』

それがアタシ達が彼らに対して報いる唯一のコト・・・

そうじゃなくって・・・？」

アクセル「同感だな、こいつは・・・

で、脱出の手立てはあるんだろっな？」

カイ「・・・この先の格納庫にレディバードがある。

それを使えば・・・

ムッ・・・？」

カイがそこまで言いかけた時、再び大きな揺れが発生した。

しかもそれは地面からでもましてや空からでもない。

ジヨツシュ「な、なんだこの地響きはッ!？」

アシェン「後方から無数の熱源反応がこちらに向かって押し寄せているようです、

それも結構な速度で。」

ハーケン「どうやらおしゃべりはここいらで終わったほうがいいらしいな。

・・・走るぞ!」

<ラングレー基地 屋外>

ハーケン達は倉庫を後にし、レディバードが待つ格納庫に向かって全速力で走り出した。  
だが・・・

ジョツシュ「これは・・・！」  
リム（リアナ）「嘘・・・でしょ・・・！」

目指すべき格納庫には既に無数のアインストが取り付いていた。  
そして、格納庫の天井を砕き、巨大な翼を広げて彼らを嘲笑うかのようにそれは現れた。

ハーケン「なんだ・・・！？

あのふざけたサイズはッ！？」

アシェン「データ分析完了。」

どうやらアレがレディバードのようです。」

カイ「そんな馬鹿な・・・！」

ラミア「いえ、よく見ると痕跡があるのがわかります。

おそらく、敵に乗っ取られたのでしょうか。」

アラド「じゃ、じゃあどうやって脱出するんスカ！？」

アクセル「落ち着け・・・カイ・キタムラ、PTやAMの格納庫は何処だ？」

カイ「ああ、どうやらその手を使うしかないようだな。」

神夜「ど、どうするんですか？」

ハーケン「どうやらスーパーロボッツに乗り込んで逃げる、という事らしいな。」

カイ「問題は、奴らが既に手を出しているかどうかだが・・・」

ハーケン「フッ・・・分の悪い博打はいつもの事さ。」

アルフィミィ「でも率を上げるには越したことはない、ですね  
アクセル？」

アクセル「ムッ・・・」

成程そう言う事か、こいつは。」

アクセルはアルフィミイの表情を読み取り、そして二人はそのまま足を止めた。

ジヨツシュ「ア、アクセルさん!？」

ヘンネ「捨て駒になろうつてのかい!？」

アルフィミイ「そのつもりはありませんの。」

アクセル「殿になるだけだ。」

とつとと乗り込んで来い。」

リム（リアナ）「でも武器も無いんじゃない・・・!」

アクセル「その心配は無用なのさ、これがな!」

その言葉に呼応するかのように、地下から何かが突き破ってきた。それらは敵の軍団を薙ぎ払い、瞬く間に形勢を逆転させた。

ハーケン「あれは・・・なんだ!？」

腕だ!

脚だ!

巨大な体だ!

それらは旋風を巻き起こしながら一つとなり、蒼と紅の2体の巨人が大地に降臨した!!!

アラド「ゲエ・・・ッ!

ペルゼインにソウルゲイン!??」

リム（リアナ）「何か今、もの凄く有り得ない登場の仕方だったけど・・・!？」

アルフィミイ「よく分かりましたですね、アクセル。」

アクセル「お前の事だ、バラバラになったソウルゲインに何か仕込んでるのは目に見えていた。

それだけの話だ、これがな。」

ジョッシュ「常識ハズレのバーゲンセールだな、コリャ。」

ラミア「ですが、今の攻撃でかなりの数が殲滅出来ちゃったのは事実です。」

アクセル「だが恐らく一時凌ぎに過ぎん・・・

すぐに第二波が来る。」

アルフィミィ「ですからここは私達にお任せして欲しいのです！」

二人はそう言うソウルゲインとペルゼインのコクピットに乗り込んだ。

この予想外の出来事に一同は驚愕したが、この6人は別の意味で驚いていた。

・  
錫華「（大きさこそ異なるが、あの紅の方は紛れも無くあの時の・

それを操るあの小娘・・・それとつるむあの男・・・）」

エイゼル「（忘れませぬ。

あの姿は・・・ノース・オリトリアでの死闘で・・・

！）」

ハーケン「（アクセル・アルマー・・・それにアルフィミィとか言っただけ・・・

何モンだ、こいつら・・・？）」

リシュウ「ム・・・

どうしたかの？」

神夜「いつ、いえ何でもないです！」

ハーケン「あ、ああ、合体口ボなんて始めてみるから驚いてるのさ。」

アラド「まゝ、確かにあの登場の仕方は予想外だけど・・・

つか俺達も初めて知ったし。」

カイ「状況が状況だ、もう形振り構ってられん。」

アシェン「皆様、思うことはあると思いますが・・・」

ハーケン「ああ、分かってる。

あのガールとミスターは味方だ・・・

今はそれでいい。」

カツツエ「・・・全く持つて正論だな。

なあ、エイゼル？」

エイゼル「・・・理解している・・・」

ヘンネ「何ボサツとしてる！

早く行くぞ！」

鞠音「（む・・・これは？）」

皆はこの場を二人に任せて一目散に格納庫を目指した。

アルフィミイ「皆さん行った様ですのね。

このままおいとましますか、アクセル？」

アクセル「お前、何気に黒いな・・・

だがな・・・！」

ソウルゲインは、いやアクセルは逃げるところか、両の足を大地を踏みしめ戦いの構えをとった。

アクセル「借りの作りっぱなしは性に合わんのでな、

ここでさっきの分を返す。」

アルフィミイ「フフ・・・そうおっしゃると思っていましたの」

アクセル「行きがけの駄賃だ！

まずは・・・！」

アクセルは照準をレディバードを取り込んだ巨大アイNSTにロッ

クした。

アクセル「目障りな貴様からだっ！

食らってくだばれ！

玄武剛弾！」

ソウルゲインの主武器の一つ、玄武剛弾は所謂ロケットパンチだ。参式のドリル・ブーストナックルのように高速回転した拳を飛ばし、対象を挟み込み、打ち貫く。

巨大アインストには大きな穴が開通し、断末魔をあげながら大地に倒れた。

アクセル「意外と脆いな・・・こいつ。」

アルフィミイ「多分、まだ完全に融合しきっていなかったせいだと思いますの。」

アクセル「なら暇を与えなければいいだけの話、だな・・・！」

アルフィミイ「はい、では遠慮なく・・・。」

<ラングレー基地 PT格納庫>

ハーケン「・・・っと、ここにもお客さんがうじゃうじゃいやがるようだな。」

アシエン「ですが、機体への融合の兆候は今のところまだナッシングもしくは軽微でいやがりません。」

ハーケン「そいつは重畳ってやつだな、こいつは。」

やはりここにも居るのもアインストのみ、  
いや『アインストになってしまった』者達のみが蠢いていた。



ラトウーニ「でも、生存者は1人も居ない・・・」

アラド「クソッ・・・もうこの基地には、こいつらしか居ねえのかよ！」

ゼオラ「もう、倒すしか・・・方法が無いの・・・!??」

ハーケン「ストップだチルドレン・・・!」

ハーケンは迷うことなく、二丁の銃で敵アインストを打ち砕き、

ハーケン「それ以上泣き言は、本当に生き残ってから言いなッ!」

神夜「ここが勝負どころです！」

今は、迷いは払ってください!」

神夜は月輪で切り刻み、

アシエン「乳牛姫も少しは言うになりましたね。」

アシエンは力技で強引に薙ぎ倒し、

錫華「ほれ!とつとと乗り込まんか!」

錫華は邪鬼銃王で粉々に粉碎して、弱音を吐く三人に檄を飛ばしながら、彼らの道を作っていた。

ラトウーニ「(許してとは・・・言わない!)」

そして彼らはその道をただ走りぬく。

今は、振り返らずに。

キュオン「も〜!

敵多すぎッ！！

あの二人、ちゃんと働いてるのー！？」

カツツエ「元からここに居たんじゃ仕方ないでしょッー！！」

ヘンネ「それにあの図体だ・・・打ち漏らした連中もこっちに来てるんじゃないか？」

エイゼル「我ら以外は全て敵、と考えて間違いあるまい！」

リー「全く！！」

猫の手も借りたいとはこう言う事らしいなッー！！」

一方でオルケストルアーミーとリーは博士達、非戦闘員のガードに務めていた。

キュオンはブロンテ・クラフトで打ち払い、

カツツエは片っ端から蹴り倒し、

ヘンネはフェーダー・レイで穴だらけにし、

エイゼルはアックス・マックスで爆砕し、

リーは持ち前の叩き上げの格闘戦術でまだ息のある敵に止めを刺して。

ジョナサン「くうー・・・こりやもう対人戦なんて生易しいモンじゃないな。」

リシュウ「フム、儂の出る幕はなさそうじゃの。」

ソフィア「これはもう、そういう問題ではないと思いますが・・・」

エリ「鞠音博士・・・？」

鞠音「(さっきのが見間違いでないとしたら・・・

いえ、私が見間違えるはずはありませんわ・・・！

なら・・・！)」

鞠音博士は見逃していなかった。

ソウルゲインが空けた地面の穴から僅かに見えていたそれを。

赤い地上戦艦、ツァイト・クロコディールを。

そして、それが、正確にはそれに搭載されているものが、今の自分達にとって大きな戦力となる事を理解していた。

ハーケン「チツ・・・もうそろそろ弾切れか？」

神夜「まだ起動できないんですか！？」

ラミア「今乗り込んだばかりだ。」

起動には・・・もう少し時間がかかる！」

ハーケン「こんなデカブツがボタン一つで動く筈はない、か。」

アシェン「成程、こっちのほうをプランBにしたのはそういうワケでやがりましたか。」

錫華「出来るだけ早うせい、小童共！」

こちらとて押さええられるのにも限度がある！」

ハーケン「（こんな時にアイツ等がいれば・・・）」

鞠音「艦長！」

・・・『コール』、可能ですわ。」

ハーケン「マジか・・・！？」

タイミングよすぎるだろ！？」

鞠音「ツアイト、どうやら地下に保管されていたようです。」

ハーケン「そうか・・・！さっきの攻撃で・・・

なら・・・！」

C A L L ! S P E C T E R E S  
！  
！

アラド「うおっ、眩しっ！？」

ゼオラ「今度は何なの！？」

その呼び声と同時に三つの光の柱が突如として空間を裂いて現れた。そして、光が収まり、その中心に居たのは・・・

ラミア「・・・!?!」

あれはっ・・・!?!」

現れたのは『幽霊』の名を冠す機械の兵士達

漆黒の追撃者・ファントム

蒼き鋼鉄の孤狼・アルトアイゼン・ナハト

紅き白銀の墮天使・ヴァイスリッター・アーベント

アラド「アルトにヴァイス・・・それにゲシュペン!?!」

ゼオラ「これがあなた達が言っていた・・・!」

ラトウーニ「小型のパーソナル・トルーパー・・・!」

神夜「呼べないんじゃないんですか・・・?」

ハーケン「『召喚』が出来ないだけだ。

近距離なら『コール』でワープして来るように設定して

たのさ。」

錫華「ふむ、からくり共が何処におるのか分からねば、呼んでも意味が無いと言う事か。」

アシエン「もし来なかったら只の痛い人になっていましたね、艦長。」

ハーケン「本当に痛いところ突くなよな、アシエン。」

さあ、仕切りなおしだ、幽霊共!!」

物言わぬ機械の兵達は、ハーケンの意思を汲み取り、瞬時に敵性体を識別し、

自身の持つ力の全てを使ってアインスト達を的確に排除していった。

ファントム「・・・」

フォントムは格納庫内、特にハーケン達の武器の射程外のアインストを『プラスター・キャノン』で焼き払い、

近距離の敵は『プラズマサイズ』や『グラン・プラズマカッター』  
で切り裂いていき、

アーベント「……………」

アーベントは宙を舞い、ファントムやハーケン達の攻撃を免れて機  
体に取り付こうとするアインストを

『パルチザン・ランチャー』の狙撃でフォローし、

ナハト「……………」

ナハトは屋外で格納庫に近づくアインストを『レイヤード・クレイ  
モア』で殲滅し、

打ち漏らした相手には『リボルビング・ブレイカー』で打ち貫いて  
トドメを刺していった。

ラトウニ「……TC・OS、起動完了。」

アラド「ジェネレーター、出力安定！」

ゼオラ「各武装、ほぼ異常無し。」

ラミア「コンディション、イエロー。」

カイ「ハッチは壊していい！」

もう援護はいらん、格納庫から退避しろ！」

ハーケン「オーケイだ、スーパードボッツ！」

みんな、下がるぞ……！」

<ラングレー基地 屋外>

アクセル「……殆ど片付いたな。」

アルフィミイ「でも皆さん大丈夫でしょうか？」

結構打ち漏らしちゃいましたけど。」

アクセル「ム……？」

「どうやらあの連中、そこそこはやるようだな、こいつは。」

「

ソウルゲインのモニターが格納庫から脱出する教導隊を捕らえ、彼らの無事を知らせた。

カイ「皆、無事か？」

ラミア「装甲に一部損傷した箇所がみられちゃいましたが、

戦闘には支障ありません事よ。」

ラトウーニ「ラプターも問題ありません、変形用のサーボモーターも生きています。」

ゼオラ「こっちはテストドライブが損傷……だけど何とか飛べます。」

アラド「ビルガーは装甲がオシャカになっちゃったから、パージするしかなかったっす。」

カイ「ダメージチェックはもういい、俺の改式も似たようなもんだ。

それより他のメンバーは？」

ハーケン「こっちはノープロBLEMだぜ、少佐。」

エイゼル「そちらから2時の方向、数十メートル先に待機している。」

「

彼らが心配した矢先、

教導隊の通信回線に突然ハーケン達が割り込んできた。

ラトウーニ「生命反応捕捉、間違いありません。」

カイ「しかし通信だと？」

一体どうやって・・・？」

鞠音「ファントムには一通りの電子戦装備しております。

通信回線の割り込みぐらい朝飯前ですわ。」

ハーケン「と言う事だそうだが、早いとこ拾ってくれないか？」

カイ「分かっている。

断っておくが、マニピレーターの乗り心地は悪いぞ。」

ハーケン「命がかかってるんだ。

文句はないさ、ミスター。」

教導隊はハーケン達のほうへ向かい、救出作業を始めようとした。

アルフィミイ「・・・！？」

いけません！」

アクセル「・・・こいつは！？」

彼らの機体が格納庫から出撃したのと同様に、他の格納庫からも幾つもの機体が出撃してきた。

カイ「な・・・！？」

こいつらは！？」

ラミア「リオン、バレリオン、ガリオン、それに量産型ヒュツケ

バイン Mk-II・・・！？」

ラトウニ「ガヴァメントにバンドルグ・・・それにメッサーまで・・・！？」

アラド「全部この基地の機体じゃねえか！？」

もしかして俺達みたく脱出してきたのか？」

ゼオラ「・・・違うわ！

よく見て！」

現れた機体を注意深く観察すると、それぞれに無数の小型アインストが取り付いているのが分かった。  
それも一目では区別が付かないほど巧妙に同化していた。  
だが、巧妙なのはそれだけでは無い。

ラトウーニ「……どこからも連邦軍の識別信号が出ています。」  
ラミア「それに、熱源パターン、各種センサー共に通常のそれと全く変化ナッシングです。」

カイ「成程……！」

擬態というわけか。」

アクセル「カイ・キタムラ。」

こいつらまさか……？」

カイ「……ああ。」

このラングレーの戦力がそのままやつらの手に落ちたと考えて間違いあるまい！」

ラトウーニ「それも最悪の形で……！」

アラド「まさかこいつら……最初からそのつもりで……？」

アルフィミイ「他人のフンドシでお相撲するなんて、あまり感心しませんですの。」

アクセル「(『奴』の狙いは本当にソレなのか……?)

いや、戦略的に見て基地機能を潰した時点でもう勝ち  
は決まっている。

そもそもあのゲシュペンスト共が現れないのは妙だな・

・

それとも別の狙いが……?)」

???「(各機、展開……)

……攻撃、開始)」



何者かの意思に呼応して、アインストの僕達は動き出した。

ゼオラ「こつちに来る・・・！？

回避行動・・・

・・・ダメっ反応速度が！？」

戦闘機やリオンを取り込んだアインスト機は、まず、動きが鈍くなつたファルケンに狙いを定めた。

ラミア「ゼオラ、フォローする！

シャドウ・ランサー、発射！」

ラミアはすかさず左腕のシールドから槍状のエネルギーを放つ『シヤドウ・ランサー』で敵アインスト機めがけて攻撃した。

攻撃は見事命中し、敵の動体には幾つもの穴が開き、爆散した・・・かにみえた。

ラミア「・・・馬鹿なっ！？」

バラバラになつたはず破片は、映像を巻き戻すかのように一瞬で元通りになり、

当のアインスト機は何事も無かつたかのように反撃してきた。

カイ「ぐっ・・・何が起こつた！？」

ラトウーニ「・・・敵機撃墜後、周囲のクリスタルから強力なエネルギー反応を確認しました。

恐らく、それが原因かと。」

ゼオラ「クリスタルが基地中のエネルギーをかき集めていたのは・・・このためなの！？」

アラド「ま、まさか無限に復活するって事か!？」

ラトゥーニ「少なくとも、エネルギーが続く限りは……」

アクセル「妙だな……」

さつき、レディバードを取り込んだ奴は普通に撃墜できたが……」

アルフィミイ「完全に融合を果たした……」

その結果だと思えますの。」

アクセル「成程、『奴』の経験から学んだか……」

だが元を断てばいいだけの話だ!

受ける!青龍鱗!!」

アクセルは近くにあるミルトカイル石にめがけて『青龍鱗』を撃ち、その直線状にいるアインスト機ごとの破壊を試みた。

アクセル「やったか……?」

ミルトカイル石は一瞬ではあるが、確かにバラバラになった。だが破片となったそれは『青龍鱗』のエネルギーを吸収し、それぞれの破片が破壊される前のそれと同じ大きさにまで成長していった。

更に悪いことに巻き込まれたアインスト機も同様に増殖して復活してしまった。

アルフィミイ「どうやら逆効果だったようですの……」

アクセル「……言わんでもわかる。」

ラミア「自身の破壊すらも増殖の手段にするのか……!」

アラド「こ、これじゃラチがあかねえ所の話じゃねえぞ!!?」

カイ「ええいつ!」

E系の武器は使っな!

格闘戦、もしくは実体弾で牽制!

ラミアとゼオラは空の連中を！」

ゼオラ「は、はい！」

ラミア「了解！」

カイ「アラドは俺と地上の敵を！」

ラトウーニは非戦闘員の護衛をしつつ後方支援を頼む！」

アラド「了解っス！」

ラトウーニ「了解・・・！」

アルフィミイ「アクセル、私達はどういたします？」

アクセル「降りかかる火の粉を払うのはやぶさかじゃない。

それに借りもまだ返しきったとは言えん。」

アルフィミイ「フフ・・・そう言う事にしておきますわ。」

キュオン「うゝ、なんかデッカイのが出てきたよゝ！」

カツエ「小さいほうがやたら格納庫に押し付けてきたけど。

どうやら、中のロボットがお目当てだったようね。」

ジヨナサン「数が多い上におまけに不死身とは・・・

(今度こそ、万策尽きた・・・かな?)」

鞠音「・・・」。

艦長、ちょっとファントムをこちらへ。」

ハーケン「何する気だ、企みドクター？」

鞠音「私の切り札を使うときが来たようです。」

ハーケン「何・・・!?」

鞠音博士はファントムの胸部ハッチを開けて、中からコンソールを取り出して作業を始めた。

## 第5話 a 交わる『刻』 その6（後書き）

2009年、大晦日。

この一年、大変お疲れ様でしたm（――）m  
年始はちよつと用事がありましたて更新が出来ませんので、今のうちに投稿しておきます。

一日早いお年玉、だと思ってくれば幸いです、プライスレスですが（苦笑）

常識ハズレには常識ハズレで対抗です。

つて言うか、ジョツシュの一言が全てを物語っています（笑）  
でもソウルゲインとペルゼインの登場の仕方は本当にコレでよかったのかと正直書いた自分自身でも未だに悩んでいます（^^;）

呼ばれて飛び出てスペクターズ。

最初は鞠音博士から時計型遠隔装置渡して呼ぶ、といった感じでした。

掛け声は勿論「スペクターズ、ショウタイム！」

・・・あからさま過ぎますね、はい。

やつと出てきたスーパーロボット達。

最初からダメージ受けてるのはスパロボ的に言えば『難易度調整』

犠牲になってもらったのは装甲と運動性、あとHP

柔らかいビルガー、避けないファルケン、少ないHP、

おまけに敵は『ド根性』&『条件付増援』という、スパロボ的になりイヤなステージ・・・

ガンバレ！耐えろ！逆転イベントは目の前だ！

それではまた来年でノシ

## 第5話 a 交わる『刻』 その7

アラド「コールドメタルソーードッ!」

ビルガーは長剣、『コールドメタルソード』にて突貫してきた敵ア  
INST機を文字通り真っ二つにした。

右と左に分かれたそれは、それぞれうつ伏せになって倒れた。  
しかし・・・

アラド「くそっ・・・またか!??」

それは磁石でくっつくかのように元通りに一つとなり、這い蹲った  
体勢からそのまま飛び掛ってきた。

カイ「ぬうんっ!」

すかさず改式が割り込み、敵機を蹴り飛ばした。  
だが敵は関節をあらぬ方向に曲げて着地し、瞬時に立ち上がってき  
た。

これらの拳動はどれをとっても機械ロボットのそれを凌駕する。  
そして碎かれた箇所は瞬く間に修復されていた。

その際、機械の面の下からは人間の皮を剥いだような生々しい顔が  
見え隠れしていた。

ラトウーニ「再生能力だけじゃない・・・!?

あの動き・・・まるで獣・・・いや、それ以上・・・

!」

アクセル「そして例によって、中身は既に別物か・・・」

カイ「アラド、奴らに斬撃や銃撃は無意味だ!

蹴るなり殴るなりして押し戻せ！」

アラド「わ、分かつてるツス！」

けど、それじゃ・・・」

ゼオラ「敵のエネルギーの消耗を抑えているのも同然・・・

アラドの言いたいことは分かるけど・・・！」

ラトウーニ「敵のエネルギーの総量が分からないこの状況じゃ、

闇雲に戦っても意味が無いわ・・・」

アクセル「おまけに制空権を押さえられている以上、離脱も出来ん、か。」

ラミア「それに連中を野放しにしておくにはあまりに危険すぎる・・・

・！」

カイ「『生存者は守る』、『連中は叩き潰す』・・・

両方やらねばならんのが辛い、文句をいう余裕も無い、か。

まあ、いつものことだ・・・！」

アルフィミイ「（でも、彼らの動き・・・何か妙ですの・・・）」

アクセル「（ここから離れようとする動きが全く無い・・・

ただ単におれ達を狙っているだけ、か・・・

それとも・・・？）」

打ち倒した敵はすぐに再生するのだから数は一向に減らない。

また、下手にエネルギー攻撃を使おうものならクリスタルに吸収され、敵に利用されてしまう。

接近してそれらの破壊を試みようにも敵が立ち塞がり行く手を阻め、近づくと事すら出来ない。

なにより自分達の背後にいる生存者は何が何でもに守りぬかなければならない。

あらゆる修羅場をくぐってきた彼らであろうと、この状況は困難を極めていた。

そんな時・・・

ラトウーニ「・・・？」

地下格納庫から第5倉庫ハッチへ移送？

どういう事なの？」

カイ「どうした、ラトウーニ？」

ラトウーニ「基地システムの一部が勝手に作動しています！

それに、新たな熱源反応も感知しました！」

ラミア「新手か！？」

ラトウーニ「違う、この反応は・・・！」

地下格納庫から第5倉庫に送られたソレは、倉庫の壁を強引にブチ破って現れた。

紅い地上戦艦、ツアイト・クロコデイルが！

アクセル「地上戦艦・・・？」

見たことの無いタイプだが・・・」

カイ「あれは彼らが乗ってきた・・・！」

しかし、どうやって！？」

鞠音「どうやら、成功したようですね。」

神夜「あれってハーケンさんのツアイトじゃないですか！？

どうしてあそこから？」

鞠音「ファントムの電子戦機能を活用してこの基地のシステムを一部掌握、

地下に格納されていたツアイトを直接あそこに搬送するようにプログラムしました。」

ハーケン「でもって、無人のツアイトが動いているのは・・・？」

鞠音「ファントムにツアイトの遠隔操作プログラムをあらかじめ仕込んでおきました。

・・・こんなこともあるのかと。

フフフ・・・一度言ってみたかったです、この台詞。」

神夜「わ、笑っているのに、恐ろしいこと極まりないです・・・！」  
鞠音「ゴホン・・・それよりも切り札はここからです。」

鞠音博士はファントムを介してツアイトに新たな指令を伝達した。  
そしてツアイトはその指令を忠実に実行した。

鞠音「目標、巨大ミルトカイル石。

・・・一斉発射！」

ツアイトの主砲がミルトカイル石にめがけて次々と特殊弾頭弾を発射した。

それらの着弾と同時に、全てのミルトカイル石はまるでやが消えるように消滅していった。

そしてアインスト機はまるでゼンマイが切れかかった玩具のように動きが鈍くなっていた。

ゼオラ「クリスタルが・・・消えた！？？」

リム（リアナ）「あ、あの髭ロボットのビームにビクともしなかったのに！？？」

ジヨッシュ「あのクリスタルを破壊したのか！！？」

それもちょうどアッサリと・・・！！？」

錫華「むむっ？」

あの散り方、見覚えがあるぞ・・・！！？」

エイゼル「対ミルトカイル破砕弾『アントラクス』か・・・！！？」

ジヨナサン「確か、君等の世界で開発された特殊弾頭弾だったか・・・！！？」

報告書で一通りは読んでいたがまさかこれほど効果  
観面とは・・・！！」

ヘンネ「だけど、戦艦用の弾頭なんて聞いたことも無いぞ・・・！！」



ハーケン「・・・ドクター、これも『こんなこともあるつかと』・・・かい？」

鞠音「流石の私でもそこまでは・・・」

ただ、少し前にドロシーとその悪魔小娘と一悶着あった事がありましてね、

その時ファントム達を出したら、それはもう、快く研究データを差し出してくれまして・・・

アレは、その後の勢いでつい作ってしまっただけの代物です。

「  
キュオン「う・・・

お、思い出したらトリハダが・・・」

神夜「ご、極悪極まりないです・・・」

錫華「というか『勢いで作った』のあたりもどうかしてるぞな・・・」

「  
リー「マリオン博士は勢いがつくと、もうどうにも止まらないマッドサイエンティストなのだ。」

ハーケン「オーケイ・・・」

今回ばかりはドクターのサイエンティック・リビドーに感謝しないとな。」

鞠音「軽くセクハラが入っているような気がしましたが、聞かなかつた事にしましょう。」

あと、ツアイトはこちらに向かわせるように指示をしておきましたので、

あちら方へそのように伝えておいてください。」

ハーケン「へいへい、相変わらず上司使いが荒いこって・・・」

ハーケンはファントムを使ってカイ少佐に通信をつなげた。

カイ「・・・む？

彼らからか。」

ハーケン「これで連中は再生できなくなった筈だぜ、少佐。」

ラミア「確かに・・・」

敵アインスト機、再生出来ないようでございます。」

ラトウーニ「それに、機動力の著しい低下も確認しました。」

アラド「一体、どんな手品を使ったんスカ!?」

ハーケン「種明かしはショウが終わってからだぜ、ボウズ。

俺達はツアイトで脱出する、ルートを確保してくれ!」

カイ「了解だ・・・!」

あのクリスタルさえなければこつちのものだ!」

アクセル「理屈は知らんが、流れは俺達にあるようだな、こいつは!」

カイ「ああ、奴らを叩くなら今しかない!

各機展開!

敵アインスト機を殲滅しろ!」

ラミア「了解・・・!」

ターゲット、プルーラルロック。

リミット解除。

コード・ファントムフェニックス!」

アンジュルグの最強兵装、『ファントムフェニックス』

エネルギーを一点集中させた一矢はその名の如く燃え盛る不死鳥の姿を連想させる。

それが生み出す炎の渦は動きの鈍ったアインスト達を一欠けらも残さず焼滅させていった。

アラド「俺達も負けてらんねえな!

ウイング展開！ドライブ全開ッ！！

本気出すぞ、ゼオラ！！」

ゼオラ「ええ！

パターンTBS、

クロスアレンジ！

ブースト！」

空のインスト達も、もはやこの百舌と隼の格好の餌食でしかない。高軌道且つ高速のコンビネーションは戦闘機やりオン如きでは何をされたのかを理解する事すら難しい。

あるものは切り裂かれただろう、あるものは撃ち抜かれただろう、だが過程は問題ではない、何故ならどれも最後には……

アラド&ゼオラ「ツイン・バード・ストライクッ！！」

跡形もなく砕け散ったのだから。

インスト機「……！」

いくら弱りきったからといって、インスト達が攻撃の手を辞める理由にはならない。

物量では彼らのほうが上回っている、それに被害はまだ彼らのほうが少ない。

カイ「ム……！？」

彼らは狙いを一つに絞り、銃火器の連続放火を浴びせた。

常識的に考えれば疲弊した一体に対して複数でかかれば確実に撃墜<sup>お</sup>とす事が出来る。

そして、動かなくなつたそれに確実に止めを刺すべく接近していっ

た。

だが彼らが狙った獲物にその常識は当てはまらない。

カイ「フン・・・」

これほど見え透いた手、まるで話にならんな。」

アインスト機「！！！！！！」

接近してきたアインスト機は頭を握りつぶされ、その胴体に懇親のプラズマステークを打ち込まれ、爆散した。

異変に気付いたがもう遅い、既にカイ・キタムラが駆る改式の射程内だからだ。

カイ「プラズマ・ジェネレーター、フルドライブ！

全サーボモーター、強制排熱！

ダブル・プラズマステーク、セット・・・！」

改式から立ち上る蒸気は、まるで搭乗者の気迫そのものの様だった。だが、彼らがそれを認識したのは自身が打ち滅ぼされていく最中だった。

カイ「ぬおおおおッ！」

回し蹴り、踵落とし、正拳突き、逆突き、手刀打ち・・・  
誰も彼も刹那の中でその技の前に散っていった。

カイ「・・・ふうー。」

これを天下無双と言わずして何と言おうか。

アクセル「・・・一気に叩く！」

援護しろ！」

アルフィミイ「はいはい、いつもの事ですものね。」

ペルゼインの両肩部に浮遊している鬼面型のパーツ『オニボサツ』が分離、巨大な傀儡に変化し、

『ヨミジ』と呼ばれる破壊光線を放った。

アクセル「・・・受ける！」

舞朱雀！！」

発射と同時に、ソウルゲインは敵の懷に飛び込み両腕のブレードで高速で斬り刻んでいった。

そして『ヨミジ』が命中する刹那、ソウルゲインはあらかじめ分かっていたかのように離脱し

アインスト達だけがその攻撃を受けて宙を舞い、

アクセル「でいいやつ！」

最後にはソウルゲインの渾身の一撃を受けて爆散した。

ラトウニ「・・・逃がさない、誰一人として！」

ラプターはこれらの攻撃から逃れようとするアインスト機をハイパー・ビームライフルで片っ端から撃ち落していった。  
只、淡々と、只、黙々と。

錫華「ほっほっほ

こつも圧倒的とは気分爽快であるな。」

ハーケン「まあ、大きい分、ウチのロボッツよか迫力はあるな。」  
リー「艦長、どうやら全員乗り込めたようです。」

鞠音「全パーソナル・トルーパー、収容完了。」

ツアイトももう少しだけなら無茶できますわ!」

ハーケン「オーケイ、ケツまくって逃げるぞ!」

リー「アイアイサー!」

ツアイト・クロコデイル、フルドライブ!」

全員を乗せたツアイトは煙を点てながらも全速力で基地脱出を目指して発進した。

ラミア「全ターゲットの撃墜を確認。」

再生も見られないようです。」

ラトウーニ「それと、地上戦艦の脱出を確認しました。」

カイ「良し……!」

全員、地上戦艦に続いてこの場を離脱だ!」

アラド「了解っス!」

アクセル「……」

ラミア「どうかしましたでっしゃろつか、隊長?」

アクセル「……アルフィミイ、おまえはどうだ?」

アルフィミイ「なんともいえませんですの……」

ですが……」

アクセル「なんととはなしに嫌な予感はある、か。」

???「全戦力……消滅……」

計算外の……正体不明の敵による……クリスタルの消

滅を確認……

……

これより……最終段階へ移行する……

全ては……予定通り……」

次の瞬間、全ての機体のモニターにアラートメッセージが奔った。

その内容は彼らの血相を一瞬にして変えるには十分すぎるものだった。

ラトウーニ「き、基地地下部ジェネレーターより異常熱量反応!？」

それに、このエネルギー値は・・・!？」

ラミア「熱量膨張の加速度から推測して、

爆発まで1分とかからないでつしやろうと思います・・・!

更にこの基地の火器類と連鎖反応を起こした場合・・・」

アクセル「もうそれ以上言うな・・・!

こういう事が、こいつは!」

アラド「ど、どういう事っスか?」

アクセル「奴らは全員ブラフだ!

おれ達をこの爆発に巻き込むためのな!」

ゼオラ「お、囷だっ たってこと!？」

アラド「あ、あれ全部がか!？」

アルフィミイ「彼らはここから離れようとはしませんでした。

それに理由があつたのだとしたら恐らく・・・」

ラミア「確かに・・・

そう考えればあれらがわざわざ擬態していたのもうなずける。」

アクセル「ああ。

アレ以上に食いつきやすいエサは無い・・・!」

アラド「・・・クソッ!

俺達やまんまとハメられたって事かよ!」

カイ「話は後だ!

総員、全速力で離脱だ!」

事態は、ラミアの予測通りに起こった。

基地は一瞬のうちに炎のドームに包まれ、  
ソニックウェーブ  
衝撃波と爆音が唸りを上げ、

巨大おおな巨大おおなキノコ雲が立ち昇っていった。  
だが、その爆心ちゅうしん地で起きていた事など、このとき誰が予想していたであろうか。

「……………」

< 荒野地帯      ラングレー基地より十数キロ地点      基地自爆より数分後 >

ハーケン「……み、皆、怪我は無いか？」

錫華「み、皆ぬしと似たようなザマであるぞ……」

神夜「こ、今回の衝撃は凄まじい事極まりなかったです……」

ハーケン「アシエン、何が起こったかわかるか？」

アシエン「天井と床が2、3回程入れ替わったのを記録いたしました。」

御覧になりやがりますか？」

ハーケン「ハツ……冗談きつぜ。」

アシエン「そうですか、爆乳姫の上とか下とかがそれはもう大変な事になっていたのですが……」

ハーケン「……いや、やっぱり艦長として艦に関する記録映像はキツチリ見ておくべきだな。」

神夜「ハ、ハーケンさん……？」

錫華「今はそれ所ではないであろうに……」

お主がチャラ助平なのは元からとしてもだがの。」

ハーケン「いやいや、これは軽いジョークさ。」

天井と床が入れ替わった……



それはつまりツアイト・クロコデイルが引っくり返されたと言う事を意味していた。

ラングレーを一瞬で燃やし尽くした爆発の衝撃波は、遠く離れたこの巨大な地上戦艦を転がすだけのパワーを持っていたのだ。

エイゼル「フム、特に目立つた外傷も無いな。

問題あるまい。」

ジヨナサン「相変わらずとんでもないタフさだな、君達は・・・

っあ、痛づく・・・

こりや骨にヒビでも入ったかな？」

キュオン「うゝ、キュオンも痛いゝ！」

ヘンネ「アンタはまた頭撃っただけだろ？」

キュオン「痛いものは、痛いのに！」

リシュウ「我慢が足りんの、お嬢ちゃん。

この程度、気合と日頃の鍛錬があれば・・・

むぐぐ・・・」

ジヨツシュ「所長も先生もあまり無理はなさらないほうが・・・」

エリ「ジヨシュア君、そういうあなたは大丈夫なのかしら？」

ジヨツシュ「経験上、似たような目には何度も遭っていますんで。

それより・・・リムは!？」

リム（リアナ）「アタシなら平気だよ、アニキ。」

ジヨツシュ「無事でよかった・・・

怪我はないか・・・？」

ソフィア「私達3人なら、大丈夫よ。

この方々が助けてくれましたから。」

リ「礼には及びませんよ。

ウチのドクターを助けるついででしたから。」

カツツエ「それにこういった動体視力とか瞬発力だったら猫科のათა達の出番でしょ？」

ハーケン「グッジョブだな、キャットガイズ。」

で、さっそくだが我等がドクター・マリオンに聞きたいことがあるんだが・・・」

鞠音「ツアイトの事でしたら、暫くお待ちください。」

なにしろひっくり返されたなんて初めての経験ですからして。

「  
ハーケン「流石のツアイトも今回はかりは手探り、か。」

今度何か仕込むんだったら、反重力システムとかにしてくれよ。」

鞠音「いいですわね、それ。」

神夜「でも、どうしてこんなことに？」

ハーケン「アシェン、はぐらかさなくていい・・・」

ありのままを言ってくれ。」

アシェン「・・・ツアイト後方から巨大な熱量反応と衝撃波を感知しちゃいました。」

規模と方向から推測して、おそらくあの基地そのものが・

・  
「

錫華「爆滅したと・・・？」

・  
ジョナサン「基地地下のジェネレーターと配備されていた爆発物・

・  
それらが一瞬で連鎖反応を起こしたと考えるのが妥当

だろうな。」

ハーケン「解説感謝するよ、ドクター。」

・  
・・・それよりも、あの連中は？」

エイゼル「あの規模だ、直前で脱出したとしても・・・恐らく・・・」

「  
カツツエ「・・・イイ人だったわよね、彼ら・・・」

ヘンネ「ちよいと五月蠅かったけど、ね・・・」

リシュウ「・・・お主ら、そう早々と葬式気分になるでないぞ。」

ハーケン「リシュウグランパの言う通りだな。」

グリーンワークにはまだ早すぎる。」

ジヨナサン「それにああ見えて彼らも結構しぶとい性質だからね、君達と同じで」

「応答せ・・・ら・・・イ・キタム・・・  
くりかえ・・・答せよ・・・」

ハーケン「つと・・・言ってる側から来たようだな。

なんか妙にタイミングが良くないか？」

アシエン「割と前から電波は飛び交っていやがりました。

ですが皆様何かとお忙しそうなので繋ぎませんでした、あえて。」

ハーケン「お前は暇だろうが、アシエン。

とつとと繋げる！」

カイ「むう・・・

応答が無いな・・・」

アラド「ま、まさか爆発に巻き込まれたんじゃない・・・！」

ラミア「その可能性は低いだろう。

私達より早く脱出した分、向こうのほうが距離がある。」

ラトウーニ「ただ単に通信機能が故障しているだけかもしれない・・・」

ゼオラ「それにわたし達がこうして生きている！

だから、生きてる・・・必ず！」

アルフィミイ「あら、アクセル。

『くだらん、とんだ茶番だ』とかいいませんか？」

アクセル「連中からはまだ何も聞いちゃいない。

探し出して、聞くだけ聞いたらずらかる、それだけだ、これがな。」

アルフィミイ「『た、助けるのは自分のためなんだからね！』」

と言う事ですのね。」

ラミア「（隊長、流石です。」

バリエーションも豊富だ……）」

ハーケン「あ……こちらツアイト・クロコデイル、全員無事だ、どうぞ。」

アシェン「ちょっと聞いてて楽しかったですう、どうぞ。」

ラミア「……発信源、補足しちゃいました。」

アルフィミイ「あら、意外と早く見つかりましたのね。」

アラド「って言うか今の聞いてたのかよ！」

## 第5話 a 交わる『刻』 その7（後書き）

ようやく戦闘パート開始、そして終了（早っ）

な第5話7回目です。

今回は

『最強伝説澄井鞠音』

『ラングレー大爆発、ぶつちぎりバトルスーパーロボット』

の二本でお送りしました。

・SFの世界で一番重要なのは、兵士でもロボットでもなく  
マッドサイエンティストだと思います。

それこそ頼もしいサポーターからラスボスまで

鞠音博士は前者ですが（笑）

・なんだかねで爆発オチですが、これで終わりってわけじゃありません。

その辺は次回で（^^;）

・「あれ？そういえばアレが確かテスラ研から・・・」

その辺も次回で（汗）

丁度一月ぶりの更新になりました。

このぐらいのペースで更新できれば良いのですが、

とりあえず、今回は2月25日前までには投稿するつもりです。

理由はEXCEEDをプレイして妙な影響を受けないようにするため。

いえ、EXCEEDの設定もガンガン使っていきますけど私個人の解釈も織り交ぜたいので主にアクセルとハーケンの関係とかですが。

それではまたノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6527f/>

---

スーパーロボット大戦OG

2010年10月8日21時47分発行